新潟県埋蔵文化財調査報告書　第214集

一般国道８号

柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ

千 古 作 遺 跡
香積寺沢遺跡

２０１１

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道８号

柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ

千古作遺跡
香積寺沢遺跡

２０１１

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道８号は新潟市を起点とし、日本海沿いに北陸地方を縦断し、京都市に至る総距離 561.2km の主要幹線国道です。新潟県と北陸地方及び京阪神地方を結ぶとともに、新潟県の産業・経済・文化の交流発展に大きな役割を果たしてきました。

しかし、現在の柏崎市域の一般国道８号は、近年の市街化の進展及び交通需要の増加により、慢性的な交通混雑を引き起こしています。特に夏期の交通渋滞は、沿道住民にとって深刻な問題となっています。柏崎バイパス建設事業は、このような問題を解決し、広域地域との交流の促進、都市交通の円滑化、都市機能の活性化などを目的に計画されました。

本書は、この柏崎バイパスの建設に先立ち、平成 20 年度に実施した千古作遺跡、香積寺沢遺跡の発掘調査報告書です。調査によって、千古作遺跡では、中世を主体とした井戸、河川跡や溝が見つかり、多くの遺物が出土しました。中世土師器、珠洲焼などの土器・陶磁器以外にも、田下駄や弓などの木製品、有孔石製品、鉄滓など様々な種類の遺物が見られます。今回の調査区は、居住域の縁辺部と考えられますが、農具の田下駄足板を折り割り、意図的に地面に突き刺しているなど、農耕に関連する祭祀の場としての性格もうかがえます。一方、香積寺沢遺跡では、現在柏崎市の市街地にある香積寺が、この地から移転したとの伝聞があり、中世寺院の検出が期待されていました。中世が主体の遺構・遺物は見つかりましたが、残念ながら、直接寺院の痕跡を示すものを確認することはできませんでした。しかし、古代の木炭窯や縄文時代の遺物が新たに見つかるなど、狭い谷地に立地する遺跡の性格について考える契機ともなりました。

今回の発掘調査で得られた資料や本報告書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されることを期待しています。

最後に、この発掘調査に対し多大な御理解と御協力をいただいた柏崎市教育委員会、並びに地元の方々、また、発掘調査から本報告書の作成に至るまで格別な御配慮をいただいた国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所に対して厚くお礼を申し上げます。

平成 23 年 3 月

新潟県教育委員会

教　育　長　武藤　克己

例　　言

1　本報告書は、新潟県柏崎市大字剣野町字千古作 288-3 ほかに所在する千古作遺跡、同じく大字剣野字香積寺沢 862-28 ほかに所在する香積寺沢遺跡の発掘調査記録である。

2　発掘調査は一般国道８号柏崎バイパスの建設に伴い、国土交通省から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したものである。

3　発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。

4　埋文事業団は、掘削作業等を株式会社イビソクに委託して発掘調査を実施した。

5　出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記は、千古作遺跡の略記号「チゴ」、香積寺沢遺跡の略記号「コウシ」とし、出土地点や層位等を併記した。

6　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。

7　本書に掲載した遺物番号は種別を問わず通し番号とし、本文及び挿図・遺物観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。

8　引用・参考文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。「第Ⅲ章４　自然科学分析」「第Ⅳ章４　自然科学分析」については、引用文献を節末に掲載した。また、本文中の敬称は略した。

9　調査の一部は、現地説明会（平成 20 年 10 月 18 日）、広報紙『埋文にいがた』等で公表しているが、本書の記述をもって正式な報告とする。

10　自然科学分析のうち、樹種同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に、放射性炭素年代測定は株式会社加速器分析研究所に委託した。

11　遺構断面図のトレース及び各種図版作成・編集は、株式会社セビアスに委託した。

12　本書の執筆は、石川智紀（埋文事業団　班長）、實川順一･長澤展生（株式会社イビソク　調査員）、鹿又喜隆（株式会社加速器分析研究所）、斉藤崇人・高橋敦・馬場健司（パリノ・サーヴェイ株式会社）が当たり、編集は石川・藤巻正信（埋文事業団　調査課長）・長澤が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅰ章、第Ⅲ章１Ａ、第Ⅳ章１Ｂ･･･石川

第Ⅱ章１･･･實川

第Ⅲ章２、第Ⅳ章２･･･石川・實川・長澤

第Ⅱ章２、第Ⅲ章１Ｂ ・３・５、第Ⅳ章１Ｂ ・３・５･･･長澤

第Ⅲ章４Ａ・第Ⅳ章４Ａ･･･鹿又

第Ⅲ章４Ｂ・第Ⅳ章４Ｂ･･･斉藤・高橋・馬場

13　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力をいただいた。ここに記して厚くお礼を申し上げる。（敬称略　五十音順）

相羽重徳　　金子拓男　　関　雅之　　水澤幸一

柏崎市教育委員会　　剣野川ホタル保存会　　剣野町町内会

目　　次

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調 査 経 過 …… 2

A　千古作遺跡 …… 2

B　香積寺沢遺跡 …… 4

3　調 査 体 制 …… 5

A　試掘確認調査 …… 5

B　本発掘調査 …… 5

4　整理作業と整理体制 …… 5

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地理的環境 …… 6

2　歴史的環境 …… 8

A　鵜川流域の遺跡 …… 8

B　文献からみた古代・中世の柏崎 …… 10

第Ⅲ章　千古作遺跡

1　調査の概要 …… 13

A　グリッドの設定 …… 13

B　基 本 層 序 …… 13

2　遺　　構 …… 16

A　遺構の概要 …… 16

B　記述の方法 …… 16

C　遺 構 各 説 …… 16

3　遺　　物 …… 20

A　遺物の概要 …… 20

B　遺 物 各 説 …… 21

4　自然科学分析 …… 24

A　放射性炭素年代測定 …… 24

B　樹 種 同 定 …… 27

5　ま　と　め …… 30

A　出土遺物について …… 30

B　検出遺構と遺跡の性格について …… 31

第Ⅳ章　香積寺沢遺跡

1　調査の概要 …… 33
A　グリッドの設定 …… 33
B　基本層序 …… 33
2　遺　　構 …… 35
A　遺構の概要 …… 35
B　遺構各説 …… 35
3　遺　　物 …… 38
A　概　　要 …… 38
B　分　　類 …… 39
C　遺物各説 …… 40
4　自然科学分析 …… 45
A　放射性炭素年代測定 …… 45
B　樹種同定 …… 48
5　ま　と　め …… 53
A　SX3 出土の土器・陶磁器について …… 53
B　遺構の変遷と遺跡の性格について …… 54

≪要　　約≫ …… 56
≪引用・参考文献≫ …… 57
≪観　察　表≫ …… 60

挿図目次

第 1 図　柏崎バイパスの法線と遺跡の位置 …… 1
第 2 図　千古作遺跡の範囲と試掘トレンチの位置 …… 3
第 3 図　香積寺沢遺跡の範囲と試掘トレンチの位置 …… 3
第 4 図　柏崎周辺の地形 …… 7
第 5 図　周辺の遺跡分布図 …… 9
第 6 図　香積寺沢遺跡周辺の更正図 …… 12
第 7 図　千古作遺跡　基本土層図 …… 15
第 8 図　遺構の形態分類図 …… 16
第 9 図　千古作遺跡　遺物の重量分布図 …… 20
第 10 図　千古作遺跡 暦年較正結果 …… 25
第 11 図　千古作遺跡 木製品の材組織 …… 28
第 12 図　円形枠付き田下駄とその足板 …… 31
第 13 図　千古作遺跡　遺構の変遷 …… 32
第 14 図　香積寺沢遺跡　調査区・基本層序図 …… 34
第 15 図　香積寺沢遺跡　遺物の重量分布図 …… 38
第 16 図　香積寺沢遺跡　中世土師器皿・小皿の分類 …… 40
第 17 図　香積寺沢遺跡　暦年較正結果 …… 46
第 18 図　香積寺沢遺跡　木製品の材組織 …… 50
第 19 図　香積寺沢遺跡　遺構の変遷 …… 55

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧表……9
第２表　鵜川流域近世村落の石高推移……12
第３表　遺構の形態分類表……16
第４表　千古作遺跡　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果……25
第５表　千古作遺跡　木製品の樹種同定結果……28
第６表　香積寺沢遺跡　SX3 土師器の個体数……41
第７表　香積寺沢遺跡　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果……46
第８表　香積寺沢遺跡　木製品の樹種同定結果……49
第９表　香積寺沢遺跡　炭化材の樹種同定結果……49

図版目次

［図面目次］
図版 1　千古作遺跡　調査範囲と周辺の地形
図版 2　千古作遺跡　遺構全体図
図版 3　千古作遺跡　ピア２区遺構全体図、遺構個別図（1）井戸・土坑・ピット
図版 4　千古作遺跡　ピア２区、遺構個別図（2）性格不明遺構
図版 5　千古作遺跡　ピア３区遺構全体図、遺構個別図（1）溝
図版 6　千古作遺跡　ピア３区遺構個別図(2)溝･杭･木製品出土状況、ピア４区遺構全体図
図版 7　千古作遺跡　作業ヤード遺構全体図、遺構個別図　溝・性格不明遺構
図版 8　千古作遺跡　遺物実測図（1）ピア２・３区出土遺物
図版 9　千古作遺跡　遺物実測図（2）ピア４区出土遺物
図版 10　千古作遺跡　遺物実測図（3）作業ヤード出土遺物
図版 11　香積寺沢遺跡　調査範囲と周辺の地形
図版 12　香積寺沢遺跡　遺構全体図
図版 13　香積寺沢遺跡　遺構分割図（1）
図版 14　香積寺沢遺跡　遺構分割図（2）、遺構個別図（1）土坑
図版 15　香積寺沢遺跡　遺構個別図（2）土坑・溝・ピット・杭
図版 16　香積寺沢遺跡　遺構個別図（3）性格不明遺構
図版 17　香積寺沢遺跡　遺構分割図（3）、25J・K 遺物集中区
図版 18　香積寺沢遺跡　遺物実測図（1）中世土器
図版 19　香積寺沢遺跡　遺物実測図（2）中世土器・縄文時代土器
図版 20　香積寺沢遺跡　遺物実測図（3）石器・石製品
図版 21　香積寺沢遺跡　遺物実測図（4）木製品・銭貨・金属製品
［写真図版］
図版 22　千古作遺跡　遺跡遠景・近景
図版 23　千古作遺跡　ピア２区基本層序・遺構（1）
図版 24　千古作遺跡　ピア２区遺構（2）
図版 25　千古作遺跡　ピア３区基本層序・遺構（1）
図版 26　千古作遺跡　ピア３区遺構（2）
図版 27　千古作遺跡　ピア３区遺構（3）、ピア４区基本層序・遺構、作業ヤード基本層序・遺構（1）
図版 28　千古作遺跡　作業ヤード基本層序・遺構（2）
図版 29　千古作遺跡　遺物（1）
図版 30　千古作遺跡　遺物（2）
図版 31　香積寺沢遺跡　遺跡遠景（1）・近景（1）
図版 32　香積寺沢遺跡　遺跡遠景（2）・近景（2）・基本層序・遺構（1）
図版 33　香積寺沢遺跡　遺構（2）
図版 34　香積寺沢遺跡　遺構（3）
図版 35　香積寺沢遺跡　遺構（4）
図版 36　香積寺沢遺跡　遺構（5）
図版 37　香積寺沢遺跡　遺構（6）
図版 38　香積寺沢遺跡　遺物（1）
図版 39　香積寺沢遺跡　遺物（2）
図版 40　香積寺沢遺跡　遺物（3）

第Ⅰ章　序　　説

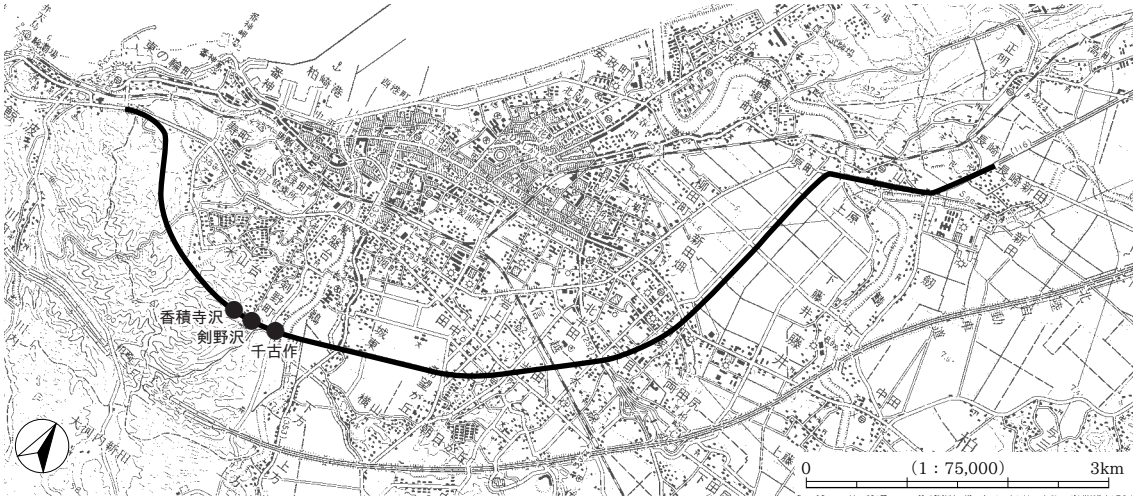
1　調査に至る経緯

「一般国道８号　柏崎バイパス」は、柏崎市長崎を起点に、同市鯨波に至る延長 11.0km の幹線道路である。交通混雑の解消、広域地域との交流の促進、都市交通の円滑化、都市機能の活性化などを目的に計画され、昭和 62 年度に事業化された。平成３年度から用地買収、平成５年度から工事着手して整備が進められている。これを受けて、建設省（現国土交通省、以下、「国交省」）と新潟県教育委員会（以下、「県教委」）との間で、事業用地内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

柏崎市元城町字宮川（横山川）～剣野字香積寺沢間の分布調査は、県教委から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」）が平成 12 年 12 月に実施した。調査によって、道路法線上には周知遺跡である剣野Ｂ遺跡・剣野沢遺跡・香積寺沢遺跡が存在することが判明した。また、沖積地の広範囲で平安時代～中世の遺物が採集でき、埋没した自然堤防上に遺跡が存在する可能性があることから、ほぼ全域について試掘確認調査が必要である旨を県教委に報告した。

千古作遺跡に係る試掘調査は、埋文事業団が平成 15 年８月に実施した。中世が主体の遺物とその時期の可能性がある遺構を検出し、千古作遺跡として新規登録した。この時点での本発掘調査必要面積は、3,020m^2 である。剣野沢遺跡･香積寺沢遺跡に係る確認調査は、埋文事業団が平成 16 年８月に実施した。剣野沢遺跡で縄文時代の遺構・遺物を検出し、4,500m^2 について本発掘調査が必要とした。香積寺沢遺跡では中世の遺構・遺物を検出したが、周辺に調査不可の範囲が存在したため判断保留とした。

平成 20 年度の本発掘調査か所は、ほかの公共事業との調整もあり、最終的に平成 20 年３月に決定した。工事内容による取り扱い協議の結果、千古作遺跡 740m^2、香積寺沢遺跡 630m^2、剣野沢遺跡 3,030m^2 が本発掘調査対象となった。国交省から調査を受託した県教委は、埋文事業団に実施を依頼した。埋文事業団は千古作遺跡の調査終了後、香積寺沢遺跡、剣野沢遺跡の順に着手することとし、４月 28 日から調査を開始した。



第１図　柏崎バイパスの法線と遺跡の位置
〔国土地理院「柏崎」「岡野町」1：50,000 を縮小〕

2 調査経過

A 千古作遺跡

1）試掘確認調査

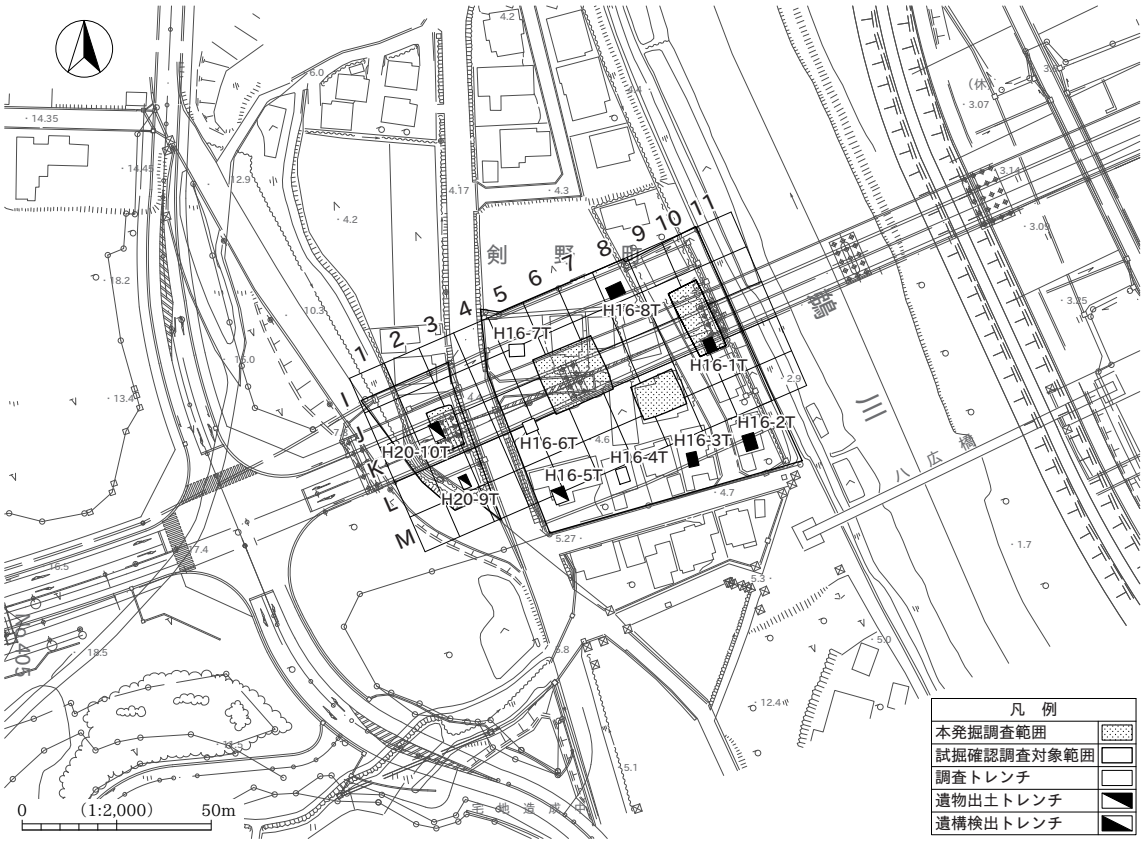
千古作遺跡に係る試掘確認調査は、平成15年8月27・28日に実施し、柏崎バイパス用地約4,900m^{2}を対象に、約112m^{2}を調査した。8か所の試掘坑（トレンチ。以下、T）を設定して調査したところ、1･2･3・8Tで遺構を検出した。また5か所のトレンチから、土師質土器・珠洲焼・須恵器・磨石・銭貨・鉄滓が出土した。鵜川の対岸に位置する下沖北遺跡との関連が考えられ、3,020m^{2}について本発掘調査（以下、本調査）が必要と判断した。遺跡新発見の地点であったことから、千古作遺跡と呼称することとした。

また平成20年5月14日には、調査未了であった西側の丘陵裾部730m^{2}を対象に、2か所のトレンチ、約26m^{2}を調査した。遺構は検出できなかったが、古代～中世の遺物が出土した。遺跡が当該地まで拡がっていることが確認でき、遺物が多く出土した10T周辺について本調査が必要と判断した。

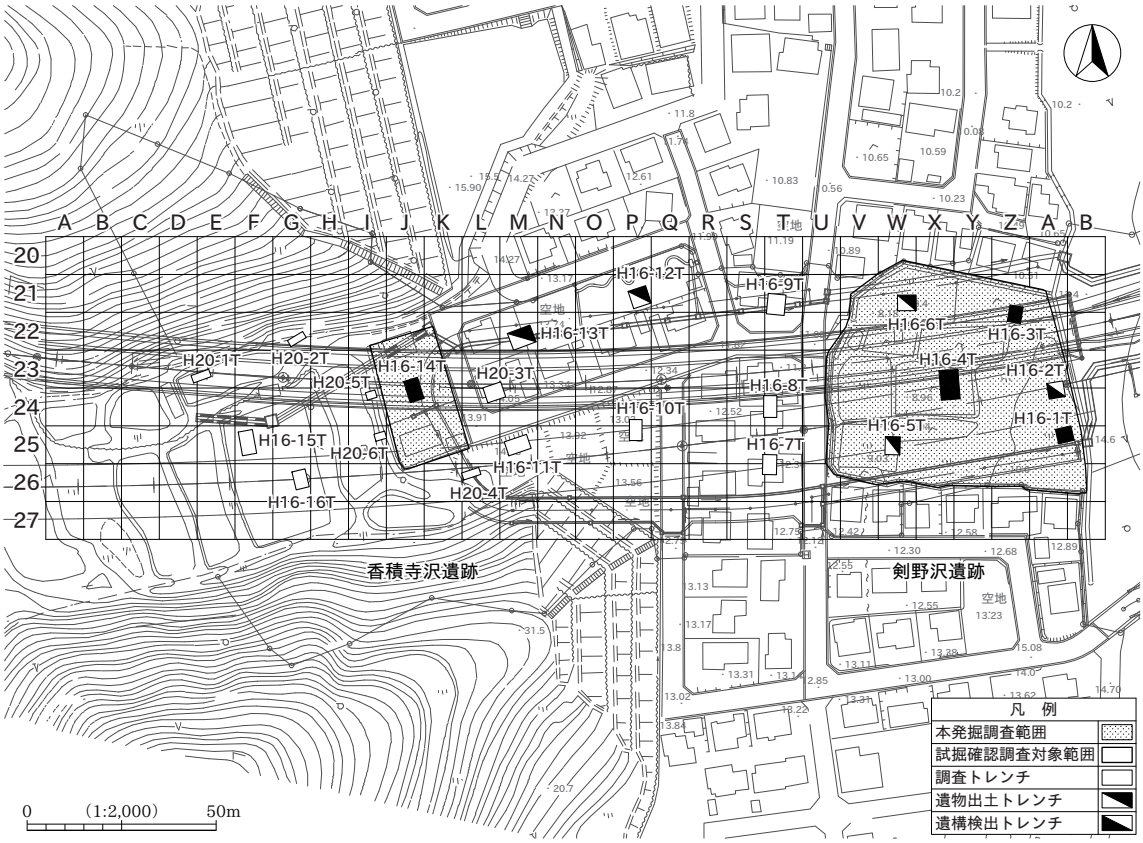
2）本発掘調査

千古作遺跡の本調査範囲は、工事工法の変更等があり、橋脚部分（ピア）と工事用に地盤改良する範囲（作業ヤード）に限定されることとなった。県教委からの依頼（平成20年3月31日付け教文第1438号の2）に基づく、当初予定面積は980m^{2}であった。内訳は、ピア2・3とヤード1（作業ヤード1区）が本調査確定面積780m^2、ピア4とヤード2が確認調査後に要本調査と予想される面積200m^{2}である。調査対象地は宅地であり、住宅の基礎や埋設管などが残っていたため、国交省に調査前の除去をお願いした。

国交省による支障物件の除去後、本格的な準備工を開始したが、道路特定財源の問題による一時中断もあり、4月は環境整備を中心に行った。調査区周囲は住宅地であり、また軟弱地盤であることから、騒音･振動に十分注意しながら作業を進めるようにした。作業可能範囲は狭かったが、調査工程を検討し、ピア3とヤード1の併行調査が可能となった。5月1日からピア3・ヤード1の暗渠工事を開始し、掘削土中から遺物を採取した。暗渠施工後の5月8日から13日の間で、調査員立会いのもと重機（バック・ホー）で表土掘削を行った。5月14日に上述の確認調査を実施し、10T周辺のピア4が本調査対象となったため、ピア2調査終了後に着手することにした。ピア3を中心に、包含層掘削･遺構検出･遺構掘削を開始した。ピア3は遺構検出面も軟弱で、溝状のプランが多く検出された。人為的な掘り込みか自然形成の落ち込みかを判断するため、サブトレンチを多く入れた。ヤード1では、方形を呈する浅く広い遺構が検出され、耕作痕の可能性が想定できた。しかし、旧表土からの深度も浅いので、分析を行うことは断念した。調査は順調に進行し、次に移動予定の香積寺沢遺跡・剣野沢遺跡の準備作業も徐々に開始した。ピア2も着手可能となり、5月28・29日に表土掘削を行った。ピア2は鵜川の堤防にかかるため、現段階で調査可能な範囲に留め、その状況により残りの取扱いを判断することにした。ピア2は居住域の一端であると想定されたが、鵜川方向への急な落ち込みが検出できたので、残りは調査不要と判断した。遺構掘削及び測量もほぼ終了したことから、ピア2・3、ヤード1の3か所の全体完掘写真を、高所作業車を使用して撮影した。その後残務整理し、市道東側の範囲を、6月20日に国交省に引き渡した。市道西側のピア4は6月23日から調査を開始した。調査区狭小のため、調査員・作業員数名の体制で臨み、そのほかは香積寺沢遺跡へと移った。遺物は比較的多く出土したが、自然の落ち込み以外に遺構は検出できなかった。



第２図　千古作遺跡の範囲と試掘トレンチの位置



第３図　香積寺沢遺跡の範囲と試掘トレンチの位置

7 月 2 日に全体写真撮影・測量を行い、7 月 3 日に県教委の終了確認を受けてすべての作業を終了した。

B　香積寺沢遺跡

1）試掘確認調査

周知の香積寺沢遺跡及び剣野沢遺跡に係る試掘確認調査は、平成 16 年 8 月 16 日～ 24 日に実施した。柏崎バイパス用地約 13,000m² を対象に、16 か所のトレンチを設定し、約 335m² を調査した。

香積寺沢遺跡に係るトレンチは 10 ～ 16T であり、12・13T の宅地盛土下の旧表土から土師器が出土した。また、14T では土坑 1 基が確認でき、その覆土中から漆器椀 1 点が出土した。しかし、14T 周辺には支障物件等があり、十分な調査が実施できなかったので、4,200m² が判断保留となった。

平成 20 年 5 月 28 日、平成 16 年度判断保留範囲を含めた 6,000m² を対象に、確認調査を実施した。6 か所のトレンチ、約 58m² を調査したが、遺構・遺物は検出できなかった。遺跡は局所的であることが想定されたことから、平成 16 年度 14T 周辺の 630m² について本発掘調査が必要と判断した。

2）本発掘調査

香積寺沢遺跡及び剣野沢遺跡周辺は、住宅地であり、またホタルの生息域でもあったことから、事前準備・調査は慎重に行う必要があった。特に香積寺沢遺跡は水路の上流部に位置することから、近くの用水等に調査時の濁水が流れ込まないように留意した。調査区南東側の開渠集水部からポンプで汲み上げ、沈澱槽（ノッチタンク）を経由してから排水するようにした。5 月 25 日に地元の剣野川ホタル保存会事務局に調査行程・排水対策等を説明し、了解を得た。また 6 月 24 日には、国交省と協力して、道路法線内の水路からホタル幼虫の餌となるカワニナの移動を行った。

調査区全面には、試掘調査後に盛られた 1.5m 程の盛土があり、その除去を 5 月 28 日から開始した。次に着手予定の剣野沢遺跡で、進入路用スロープを造成する必要があったことから、この盛土を運搬して使用することで国交省の了解を得た。それ以外の盛土及び表土については、確認調査で本調査が不要と判断された西側に排土した。本来の旧表土層までの深度は、北西側で浅く、南東側で深くなっており、盛土下に旧地形が良好に残っていることが判明した。遺物量が少ない地点については、遺構検出面まで重機で慎重に掘削した。また、量の多寡はあるが、試掘調査では未検出の縄文時代の遺物が、ほぼ調査区全域に散布していることを確認した。6 月 13 日に重機による表土掘削を終了し、土層堆積を確認するためのトレンチ掘削に着手した。土層観察の結果、灰黄褐色～黒褐色を呈する層が中世主体の遺物包含層であることを把握し、6 月 24 日から包含層発掘を開始し、遺構検出･遺構掘削も 7 月 1 日から同時並行で開始した。調査は基本的に地形的に高所の北側から、低所の南側に向かって進行させた。調査区中央付近から、拳大の礫が包含層中に多く混じるようになった。24J13・14 グリッド付近では遺物も多く、地山に平坦面も認められることから、この一連を SX3 と呼称した。その延長方向の東側で、SX3 の堆積土に覆われた炭の集中か所 SK25 を検出した。低所の南側では縄文時代の遺物が多く出土し、南西方向にさらに落ち込む様相が確認できた。SX4 と呼称し、開渠の底面付近でも遺物が出土したことから、さらに面的な掘り下げを行った。7 月末頃には調査が終盤に入り、徐々に作業の主力を剣野沢遺跡に移していった。8 月 7 日には遺構発掘作業をおおむね終え、8 月 8 日に全体の完掘写真を、高所作業車を使用して撮影した。掘り残し部分がないか、南側を中心にトレンチ調査したところ、少量ではあるがⅣ層中にも縄文土器が入り込んでいることが確認された。面的に掘下げる必要が生じたが、8 月 20 日には測量も含めて全作業を終

了した。その後、国交省の要望により調査区の埋め戻し作業を行い、8月27日に終了して撤収した。

なお、10月18日に剣野沢遺跡現地事務所で現地説明会を開催し、千古作遺跡・香積寺沢遺跡のスライド説明、遺物展示も行った。近隣の住民を中心に、90人の参加があった。

3　調査体制

A　試掘確認調査

千古作遺跡と香積寺沢遺跡に係る試掘確認調査は、以下のような期日と体制で行った。

遺跡名	千古作遺跡	香積寺沢遺跡
調査期間	平成15（2003）年8月27日・28日	平成16（2004）年8月16日～24日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　板屋越　麟一）	新潟県教育委員会（教育長　板屋越　麟一）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	黒井　幸一（事務局長）	黒井　幸一（事務局長）
管理	長谷川二三夫（総務課長）	長谷川二三夫（総務課長）
庶務	高野　正司（総務課班長）	高野　正司（総務課班長）
調査総括	藤巻　正信（調査課長）	藤巻　正信（調査課長）
調査担当	尾崎　高宏（調査課班長）	滝沢　規朗（調査課班長）
調査職員	田中　一穂（調査課嘱託員）	片岡　千恵（調査課嘱託員）

B　本発掘調査

平成20年度の本発掘調査は、以下のような期日と体制で行った。

調査期間	平成20（2008）年4月28日～平成20年7月3日〔千古作遺跡〕
	平成20（2008）年6月2日～平成20年8月20日〔香積寺沢遺跡〕
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村　正昭（事務局長）
管理	斎藤　栄（総務課長）
庶務	長谷川　靖（総務課班長）
調査総括	藤巻　正信（調査課長）
指導	高橋　保雄（調査課　課長代理）
調査担当	石川　智紀（調査課班長）
支援組織	株式会社イビソク
現場代理人	小林　史尚（文化財計測本部　監理課主任）
調査員	實川　順一（埋文調査部　遺跡調査課）
	長澤　展生（　　同　　）
補助員	今成京子、江尻昭子、貝瀬あゆみ、川内京子、桑原淳子、久保美由紀、冨沢由美子

4　整理作業と整理体制

平成20年度の整理作業は、現地作業と併行しながら進めた。遺物の水洗の一部、土壌水洗などを現地事務所で行い、遺物の水洗・注記、接合・復元・実測・写真撮影、台帳類の整備、図面類の修正・レイアウト、原稿執筆などを株式会社イビソク南魚沼整理所（南魚沼市）及び埋文事業団（新潟市秋葉区）で実施した。平成20年度の整理体制は本発掘調査の体制と同じで、整理期間は平成20年6月16日から平成21年3月31日までである。平成21年度は原稿執筆･編集･校正を主に実施し、平成22年度に印刷･刊行した。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

柏崎平野の地勢　柏崎平野は、主要河川である鵜川と鯖石川及びその支流の別山川によって形成された臨海沖積平野である。その南と東西の三方は「刈羽三山」を頂点とする山地や東頸城丘陵によって囲まれている。「刈羽三山」とは米山（標高 992.6m）、黒姫山（標高 889.5m）、八石山（標高 518m）を指し、米山・黒姫山山頂付近は大起伏山地に地形区分され、頸城方面との分水嶺をなす。こうした山地・丘陵の縁辺には、沖積地や一部日本海に接して中・高位段丘面が局地的な広がりを見せる。加えて、日本海に接する沿岸部には荒浜砂丘が発達し、その後背には湿地性の沖積地が展開する［鈴木ほか 1988・1989］。

こうした柏崎平野周辺の地形的特徴は、平野を北流する鵜川・鯖石川によって西部・中央部・東部に三分される。東部は鯖石川以東の地域に相当し、丘陵や沖積地・砂丘が発達している。刈羽・三島丘陵などの丘陵地帯と別山川・長鳥川流域の沖積地、さらには日本海岸沿の砂丘が広く展開し、その軸はいずれも北北東－南南西方向を示している。こうした地形的特徴は新第三系以降の地質構造を反映したもので、褶曲構造の向斜・背斜方向と一致している［鈴木ほか 1988・1989、大野・徳間ほか 1990］。

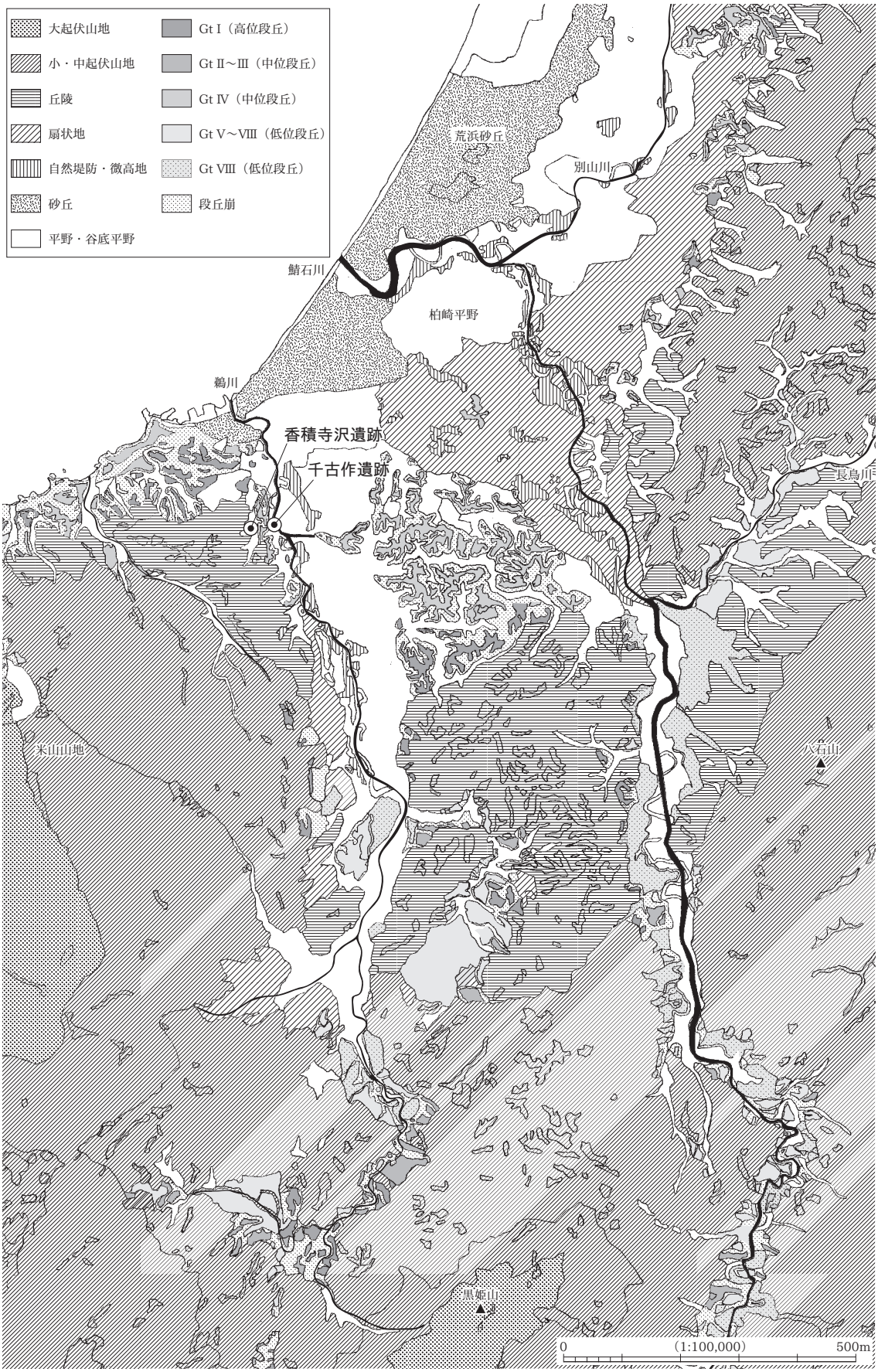
中央部は鵜川・鯖石川流域に沿って黒姫山地や丘陵が南北方向に展開し、その縁辺では中位段丘地帯の発達が顕著である。中位段丘面は著しく樹枝状に開析され鵜川・鯖石川が生成した沖積地に接している。中央部以西では地形の軸が東部に比べて南北方向にずれているが、それは新第三系以降の地質構造の褶曲区の違いに由来するものと推測されている［大野・徳間ほか 1990］。

西部は鵜川左岸地帯一帯を指し、米山から続く山地・丘陵が発達している。当地域では、米山山地が海岸に達して断崖をなし、その東側では狭小な中・高位段丘面を形成している。砂丘や沖積地の形成に乏しい地域であり、広範囲に発達した沖積地や砂丘が展開する東部や中央部とは対照的な様相を示している。

鵜川流域の地形と遺跡の位置　千古作遺跡と香積寺沢遺跡が立地する鵜川流域は、上述のような米山山地や丘陵が発達した柏崎平野西部にある。鵜川流域左岸に相当する米山丘陵では、小規模な開析が進行し、南北方向の狭隘な樹枝谷が深く入り込んでいる。一方、右岸は中・高位段丘（安田丘陵）が展開するとともに、左岸とは対照的に強い湿地性を示す沖積地が広範な広がりをみせている。現在ではわずかな湖沼を残すのみとなっているが、「鏡ヶ沖」なる湖沼の存在が伝承されている区域である。

鵜川は流域面積 108.7km²、流路全長 24.6km の 2 級河川で、柏崎市南部の尾神岳に源を発する。その下流では蛇行を繰り返し、小規模な自然堤防を発達させている。かつてはより複雑な蛇行が見られ、大雨の都度氾濫する水害の歴史を繰り返してきた。その下流域に立地する下沖北遺跡やその対岸の千古作遺跡周辺などにも旧流路の残痕が地形図から観察できる［品田 1995b、山本・高橋ほか 2003］。このように鵜川流域の氾濫原では、自然堤防などの微高地が古代・中世の遺跡が立地する適地となっている。

千古作遺跡や香積寺沢遺跡はこの鵜川下流域の左岸に形成されている。千古作遺跡は鵜川の河口から 3km ほど上流の剣野丘陵裾部の微高地にある。遺跡西方の中位段丘上には柏崎市指定遺跡・剣野山縄文遺跡群（剣野 B 遺跡など）が展開し、鵜川を挟んだ対岸には中世を主体とする下沖北遺跡［山本・高橋ほか 2003、山崎ほか 2005］が存在する。当遺跡は下沖北遺跡とともに鵜川に隣接して形成された遺跡である。


大起伏山地
小・中起伏山地
丘陵
扇状地
自然堤防・微高地
砂丘
平野・谷底平野
Gt Ⅰ（高位段丘）
Gt Ⅱ～Ⅲ（中位段丘）
Gt Ⅳ（中位段丘）
Gt Ⅴ～Ⅷ（低位段丘）
Gt Ⅷ（低位段丘）
段丘崩
荒浜砂丘
別山川
鯖石川
柏崎平野
鵜川
香積寺沢遺跡
千古作遺跡
長鳥川
米山山地
八石山
黒姫山
0
(1:100,000)
500m

第４図　柏崎周辺の地形

香積寺沢遺跡は米山丘陵と剣野丘陵に挟まれた小規模な樹枝状の谷間、沢内沖積地に立地する。当遺跡が所在する沢内沖積地は、剣野丘陵の西を南北に開析する谷筋と遺跡の東で合流する。千古作遺跡とは剣野丘陵を挟んだ西側にあり、遺跡に隣接してその東に剣野沢遺跡［品田 1990b、中野 1995］が所在する。

2　歴史的環境

A　鵜川流域の遺跡

縄文時代　鵜川流域を中心とした柏崎平野南部では、既に前期後半以降を主体とする多数の遺跡が周知化されている。縄文時代草創期・早期の遺跡は、現段階では遺跡が極めて少なく、その様相は明らかでないが、大原遺跡（46）で草創期と考えられる丸鑿形打製石斧が採取されている［宇佐美 1987］。

前期の遺跡には、剣野 A 遺跡（8）、大宮遺跡（35）、屁振坂遺跡（38）、辻の内遺跡（45）などがあり、特に前期後半以降の遺跡形成が明瞭である。大宮遺跡［中野 1998］は該期の中核的集落と目される。

中期は柏崎平野においても遺跡数が増加する時期であり、本県の縄文土器型式の標識遺跡となった剣野 E 遺跡（3）、剣野 B 遺跡（9）がある。ほかに藤橋東遺跡群（41）の京ヶ峰遺跡や、屁振坂遺跡（38）、大沢遺跡（34）、雨池遺跡（37）、辻の内遺跡（45）などが分布している。また鯖石川流域となるが、かつて中期前半の標識遺跡とされた十三仏塚遺跡（70）も近隣に存在する。

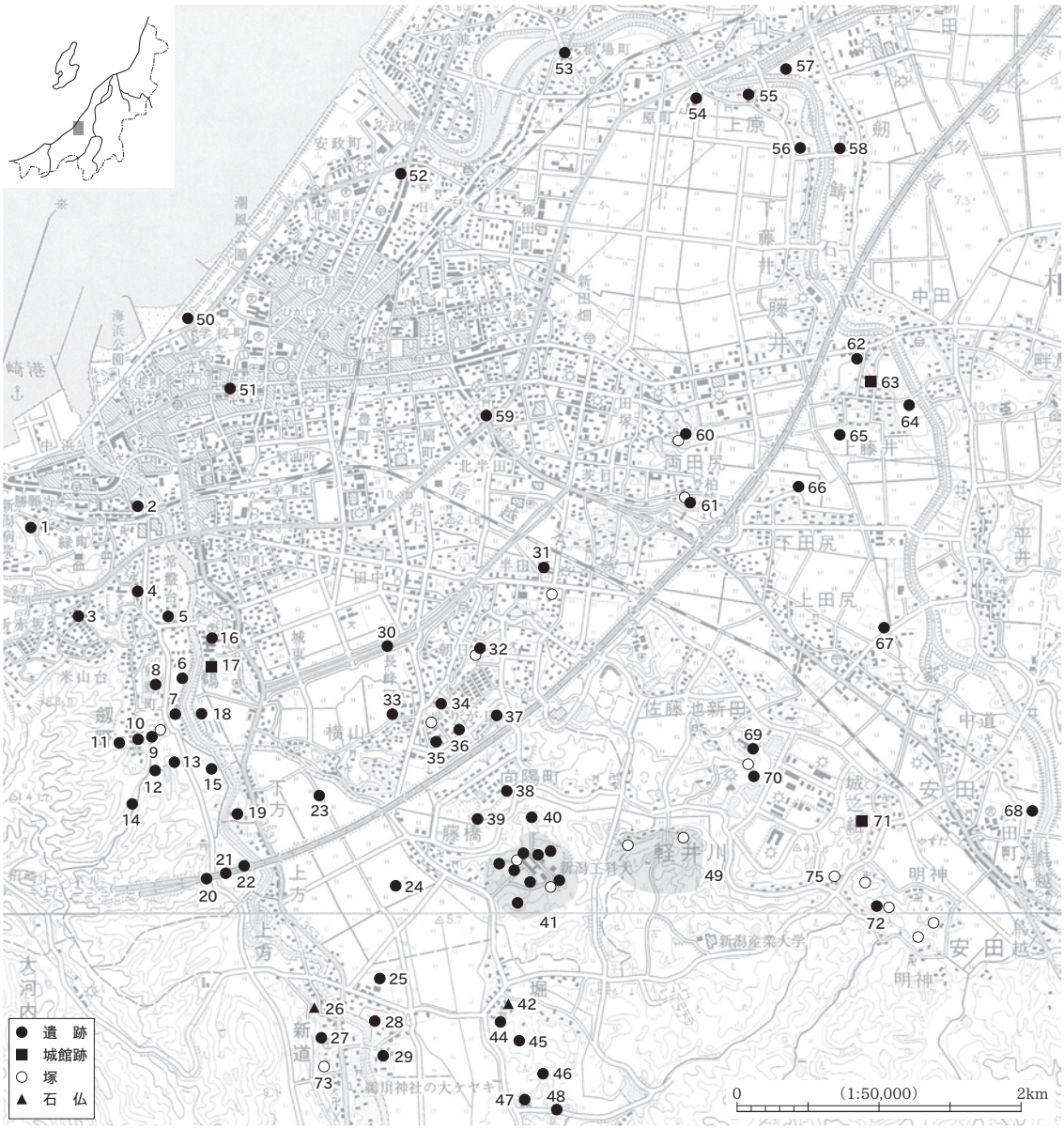
このうち剣野 B 遺跡は、近年の発掘調査によって中期前葉集落の存在が明らかとなり、広場を中心として竪穴住居や柱穴群などが環状に検出されている［品田 2004］。これに対して竪穴住居が検出されず、主に平地式住居で構成される大沢遺跡（34）、屁振坂遺跡（38）、雨池遺跡（37）などの集落遺跡も存在する。こうした当地域での中期前葉を中心とする集落の様相は、検出遺構とその構成や、土器捨て場の形成等の集落構造によって積極的に類型化が試みられ、環状集落を構成する剣野 B 遺跡や大沢遺跡はその第 I 類型に分類されている［品田 1996］。

後・晩期の遺跡は、剣野 C 遺跡（12）、剣野 B 遺跡（9）、剣野沢遺跡（10）などがある。前述した中期前葉の中核的集落である剣野 B 遺跡では、後期後葉以降再び環状集落が形成される［品田 2004］。また、周辺の十三本塚北遺跡（69）でも後期前葉の環状集落の存在が明らかにされている［品田・平吹 2001］。

鵜川流域では以上の集落のほかに生業関連の遺跡も分布する。藤橋東遺跡群（41）の呑作 A 遺跡［品田 1997b］、千古塚遺跡（48）［品田 1990a］などがそれに該当し、陥穴状遺構が多数検出されている。これらの事例は、当地域が集落だけでなく狩猟の領域としても利用されていたことを示すものである。

こうした鵜川流域を中心とした縄文時代の遺跡立地は、その大部分は鵜川や鯖石川流域の中位段丘や丘陵上の平坦面に分布するが、その一方で剣野沢遺跡（後期後葉）のように沖積地上の遺跡も存在している［中野 1995］。また、鵜川上流の高畑遺跡（後期中葉）の立地は自然堤防の可能性も指摘されるなど［品田 1990a］、少なくとも後期中葉以降に沖積地への展開が認められるようになる。

弥生・古墳時代　当地域では弥生時代～古墳時代の遺跡は少なく、今後の調査事例の増加が待たれる。弥生時代の遺跡には、剣野 A 遺跡（8）、箕輪遺跡（30）、鶴巻田遺跡（22）などがあり、近年報告された箕輪遺跡では中期後半の遺構・遺物が検出されている［高橋ほか 2002］。ほかは後期の遺物が採取あるいは少量出土しているにとどまる。柏崎平野東部では、中期後半を主体とする下谷地遺跡［高橋ほか 1979］や小丸山遺跡［品田ほか 1985］、後期の西岩野遺跡［品田 1987］などが知られている。これら柏崎平野東部での遺跡の立地傾向は、西岩野遺跡などのように台地上に立地する遺跡もあるが、下谷地遺跡などの



第５図　周辺の遺跡分布図　〔国土地理院「柏崎」「岡野町」1:50,000原図 2008〕

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	赤沢	縄文	20	西田	縄文・中世	38	屈振坂	縄文（前・中期）	57	角田	古墳・中世
2	大久保東	中世	21	桐山	縄文・古代・中世	39	藤橋向山	古代	58	剣下川原	古墳・古代
3	剣野 E	縄文（中期）	22	鶴巻田	縄文・弥生～古墳平安・中世	40	藤橋	縄文	59	雀森	古墳
4	剣野 F	縄文				41	藤橋東遺跡群	縄文・古代（製鉄関連）・中世	60	田塚山	縄文･弥生･中世（仏堂）
5	三島神社	古墳・古代	23	茅原	古代・中世						
6	渋柿	縄文・古代	24	沢田	古代	42	堀の五輪塔	中世	61	小児石	中世（中世墓地）
7	千古作	中世	25	前掛り	平安・中世	43	堂の前	古代・中世	62	田中久保川原	中世
8	剣野 A	縄文・弥生	26	風牧山の五輪塔	中世	44	原	縄文	63	藤井城跡	古代・中世
9	剣野 B	縄文（中期・後期）	27	風牧山	古代・中世	45	辻の内	縄文	64	関野	古墳・平安・中世
10	剣野沢	縄文・古代・中世	28	剣殿	古代	46	大原	縄文	65	前田	中世
11	香積寺沢	縄文・中世	29	小寺島	中世	47	南下御堂尻	中世	66	不退寺	古代・中世
12	剣野 C	縄文（晩期）	30	箕輪	弥生（中期）・平安・中世	48	千古塚	縄文・中世	67	大新田	中世
13	剣野 D	縄文				49	軽井川南遺跡群	古代（製鉄関連）	68	中道	古代・中世
14	剣野水上	製鉄関連	31	小峯	古代	50	裏浜	縄文・弥生	69	十三本塚北	縄文（後期）
15	下沖	古代	32	半田一ッ塚	縄文	51	柏崎町	中・近世	70	十三仏塚	縄文（中期）
16	柏崎農業高等学校校庭	古墳・古代	33	京田	古代	52	桜木町	古代	71	安田城跡	中世
			34	大沢 A	縄文（中期）・平安	53	開運橋	縄文・弥生・古代	72	上軽井川	縄文・弥生
17	琵琶島城	中世	35	大宮	縄文（前期）・古代	54	東原町	中世	73	三諦寺の経塚	中世
18	下沖北	平安・中世	36	大沢 B	古代（製鉄関連）	55	上原	古代・中世	74	庚申塚の経塚	中世
19	嶋屋敷	中世	37	雨池・雨池古窯	縄文・平安	56	境川原	中世	75	軽井川の経塚	中世

第１表　周辺の遺跡一覧表

ように沖積地への遺跡形成が明瞭となっていく。鵜川流域でも剣野A遺跡が台地上に存在する以外は沖積地上に分布しており、柏崎平野東部に見られる立地傾向と同様の様相を示している。

古墳時代では、三島神社遺跡（5）や柏崎農業高等学校校庭遺跡（16）が分布するが詳細は明らかでない。柏崎平野東部では、吉井遺跡群の礼坊遺跡［品田 1990c］、行塚遺跡［品田 1985］などの集落遺跡の調査事例があるが、これらは鵜川流域の遺跡と同様に大部分は沖積地上に立地している。

古　　代　古代の遺跡は、古墳時代とは対照的に遺跡数が増加し、9世紀代を中心とする平安時代の遺跡が数多く存在している。発掘調査も、下沖北遺跡（18）、鶴巻田遺跡（22）、前掛り遺跡（25）、箕輪遺跡（30）などで実施され、該期集落の様相が明らかにされつつある。このうち箕輪遺跡では、これまで柏崎平野では少数であった奈良時代の遺物が出土し、それとともに「駅家村」の記述がある木簡、木製鐙などが伴出し、延喜式の記載に見える「三嶋駅」が周辺に存在する可能性が濃厚となった［岡田ほか 2000］。

また、鵜川右岸の丘陵地帯では、雨池古窯［品田・中野ほか 2000］、藤橋東遺跡群［品田 1995a］、軽井川南遺跡群［中野 2008］などが調査され、須恵器の窯跡や大規模な製鉄関連遺跡が展開していることが明らかとなった。鵜川左岸の丘陵地帯にも剣野B遺跡（9）や剣野水上遺跡（14）などの製鉄関連遺物が採取される遺跡が知られ、鶴巻田遺跡（22）でも炉内滓が多数出土している［藤巻 1988］。

こうした古代の遺跡の立地傾向は、集落遺跡の箕輪遺跡、前掛り遺跡［品田・伊藤 1997b］などのように多数は自然堤防上や丘陵裾部の沖積地に立地し、雨池古窯や軽井川南遺跡群などの須恵器窯や製鉄関連遺跡は丘陵斜面地に局地的に分布する傾向にある［品田 1995b］。

中　　世　中世の遺跡は、剣野沢遺跡（10）、下沖北遺跡（18）、鶴巻田遺跡（22）などがあり、これらはいずれも13世紀～14世紀を中心とするものである。このうち下沖北遺跡では方形区画内に掘立柱建物や井戸が集中する該期集落の様相が明らかにされ、道路状遺構や水田跡も検出されている［山本・高橋ほか 2003、山崎ほか 2005］。鶴巻田遺跡でも井戸や貯蔵穴が検出された［藤巻 1988］。

鵜川流域ではこうした集落遺跡の調査のほかに、千古塚遺跡（48）などの墳墓の調査事例がある。同遺跡では仮称「方形基壇墓」の検出があり、該期の墓域が想定されている［品田 1990a］。こうした中世の墓域の事例は、鯖石川流域の小児石遺跡（61）にもある［品田 1991b］。また隣接の田塚山遺跡群（60）では、墳墓や13世紀代と推測される仏堂が検出されている［品田・中野ほか 1996］。

15世紀以降の遺跡は、上記の集落遺跡で遺物などが散見されるほか、15世紀後半～16世紀の琵琶島城（17）［中野 2003］や柏崎町遺跡（51）［品田・伊藤ほか 2001］の調査事例がある。このうち、中世荘園の比角荘域にある柏崎町遺跡では、遺跡の所在する東本町が15世紀には既に開発が及び、17世紀を画期として市街地の原型が形成されていく過程が明らかにされている。

こうした鵜川流域を中心とした中世の遺跡立地は、13世紀～14世紀を主体とする集落遺跡が丘陵裾部や自然堤防などの沖積地に分布し、千古塚遺跡などの墳墓が中位段丘などの台地上に立地する傾向が認められている［品田 1995b］。以上のほかに丘陵上には三締寺や庚申塚の経塚（73･74）などの塚が分布し、このうち三締寺経塚にはその奥書に建仁3年（1203）の年号が認められる［金子 1987］。

B　文献からみた古代・中世の柏崎

1）古　　代

古代の鵜川流域　千古作遺跡と香積寺沢遺跡が存在する柏崎平野一帯は、奈良・平安時代を通じて越後国に属していた。越後国は、当初、北陸道の出羽までを含む広大な越国に一括されていたが、8世紀初頭

に三分割されて成立する。その後、越後国は大宝 2（702）年の越中国 4 郡（頸城・高志・魚沼・蒲原の 4 郡）編入、和銅 5（712）年の出羽国の分置を経て、その国域が完成する。

越後国には延長 5（927）年に成立した延喜式によって頸城、高志、三嶋、魚沼など 7 郡の存在が知られ、柏崎平野一帯は三嶋郡の領域であった可能性が高い。三嶋郡は、［米沢 1980］によって高志郡から 9 世紀に分置された可能性が指摘されており、9 世紀以前では当該地域は高志郡に属していたことが推測される。また、10 世紀前葉に成立した『倭名類聚抄』には、三島郡に三嶋、高家、多岐の 3 郷が記載され、その所在は三嶋郷が鵜川下流域、高家郷が長鳥川流域と鯖石川中流域、多岐郷が別山川上・中流域にそれぞれ比定されている［金子 1990］。したがって、古代の千古作遺跡と香積寺沢遺跡周辺は少なくとも 10 世紀前葉には三嶋郷の郷域にあったことが推測される。

三島駅と式内社　鵜川下流域には現在、三嶋神社や鵜川神社が存在している。三嶋・鵜川神社は延喜式神名帳に記載された三嶋郡内の式内社であり、両社はその論社である［金子 1990］。また当地域は延喜式が記す北陸道の「三嶋駅」の所在地と目されているが、前述した箕輪遺跡の「駅家村」木簡などによってその周辺が有力候補地となった［小林・相沢 2000、中 2003］。加えて、当地域を通過する北陸道の道筋をめぐっては既に内陸をとる説があったが［新沢 1970、金子 1990］、その可能性が高くなった。

2）中　　世

中世荘園の成立　11 世紀後半から 12 世紀にかけて和名抄郷が再編され、各地に荘園や郷・保を単位とする国衙領が成立した。柏崎平野一帯では、鵜河荘、佐橋荘、比角荘などの荘園や、原田保、赤田保などの国衙領の存在が知られている。これらの荘園・国衙領の所在は、現状では鵜河荘などの荘園を柏崎平野南部の鵜川･鯖石川流域に、原田保などの国衙領を主に北部の別山川流域に比定するのが定説化している。このうち千古作遺跡と香積寺沢遺跡が存在する鵜川流域は、鵜河荘の荘域と推測される。

鵜河荘は､『吾妻鏡』の文治 2（1186）年の『三箇国庄々未進注文』に佐橋荘､比角荘などとともに記され､11 世紀後半から 12 世紀の院政期の成立が想定されている［萩野 1983］。具体的な荘域は根拠となる文献に乏しいが､「鵜河荘安田条上方」（『上杉朝定寄進状』、暦応 4（1341）年）、「鵜川荘内半田村」（『室町幕府奉行人連署奉書』、文亀元（1501）年）のほか、「宇川御庄新堂」（『妙法蓮華経奥書』建仁 3（1203）年）、「鵜河庄内上条今泉村」（『十一面観音胎内墨書銘』､延文 3（1358）年)､「鵜河荘藤井」（『岩井神社鰐口銘』､嘉吉 2（1442）年）などによって、鵜川流域（新道、上条など）のみならず、鯖石川中下流域の左岸地帯（安田、藤井、半田など）までを含むものと推測されている［村山 1990］。

鵜河荘の支配　鵜河荘は、鎌倉時代初期に前述の『三箇国庄々未進注文』によって、本家を前斎院（鳥羽上皇の女頌子内親王）、領家を前治部卿（藤原光隆）とする前斎院領であったとされる［萩野 1983］。南北朝時代には、上杉定朝が丹波国の安国寺（光福寺）に鵜河荘安田条上方を寄進し（『上杉朝定寄進状』、暦応 4（1341）年）、安田条が安国寺領となったことが明らかにされている。しかしながら、既に近隣の佐橋荘南条の地頭職を安堵していた毛利氏は安国寺領であった同条に進出し、長期にわたる争論の結果、ついに鵜河荘安田条の地頭職を獲得し（『室町将軍足利義満下文』、康暦 2（1380）年）、同地を本拠とする毛利安田氏として勢力を振るう［山田 1987、村山 1990］。

こうした、鵜河荘への安田氏の勢力拡大が進められる一方、南北朝時代の 14 世紀に越後国守護上杉氏とともに入部した宇佐美氏が、鵜川下流域の琵琶嶋を本拠とした。さらに室町時代の 15 世紀頃には越後国守護上杉一門の上杉清方が入部し、鵜川中流域の上条を本拠として上条氏を称した［山田 1987］。

このように鵜河荘域は少なくとも南北朝時代以降、琵琶嶋の宇佐美氏、上条の上条上杉氏、安田の毛利安田氏らが本拠を構え柏崎平野の中核的な領域を形成した。

戦国時代には、上述の鵜河荘の宇佐美、上条、安田氏も戦乱に巻き込まれ、永禄 7（1564）年に宇佐美定満が失脚すると、琵琶島には琵琶嶋善次郎が入った。天正 12（1584）年の御館の乱の終息後には、桐沢具繁が琵琶嶋と毛利北条氏の遺領（佐橋荘北条）をその所領としている［村山 1990］。

近世剣野村と石高推移　千古作遺跡や香積寺沢遺跡が所在する剣野周辺は、近世には剣野村と呼ばれ 18 村に及ぶ鏡郷に編成された。剣野村には琵琶島村の飛び地が多く、近世以降の琵琶島村域が琵琶島城の名残を強く反映したものと説明されている［新沢 1990］。明治 42 年の更正図にも琵琶島村の飛び地や入り組んだ同村との境界が示されている。

このような鵜川流域の近世剣野村やその周辺郷村の石高は、その多くで天和検地（1683）まで増加し続けている［新沢ほか 1990］（第 2 表）。近世郷村は近世初頭に進展し、元禄期にほぼ完了するが［新沢 1990］、これは 17 世紀後葉まで鵜川流域には開発の余地が残されていたことを示している。

村名	正保（1645）	天和（1683）	元禄（1702）	天保（1834）
枇杷島	1640	2386	2419	2449
剣野	129	190	206	303
下方	284	375	339	340
上方	510	380	380	381
新道	788	1347	1389	1396
貝渕	54	76	76	80
黒滝	257	325	346	374
宮窪	513	541	592	613
横山	236	680	690	693
藤橋	501	444	448	458
堀	450	513	513	515
南下	350	352	358	422
城川原	221	187	187	198
古町	130	155	165	173

［新沢ほか 1990］を一部改変

第 2 表　鵜川流域近世村落の石高推移

香積寺について　ここで香積寺について触れておきたい。香積寺は、現在でも柏崎市街地に存在する曹洞宗の寺院であり、近世（18 世紀後葉）の柏崎町を示した寛政古絵図にも見られる。『白川風土記』には柏崎勝長の開基の寺であり、勝長の館が廃された後に剣野村の香積寺沢から現在の西本町の地へ移転したとする伝承を記している。また『柏崎編年史』では、更正図にある剣野村内の香積寺沢の地名と、明応元（1492）年の『長尾能景寄進状』にある「香積寺山、南者劔之尾之沢通、西者山道之境北者宗全寺之入迄也、并屋敷処有…」の記載から、香積寺は剣野村から移転し、その時期は少なくとも明応元年以降と推測する［新沢 1970］。このように、香積寺沢遺跡周辺は、移転する以前の香積寺の所在地であった可能性が指摘されている。

第 6 図　香積寺沢遺跡周辺の更正図

第Ⅲ章　千古作遺跡

1　調査の概要

千古作遺跡の発掘調査は、一般国道８号柏崎バイパスの橋脚部分と工事用作業ヤードを対象とし、橋脚の P2 ～ P4 と作業ヤード１区の４か所を調査した。調査区は工事用の名称を使用し、以下の記述ではそれぞれピア２区～ピア４区、作業ヤードと表記した。以下は千古作遺跡の概要である。

A　グリッドの設定（図版 2）

今回の千古作遺跡の調査区は、柏崎バイパス建設予定地内であり、東側には鵜川を挟んで下沖北遺跡が隣接している。千古作遺跡は下沖北遺跡同様に、中世が主体の遺跡と推定されており、また遺跡の存在する標高もほぼ同じことからその関連が想定できた。よって、同一のグリッドを使用することも考えたが、算用数字がマイナス方向となるため断念し、後述のように基本的な考えは踏襲し、南北方向のアルファベットのみ一致させた。

グリッドの主軸方向は、道路建設予定地内のセンター杭 No.400 と杭 No.395 を結んだラインとした。主軸は東西方向に向き、主軸と直交する南北方向の軸は、センター杭 No.400 を基準の交点として設定した。南北軸は真北に対して 23 度 32 分 31 秒西偏している。グリッドは大小２種あり、大グリッドは 10m 四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを 2m 四方に 25 等分したものである。大グリッドの名称は北西隅の杭を基点として東西方向を算用数字、南北方向をアルファベットとし、両者の組合せにより「6K」のように表示した。小グリッドは１～ 25 の算用数字で表し、北西隅を 1、南東隅を 25 とし、「6K1」のように大グリッド表示の後につけて呼称した。また必要に応じて小グリッドを 1m 四方に四分した。ア～エのカタカナで表し、北西隅をア、南東隅をエとし、「6K1 イ」のように呼称した（図版 2）。今回の調査区にあたる杭の座標値（世界測地系）は、6K 杭（X ＝ 149267.705、Y ＝ 4776.276）、10K 杭（X ＝ 149283.682、Y ＝ 4812.947）を示す。

B　基 本 層 序（第７図）

周辺の地形と土層の堆積状況　今回の調査範囲は、標高 4.2 ～ 4.8m 前後の鵜川左岸の沖積地にある。鵜川左岸の沖積地は、遺跡近辺では西側丘陵裾部までの距離が 100m ほどと狭小で、現況は耕地あるいは宅地となってほぼ平坦な地形を示している。背後に剣野山縄文遺跡群を形成する丘陵地帯が広がり、調査区の一部（ピア４区）は丘陵裾部の影響を受け、東に緩やかな傾斜を示す。

こうした地形に立地する千古作遺跡の土層の堆積状況は、かつての土地改良によって最大 1.6m の層厚を持つ盛土層が覆い、その直下から旧表土層のⅠ層以下Ⅳ・Ⅴ層までが堆積する。Ⅳ・Ⅴ層は本遺跡の遺構検出面で、同層はピア３区周辺では 0.5m 前後落ち込んでいる。そこから丘陵裾部のあるピア４区にかけては遺構検出面（地山面）以下のⅣ・Ⅵ・Ⅷ層とした黒色の腐植層が堆積し、ピア４区では 1m 以上の層厚を持つ。腐植層はピア３・４区でのみ確認され、ピア４区付近の腐植層（Ⅳ層）の上面は、ピア２区や作業ヤードの遺構検出面（Ⅴ層）より 0.6m 前後高い標高値を示している。

基本層序　千古作遺跡の基本層序は、各地区の層序対比が困難ではあるものの、包含する遺物内容や土層の性質によって、遺構検出面までをⅠ～Ⅴ層に大別した。また、前述のように腐植層の堆積が見られるピア3･4区では、地山面以下の土層の堆積状況も確認しており、これらについてもⅤ～ⅩⅡ層に大別した。

このうち遺物包含層は、中世以前の遺物を包含するⅢ層であり、その上位のⅡ層には近世の遺物を包含している。Ⅲ層はピア４区で丘陵裾部の影響を受けて、最大39cmと安定した堆積を示すが、ピア３区以東では層厚10cm未満の薄いものとなり、ピア２区では堆積が認められない。

Ⅰ層　暗灰黄色（2.5Y5/2）～暗青灰色（5B3/1）粘質土　旧表土層である。

Ⅱ層　黄灰色（2.5Y4/1）～暗青灰色（5B4/1）粘質土　Ⅰ層とⅢ層の間に堆積する土層で、Ⅱａ層～Ⅱｇ層に細分した。Ⅱａ層～Ⅱｃ層はピア３区と作業ヤードに、Ⅱｄ層はピア２区に、Ⅱｅ～Ⅱｇ層はピア４区に堆積する。いずれも締り・粘性のある粘質土でⅡａ～Ⅱｄ層はややシルト質である。Ⅱａ層は灰黄色（2.5Y6/2）を呈し、炭化物粒子や灰黄色ブロックを少量含んでいる。Ⅱｂ・Ⅱｃ層に比べやや締りに欠ける。Ⅱｂ層は暗灰黄色（2.5Y5/2）を呈し、Ⅱａ層と同様の含有物を含むが、Ⅱａ～Ⅱｃ層の中では相対的に含有量が多い。Ⅱｃ層は黄灰色（2.5Y4/1）を呈し、Ⅱａ・Ⅱｂ層と同様の含有物を含むが、その量は少なくややシルト質である。Ⅱｄ層は暗青灰色（5B4/1）を呈し、含有物は非常に少なく炭化物粒子がごくまれに含まれる。

Ⅱｅ～Ⅱｇ層は、ピア３区などのⅡ層に比べ、やや締りが弱く粘性が強い特徴がある。Ⅱｅ層は灰色(7.5Y6/1)を呈し、灰白色ブロックや炭化物粒子を少量含んでいる。Ⅱｆ層は灰色(5Y5/1)を呈し、Ⅱｅ層と同様の含有物を含むが、植物質を微量ながらに含んでいる。Ⅱｇ層は黄灰色(2.5Y4/1）を呈し、Ⅱｅ層と同様の含有物を含むが、植物質はⅡｆ層よりも多く含んでいる。

Ⅲ層　黒褐色（2.5Y3/1）～灰色（N4/0）粘質土　**中世を中心とする遺物包含層**で、Ⅲａ～Ⅲｂ層に細分した。いずれも粘質土で締り･粘性がある。Ⅲａ層は黒褐色（2.5Y3/1）を呈し、灰黄色ブロックや炭化物粒子を少量含んでいる。本土層はピア３区に堆積し、灰黄色ブロックが多く含まれる部分がある（Ⅲａ'層）。Ⅲｂ層は作業ヤードに薄く堆積する灰色（N4/0）粘質土で、ほかのⅢ層よりも粘性が強く、灰黄色ブロックが少量含まれている。Ⅲｃ層はピア４区に堆積する黒褐色（2.5Y3/1）粘質土で､灰白色ブロックを少量含む。植物質の含有が多いのが本層の特徴である。

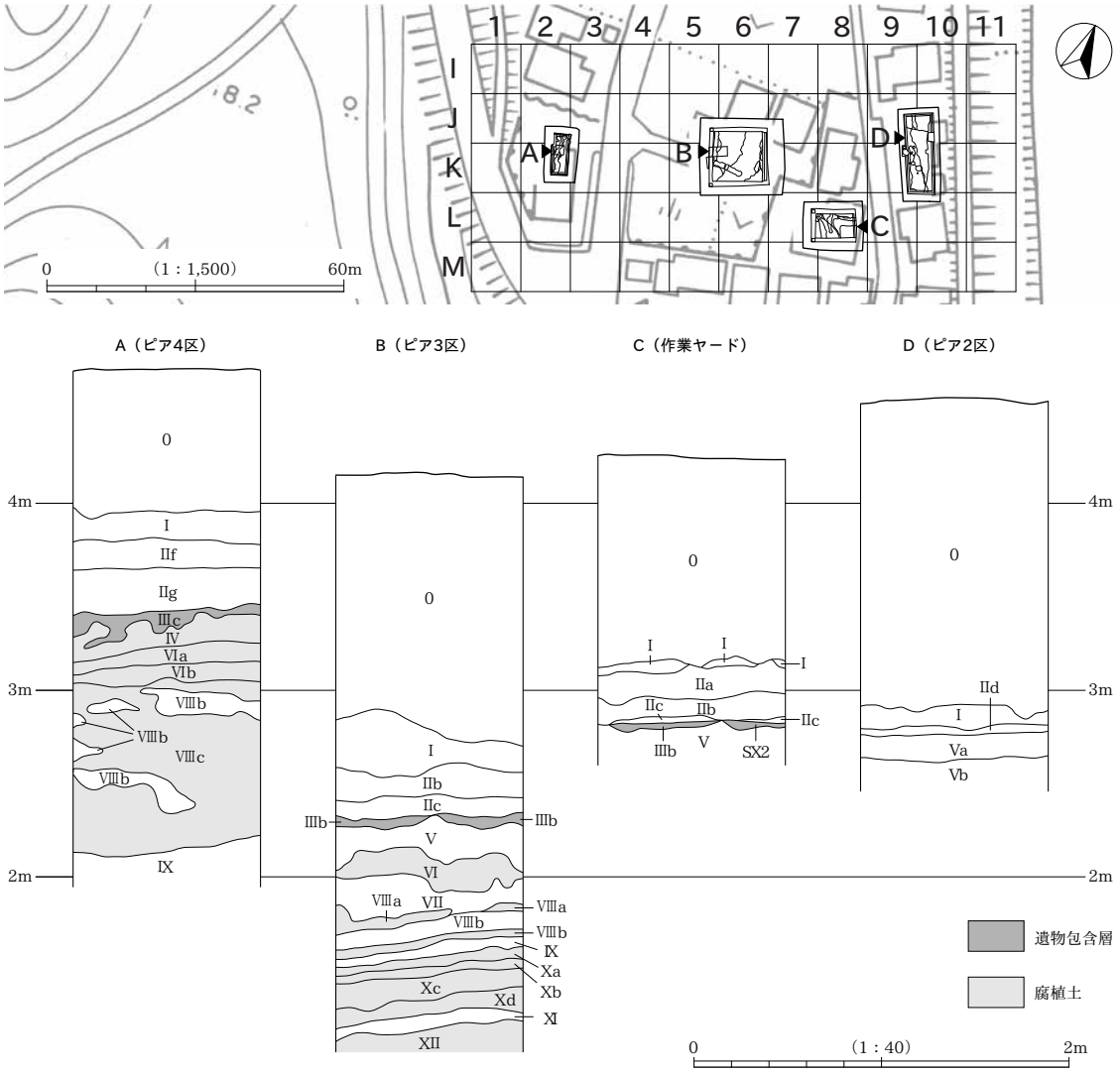
Ⅳ層　黒褐色（2.5Y3/1）の腐植土　多量の植物質からなり、ピア４区でのみ確認された。遺物は出土していない。SX32の検出面で、粘性があり部分的に粘質化している。締りはやや弱い。

Ⅴ層　灰黄色（2.5Y7/2）～緑灰色（10BG5/1）粘質土　Ⅴａ～Ⅴｃ層に細分した。いずれもピア２・３区と作業ヤードに堆積する粘質土で、締り・粘性がある。下部のⅤｂ・Ⅴｃ層は、ピア３区では確認されていない。Ⅴａ層は灰黄色（2.5Y7/2）～緑灰色（10BG5/1）粘質土で、上位に堆積するⅢ層との漸移層である植栽痕が多い。Ⅴｂ層はオリーブ灰色（2.5Y7/2）粘質土で、含有物は少ない。Ⅴｃ層はオリーブ灰色（5GY6/1）粘質土で、粘性が強く含有物は少ない。

Ⅵ層　黒褐色（2.5Y3/1）の腐植土　多量の植物質からなる。ピア３・４区に堆積し、４区ではⅥａ・Ⅵｂ層に細分される。Ⅵａ層は、多量に含まれる植物質の粒径が相対的に細かく、部分的に粘質化が進行している。Ⅵｂ層は、Ⅵａ層より含まれる植物質の粒径が粗い。

Ⅶ層　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土　ピア３区に堆積する。植物質が少量含まれている。

Ⅷ層　灰褐色（5YR4/2）腐植土　ピア３・４区に堆積する土層で、灰白色（2.5Y8/1）粘質土（Ⅷｂ層）



第７図　千古作遺跡　基本土層図

が狭在し、ピア３区では水平堆積を示すⅧｂ層の上下に腐植層（上位はⅧａ層、下位はⅧｂ層）が堆積する。一方、ピア４区ではⅧｂ層が斜位にブロック状に複雑な堆積となり、その上下のⅧａ・Ⅷｂ層の区分が不明瞭となる。Ⅷａ・Ⅷｃ層は基本的には同質で、締り・粘性があり、多量の植物質からなる。Ⅷｂ層は締り・粘性があり、少量の植物質を含む。

Ⅸ層　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土　しまり・粘性がある。植物質を少量含む。

Ｘ層　褐灰色(10YR4/1)～黒褐色(10YR3/1)腐植土　Ｘａ～Ｘｄ層に細分した。これらはいずれも締り・粘性がある。褐灰色（10YR4/1）の粘質土を含むが、Ｘａ・Ｘｃ層ではそれが少なく植物質が多量の腐植土となる。Ｘａ・Ｘｃ層は褐灰色（10YR4/1）で、褐灰色の粘質土が含まれる腐植土である。Ｘｂ・Ｘｄ層は黒褐色（10YR3/1）腐植土で、植物質が多い。

ＸＩ層　灰色（5Y6/1）粘質土　少量の植物質を含む。締り・粘性がある。

ＸⅡ層　褐灰色（10YR4/1）腐植土　多量の植物質からなり、礫を少量含む。

2 遺　　構

A 遺構の概要

遺構は、井戸１基、土坑３基、溝 13 条、性格不明遺構７基、柱穴５基を検出した。いずれも基本層序Ⅳ・Ⅴ層を検出面とする。井戸や柱穴など集落の居住域を想定させる遺構は、ピア２区に存在する。また作業ヤードでは、耕作痕の可能性がある浅い掘り込み（SX1･2）を検出した。これら以外のピア 3･4 区では、自然形成の可能性がある溝や性格不明遺構を検出した。

こうした遺構の時期は、出土遺物が少なく判断しにくいが、周辺の遺物包含層あるいは伴出の土器・陶磁器によって、主体は 13 世紀後半～ 15 世紀頃にあると推測している。このうち、ピア３区の SD13 から田下駄の足板と考えられる木製品が出土し、本遺跡周辺に水田が存在したことを推測させる。

今回の発掘調査範囲は橋脚部分に限られ、遺跡の様相を明らかにすることは困難である。しかしながらこうした狭い調査区で検出した少数の遺構や出土遺物は、少なからず、遺跡の性格を示唆する手がかりを提供してくれる。以下、本遺跡で検出した遺構の詳細を説明する。

平面形態

円　形：	長径が短径の 1.2 倍未満のもの
楕円形：	長径が短径の 1.2 倍以上のもの
方　形：	長径が短径の 1.2 倍未満のもの
長方形：	長径が短径の 1.2 倍以上のもの
不整形：	凹凸で一定の平面形を持たないもの

断面形態

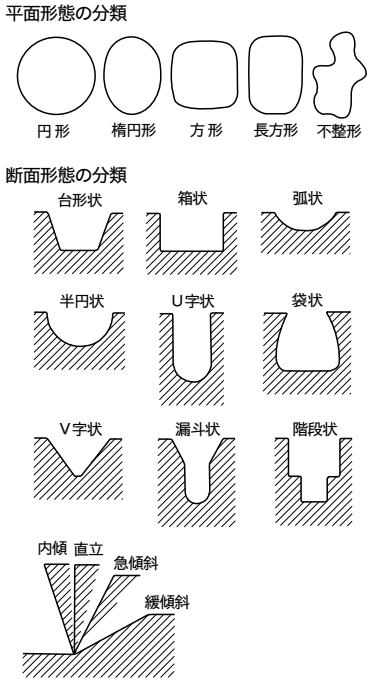
台形状：	底部に平坦面を持ち、緩やかから急角度に立ち上がるもの
箱　状：	底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるもの
弧　状：	底部に平坦面を持たない皿状で、緩やかに立ち上がるもの
半円状：	底部に平坦面を持たない椀状で、急角度で立ち上がるもの
階段状：	階段状の立ち上がりを持つもの　平面長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの
漏斗状：	下部がＵ字状、上部がＶ字状の２段階構造からなるもの
不整形：	凹凸で一定の断面形を持たないもの

第３表　遺構の形態分類表

B 記述の方法

記述の基本方針　個々の遺構の説明は、本文（遺構各説）、図面・写真図版を用いた。なお、遺構の平面・断面形状の分類基準は、［荒川・加藤 1999］に準拠した（第３表・第８図）。遺構の長軸方向は、長径を基準に真北からの角度を測定し、N ○° E（W）のように表示した。

遺構番号の表記方法　遺構番号は、遺構の種別に関係なく遺構確認の段階で、種別の略号と通し番号を付した。整理作業の段階で遺構と認識できないものは、そのまま欠番とした。遺構の種別は略号を用い、井戸：SE、土坑：SK、溝：SD、集石：SS、性格不明遺構：SX、杭列：SA、ピット：P と表記した。



第８図　遺構の形態分類図

C 遺構各説

1）ピア２区（図版２～４・22～24）

ピア２区は、Ⅴ層を遺構検出面として井戸１基、土坑３基、溝１条、性格不明遺構３基、ピット５基を検出した。遺物包含層が残存しないことから、本地区の大半が削平を受けたものと考える。遺構には、性格不明遺構（SX16・17・31）など自然形成の可能性が高いものもあるが、珠洲焼を包含する井戸（SE19）があるなど、本地区周辺が中世集落の一部であることを示す。

SE19（図版 3･23）　9K4･5･9･10 グリッドに位置する。平面は不整方形で、長径 1.57m･短径 1.18m である。深さは 1.92m で、断面が漏斗状を呈する素掘り構造の井戸である。SK33 よりも古い。覆土は 8 層に分層でき、すべてレンズ状に堆積している。出土遺物は 4 層から珠洲焼の甕（1）、5 層から磨石（2）が出土した。

SK23（図版 3･23）　9K10･15 グリッドに位置する。平面は不整円形で、長径 0.73m･短径 0.67m である。深さは 0.25m で、断面は台形状を呈し、緩やかに立ち上がる。長軸方向は N42° E を示す。

SK29（図版 3・23）　9K15、10K11 グリッドに位置する。平面は楕円形で、長径 1.27m・短径 1.15m である。深さは 0.11m で、断面は台形状を呈し、緩やかに立ち上がる。長軸方向は N57° E を示し、SX31 よりも新しい。

SK33（図版 3）　9K4 グリッドに位置する。平面は不整楕円形で、長径 0.73m・短径 0.59m である。深さは 0.15m で、断面は台形状を呈し、急斜度に立ち上がる。長軸方向は N23° W を示し、SE19 よりも新しい。

SD27（図版 3・4）　9J15・20 グリッドに位置する。北側は調査区外に延びる。断面は台形状を呈し、緩やかに立ち上がる。長軸方向は N28° W を示す。覆土は 2 層に分層でき、レンズ状の堆積を示している。SX16 よりも古い。遺物は須恵器の甕（3）が出土した。

SX16（図版 3・4・24）　9J15・20、10 J16・21 グリッドに位置する。東側は SX17 に切られ、北側・西側は調査区外に延びている。深さは 0.2m である。断面は台形状を呈し、立ち上がりは緩やかである。SX17 よりも古く、SX31 よりも新しい。遺物は須恵器有台杯（4）が出土している。

SX17（図版 3・4・24）　10J・K グリッドに位置し、南北方向に延びる。北側・東側・南側は調査区外に延びる。西側の立ち上がりが確認できた。断面は階段状を呈し、立ち上がりは緩やかである。SX16・31 よりも新しい。遺物は中世土師器の小皿（5）が出土した。

SX31（図版 3・4・24）　9 J・K、10J・K グリッドに位置し、南北方向に延びる。北側・東側・南側は調査区外に延び、調査区内では西側の立ち上がり部分のみを確認した。自然形成の埋没谷である可能性が高い。したがって、SX31 はトレンチを設定し、プラン・土層断面などを記録するにとどめた。SK29、SX16・17、SD27 よりも古い。

柱　穴（図版 3・23）　9K・10K グリッドで 8 基確認した。柱穴は、総体的に規模が小さいが、直径 35cm 未満の規模の小さいもの（P20 ～ 22・24・25）と直径 45cm 前後の相対的に大きいもの（P30）とに分けられる。規模の小さいものは、深さ 20cm 前後の P20 ～ 22・24 と深さ 35cm の P25 とがある。相対的に大型の P30 は、深さ 44cm に達する。

2）ピア 3 区（図版 2・5・6・22・25 ～ 27）

ピア 3 区では、Ⅴ層を遺構検出面として溝 6 条、性格不明遺構 1 基を検出した。溝には自然流路の可能性がある SD13 と、その覆土堆積後に形成された SD8 ～ 12 がある。また、SD9・10 に沿って杭 1 ～ 13 を検出した。遺物は、SD13 から 14 世紀頃の中世土師器と、田下駄の足板などが出土している。

SD8（図版 5・25）　5J20・25、5K5・10 グリッドに位置する。北側は調査区外に延びる。幅 0.55 ～ 0.93m で、深さ 0.06m と浅く、基底面は起伏に富む。断面は台形状を呈し、緩やかに立ち上がる。主軸方向は後述する SD11・12 とほぼ平行し、N17° W を示す。SD9 よりも古く、SX14 よりも新しい。

SD9（図版 5･25）　5K10･15、6K6･11 グリッドに位置する。平面は長方形で、長径 2.3m･短径 1.16m･

深さ 0.06m と浅く、基底面は起伏に富む。断面は台形状を呈し、緩やかに立ち上がる。長軸方向は N88°E を示す。

SD10（図版 5・25・26） 6K11 ～ 13・17・18 グリッドに位置する。平面は長方形で、長径 3.74m・短径 1.03m・深さ 0.21m と浅く、基底面は起伏に富む。断面は階段状を呈し、緩やかに立ち上がる。長軸方向は N86°W を示し、SD13 よりも新しい。箸（20）が出土した。

SD11（図版 5・26） 6K9・10・14・15 グリッドに位置する。長径 2.14m・短径 0.95m・深さ 0.07m と浅く、基底面は起伏に富む。断面は台形状を呈し、緩やかに立ち上がる。長軸方向は N8°W を示し、SD13 よりも新しい。

SD12（図版 5・26） 6J25、6K5・10 グリッドに位置する。深さ 0.1m と浅く、基底面は起伏に富む。断面は台形状を呈し、緩やかに立ち上がる。SD13 よりも新しい。

SD13（図版 5・6・26） 5K、6J・K グリッドに位置する。最大幅 4.57m・深さは 0.25 ～ 0.34m である。断面は弧状を呈し、立ち上がりは緩い。長軸方向は 6K14 杭を境に緩く屈曲し、N23°E(南側)から N2°W(北側）へと変化する。覆土には未分解の植物質を多く含み、加工痕が認められない自然木が長軸に沿う形で多く検出された。溝底面が平坦面を持たずに緩やかに北側へ傾斜していることや、覆土の堆積状況などから考えて、自然流路の可能性が高い。SD10 ～ 12 よりも古い。出土遺物には中世土師器小皿（11）や木製品（12 ～ 19）などがあり、中世土師器は覆土の上部（1 層）から出土している。6K9 グリッドでは、田下駄（円形枠付き田下駄）の足板の一部（13・14）が、地山（Ⅶ層）に刺さった状態で見つかった。破損した部材が重なってほぼ垂直に刺さっていることから、意図的に廃棄した結果と考える。この足板（13）に対して放射性炭素年代測定を実施したところ、1,191 ± 29 年 BP（AD781 ～ 791 年（8.0%）・807 ～ 881 年（60.2%））との値（第Ⅲ章 4A 参照）が示され、平安時代にはこの溝（流路）が存在していた可能性が高い。

SX14（図版 5） 5J25、5K5・10、6J21、6K1 グリッドに位置する。深さ 0.06m と浅く、基底面は起伏に富む。断面は台形状を呈し、緩やかに立ち上がる。SD8 よりも古い。

杭（図版 5・6） 杭は 5K10 グリッドで 2 本、6K11 グリッドで 4 本、6K13 グリッドで 2 本、6K19・20 グリッドで 4 本確認できた。SD9・10 に沿うように北西－南東方向に並んでいるので、関連する可能性が高い。杭列の長軸方向は N56 ～ 68°W の範囲内にある。SD13 の覆土上面から打ち込まれているため、少なくとも SD13 よりは新しい。

3）ピ ア 4 区（図版 2・6・22・27）

今回の調査では最西端の調査区である。剣野丘陵裾部に位置し、基盤層は東に傾斜する斜面地を形成する。Ⅳ層を遺物検出面として、自然形成の可能性がある SX32 を検出した。最大深度 0.54m で、西側の立ち上がりは急斜度である。東に落ち込んでおり、埋没谷となっている可能性がある。覆土から遺物は出土しなかった。

4）作業ヤード（図版 2・7・22・28）

作業ヤードからは、Ⅴ層を遺構検出面として溝 6 基・性格不明遺構 2 基を検出した。遺物包含層のⅢ層の堆積が極めて薄く、調査区の大半は削平を受けている。検出した遺構には SD5・6 や SX1・2 などがあり、SX1・2 は遺構の形状から耕地の可能性も考慮される。出土遺物は少ないが、中世（15 世紀後半頃）の土師器などがある。

SD3（図版７・27）　7L15、8L11 グリッドに位置する。SD7 と平行する溝で、北側・西側は調査区外に延びる。幅 0.5m・深さは 0.16m である。断面は台形状を呈し、急斜度の立ち上がりである。長軸方向は N6° W を示し、SX1 よりも新しい。遺物は土師器の無台椀（69）が出土した。

SD4（図版７･28）　8L11 グリッドに位置し、北側は調査区外に延びる。幅 0.28m･深さ 0.06m の浅い溝で、断面は V 形状を呈し、緩やかな立ち上がりを示す。長軸方向は N47° W で、SX1 よりも古い。

SD5（図版７･28）　8L12 ～ 14 グリッドに位置し、東側は調査区外に延びる。幅 0.51m･深さは 0.05m で、断面は台形状を呈し、緩やかに立ち上がる。北側の直近には、本遺構よりも新しい時期の SD6 が平行して存在する。長軸方向は N73° E を示す。珠洲焼の片口鉢（70）が出土した。

SD6（図版７・28）　8L12 ～ 14 グリッドに位置する。北側・東側は調査区外に延びる。幅 0.92m・深さ 0.25m で、断面は V 形状を呈し、急斜度に立ち上がる。南側に本遺構よりも古い時期の SD5 が平行して存在し、長軸方向は N75° E を示す。遺物は中世土師器皿（71）が出土した。

SD7（図版７･28）　8L11･12･16･17･22 グリッドに位置し、北側は調査区外に延びる。幅 0.44 ～ 1.0m･深さ 0.25 ～ 0.34m の浅い溝である。断面は台形状を呈し、緩やかに立ち上がる。長軸方向は N33° W を示し、平行する SD3 と同様に SX1 よりも新しい。

SD15（図版７・28）　8L11・16・21 グリッドに位置し、南側は調査区外に延びる。SX1 の底面から検出され、幅 0.43 ～ 1.02m・深さ 0.18m である。断面は台形状を呈し、急斜度の立ち上がりである。長軸方向は N33° W を示し、SX1 よりも古い。

SX1（図版７・28）　8L11・16・17・21・22 グリッドに位置する。西側・南側は調査区外に延び、全体規模は不明である。深さは 0.06m と浅く、緩やかな立ち上がりを示す。SD3・7 よりも古く、SD4・15 よりも新しい。底面は細かな起伏があり、東側の SX2 と共に耕作痕の可能性がある。SX2 との境は幅 20cm 程の畦畔状を呈する。中世土師器皿（72）と V 期と考えられる珠洲焼片口鉢（73）が出土している。

SX2（図版７・28）　8L18・19・23・24 グリッドに位置し、東側・南側は調査区外に延びる。SX1 同様に底面は細かな起伏があり、深さも 0.06m と共通する。北西隅はほぼ直角になっており、急斜度に立ち上がる。遺物は須恵器の無台杯（74）が出土した。

3 遺　　物

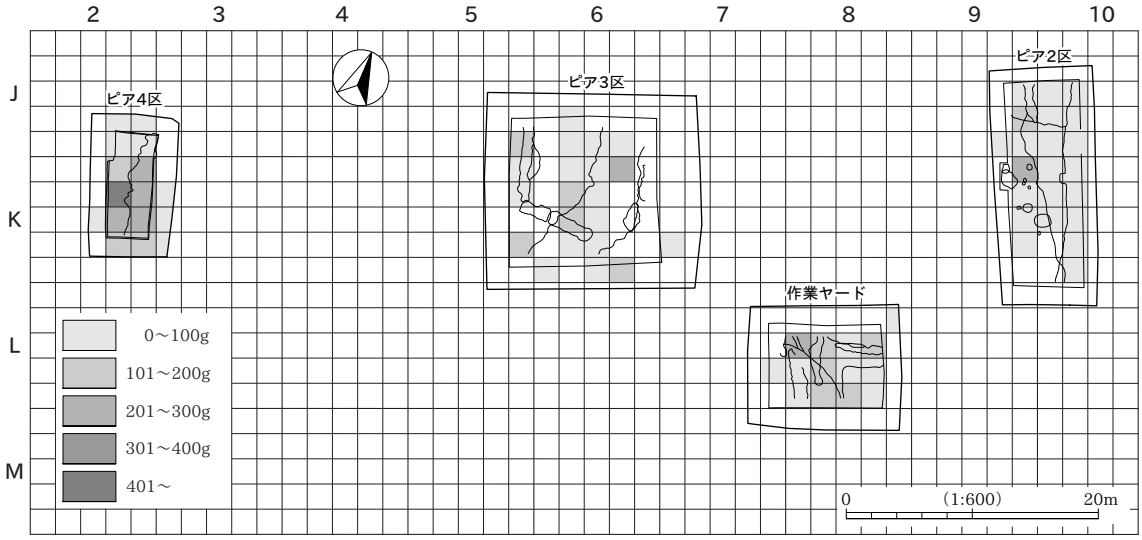
A 遺物の概要

出土遺物の概要　千古作遺跡では、比較的多数の出土遺物が得られた。出土遺物の総数は、平箱（54 × 34 × 10cm）約 9 箱で、土器・陶磁器 4 箱、木製品 4 箱、石器・石製品 1 箱などがある。時期別には、縄文時代、古代、中世の遺物があるが、13 世紀～ 15 世紀にかけての中世の遺物が主体であり、ほかは少量にとどまる。各地区いずれもⅡ～Ⅲ層から出土しているが、中世を主体とする遺物包含層のⅢ層は、堆積が不安定で、ピア 2 区、作業ヤードでは薄いか堆積していない状況であった。したがって、遺物の取り上げは層位ごとに行ったが、層位的傾向は得られなかった。

遺物の分布は、ピア 2 区、3 区、作業ヤードでは少なく、丘陵裾部に近接するピア 4 区で比較的多数出土する傾向にあった。第 9 図は、中世を主体とした土器･陶磁器の平面的な重量分布を示したものだが、上記した発掘調査時の所見と整合的な分布状況を示している。しかしながら、明瞭な遺構の形成があるのはピア 3 区以東の各地区であり、遺構の分布傾向と遺物の分布傾向は一致していない。すなわち自然形成の落ち込み（SX32）のあるピア 4 区に遺物が多く、遺構の分布が明瞭となるピア 3 区以東には遺物分布が少なくなるのである。

遺物の記述方法　遺物の記述は、出土地点を優先し地区ごとに行った。各種遺物の説明にあたっては、本文の遺物各説、観察表、実測図（図版 8 ～ 10）、写真（図版 29･30）を用いた。実測図などの遺物の掲載は、土器・陶磁器・木製品など種別ごとに分類し、遺構内出土遺物を中心に選択した。また、土器・陶磁器は、本遺跡で主体的な中世を中心に選択し、客体的な古代・縄文時代に先行して図版に配した。さらに、中世のものは土師器、陶磁器の順で掲載し、時期的に古いものから掲載するのを基本とした。遺構の出土遺物では遺構番号（小→大）、遺構の種別では SE、SK、P、SD、SX の順を原則とした。

遺物各説の記述の方針は、原則として法量や色調、胎土の特徴などは観察表に示し、本文は観察表では示せない個々の遺物の特徴や所見を中心とした。



第 9 図　千古作遺跡　遺物の重量分布図

B　遺物各説

1）ピア２区

本地区は最も遺物が少なかった地区で、その大多数は小破片であった。ピア３・４区や作業ヤードで遺物包含層Ⅲ層の堆積が無く、図示した遺物は遺構内か上位に堆積するⅡ層から出土した遺物である。

遺構内出土遺物は、SE19、SD27、SX16・17 にあるが、いずれも小片である。しかしながら、本遺跡唯一の井戸である SE19 から珠洲焼が出土した。また自然形成の可能性がある SX16・17 からは平安時代の須恵器の出土がある。このうち SX16･17 には混入の可能性もあるが、近世陶磁器も存在している。

SE19（図版 8･29 － 1･2）　珠洲焼の甕（1）と磨石（2）がある。1 の珠洲焼には粗い斜行する叩き目があり、内面は平滑に摩滅している。叩き目と胎土からⅤ期［吉岡 1994］の所産の可能性がある。2 の磨石は安山岩を素材とするもので、弱い磨り痕が全面に観察される。

SD27（図版 8・29 － 3）　3 は須恵器甕の胴部破片で、外面が擬格子の叩き目、内面は平行状の当て具痕が重複して斜格子目状となっている。

SX16（図版 8･29 － 4）　4 は須恵器杯の口縁部から底部付近にかけての破片で、有台杯の可能性がある。

SX17（図版 8・29 － 5）　5 は中世土師器の小皿で、わずかに残る底部には指によるオサエが見られず、ロクロ成形の可能性がある。

包含層（図版 8・29 － 6 ～ 10）　6 は中世土師器の小皿で、口縁部から体部に横方向のナデが見られ、手づくね成形の可能性がある。7 は手づくね成形の中世土師器皿で、口縁部と体部の境に段が明瞭に認められる。8 は 3 単位の脚が付く瓦器で、鉢と推測される。9 は頁岩を素材とする有孔石器で、上下 2 孔ともに表裏両面から穿孔されている。10 は小型の椀形鍛冶滓で、表面には木炭が付着する。磁着反応が見られないことから、鉄を含んでいないものと考えられる。

2）ピア３区

本地区は、遺物包含層と自然形成の流路跡と推測される SD13 を中心として 13 世紀後半や 15 世紀後半を中心とする遺物が出土している。土器・陶磁器は本地区でも細片が多く、大部分は包含層のⅢ層から出土している。包含層の堆積は薄く、遺物の層位的な傾向は得られていない。標高が最も低い調査区のため木製品も多く、特に SD13 からは、本県では類例に乏しい田下駄の足板が出土している。

SD10（図版 8･29 － 20）　木製品の箸（20）がある。削りによって断面多角形に成形して棒状に整えている。

SD13（図版 8・29 － 11 ～ 19）　中世土師器の小皿（11）と木製品（12 ～ 19）がある。11 の中世土師器小皿は手づくね成形で口径 8.2cm とやや小さく、底部は厚みがあり体部は薄くなっている。木製品の 12 ～ 15 は、田下駄の足板と推測されるものである。このうち 12 は完存するもので、前後に両側縁から抉りが入り、後部は抉りから後方が幅狭く仕上げられている。略方形（8 × 9mm）の緒孔は下駄同様に前に 1 つ、後部に 2 つ穿たれている。こうした 12 の形状を考慮したとき、同一地点から突き刺されて出土した 13 ～ 15 は接合しないが同一個体の可能性がある。3 点の緒孔は円形に近いが、幅 8mm 前後と 12 の緒孔の大きさと共通する。16・17 は板材であり、このうち 16 の先端は炭化しているため火付け木の可能性もある。火付け木の可能性のあるものは 16・17 以外にも少数出土しており、その一部の写真（図版 30 － 90 ～ 93）を掲載した。18・19 は断面多角形の箸である。

包含層（図版 8・29 － 21 ～ 42）　21・22 は輸入陶磁器で、21 は龍泉窯系青磁椀Ⅲ類［山本 2000］と

推測されるもので、釉薬が厚く澄んだ青緑色を呈し器厚も薄い。周縁は円形を意識して剝離されており、研削具として転用された可能性もある。22 はＤ群の白磁皿[森田 1982]で底部付近は露胎となっている。

23・24 は珠洲焼の片口鉢で、このうち 24 は口縁部の断面形が内削状となり内面に肥厚し、広くなりつつある面を有する。卸目一単位が多条化し、施文の間隔も稠密となりつつある段階のもので、［吉岡 1994］編年のＶ期でもやや古い様相のものであろう。

25 ～ 31 は、中世土師器の皿である。いずれも手づくね成形だが、25 ～ 27 の器厚は厚手で、かつて刈羽・三島型［品田 1991a・1997・1999a］とされた一群で、口縁部の横ナデと体部から底部の指頭によるオサエが特徴である。これらは、いずれも口縁部と体部の境に明瞭な段をつけず、横ナデが底部付近まで及んでいる。28 ～ 31 は器厚が薄手で京都系第 2 波の影響を受けた一群である［品田 1999b、水澤 2005b］。口縁部が体部から屈曲して外反する特徴があり、28・29 の口唇部は上方に摘み上げられる。口縁部の横ナデと体部から底部に施される指頭によるオサエの境界は、明瞭な段となるもの（28・29）とわずかに括れるもの（30･31）がある。法量には口径 12cm 前後（28 ～ 30）と、15cm 以上（31）とがある。

本地区では、以上の土器・陶磁器のほか、33 の須恵器甕、32 の管状土錘、34 ～ 42 の木製品がある。このうち、32 の土錘は完形に近いが表面の剝落が著しく、観察表に示した重量は括弧を付した。太型管状土錘に分類されるものであろう［関 1990］。また、木製品の 34 ～ 37 は板状を呈するもので、34 ～ 36 は先端が炭化している。祭祀などに伴う火付け木の可能性がある。39 ～ 42 は箸の下半部である。

3）ピ ア ４ 区

本地区は丘陵裾部に位置する地区で、東に傾斜する斜面地をなし、SX32 が形成されている。包含層（Ⅲ層）の堆積も厚く、出土遺物の量も相対的に多いが、層位的な傾向は得られていない。掲載遺物はいずれも包含層のもので、SX32 の出土遺物は図示に耐えない小片であった。なお、本地区の西側、丘陵頂部に剣野Ｂ遺跡が隣接しているが、出土遺物の一部はその再堆積の可能性もある。

包含層（図版 9・29・30 － 43 ～ 59）　土器・陶磁器（43 ～ 54）、石製品（55 ～ 57）、漆器（58）、木製品（59 ～ 65）、銭貨（66・67）、鉄関連遺物（68）がある。43・44 は、いずれも輸入陶磁器で、43 は 16 世紀中葉頃の景徳鎮窯系の青磁皿である。44 は龍泉窯系の青磁椀Ⅳ類［山本 2000］で、無文で釉薬も厚い。

45・46 は珠洲焼で、45 は甕の肩部に相当する部分で、叩き目は比較的密で深い特徴がある。46 は片口鉢で、口縁部が内削状で広い面を持つ。45 は［吉岡 1994］編年のⅢ期頃、46 はＶ期と推測される。

47 ～ 53 は土師器で、多くは中世のものと考えられる。47・50 ～ 52 はロクロ成形で、51・52 以外はいずれも器厚が厚い。このうち 47 は皿に分類されるもので、器高に対して底径が大きい。50 は 51・52 と比較して底部が厚底となり、51 の底径はほかのものより大きい傾向があり、皿に分類できる可能性がある。52 は器形、底部の厚さなどから無台の椀形を呈する可能性がある。48・49 は手づくね成形の皿と推測され、48 は口縁部と体部の境界に明瞭な段を持たない。49 は器厚が薄く、口縁部先端は上方に摘みあげられ、体部には口縁部と画する段がある。53 は、ロクロ成形の長甕の口縁部である。

54 は 17 世紀代の唐津椀である。底部を露胎とし、高台内の表面には細かい皺が認められる。

55 ～ 57 は石製品である。55 は磨石で、側面 3 面に磨面を持つ。56 は表裏のほぼ同じ位置に、縦位 1 条の溝（幅 3mm、深さ 5mm）を持つ有溝砥石で、両側面には敲打痕も認められる。57 は表面に磨面を持つが、欠損する裏面が不安定な形状と考えられることから、置砥石としての利用が想定できる。58 は漆器椀で、内面赤漆、外面黒漆が塗布され、外面に赤漆による文様が描かれている。59 ～ 65 は木製品で、

59 は丸木の表面を削り出し、先端に断面長方形を呈する凸状の加工が施される。体部は緩く湾曲しており、先端部加工の特徴と合わせて弓と判断した。60 は上方が断面円形状に面取りされ、下方が断面方形に加工される。動力部の軸としての機能が想定できる。61 は桶の側板、63 ～ 65 は用途不明の板材である。62 は径約 5mm の円孔と綴じ皮が認められる板材で、曲物などの箍の可能性がある。

66･67 は銭貨で、66 が元祐通寶（篆書体）、67 が永楽通寶である。68 は鉄関連遺物の椀形鍛冶滓である。小型で磁着反応が見られないため、鉄を含まないと考えられる。

4）作業ヤード

本地区では、遺物包含層を中心に遺物が出土したが、包含層の堆積は薄く、層位的な傾向は得られなかった。遺構出土の遺物は極めて少なく、その大部分は図示に耐えない小片である。SD3・5・6、SX1・2 から出土し、その多くは中世の遺物である。SX2 からは平安時代の須恵器も出土している。

SD3（図版 10・30 － 69）　69 は、土師器食膳具の底部で、回転糸切りの痕跡を残す。器厚が厚く、中世土師器皿の可能性もある。

SD5（図版 10・30 － 70）　70 は口縁部の先端が丸く収まる珠洲焼の片口鉢で、内面の肥厚部が退化して波状文が施文される。胎土も灰白色と新出の要素があり、［吉岡 1994］編年のⅥ期と考えられる。

SD6（図版 10・30 － 71）　71 は土師器の底部で、内面にはロクロ成形の凹凸が顕著に残る。底部の器厚は厚く、中世でも古い様相の食膳具の可能性もある。

SX1（図版 10・30 － 72・73）　72 は中世土師器の皿で、手づくね成形で口縁部に横ナデを施し、体部の段を作出しない特徴がある。73 は珠洲焼の片口鉢で、口縁部は三角頭で内傾し、上面に波状文を施文する。［吉岡 1994］編年のⅤ期に位置付けられる。

SX2（図版 10・30 － 74）　74 は、須恵器無台杯の口縁部で、口縁部が緩く立ち上がり相対的に新しい様相を帯びている。胎土の特徴から佐渡小泊窯産の可能性がある。

包含層（図版 10・30 － 75 ～ 89）　75 は龍泉窯系の青磁椀で、口縁部には片切彫の雷文が施文されている。［上田 1982］分類の C 類に相当する。76 は瀬戸・美濃焼の天目茶椀で、口縁部は垂直気味に立ち上がり、そこから弱く外反する特徴があり、後期様式のⅡ期［藤澤 2005］と推測される。

77 ～ 81 は珠洲焼で、77 が甕の体部、78 ～ 80 が片口鉢、81 が甕体部片を土器片利用の研削具［藤巻 1989］に転用したものである。［吉岡 1994］編年のⅣ期（77）、Ⅲ期（78）、Ⅵ期（79・80）に位置付けられる。このうち 79 の片口鉢の口縁部は、内面に波状文が施文されるが先端が丸く、胎土も灰白色と後出の特徴を持つ。

82 ～ 84 は中世土師器で、82･83 は厚手の手づくね成形の皿で、体部に明瞭な段を形成しない。84 は、小皿に分類されるもので、薄手で口縁部の摘み上げが微弱となり口縁部の肥厚が顕著である。

85 は須恵器有台杯の高台が内端接地する底部で、切り離し痕は回転ヘラ切りである。86 は砥石で、欠損部に近い側面が擦れて丸みを持つことから、欠損後も使用されたものである。87･88 は板状の木製品で、87 は上方中央に径約 4mm の円孔が認められる。89 は鉄関連遺物で小型の椀形鍛冶滓である。

4　自然科学分析

A　放射性炭素年代測定

1）測定対象試料

千古作遺跡は、新潟県柏崎市剣野町字千古作 288-3 ほかに所在する。測定対象試料は、ピア 3 区 SD13 の 3 層から出土した木製品（①：IAAA-82522）、ピア 4 区 2K4 グリッドのⅢ層から出土した木製品（②：IAAA-82523）、ピア 3 区 SD13（Ⅵ層）から出土した木皮（③：IAAA-82524）、ピア 3 区 SD13（Ⅷ層）から出土した小枝（④：IAAA-82525）、ピア 4 区のⅣ層から出土した小枝（⑤：IAAA-82526）、ピア 4 区のⅧ層から出土した小枝（⑥：IAAA-82527）、合計 6 点である。

2）測定の意義

千古作遺跡は中世を主体とする遺跡であるが、古代・近世の遺物も出土している。対象となる木製品は層位や形態から所属時期を決めることは難しく、遺跡の時間幅も大きいことから、その所属する年代を明らかにしたい。また、遺構面の上下に存在する腐植物層の包含物を 2 地点間で比較することにより、層序の対応関係と遺構の時期を把握したい。

3）化学処理工程

（1）　メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

（2）　酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA:Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では 1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では 1N の水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお、AAA 処理において、アルカリ濃度が 1N 未満の場合、表中に AaA と記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

（3）　試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で 30 分、850℃で 2 時間加熱する。

（4）　液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

（5）　精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。

（6）　グラファイトを内径 1mm のカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4）測 定 方 法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5）算 出 方 法

（1）　年代値の算出には、Libby の半減期（5,568 年）を使用する［Stuiver and Polash 1977］。

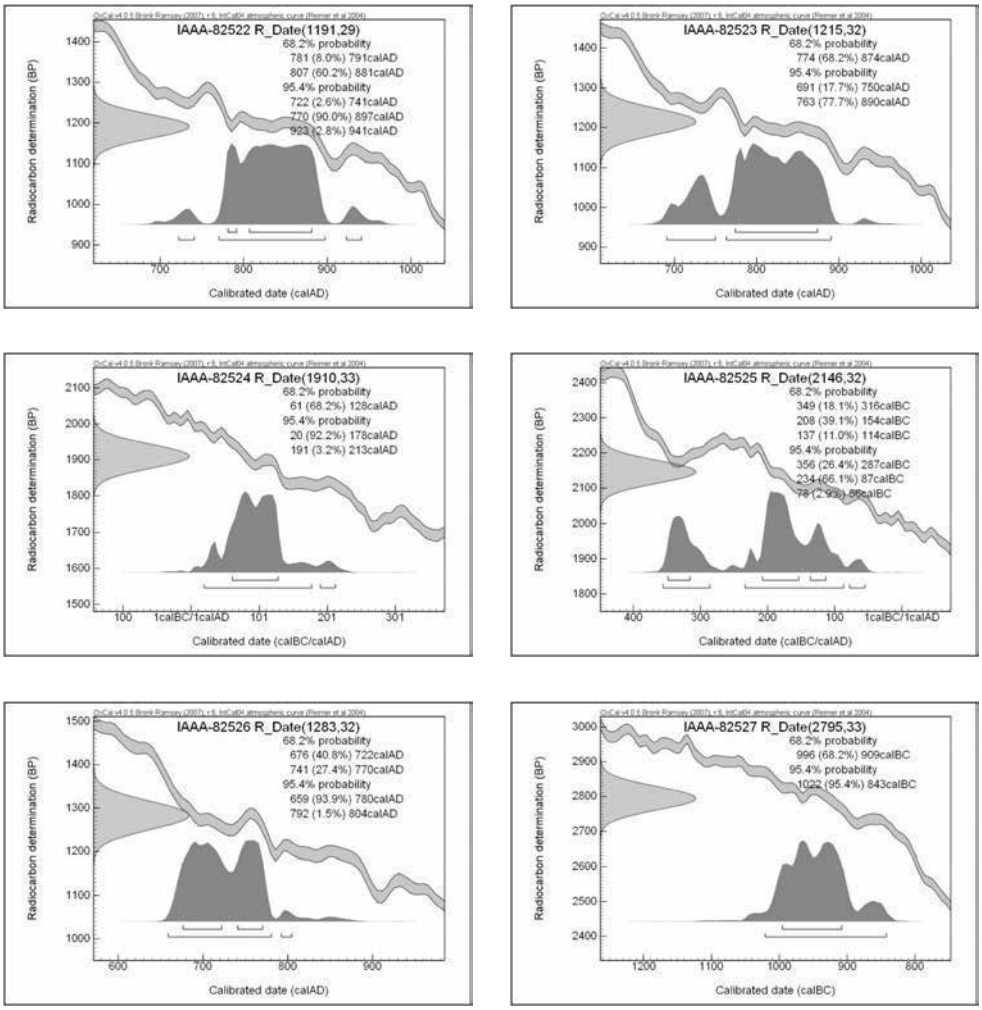
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ 13C（‰）（AMS）	δ 13C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-82522	①	ピア３区　SD13　３層	木製品（田下駄）	AAA	-23.38 ± 0.69	1,190 ± 30	86.21 ± 0.32
IAAA-82523	②	ピア４区　2K4 グリッド　Ⅲ層	木製品（弓）	AAA	-25.16 ± 0.78	1,220 ± 30	85.96 ± 0.35
IAAA-82524	③	ピア３区　SD13　Ⅵ層	木皮	AAA	-25.53 ± 0.54	1,910 ± 30	78.83 ± 0.32
IAAA-82525	④	ピア３区　SD13　Ⅶ層	小枝	AaA	-26.96 ± 0.61	2,150 ± 30	76.55 ± 0.31
IAAA-82526	⑤	ピア４区　Ⅳ層	小枝	AAA	-26.13 ± 0.65	1,280 ± 30	85.24 ± 0.34
IAAA-82527	⑥	ピア４区　Ⅶ層	小枝	AAA	-27.12 ± 0.62	2,800 ± 30	70.61 ± 0.30

［#2678］

測定番号	報告No.	δ 13C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
		Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-82522	13	1,170 ± 30	86.50 ± 0.30	1,191 ± 29	781AD - 791AD（8.0%） 807AD - 881AD（60.2%）	722AD - 741AD（2.6%） 770AD - 897AD（90.0%） 923AD - 941AD（2.8%）
IAAA-82523	59	1,220 ± 30	85.93 ± 0.32	1,215 ± 32	774AD - 874AD（68.2%）	691AD - 750AD（17.7%） 763AD - 890AD（77.7%）
IAAA-82524		1,920 ± 30	78.74 ± 0.31	1,910 ± 33	61AD - 128AD（68.2%）	20AD - 178AD（92.2%） 191AD - 213AD（3.2%）
IAAA-82525		2,180 ± 30	76.24 ± 0.29	2,146 ± 32	349BC - 316BC（18.1%） 208BC - 154BC（39.1%） 137BC - 114BC（11.0%）	356BC - 287BC（26.4%） 234BC - 87BC（66.1%） 78BC - 56BC（2.9%）
IAAA-82526		1,300 ± 30	85.04 ± 0.32	1,283 ± 32	676AD - 722AD（40.8%） 741AD - 770AD（27.4%）	659AD - 780AD（93.9%） 792AD - 804AD（1.5%）
IAAA-82527		2,830 ± 30	70.30 ± 0.28	2,795 ± 33	996BC - 909BC（68.2%）	1022BC - 843BC（95.4%）

［参考値］

第４表　千古作遺跡　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果



第 10 図　千古作遺跡　暦年較正結果

（2）　^{14}C 年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）としてさかのぼる年代である。この値は、δ ^{13}C によって補正された値である。^{14}C 年代と誤差は、1 桁目を四捨五入して 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（± 1 σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

（3）　δ ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により ^{13}C/^{12}C を測定した場合には、表中に（AMS）と注記する。

（4）　pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。

（5）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1 σ＝68.2％）あるいは 2 標準偏差（2 σ＝95.4％）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04 データベース［Reimer et al 2004］を用い、OxCalv4.0 較正プログラム［Bronk Ramsey 1995　Bronk Ramsey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001］を使用した。

6）測 定 結 果

^{14}C 年代は、ピア 3 区 SD13 の 3 層から出土した木製品が 1,190 ± 30yrBP、ピア 4 区 2K4 グリッドのⅢ層から出土した木製品が 1,220 ± 30yrBP である。

ピア 3 区 SD13 では、Ⅵ層から出土した木皮が 1,910 ± 30yrBP、Ⅷ層から出土した小枝が 2,150 ± 30yrBP である。ピア 4 区では、Ⅳ層から出土した小枝が 1,280 ± 30yrBP、Ⅷ層から出土した小枝が 2,800 ± 30yrBP である。

試料の炭素含有率はすべて 50％以上であり、十分な値であった。③～⑥に関しては、樹皮や小枝であり、樹木の最外年輪付近から試料を採取されたことから、樹木の枯死年代を反映する年代が得られたと考えられる。ピア 3 区やピア 4 区出土試料の測定結果は、層位の上下関係とも整合的であり、化学処理及び測定内容にも問題が無く、測定結果の信頼性を保証するものである。

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37（2）, 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43（2A）, 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43（2A）, 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

B　樹種同定

1）試　　料

試料は、分析対象候補とされた木製品 30 点から選択された 15 点である。これらを対象に樹種同定を行う。各試料の詳細は、結果とともに第 5 表に示す。

2）分析方法

各木製品の木取りを観察した上で、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を木製品表面から直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入してプレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

木材組織の名称や特徴については、［島地･伊東 1982］、［Wheeler ほか 1998］、［Richter ほか 2006］を、日本産木材の組織配列については、［林 1991］や［伊東 1995･1996･1997･1998･1999］を参考にする。

3）結　　果

結果を第 5 表に示す。木製品は、針葉樹 3 分類群（マツ属複維管束亜属･スギ･ヒノキ科）と広葉樹 2 分類群（ブナ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節）に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となり、1 分野に 1 個。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15 細胞高。

・スギ（*Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2-4 個。放射組織は単列、1-10 細胞高。

・ヒノキ科（Cupressaceae）

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10 細胞高。

・ブナ属（*Fagus*）　ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に 2-3 個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1-2 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高のものと複合放射組

報告 No.	実測 No. 写真 No.	調査区		遺構名	層位	取上 No.	器種	木取り	樹種
12	W-3	ピア３区		SD13	４層	No.5	田下駄足板	板目	スギ
13	W-2	ピア３区		SD13	３層	No.6	田下駄足板	板目	スギ
15	W-1	ピア３区		SD13	２層	No.1	田下駄足板	板目	スギ
34	W-9	ピア３区	6K16				板材	柾目	スギ
36	W-10	ピア３区	7K16				板材	柾目	スギ
37	W-6	ピア３区	6K19		Ⅱ層		板材	板目	スギ
38	W-7	ピア３区	6J24				部材	分割材	スギ
39	W-12	ピア３区	5K20				箸	削出角棒	スギ
42	W-17	ピア３区	6K12				箸	削出角棒	スギ
58	W-27	ピア４区	2K9		Ⅱｃ層		漆器椀	横木地	ブナ属
59	W-18	ピア４区	2K14		Ⅲ層		弓	芯持丸木	ヒノキ科
60	W-21	ピア４区	2K14		Ⅰｃ層		部材	削出丸棒	コナラ属コナラ亜属コナラ節
61	W-22	ピア４区	2K15		Ⅰｃ層		桶側板	柾目	スギ
87	W-26	作業ヤード	8L17				板材	追柾	スギ
91	写 -2	作業ヤード	8L23				付け木	分割材	マツ属複維管束亜属

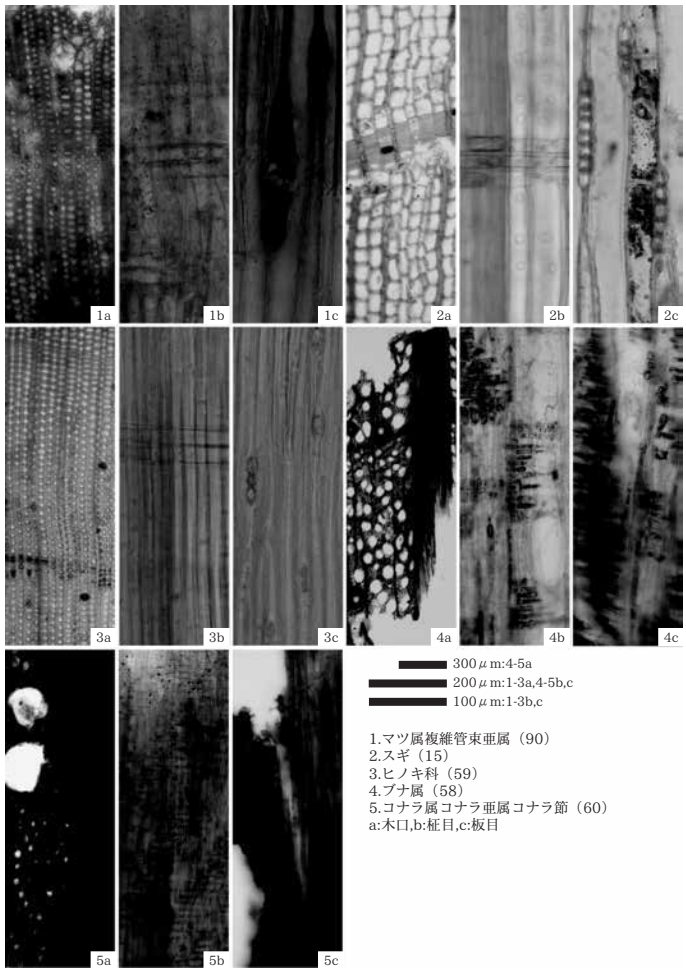
第５表　千古作遺跡　木製品の樹種同定結果

織とがある。

4）考　　察

木製品には、板状の試料が多く、このほかに角棒状・付け木・漆器・弓・用途不明の削出丸棒状の製品がある。板状木製品は、板目となる試料（12・13・15・37）と、柾目になる試料（34・36・61）が認められたが、樹種はいずれもスギであった。スギは木理が通直で割裂性が高く、板状の加工に適していることから利用されたことが推定される。また、箸や角棒状を呈する試料もすべてスギが利用されており、スギを主とした木材利用が推定される。板状の部材や箸等にスギが多い傾向は、後述する香積寺沢遺跡の分析結果とも調和的である。曲物等の板状を呈する木製品や箸にスギが利用される事例は、東原町遺跡や下沖北遺跡（柏崎市）でも確認されている[パリノ･サーヴェイ株式会社 2003a・2005a]。

このほかの木製品では、形状から網枠や弓の可能性が考えられる芯持丸木の木製品（59）にヒノキ科が認められた。ヒノキ科は、木理が通直で割裂性があり、耐水性が高い材質を有する。新潟県内における事例では、網枠は千種遺跡（佐渡市）の弥生時代後期のたも枠にハイイヌガヤが認められている［亘理・山内 1953］が、古代以降の調査事例はこれまでのところ確認できない。一方､弓は､一之口遺跡（上越市）の古代の丸木弓にスギ、屋敷遺跡（胎内市）や桃川遺跡群（村上市）の古代の弓にイヌガヤ等が確認されている



第 11 図　千古作遺跡　木製品の材組織

［パリノ・サーヴェイ株式会社 1994・2003b、株式会社吉田生物研究所 2004］。以上の調査事例を見る限りでは、ヒノキ科が網枠や弓に利用された例は知られていないが、本分析結果からヒノキ科の利用も推定される。

分割棒状を呈し、一方の端部に炭化が認められた付け木（91）は、マツ属複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属は、松脂を多く含み、燃料材としても有用であることから、付け木として利用された可能性がある。剣野丘陵を挟んで位置する香積寺沢遺跡では、付け木にスギが確認されているほか、新潟県内での調査事例では、馬越遺跡や鬼倉遺跡（加茂市）の古代の付け木に、マツ属複維管束亜属を中心にスギ、カツラが混じる組成が確認されている［パリノ・サーヴェイ株式会社 2001・2005］。このことから、付け木には、針葉樹を主体とした木材利用が推定される。

漆器（58）は、破片であり全体の形状は不明であったが、破断面の観察から横木地と推定され、落葉広葉樹のブナ属であった。ブナ属は、緻密・重硬で強度が高く、加工は容易であるが、乾燥の際に変形しやすいとされる。また、漆器椀・皿の木地として、ケヤキやトチノキとともに最もよく利用される樹種の一つである。柏崎市域では、香積寺沢遺跡から出土した漆器 3 点がすべてブナ属であったほか、下沖北遺跡の中世の漆椀や皿にブナ属を中心に、ケヤキやタラノキ、トチノキ、クリが確認されている［パリノ・サーヴェイ株式会社 2003］。これらの調査結果から、本地域では漆器椀・皿にブナ属を主とした木材の選択性がうかがわれ、今回分析結果も調和する傾向と言える。

削出丸棒状の木製品（60）は、コナラ節であった。コナラ節は、重硬で強度の高い材質を有することから、強度を必要とするような用途・部位に利用された可能性がある。

引用文献

林　昭三　1991　「日本産木材」『顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1995　「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I」『木材研究』資料 31　京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1996　「日本産広葉樹材の解剖学的記載 II」『木材研究』資料 32　京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1997　「日本産広葉樹材の解剖学的記載 III」『木材研究』資料 33　京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1998　「日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV」『木材研究』資料 34　京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1999　「日本産広葉樹材の解剖学的記載 V」『木材研究』資料 35　京都大学木質科学研究所

株式会社吉田生物研究所　2004 「屋敷遺跡出土木製品の樹種調査結果」『屋敷遺跡 2 次』 中条町教育委員会

パリノ・サーヴェイ株式会社　1994 「一之口遺跡東地区から出土した木質遺物の同定」『一之口遺跡東地区（本文編）』 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団

パリノ・サーヴェイ株式会社　2001 「鬼倉遺跡出土遺物の自然科学分析」『鬼倉遺跡』 加茂市教育委員会

パリノ・サーヴェイ株式会社　2003a 「下沖北遺跡から出土した木製品などの樹種」『下沖北遺跡 I』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

パリノ・サーヴェイ株式会社　2003b 「桃川遺跡群の自然化学分析」『桃川遺跡群　石川遺跡・草田遺跡・桃川板碑・堤下瓦窯跡』 神林村教育委員会

パリノ・サーヴェイ株式会社　2005 「平成 14 年度馬越遺跡の自然科学分析」『馬越遺跡』 加茂市教育委員会

Richter　H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編） 2006 「針葉樹材の識別」『IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト」 海青社

島地　謙・伊東隆夫　1982 『図説木材組織』 地球社

亘理俊次・山内　文　1953 「千種出土の樹種」『千種』 新潟県教育委員会

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編） 1998 「広葉樹材の識別」『IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』 海青社

5 ま と め

A 出土遺物について

1）中世の土器・陶磁器について

千古作遺跡から出土した土器・陶磁器類は、その大部分が遺物包含層出土資料である。土師器皿は、その多くが13世紀後半頃～14世紀代の厚手の手づくね成形のもの（7、25～27など）や、15世紀後葉以降の薄手の京都系第2波の影響を受けたもの（28～31など）からなり、これに少数の14世紀～15世紀のロクロ成形のもの（47など）や12世紀前葉以前と推測される厚底のもの（71）が加わっている。

陶磁器には、13世紀中葉～14世紀初頭の龍泉窯系の青磁椀Ⅲ類・Ⅳ類［山本2000］（21・44）や、15世紀後半の雷文を特徴とするC類［上田1982］（75）や16世紀中葉頃の景徳鎮窯系の青磁皿（43）、15世紀代の白磁皿D群［森田1982］（22）などの輸入陶磁器がある。また少数ながら瀬戸・美濃焼も存在し、その天目茶椀は後期様式Ⅱ期［藤澤2005］（76）に位置付けられる。以上のほかに、珠洲焼の甕や片口鉢があり、［吉岡1994］編年のⅢ期（23・45・78）、Ⅴ期（1・24・46・73・77）、Ⅵ期（70・79・80）と考えられる。

こうした本遺跡の土器・陶磁器は各調査区を単位とする分布傾向の偏りもなく、遺跡全体として13世紀後半～15世紀後半頃を中心として、これに少量の12世紀初頭以前のものや16世紀代のものが加わる様相と考えられる。土器・陶磁器の組成は中世土師器皿・小皿や珠洲焼が主体的で、次いで輸入陶磁器の青磁が多く、これに少量の白磁、瀬戸・美濃焼が伴出する様相である。

2）田下駄について

本遺跡では、上記の土器・陶磁器のほか、ピア3・4区で木製品が多数出土している。このうち自然流路の可能性があるSD13では、枠付き田下駄の足板と推測される木製品が出土している（12～15）。

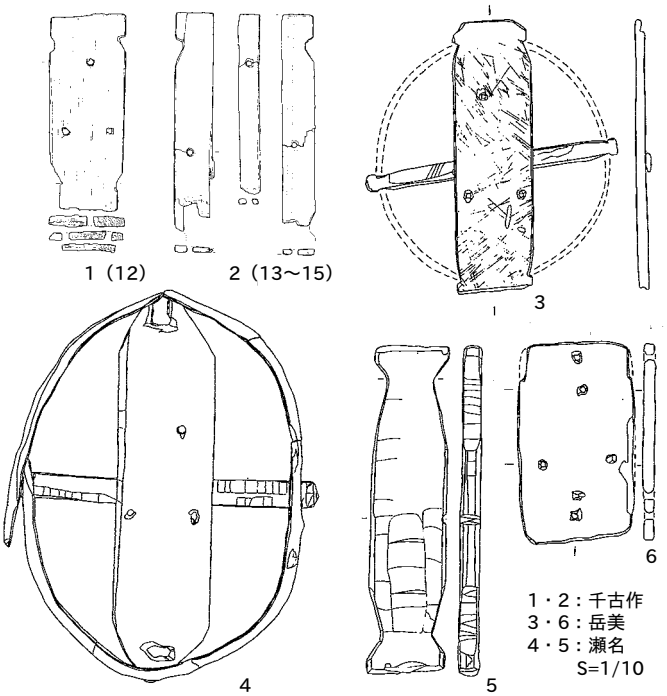
SD13出土資料は平面形が長方形を呈するもので、緒通と推測される孔が3か所見られる。上下左右の両側面に抉り状の加工を施す特徴があり、こうした形状のものは「円形枠付き田下駄」・「輪カンジキ型田下駄」などと呼称される枠付き田下駄の足板に類似する（第12図）。

その構造は、縦長の足板に横木を渡し円形の枠を取り付けるもので、枠の取り付けは足板側面の抉りや固定用の孔といった緊縛部を介して行われる。類似の構造のものは、本県の土居下遺跡［細井2006・2007］などの大型方形枠に足板を取り付ける所謂「大足」がある。しかしながら、「大足」などの足板は枘によって取り付けられる構造であり、抉りなどで固定する円形枠付き田下駄と大きく異なっている。この違いは、円形枠付き田下駄と大足などの方形枠付きのものとの区分の基準となっている［秋山1993］。

円形枠付きの田下駄と考えられる確実な類例は、検索の範囲内で現在本県にはないが、静岡県瀬名遺跡や岳美遺跡など他県で良好な事例があり、岳美遺跡の報告でⅠa類とされるものがSD13資料に類似する（第12図3）。また同遺跡では、遺跡間での法量を検討するために足板側面の抉り間の距離（緊縛部間）が集計されているが、それによれば足板の緊縛部間は20cm～60cmの間に存在し、30～40cm前後が最も多い［山本1996］。SD13資料は約20cm（12）、約25cm前後（13～15）と小さいが、上記の岳美遺跡の集計では緊縛部間が20～25㎝となる少数例もあり、SD13資料が円形枠付き田下駄である可能性もあるだろう。

こうしたSD13資料の時期は、13の放射性炭素年代測定によって、８世紀終末～９世紀頃の年代が得られており、平安時代の可能性が考えられる。類似の足板を持つ枠付きの田下駄も、平安時代・中世にも存在することが考えられている［秋山1993・2008、中山1994］。また、条里水田に伴う上記の岳見遺跡の事例も奈良時代末～平安時代前葉とされている［山本1996］。

ここで、これまでに本県で出土した田下駄とされる事例を見ると、３つの緒孔をもつ無歯の下駄あるいは横長板状のものなどが充てられてきた。しかしながら、これまでの田下駄や大足の先行研究によって、①円形枠付きのもの、②方形枠付きのものなども弥生時代～古代・中世までの田下駄として認識されており、こうした事例にも注意を払う必要性がある。本県や各地の民俗事例でも、①や②の枠付き田下駄や大足が知られ、考古学では未検出の例があるなどその形態は多様である［山口1972、潮田1967・2004など］。



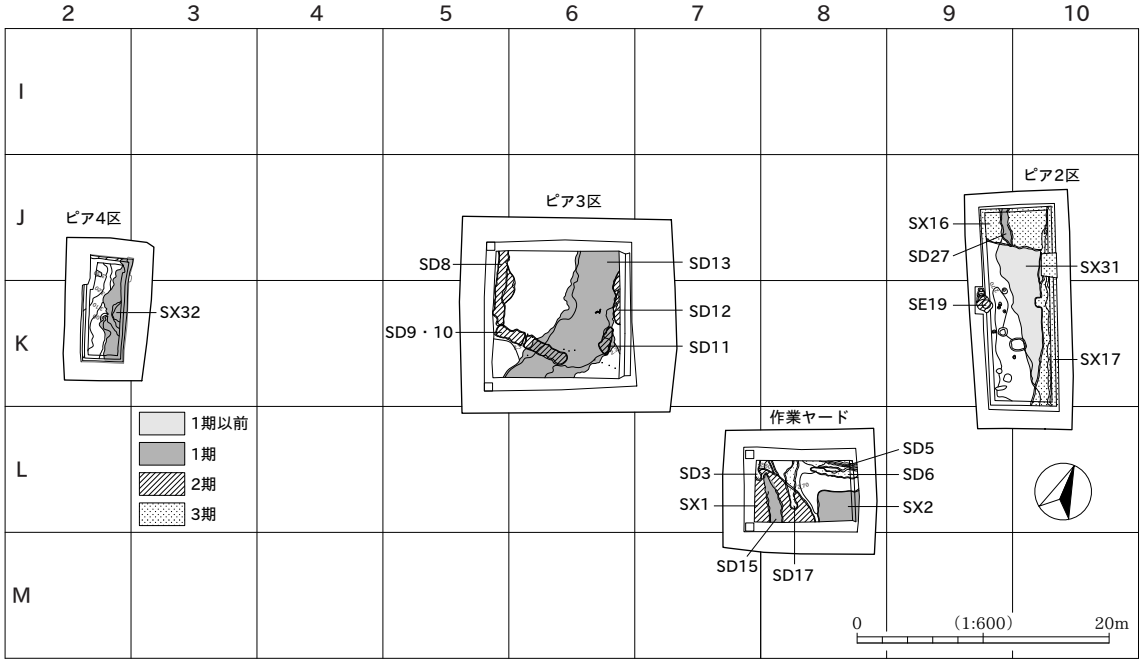
第12図　円形枠付き田下駄とその足板

このようにSD13資料は円形枠付き田下駄の可能性があるが、法量が小さいなどの課題も残る。抉りの存在から枠付き構造である可能性が否定されるものではないが、当資料の構造については民俗事例の収集や類例の増加を待って再度検証する必要があろう。ここでは、田下駄の形態的多様性の紹介にとどまったが、その体系的分類や変遷は今後の課題としたい。

B　検出遺構と遺跡の性格について

遺構の時期的変遷　本遺跡の検出遺構は調査区が狭小であるため、その性格や時期など判然としないものが多い。ここでは可能な限り遺構の時期を推測し、その時間的変遷を概観したい（第13図）。

１期（14世紀以前）　本期に帰属するものはSD27・SX31（ピア２区、以下２区と略す）、SD13（３区）、SX32（４区）、SX２、SD４・15（作業ヤード、以下ヤードと略す）が推測され、平安時代までさかのぼる可能性もある。このうち２区のＳＤ27形成以前に、ＳＸ31とした埋没谷の形成が認められた。その西にあるSX２（ヤード）は、遺構の形状から水田などの耕作痕の可能性も考えられるが明確でない。また自然流路と考えられるＳＤ13では、８世紀末～９世紀頃の可能性を持つ田下駄（円形枠付き田下駄）が、火付け木とともにその覆土や基底面に突き刺さった状況で出土しており、農耕等に関わる祭祀が行われた可能性がある。その覆土最上部では14世紀前半頃の土師器小皿が出土し、少なくとも14世紀前半には埋没していた可能性がある。ＳＸ32も４区に平安時代の遺物があることや、遺物包含層の直下で弓（放射性炭素年代測定によれば８世紀末～９世紀頃の可能性がある）が出土しており、その形成が本期までさかのぼ



第 13 図　千古作遺跡　遺構の変遷

る可能性もある。

本期はこのように、自然流路（SD13）、埋没谷などの落ち込み（SX31・32）などが展開し、明確な集落の形成は見られない。しかしながら、祭祀の場となった可能性や、田下駄足板が示唆するように、周辺での水田域などの形成が推測される。

２期（14 世紀後葉～ 15 世紀前半）　珠洲焼のⅤ期に相当する。SE19（２区）、SX １（ヤード）などがあり、鵜川に隣接する東側の微高地において、集落の一部と推測される遺構形成が明瞭となる。

低地の３区でも１期の SD13（３区）はこの時期には埋没しており、少なくとも当遺構覆土上面に形成される SD ８～ 12 は本期以降の形成で、さらに新しくなる可能性もある。これら３区の溝には、方形状の区画性が看取され、SD ９・10 の長軸方向に沿って杭が検出されている。遺跡西端の丘陵裾部の影響をうける SX32（４区）は、出土遺物から推測して本期以降にも存在していた可能性がある。

３期（15 世紀後半以降）　珠洲焼のⅥ期に相当し、SD ３・５～７（ヤード）がある。このうち SD ５・６には新旧関係があることから本期が前後２時期に細分される可能性がある。また、景徳鎮窯系の青磁皿などの存在から 16 世紀以降も周辺に集落等が形成された可能性が残される。なお、２区では本期以降の近世にかけて、自然の落ち込みなどと推測される SX16 や SX17 が形成されていたと考えられる。

遺跡の性格　以上のように、本遺跡は、２期（14 世紀後葉～ 15 世紀前半）の２区を中心に集落の一部が形成され、その周辺では１～２期にかけて水田等の生産域が展開していた可能性がある。３区から４区にかけては２期には埋没した自然流路（SD13）や低地が形成されていた。

出土遺物では、前述したように土師器や珠洲焼と少量の輸入陶磁器からなる土器組成が示され、こうした組成は、集落や水田などを検出した対岸の下沖北遺跡［山本・高橋ほか 2003、山崎ほか 2005］や旧西山町上沢田遺跡Ⅰ区［長澤・穴沢ほか 2005］の様相と類似する。したがって、本遺跡も周辺にこうした集落が展開していた可能性を残す。しかしながら、調査区が限定され、遺跡の様相が不明瞭であることは否めない。したがって、ほかの遺跡との比較を含めた遺跡の性格についての詳細は、隣接地での調査を待ちたい。

第Ⅳ章　香積寺沢遺跡

1　調査の概要

A　グリッドの設定（図版 11・第 14 図）

香積寺沢遺跡のグリッドは、東側に 100m 程離れて立地する剣野沢遺跡と共通するものを設定した。剣野沢遺跡の東側に隣接する丘陵上には、柏崎市教育委員会が平成 13 ～ 16 年度に本発掘調査を実施した剣野 B 遺跡（縄文時代主体）が立地しており、同じく縄文時代を主体とする剣野沢遺跡との関連が想定できた。よって同一のグリッドを使用することを考え、南北方向の呼称（算用数字）を一致させた。東西方向の呼称（アルファベット）で、A 列を越える西側の範囲については、新たに西に向かって「Z・Y・X・W…」と呼称した。

剣野 B 遺跡のグリッド方向と区割りは、国家座標軸（日本測地系）と一致させていた。グリッドは大小 2 種あり、大グリッドは 10m 四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを 2m 四方に 25 等分したものである。大グリッドの名称は、北西隅の杭を基点として東西方向をアルファベット、南北方向を算用数字とし、両者の組合せで表示した。小グリッドは 1 ～ 25 の算用数字で表し、北西隅を 1、南東隅を 25 とし、「24K13」のように大グリッド表示の後につけて呼称した。また必要に応じて、小グリッドを 1m 四方に細分した。ア～エのカタカナで表し、北西隅をア、南東隅をエとし、「24K13 イ」のように呼称した。香積寺沢遺跡にあたる 24K 杭の座標値（世界測地系に変換）は、「X ＝ 149520.451、Y ＝ 4098.929」を示し、剣野沢遺跡にあたる 24Y 杭の座標値は、「X ＝ 149520.451、Y ＝ 4238.927」を示す。

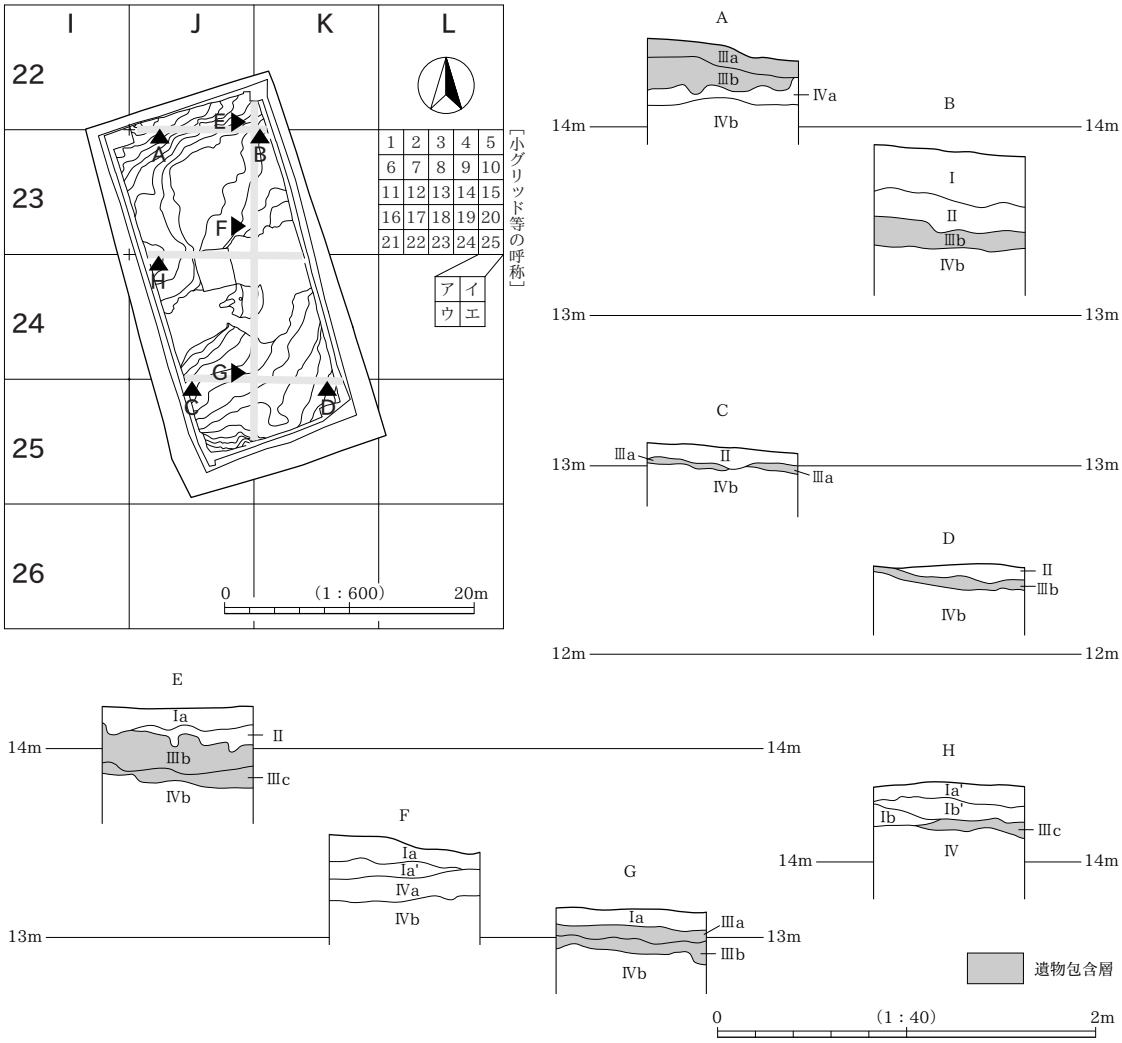
B　基 本 層 序（第 14 図）

周辺の地形と土層の堆積状況　香積寺沢遺跡は、標高 14m 前後の鵜川左岸に広がる丘陵地帯の狭小な沢内沖積地にある。遺跡が立地する低地は、遺跡付近では幅約 50m 前後だが、下流へと徐々に沖積地を発達させて字剣野沢付近で谷の本流と合流する。現況は宅地や養魚場となっているが、地形は東へ緩やかな傾斜を示す。また調査区の北は丘陵裾部と接し、その影響を受けて本遺跡の地形は南側へも傾斜を示す。

こうした立地環境にある香積寺沢遺跡の土層の堆積状況は、古代・中世の段階で基本層序のⅣ層を地山面とし、その上位に遺物包含層のⅢ層が堆積する。調査区北西隅を頂点として、東と南へ傾斜して緩やかな斜面地をなす。調査区の標高は 12.1 ～ 14.3m を測り、調査区南西隅で低地を形成する。

基本層序　本遺跡の基本層序は、現地表面から最大厚 1.5m に達する盛土層があり、その下位にⅠ～Ⅵ層までの層序を確認した。このうちⅢ層が中世主体の遺物包含層であるが、宅地造成によって大きく削平され、調査区の北西部分（23J グリッドの一部）や南東部分（24・25K グリッド）のようにⅢ層が残存しない地点も少なくない。Ⅳ層は当初は地山面と考えていたが、低地を形成する SX4 周辺（25JK グリッド）のⅣｃ層では、縄文・弥生土器からなる土器集中区が確認された。

Ⅰ層　黄灰色（2.5Y4/1）～灰褐色（7.5YR4/2）粘質土　旧表土である。Ⅰａ層とⅠｂ層に細分した。い



第 14 図　香積寺沢遺跡　調査区・基本層序図

ずれも粘性と締りがあり、炭化物粒子や 3 ～ 4cm 前後の礫を少量含む。Ⅰａ層は黄灰色（2.5Y4/1）を呈する土層で、色調が灰褐色（7.5YR4/2）の土層はⅠａ' 層とした。Ⅰｂ層は暗灰黄色（2.5Y4/2）を呈する土層で、色調が褐色（7.5YR4/1）を呈する土層はⅠｂ' 層とした。

Ⅱ層　暗褐色（10YR3/3）粘質土　炭化物粒子と砂礫を少量含む土層で、粘性・締りがある。

Ⅲ層　灰黄褐色（10YR4/2）～黒褐色（10YR2/3）粘質土　中世の遺物包含層で、Ⅲａ～Ⅲｃ層に細分した。いずれも締り･粘性があり、礫や炭化物粒子を少量含んでいる。Ⅲａ層は暗褐色（10YR3/3）を呈し、粒径の小さい砂礫（8mm 前後）が含まれる。Ⅲｂ層は黒褐色（10YR2/3）を呈し、含有物の量が相対的に多い。Ⅲｃ層は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、含有物が相対的に少ない。

Ⅳ層　灰色（5Y4/1）～灰黄色（5Y5/1）粘質土　中世遺構検出面で、Ⅳａ～Ⅳｃ層に細分した。Ⅳａ層は灰色（5Y4/1）を呈し、やや直径の大きい礫（5cm 前後）や炭化物粒子、白色粒子を少量含んでいる。Ⅳｂ層は灰黄色（5Y5/1）を呈し、粒径の大きい砂利や礫（10cm 前後）を含んでいる。Ⅳｃ層は SX4 周辺で確認されたもので、自然形成の落ち込みの可能性がある（後述）。Ⅳｂ層に近似するが、灰色（5Y4/1）を呈し、含まれる礫が大きい。いずれも締り・粘性がある。

Ⅴ層　灰色（5Y4/1）粘質土　締り・粘性があり、砂利や 10cm 前後の礫が含まれる。

Ⅵ層　暗灰黄色（2.5Y5/2）土　直径 15 ～ 20cm 前後の大きい礫を多く含む礫層である。

2　遺　　構

A　遺構の概要

香積寺沢遺跡では、土坑 9 基、溝 1 条、性格不明遺構 4 基、柱穴 121 基、杭 9 基、集石 1 基を検出した。Ⅳ層を遺構検出面とし、丘陵裾部に近い調査区北半（22・23J・K グリッド周辺）の微高地には、SK69・74 や P8・10 などの土坑・柱穴が集中している。掘立柱建物などの配列を認めることはできなかったが、当区域には中世～近世頃の集落の一部が形成されていた可能性がある。一方、低地となる調査区南側では、古代にさかのぼる SK25 などの検出はあるが、中世においても概して遺構分布は希薄であり、SX3・4 などが存在するにとどまる。このように本遺跡の遺構の分布傾向は、北側の柱穴や土坑が集中する区域と、南側の性格不明遺構が分布する区域とに区分される。

検出遺構の時期は、調査区北側では柱穴や土坑からの出土遺物が少なく、その帰属時期の判断は難しい。SX1 の寛永通宝の出土や杭 18 の放射性炭素年代測定値などから、当区域は近世にかかる可能性がある。一方、周辺の包含層や SX3 からは 13 世紀後半～ 16 世紀前葉頃の土器・陶磁器が出土しており、調査区北側を中心とした遺構形成は 16 世紀前葉にさかのぼる可能性も考えられる。また、調査区南側では木炭窯と推測される SK25 が SX3 によって切られており、それよりさかのぼるものと考えられる。同遺構出土炭化材の年代測定では奈良･平安時代の年代観が得られ、一部の遺構は古代にさかのぼると推測される。

以上のほかに、25J・K グリッド南側の SX4（埋没谷）直下では、地山層（Ⅳc 層）から縄文時代晩期～弥生時代の土器集中区を検出している。

B　遺 構 各 説

1）土　　坑（図版 12 ～ 15・31 ～ 35）

検出した土坑のうち、図示したものは SK25・27・69・74・77・125・129・152・170 の 9 基である。その多くは SK69・74・152 などのように長径 1m 前後・深さ 10 ～ 20cm 前後の掘り込みの浅い皿状を呈している。このうち SK125 は、これらと同様に浅い皿状を呈するが、その覆土には多数の礫が集積していた。また SK25 からは多数の炭化材が検出され、その特徴から木炭窯と推察される。

土坑は SD9 付近の調査区北側に多く分布する傾向にあるが、SK25 のように低地の調査区南側付近に存在するものもある。出土遺物は少なく、これらの帰属時期の判断は困難である。縄文土器や石器も出土するが SK25 のように混入遺物と判断される。ここでは、代表的な SK25・74・125 を説明する。

SK25（図版 12・14・33）　24K11 ～ 13 グリッドに位置する。平面は隅丸方形で、長径 3.62m・短径 1.40m、深さは 0.35m を測る。遺構の形状は、おおむね緩やかな立ち上がりを示すが、奥壁側で急斜度となる。長径方向は N86°W を示し、地形の等高線に直交して構築されている。遺構の壁面上部は被熱によって焼土化しているが、基底面の大部分は赤化や硬化は認められない。覆土にも多量の焼土を含み、多数の炭化材が検出された。炭化材は基本的に遺構の長径方向に充填するものが多く、炭化材の配置やそれ自体の大きさは規則性を欠く。多量の炭化材などから簡易的な木炭窯や焼土坑［渡辺 1997・1998］の可能性がある。ほかの遺構との新旧関係では、SX3 よりも古い。出土遺物には中世土師器小皿Ⅱ類（1）や縄文土器（98）があるが混入遺物である。なお炭化材の一部は、放射性炭素年代測定や樹種同定によって、7 世紀後葉～ 8 世紀の年代や、ヤナギ属を主体とする樹種構成が判明した（詳細は第Ⅳ章 4 参照）。

SK74（図版 13・15・33）　23J19 グリッドに位置する。平面が不整円形の土坑で、長径 1.16m・短径 0.88m、深さ 0.32m を測る。その形状は浅い皿状を呈し、起伏の少ない平坦な基底面を持つ。長径方向は N42° W を示す。遺構の形成時期を示す出土遺物はない。

SK125（図版 13・15・34）　24J2 グリッドに位置する。北側を幅 0.5m のトレンチにより欠損するが、長径 0.98m・深さ 0. 18m の皿状を呈する。断面は台形を呈し、立ち上がりは緩やかである。覆土は 2 層に分層でき、1 層には礫が 24 点集積していた。石材は輝石安山岩で、礫の法量は長さ 4.7 ～ 21.8cm・幅 2.2 ～ 21.0cm・厚さ 1.8 ～ 6.3cm・重量 40 ～ 2,300g の範囲にある。礫には焼痕が認められるが、土坑基底面や覆土には被熱の痕跡がなく、礫は後に廃棄されたものと判断できる。

2）溝（図版 13・15・35）

SD9 を検出した。調査区北側の 23J・23K グリッドに位置する。平面は「く」の字状に屈曲するが概ね南北方向に延び、全長 6.28m・短径 0.17m を測る。深さは 0.08 ～ 0.16m で、断面は台形状を呈し緩やかな立ち上がりを示す。遺構の南半は、遺物包含層を切る攪乱によってその上部が削平を受けている。ほかの遺構との新旧関係は SX3 よりも新しく、P23 よりも古い。出土遺物はない。

3）性格不明遺構（図版 13・14・36）

SX1（図版 13・16・36）　23J グリッドに位置する。規模は長径 7.3m・短径 5.3m・深さ 0.32m で、長軸方向は N23° W を示す。遺構の北側に残存する立ち上がりラインは、周辺に形成された斜面地の等高線におおむね沿っている。また遺構の基底面は、斜面地に平坦な水平面を形成するように構築されている。覆土は単一層の黒色土で、東側では堆積が薄くなる。ほかの遺構との新旧関係は SX2 より古い。出土遺物は中世土師器皿・小皿Ⅰ類（2 ～ 5）、石器（100 ～ 103）があり、寛永通寶（150）も 1 点出土している。

SX2（図版 13･16）　23J17･18･22･23 グリッドに位置し、長径 2.8m･短径 1.6m･深さ 0.18m を測る。平面形は不整楕円形を呈し、基底面は南側が一段高くなる形状となっている。ほかの遺構との切り合い関係は SX1、SS135 よりも新しい。出土遺物には木製品（124 ～ 126）がある。

SX3（図版 13・16・36・37）　24J・K グリッドに位置し、東西方向に軸を持つ。平面形は不整形を呈し、東側と西側は調査区外に延びる。中央部では東西 4.0m・南北 3.1m の範囲が島状に残る。幅 4.6 ～ 8.25m、深さは 0.2 ～ 0.46m と一定しないが、東側では不整形な幅広の溝状を呈する。西側（24J グリッド周辺）は、東側とは対照的に遺構覆土がほぼ水平な堆積を示すため、SX1 に類似の斜面地を造成する遺構の存在が示唆される。遺構プランや土層断面の観察では、本遺構の東西で切り合いを検出できなかったが、西側の 1 層から中世土師器皿Ⅱ類がまとまって出土している。ほかの遺構との新旧関係は、SK25・129 よりも新しく、SD9・SX4 より古い。出土遺物は中世の土器・陶磁器（6 ～ 33）、石器・石製品（104 ～ 107）、木製品（127 ～ 129）があり、このうち中世土師器皿・小皿（6 ～ 26）は、水平面を形成する西側で皿・小皿Ⅱ類が多く、溝状を呈する東側で皿・小皿のⅠ類が多く出土する傾向がある。さらに皿Ⅰ類は覆土 2 層、Ⅱ類は 1 層に多く、個体数の間に層位的な傾向が認められた（後述）。

SX4（図版 14・16・37）　24・25JK グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、西側・南側は調査区外に延びる。検出範囲では長径 9.5m・短径 6.53m と規模が大きく、その深さは北側で 0.45m、低地を形成する南側で 0.7m に達し、南側へと緩やかに傾斜している。覆土は 5 層に分層され、上部と下部の二つの土石流堆積物（2・4 層）と、その上下に堆積する 3 枚の黒色土（1・3・5 層）で構成される。上

部土石流堆積物の上面（2 層上面）は比較的平坦かつ水平で、人為的な削平があった可能性がある。出土遺物は 1 層から中世土師器皿（34 ～ 36）、珠洲焼（37・38）、石器・石製品（108・109）、木製品（130 ～ 134）、鉄関連遺物（162）、3 層から縄文土器（82）や土師器の小片が出土している。

4）柱　　穴（図版 13 ～ 15・35）

柱穴は 121 基検出した。その大部分が調査区北側の 23・24J・K グリッドに集中する。深さ 15cm 以下のものが多いが、SD9 周辺で検出された P8・10・11 は深さ 20cm 以上と規模が大きく深い。図示した柱穴は SD9 周辺の柱穴が中心で、配列を確認することはできなかったが、掘立柱建物を構成していた可能性もある。ほかの遺構との新旧関係は、SD9 と切り合う P23 があり、SD9 よりも新しい。出土遺物は P23 と P28 から中世土師器皿Ⅰ類（39・40）が出土し、P173 で柱根（149）が検出された。

5）集 石 遺 構（図版 13・15・36）

SS135 が検出された。23J12・16・17・22 グリッドに位置し、東側は SX2 に切られている。集石を構成する礫は、23J16･17 グリッド周辺に集中しているが、配置に規則性はない。下部構造は検出できず、周辺からの出土遺物もなかった。現況で東西 1.42m・南北 2.47m の範囲に、被熱している礫が 60 点出土しているが、検出面に被熱の痕跡はなかった。輝石安山岩の角礫や円礫で構成され、礫の法量は、長軸 1.5 ～ 13.9cm・幅 12.0 ～ 17.2cm・厚さ 1.8 ～ 6.3cm、重量 2.0 ～ 7,310g を示している。

6）杭（図版 13・15・35）

杭は 9 基を検出し、代表的な杭 18（148）と杭 43（147）を図示した。杭 18 は 23J グリッド、杭 43 は 24K17 グリッドで検出した。いずれも直径 10cm に満たない芯持ち丸木が打ち込まれたもので、その検出位置に規則性は看取されない。

7）土器集中区（図版 14・17・37）

SX4 直下の地山層（Ⅳc 層）から、縄文時代晩期～弥生時代を主体とする土器集中区が検出された。集中区は 25J と 25K 周辺の二つの集中区からなる。前者の 25J 集中区は、主に SX4 の基底面付近に分布するもので、Ⅳc 層の傾斜に沿って 88・89・97 などが出土している。これらは弥生時代中期前葉と推測され、弥生土器を主体とする集中区の可能性がある。一方、後者の 25K 集中区は、SX4 南側の立ち上がり付近に分布し､91･94･95 などの縄文時代晩期後葉を中心としていた。なお 25K 集中区の 95 など（図版 17 微細図のアミ）はⅢ層から出土しており、原位置をとどめている可能性は低い。

土器集中区周辺は、Ⅳc 層での遺物の分布状況から、明確なプランの検出はないが、SX4 形成以前に自然の落ち込みが存在した可能性が高い。したがって、土器集中区の形成は SX4 の形成以前であり、SX4 とは時間的な隔たりが考えられる。

3 遺　　物

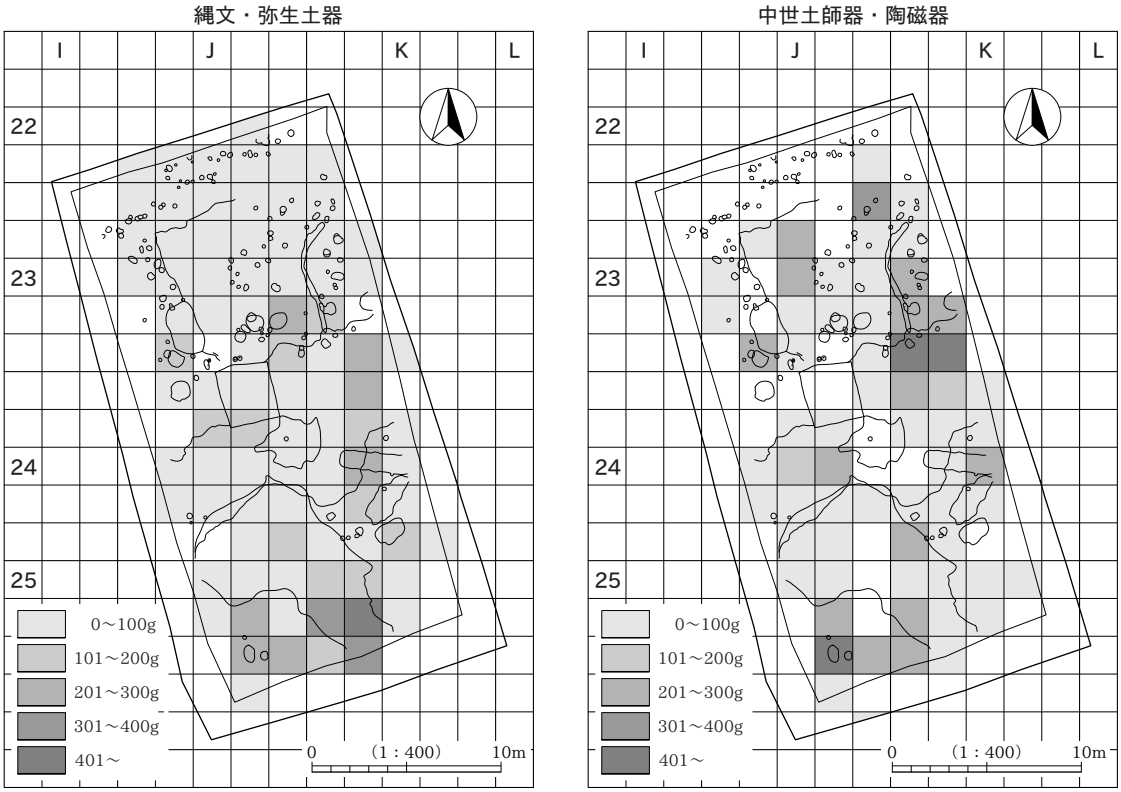
A 概　　要

香積寺沢遺跡からは、中世や縄文時代の遺物が多数出土した。遺物の総数は、平箱（54 × 34 × 10cm）約 13 箱で、土器・陶磁器 6 箱、石器・石製品 1 箱、木製品 5 箱、鉄関連遺物 1 箱などがある。時期別には縄文時代、古代、中世の遺物があるが、出土量では縄文時代が多く、中世がそれに次ぐ。ほかに少量の弥生土器が出土している。このうち中世の遺物は、13 世紀後半～ 14 世紀前半のものと、15 世紀後半～ 16 世紀前半の遺物が主体となる。縄文時代では早期中葉～晩期後葉までの土器がある。

遺物は包含層のⅢ層と中世の遺構検出面であるⅣ層（Ⅳｃ層）から出土し、前者は広範囲に中世・縄文時代の遺物を包含していた。一方、後者は SX4 の近辺（25J・K グリッド周辺）のⅣｃ層が堆積する狭い範囲に遺物を包含し、縄文土器と弥生土器が古代・中世の遺物を含まず土器集中区を形成していた。

こうした所見に基づき、中世の土器・陶磁器と縄文土器の遺物分布を視覚的に図示した（第 15 図）。中世の土器・陶磁器は広範囲に分布し、4 か所の集中が認められる。特に 24J18・19 グリッド（SX3 西側）、23K21・22 グリッド（SX3 東側）の集中は SX3 の覆土内にある。SX3 はその西と東で遺構の形状や出土遺物の様相が異なり、西側の覆土上層（1 層）では中世土師器皿・小皿Ⅱ類が多く、東側の下層（2 層）で同Ⅰ類が多くなるという、層位的・空間的分布傾向が明らかとなっている。

縄文土器の分布も、調査区の広範囲にわたっているが、特に SX4 周辺の 25J・K グリッド集中する傾向が読み取れる（第 15 図左）。23K16・22 グリッド周辺にもやや多いが、遺物包含層（Ⅲ層）や中世の遺構から出土したものである。Ⅲ層は中世の遺物が多く、同層の縄文時代の遺物は混入の可能性が高い。



第 15 図　香積寺沢遺跡　遺物の重量分布図

B 分　　類

本遺跡では、破片ながら中世の土器･陶磁器の良好なまとまりを認めた。特に SX3 では西側の上層（15 世紀後葉～ 16 世紀前葉頃）と東側の下層（13 世紀後半～ 14 世紀前半頃）で土師器皿・小皿の様相に層位的・空間的分布傾向が認められた。したがって各説の前に、まず中世の土器・陶磁器について分類する。本遺跡で出土している縄文・弥生土器、石器・石製品、木製品、鉄関連遺物については、出土状況や量を考慮して、分類は行わず次節で個々に説明する。

中世の土器・陶磁器の分類について　ここでは本遺跡で最も多く出土した中世土師器皿・小皿を対象に分類する。その際には既存の編年案を参考とした。特に土師器皿・小皿については、法量を重視する［水澤 2005b・2007］編年や、調整や器形の型式学的特徴による［品田 1999a・b］試案、中世後期の［伊藤 2006］編年などに負うところが大きい。

陶磁器については、少量のため独自の分類は行わず、以下の文献によった。15 世紀前後の輸入陶磁器は［上田 1982］と［小野 1982］、瀬戸・美濃焼は［藤澤 1986・1991・2005］、珠洲焼は［吉岡 1994］、越前焼は［田中・木村 2005］である。

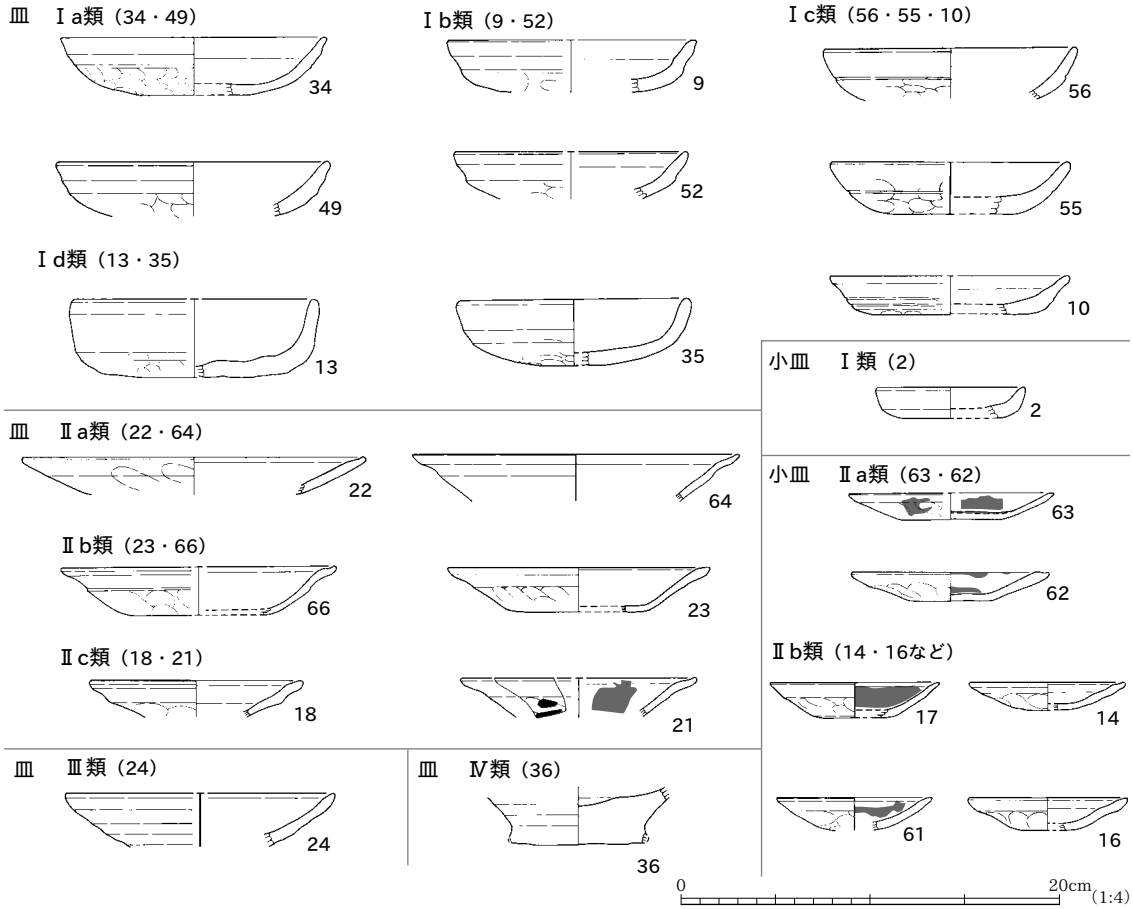
中世土師器皿の分類　技法・器形・法量などの特徴から、大きくⅠ～Ⅲ類に分類できる（第 16 図）。Ⅰ類は手づくね成形のもので、器厚が厚く体部の指オサエが特徴的に見られる。かつて刈羽・三島型［品田 1991］と呼ばれたものに相当するもので、体部形状及び口縁部との境の段や、口縁の処理方法によってⅠａ～ｄ類に細分できる。Ⅰａ類は口縁部と体部が明瞭な段差によって区分されるもので、口縁部の横ナデが 2 条見られるものである（34・49 など）。Ⅰｂ類は、a 類同様に境に明瞭な段を持つが、口縁部の横ナデが 1 段のものである（9･52 など）。Ⅰｃ類は、a･b 類に見られた境の段が沈線となっているもので、1 条のもの（55･56 など）と 2 条のもの（10）がある。Ⅰｄ類は､境の段が不明瞭若しくはナデのみになっているもの（13・35 など）で、13 のように器高の高いものが含まれる。

Ⅱ類は手づくね成形で、器厚が薄く体部の指オサエが顕著なものである。京都系第 2 波の影響を受けたもので［品田 1999b、水沢 2005］、法量の口径を基準にⅡａ～Ⅱｃ類の 3 種に細分した。Ⅱａ類は口径 15cm 以上のものを一括した（20・22・64 など）。Ⅱｂ類は口径 14 ～ 13cm 前後のもの（19・23・66 など）で、さらにそれよりも小さい口径 12 ～ 11cm 前後（18・21 など）のⅡｃ類がある。これらは口縁部の形状や、口縁部と体部の境にある段差あるいは稜線の有無などの特徴で細分が可能だが、体部以下底部までの器形が明らかなものが少なく、ここでは口径による分類にとどめた。

Ⅲ類（24 など）はロクロ成形のもので、底径が大きい特徴がある。本遺跡では非常に少ない。

Ⅳ類は上記以外のものを一括した。ロクロ成形で厚底傾向が著しい 36 などを本類としたが、平安時代末に時期が遡る可能性もある。本遺跡ではⅢ類同様非常に少数である。

中世土師器小皿の分類　上記の皿の分類と同様に技法などの特徴によってⅠ・Ⅱ類に分類できる（第 16 図）。いずれも手づくね成形のものだが、Ⅰ類は厚手で底部の指オサエが顕著に残るもので、厚手で口縁部までの立ち上がりが短い（2）。皿Ⅰ類に伴うと考えられる一群で、少量のため細分していない。Ⅱ類は皿Ⅱ類と同様の特徴を持つもので、薄手で体部の指オサエが顕著なものである。ここでは 11cm 未満を小皿とし、法量の口径を基準にして細別した。口径 10.5 ～ 10cm 前後のⅡａ類（62・63）と、10cm 未満のⅡｂ類（14・16 など）がある。このうちⅡｂ類には、口縁部が摘み上げられ肥厚するものとなり、器厚が厚く、丸底となった型式学的にやや新しい様相と推察されるもの（61）が含まれる。



第 16 図　香積寺沢遺跡　中世土師器皿・小皿の分類

C　遺物各説

ここでは遺物の種別ごとに記載する。中世の土器･陶磁器、縄文･弥生土器、石器･石製品、木製品、銭貨、鉄関連遺物の順で行う。また各種別の記述では遺構出土資料を優先し、その次に包含層出土資料を説明した。記述方法や方針については、千古作遺跡と同様である（第Ⅲ章 3A 参照）。

1）中世の土器・陶磁器

香積寺沢遺跡では、自然形成の可能性がある SX1・3・4 で比較的良好な資料が得られているが、土坑・柱穴の出土遺物は少量である。よって SX1・3・4 の遺物を中心に記述する。

SK25（図版 18･38 － 1）　1 は薄手の京都系とされるもので､口径 10cm 未満の小皿Ⅱｂ類に分類される。遺構覆土の最上部から出土しており、混入遺物と考えられる。

SX1（図版 18・38 － 2 ～ 5）　2 ～ 4 はいずれも中世土師器に分類されるもので、2 は小皿Ⅰ類、3 ～ 5 は皿Ⅰ類である。2 は口縁部にナデが施されるが、体部の境に段が形成されないものである。4 は口縁部の 2 段の横ナデが特徴の皿Ⅰａ類で、3･5 は口縁部と体部の境の段が痕跡的となったⅠｄ類に相当する。

SX3（図版 18・38 － 6 ～ 33）　6 ～ 26 は中世土師器の皿と小皿である。このうち 6 ～ 13 は皿Ⅰ類で、口縁部の 2 段の横ナデが特徴的なⅠａ類（8）、口縁部のナデが 1 段のⅠｂ類（9・11・12）、口縁部と体部の境が沈線となっているⅠｃ類（6･7･10）、Ⅰａ･ｂ類の特徴である体部の段が退化したⅠｄ類（13）がある。

このうち 13 の器形は、口縁部の立ち上がりが垂直に近く、かつ底部までが長いもので、ほかよりも身

層位	皿Ⅰ類	小皿Ⅰ類	皿Ⅱ類	小皿Ⅱ類	皿Ⅲ類	総計
1層	12（11%）	3（3%）	68（61%）	28（25%）	0	111
2層	43（69%）	0	13（21%）	4（6%）	2（4%）	62

第6表　SX3　土師器の個体数（口縁部残存率　/36）

が深くなる特徴がある。14 ～ 17 は小皿Ⅱ類で、いずれも口径 10cm 未満のⅡｂ類に分類され、口縁部先端の上方への摘み上げが微弱となっているもの（14・15）、口縁部が肥厚しているもの（16）がある。

18 ～ 23 は薄手で、京都系に相当する手づくね成形の皿Ⅱ類である。20・22・23 は口径 15cm 以上のⅡａ類で、20 は口縁部の先端が摘み上げられ、口縁部のナデと体部の指オサエの境の段が明瞭である。22・23 は体部の段が不明瞭となり、23 の口縁部は肥厚し先端が丸く収まるものとなっている。19・23 は口径 13 ～ 14cm 前後を主体とするⅡｂ類で、口縁部先端の摘み上げが微弱となっているが、体部に形成された段は明瞭である。18・21 は口径 11 ～ 12cm 前後と法量が小さいⅡｃ類で、21 には墨書が認められる。

24 はロクロ成形の皿Ⅲ類で、口縁部には厚みがあり、その立ち上がりは緩やかである。底部の 25・26 も胎土や底径から同類と考えられる。

以上のほかに、龍泉窯系の青磁椀Ｄ類［上田 1982］(27)、瀬戸・美濃焼の中期様式以降の平椀［藤澤 1991・2005］(28)、信楽焼の甕（29）、越前焼Ⅳ－３～Ⅴ－１期頃の擂鉢［田中・木村 2005］(30)、珠洲焼Ⅴ期頃の甕［吉岡 1994］(31)、16 世紀頃と推測される瓦質土器の香炉（32）がある。32 に施文されている巴状の文様は墨書によっている。また平安時代の須恵器長頸瓶（33）もあるが、混入遺物と判断される。

本遺構の中世土師器は、層位別の口縁部計測法による集計（第６表）では、上層の１層で皿Ⅱ類・小皿Ⅱ類が多く、下層の２層では皿Ⅰ類・小皿Ⅰ類が多く出土する傾向がある。１層からは６・７・14 ～ 23、24 ～ 27、29 ～ 32 が、２層からは８～ 13、23、33 が出土している。このうち 28 は口縁部破片が上層で出土し、底部付近の破片が２層から出土している。

また、１層に多い皿Ⅱ類・小皿Ⅱ類の多くは覆土の水平堆積が認められた遺構西側（24J18・19 グリッド周辺）に、２層に多い皿Ⅰ類・小皿Ⅰ類は溝状を呈する東側（23K21・22 グリッド周辺）で出土する傾向がある。遺構西側からは８・14 ～ 20・22・24 ～ 27・30 が、東側からは６・７・９～ 13・21・23・28・29・45 がそれぞれ出土している。

SX4（図版 18･38 － 34 ～ 38）　SX4 は前節で触れたように、土石流堆積物で覆われ、その上下に黒色土（1･3 層：Ⅲ層相当）が堆積し、出土遺物はその上下の黒色土に存在する。図示は土石流堆積物から上位の良好な資料に限った。土石流堆積物から下位の３層にも土師器などがあるが、図示に堪えない小片であった。34 ～ 36 は中世土師器で、34・35 は皿Ⅰ類である。34 は口縁部２段の横ナデを特徴とするⅠａ類、35 が口縁部と体部の境界が不明瞭となったⅠｄ類である。36 は厚底で柱状の底部破片である。古い様相と考えられ、Ⅳ類に分類した。37･38 は珠洲焼で、37 が片口鉢の胴部、38 が甕の底部である。いずれも［吉岡 1994］編年のⅣ期に位置付けられる。

柱穴（図版 18・38 － 39・40）　P23（39）、P28（40）で出土している。39・40 はいずれも中世土師器皿Ⅰｂ類で、口縁部の横ナデが１段で体部の段が明瞭なものである。

包含層（図版 18・19・38 － 41 ～ 75）　41 ～ 48 は珠洲焼である。41・44 ～ 46 は片口鉢、42 は甕、43 は壺（Ｔ種）と考えられる。片口鉢は、口縁部の形状や、卸目の粗密などから 41・42・44 が［吉岡 1994］編年のⅥ期、45 がⅤ～Ⅵ期、46 がⅣ期以降と考えられる。甕（42）はⅢ～Ⅳ期の古い部分に、壺（43）はⅣ期以前に位置付けられる。47・48 は甕あるいは壺の胴部破片で、土器片の周縁を剝離して研削具とし

て転用したもの［藤巻 1989］と思われる。表面に施された叩き目や胎土の特徴からⅣ期頃の甕と思われる。

49 ～ 66 は中世土師器の皿と小皿である。49 ～ 60、64 ～ 66 が皿に分類されるもので、49 ～ 59 がⅠ類、64 ～ 66 がⅡ類、60 がⅢ類の特徴を持つ。手づくね成形で厚手のⅠ類は、口縁部の調整や体部との境の段の様相によって、Ⅰａ類（49 ～ 51）、ｂ類（52 ～ 54・57）、Ⅰｃ類（55・56）、Ⅰｄ類（58・59）に細分した。手づくね成形で薄手のⅡ類は、口径によってⅡａ類（64）、Ⅱｂ類（66）、Ⅱｃ類（65）に分類される。Ⅲ類の 60 は口縁部の小片だが、厚手でロクロ成形と考えられることから本類とした。

小皿には皿Ⅱ類と共通の特徴を持つⅡ類があり、口径 10.5 ～ 10cm 前後のⅡａ類（62・63）と口径 10cm 未満のⅡｂ類（61）を認めることができる。このうちⅡａ類の 61 は底部が丸底となり、型式学的にやや新しい様相を示している。また、Ⅱｂ類の 62・63 も体部に顕著であった段が退化してかすかな稜線となり、これらも型式学的には新しい様相を持っている。

67 ～ 70 はいずれも 14 世紀以降の龍泉窯系の青磁椀で、67 ～ 69 は蓮弁文を特徴とする［上田 1982］分類のＢ類であり、いずれも 14 世紀末頃の特徴を持つ。70 は無文で釉薬が厚くかかり、端反椀の器形からＤ類と考えられる。15 世紀前半の所産と推測される。71 は染付椀で、器形や描かれている唐草文によって 15 世紀後半から 16 世紀前半にかけて製作された［小野 1982］分類のＣ群Ⅴ類に相当するものであろう。72 は瀬戸・美濃焼の大窯４期［藤澤 1991］の天目茶椀、73 は越前焼の壺と考えられる。74 は瓦質土器で蓮弁状の文様が櫛歯状の工具で描かれている。花瓶あるいは燭台と推測される。75 は須恵器無台杯の底部で、回転ヘラ切りの切り離し痕が認められる。

2）縄文・弥生土器

本節では、遺物包含層（Ⅲ層）や、25J・Ｋグリッド周辺のⅣｃ層で出土している縄文土器や弥生土器について説明する。明らかに弥生土器と判明するものは少量であるため、本節で扱うこととした。図示した資料のうち、88 ～ 91・94・95・97 は 25J・ＫグリッドのⅣｃ層の土器集中区で出土している。ほかは SK25（98）、SX1（85）、SX4（82）や、包含層（Ⅲ層）で中世の土器・陶磁器と伴出している。土器集中区以外の大半は混入遺物の可能性が高いため、出土地点よりも土器の時期を優先して記述する。

縄文土器（図版 19・39 － 76 ～ 87、90 ～ 96・98・99）　早期から晩期後葉の資料が出土している。縄文・撚糸文施文の粗製土器が多いが、後期後葉、晩期の資料も少なくない。中期前葉の弥生土器が少量ながら出土しているため、粗製土器の一部は弥生時代まで時期が降る可能性がある。

76 は浅い沈線文と貝殻復縁文で文様を描く早期中葉の資料である。77 は前期前葉の資料で、胎土に繊維を含む縄文土器である。78 ～ 80 はいずれも細隆起線文で文様を描くもので、前期末葉に帰属する。口縁部が肥厚し、78 には扁平な縦位の隆起が認められる。これは前期末葉松原式［今村 2006］のＸ字状の貼付文の変容である。80 は細隆起線文で斜格子目文を施文し、口唇部には半截工具で細隆起線状の刻みを施している。81 は断面三角形状の隆帯を貼付し、横位結節縄文を施文している。中期中葉頃の資料と考えている。

82 は細くやや深い沈線文を６条一束としてその外に縄文を施文する。こうした特徴は後期前葉南三十稲場式の新段階に見られる。83 ～ 87 は沈線による区画内を羽状縄文などの縄文や斜行の沈線文で充填する。後期後葉と考えられ、83 ～ 85 の無文部は丁寧に磨かれている。90・91・94 は口唇部に扁平な肥厚帯を持ち、鋸歯状の沈線文（90）や縄文（91・94）を施文する。頸部を無文とし、94 の胴部では横位結節縄文が施文されている。91・94 は同一個体の可能性があり、晩期後葉の資料と推測される。92

～ 95 は粗製土器で、92 は条痕文、93 は撚糸文が施文されている。上記の 90 などに伴出する可能性がある。95 は製作時の輪積の痕跡を残すもので、96 などともに無文である。これらの多くは深鉢形土器と考えられるものだが、98･99 のように注口土器も少量出土している。その注口の形状から 98 が後期後葉、99 が晩期と推察される。87 も口縁部の小破片だが、注口土器の可能性がある。

弥生土器（図版 19・39 － 88・89・97）　88・89・97 は壺形土器と推測される資料である。このうち 88・89 は縄文時代後期の鉢形土器などの可能性も残すが、内面が未調整に等しく壺形土器の可能性が高いと考えた。両資料は同一個体の可能性が高い資料で、胴部最大径以下は無文としている。97 は無文で、その器形から 88･89 と同様の壺形土器の底部と考えられる。いずれも弥生時代中期前葉の資料と考えられる。

3）石器・石製品

SX1（図版 20・39 － 100 ～ 103）　不定形石器（100）、石核（101）、磨石（102・103）が出土している。100 は安山岩の横長剥片を素材とするもので、右側縁裏面からの剥離によって刃部が作り出される。101 は長さ 19mm の石核で、石材は珪質頁岩である。石材や大きさから見て石鏃の素材となった可能性がある。102・103 は側面や表面に磨面が認められる。いずれも混入遺物であろう。

SX3（図版 20・39 － 104 ～ 107）　ピエス・エスキーユ（104）、磨石（105・106）、砥石（107）がある。104 は上下両端からの 2 極 1 対の剥離が加えられている。105・106 は表面あるいは全面に磨面が認められる。107 の砥石は右側縁欠損面にも砥面が形成されている。いずれも混入遺物である。

SX4（図版 20・39 － 108・109）　石核（108）、石硯（109）がある。108 の石核は打面転移が認められるもので、頁岩を石材としている。109 は、平面形が長方形を呈する長方硯［水野 1984］とされるもので、側面は垂直に立ち上がる。硯頭は欠損しているが、硯頭の縁帯幅が広く取られる特徴がある。硯背も硯面とともに使用によって摩耗し落ちくぼんでいる。

包含層（図版 20・39 － 110 ～ 123）　縄文時代のものとして、磨製石斧（110・111）、石鏃（112 ～ 114）、石匙（115）、不定形石器（116）、磨石（117 ～ 120）、スタンプ形石器（121）がある。110 は刃部が欠落した磨製石斧を叩石としたもので、刃部と右側縁から基部にかけては敲打痕が著しい。111 は刃部の破片で、110 とともに蛇紋岩を石材としている。石鏃の 112・114 は、無茎鏃に分類されるもので、いずれも裏面に大きく素材の主要剥離面を残している。113 は左右両側縁に抉り状の剥離が行われるもので、先端と基部が欠損する。115 は裏面に素材の主要剥離面を大きく残し、主に表面の押圧剥離によって形状を整えている。116 は右側縁に連続的な剥離を加えることで刃部とする不定形石器である。117 ～ 120 の磨石は、正面あるいは全面に磨面が認められる。121 は縄文時代早期に特徴的なスタンプ形石器（敲磨石）で、著しい敲磨作業によって下端が平坦となる特徴がある。

石硯（122）や砥石（123）は中世に帰属すると考えられるもので、122 の石硯は、平面形が長方形で、側面が上方向に向かって広がるものである。硯頭と硯尻の一部が欠損するが、縁帯は側面、硯尻とも幅広である。

123 の砥石は板状を呈し、表面と左右両側面に砥面を持つものである。

4）木　製　品

本遺跡では、少量ながら性格不明遺構（SX2 ～ 4）を中心に木製品が出土している。木取りなどの用語は、［猪狩 2004］に倣い記述した。

SX2（図版 21・40 － 124 ～ 126）　124 は曲物の底板と推測されるもので、左方 3 分の 2 を大きく欠損

する。表面には斜方向の線条痕が認められる。125・126 は削り出しにより断面が方形ないしは多角形となる箸で、125 は上端を、126 は上下両端を欠損する。

SX3（図版 21・40 － 127 ～ 129）　127 は削り出しにより断面方形の棒状に加工された木製品で、何らかの部材と考えられる。表面下半は一段薄くなり、上面に木釘が認められる。128 は板状を呈する用途不明の木製品で、上端に直径が異なる孔が開けられる。129 は曲物の底板で、表裏両面に炭化物が付着している。当資料は放射性炭素年代測定値から、13 世紀後葉～ 14 世紀前葉の可能性がある（第Ⅳ章 4A 参照）。

SX4（図版 21・40 － 130 ～ 134）　130 は隅を斜断するその形状から、折敷の底板と推測される板状の木製品で、厚さは 1mm と薄い。131 は容器の部材で、幅狭の穿孔が認められる。132 は棒状の木製品で、削り出しにより断面略円形としている。133・134 はともに箸に分類され、断面は多角形を呈し下端を尖らせている。

柱　穴（図版 21・40 － 149）　149 は芯持ちの丸木取りの柱根で、表面に樹皮を残す。下端は主に 2 方向から加工され、側面がやや尖った形状となる。下端中央の加工痕の頂点には、削り残し痕が見られる。

杭（図版 21・40 － 147・148）　147・148 はいずれも芯持ち丸木取りの杭で、芯方向に求心的な加工を加えている。点状の加工痕頂点には、削り残し痕が見られる。148（杭 18）は放射性炭素年代測定値から、16 世紀前葉から 17 世紀初頭の可能性がある（第Ⅳ章 4A 参照）。

包含層（図版 21・40 － 135 ～ 148）　漆器椀（135・136）、曲物底板（138）、用途不明木製品（139 ～ 141・146）、箸（142 ～ 144）、火付け木（145）がある。135 ～ 139 の漆器椀はいずれも底部片で、高台が剝落する。135 の内面は黒漆の上に赤漆が重ね塗りされ、その見込みには赤漆を地として黒漆によるハライが、高台内面に黒地に赤漆で「上」ヵ字が書かれている。136 は表裏両面に黒色漆が、137 には赤漆が塗られる。

138 は板状を呈し、その形状から隅丸方形的な曲物底板と推測される。139 ～ 141 は棒状を呈する用途不明木製品で、いずれも削り出して断面略方形とする。このうち 141 の上半は炭化している。146 は矢板状の用途不明品で、偏半割り状を呈し、下端は表面と側面からの加工痕が見られる。142 ～ 144 は削り出しによる箸で、いずれも端部を尖らせている。145 は両端が炭化する棒状の木片で、火付け木と推測される。

5）銭貨・鉄関連遺物

SX1（図版 21･40 － 150）　150 は所謂「新寛永銭」である。細字系の四ツ宝銭（元禄年間）と推測される。

SX4（図版 21・40 － 162）　162 は裏面に炉壁が付着する。磁着反応がなく、鉄は含んでいない。

包含層（図版 21・40 － 151 ～ 162）　銭貨（151 ～ 158）と鉄関連遺物（159 ～ 163）がある。まず銭貨には渡来銭（151 ～ 154）と新寛永銭（155 ～ 158）がある。渡来銭には、北宋の天聖元寳（136）・元豊通寳(152･153)と明代の洪武通寳(154)がある。新寛永銭は、書風によって佐渡銭(155)、十万坪銭(156)、四ツ宝銭（157)、高津背元銭（158）と推測した。155･156 は書風に類似する要素があり、元文期の特徴がある。また 158 は背に「元」の字が鋳出されている。背元銭の初鋳年は寛保元（1741）年とされている。

鉄関連遺物には金属製品(159 ～ 161)や椀形鍛冶滓(163)がある。159 が刀子、160 が釘、161 が火箸で、いずれも錆は付着するが、製品本来の形状をとどめている。このうち 161 の火箸は断面が円形の柄と方形の箸の部分からなる。163 は椀形鍛冶滓で、底面に炉床土の付着が認められ、その形状から推測して中型炉もしくは大型炉と考えられる。

4　自然科学分析

A　放射性炭素年代測定

1）測定対象試料

香積寺沢遺跡は、新潟県柏崎市剣野字香積寺沢 862-28 ほかに所在する。測定対象試料は、24K16 グリッドのⅢ層から出土した木製品（⑦：IAAA-82528）、24K2 グリッド SX32 の 2 層から出土した木製品（⑧：IAAA-82529）、23J14 グリッドの杭 18（⑨：IAAA-82530）、25J14 グリッド SX4 の 7 層から出土した自然木（⑩：IAAA-82531）、SK25 から出土した炭化材 2 点（⑪：IAAA-82532、⑫：IAAA-82533）、合計 6 点である。

2）測定の意義

香積寺沢遺跡は中世を主体とする遺跡であるが、縄文・古代・近世の遺物も出土している。対象となる木製品は層序や形態から所属時期を決めることは難しく、遺跡の時間幅も大きいことから、その所属年代を明らかにしたい。また、遺構に伴う木製品を分析することにより、遺構の時期を把握したい。

3）化学処理工程

（1）　メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

（2）　酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA:Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では 1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では 1N の水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお、AAA 処理において、アルカリ濃度が 1N 未満の場合、表中に AaA と記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

（3）　試料を酸化銅とともに石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で 30 分、850℃で 2 時間加熱する。

（4）　液体窒素とエタノール･ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

（5）　精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。

（6）　グラファイトを内径 1mm のカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4）測 定 方 法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5）算 出 方 法

（1）　年代値の算出には、Libby の半減期（5,568 年）を使用する［Stuiver and Polash 1977］。

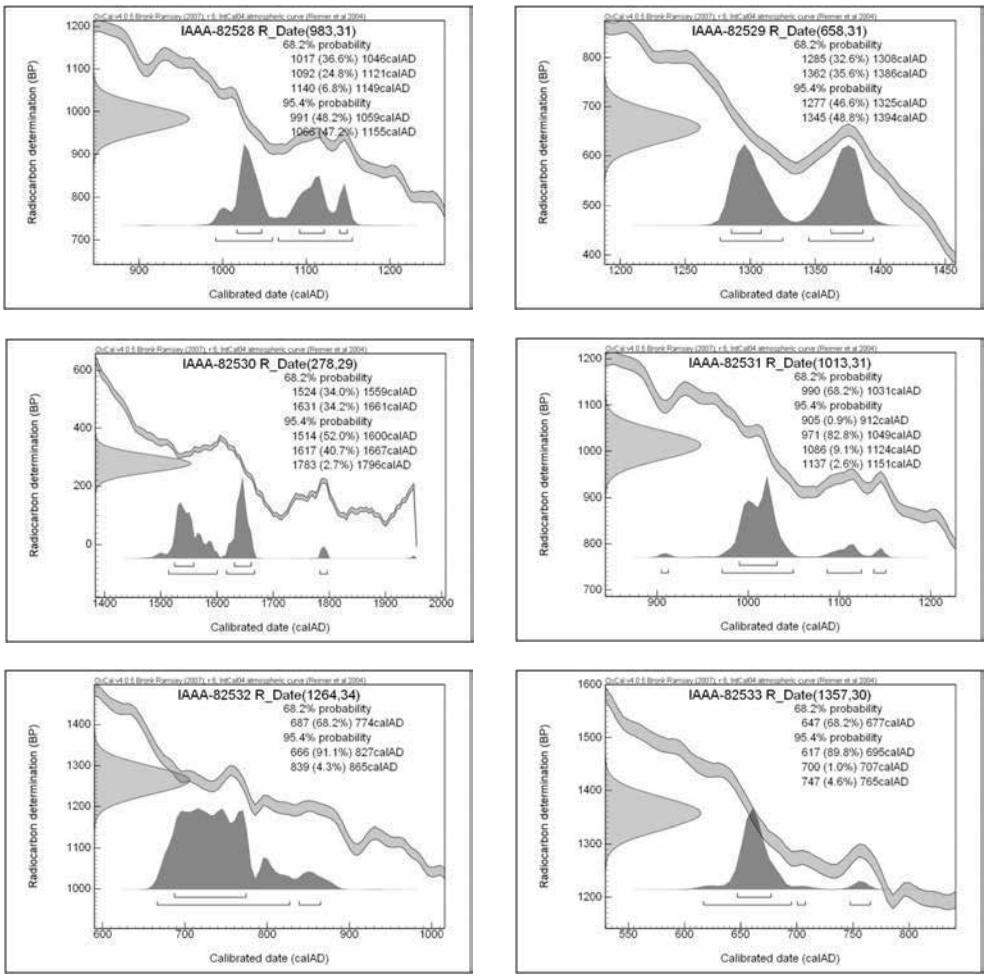
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C（‰）（AMS）	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age(yrBP)	pMC（%）
IAAA-82528	⑦	24K16 グリッド　Ⅲ層	木製品（箸）	AaA	-19.02 ± 0.61	980 ± 30	88.48 ± 0.34
IAAA-82529	⑧	24K2 グリッド　SX3　2 層	木製品（曲物底板）	AAA	-23.31 ± 0.77	660 ± 30	92.13 ± 0.36
IAAA-82530	⑨	23J14 グリッド　杭 18	木製品（杭）	AAA	-23.35 ± 0.60	280 ± 30	96.59 ± 0.36
IAAA-82531	⑩	25J14 グリッド　SX4　7 層	自然木	AAA	-25.46 ± 0.70	1,010 ± 30	88.14 ± 0.35
IAAA-82532	⑪	SK25　取上げ No.29	炭化材	AAA	-30.00 ± 0.83	1,260 ± 40	85.43 ± 0.36
IAAA-82533	⑫	SK25　取上げ No.36	炭化材	AAA	-22.40 ± 0.49	1,360 ± 30	84.45 ± 0.32

［#2679］

測定番号	報告No.	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
		Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-82528	143	890 ± 30	89.57 ± 0.33	983 ± 31	1017AD - 1046AD（36.6%） 1092AD - 1121AD（24.8%） 1140AD - 1149AD（6.8%）	991AD - 1059AD（48.2%） 1066AD - 1155AD（47.2%）
IAAA-82529	129	630 ± 30	92.45 ± 0.33	658 ± 31	1285AD - 1308AD（32.6%） 1362AD - 1386AD（35.6%）	1277AD - 1325AD（46.6%） 1345AD - 1394AD（48.8%）
IAAA-82530	148	250 ± 30	96.92 ± 0.34	278 ± 29	1524AD - 1559AD（34.0%） 1631AD - 1661AD（34.2%）	1514AD - 1600AD（52.0%） 1617AD - 1667AD（40.7%） 1783AD - 1796AD（2.7%）
IAAA-82531		1,020 ± 30	88.06 ± 0.33	1,013 ± 31	990AD - 1031AD（68.2%）	905AD - 912AD（0.9%） 971AD - 1049AD（82.8%） 1086AD - 1124AD（9.1%） 1137AD - 1151AD（2.6%）
IAAA-82532		1,350 ± 30	84.56 ± 0.33	1,264 ± 34	687AD - 774AD（68.2%）	666AD - 827AD（91.1%） 839AD - 865AD（4.3%）
IAAA-82533		1,310 ± 30	84.90 ± 0.31	1,357 ± 30	647AD - 677AD（68.2%）	617AD - 695AD（89.8%） 700AD - 707AD（1.0%） 747AD - 765AD（4.6%）

［参考値］

第 7 表　香積寺沢遺跡　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果



第 17 図　香積寺沢遺跡　暦年較正結果

（2）　^{14}C 年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は、δ ^{13}C によって補正された値である。^{14}C 年代と誤差は、1 桁目を四捨五入して 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（± 1 σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

（3）　δ ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により ^{13}C/^{12}C を測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

（4）　pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。

（5）　暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1 σ＝68.2％）あるいは 2 標準偏差（2 σ＝95.4％）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04 データベース［Reimer et al 2004］を用い、OxCalv4.0 較正プログラム［Bronk Ramsey 1995　Bronk Ramsey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001］を使用した。

6）測定結果

^{14}C 年代は、24K16 グリッドのⅢ層から出土した木製品が 980 ± 30yrBP、24K2 グリッドの SX3 から出土した木製品が 660 ± 30yrBP、23J14 グリッドの杭 18 が 280 ± 30yrBP、25J14 グリッドの SX4 から出土した自然木が 1,010 ± 30yrBP、SK25 から出土した炭化材 2 点が 1,260 ± 40yrBP、1,360 ± 30yrBP である。

暦年較正年代（1 σ）から判断すれば、7 世紀から 17 世紀まで、年代幅がある試料が含まれる。最も古い年代が、SK25 の炭化材であり 647 ～ 677AD、最も新しい年代が杭 18 であり 1,524 ～ 1,559AD（34.0%）・1,631 ～ 1,661AD（34.2%）である。

試料の炭素含有率は、すべて 50％以上であり、十分な値であった。化学処理及び測定内容に問題は無く、妥当な年代と判断される。

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37（2）, 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43（2A）, 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43（2A）, 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

B　樹種同定

1）試　　料

試料は、分析対象候補とされた木製品 27 点から選択された 16 点と、木炭窯（SK25）から出土した多量の炭化材のうち、形状や保存状態等から選択した炭化材 7 点である。これらの試料を対象に樹種同定を行う。各試料の詳細は、結果とともに第 8・9 表に示す。

2）分析方法

木製品は、木取りを観察した上で、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を木製品表面から直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入してプレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。

炭化材は、自然乾燥させた後、3 断面の割断面を作製し、双眼実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。各試料で観察された組織配列の特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

木材組織の名称や特徴については、［島地･伊東 1982］、［Wheeler ほか 1998］、［Richter ほか 2006］を、日本産木材の組織配列については､［林 1991］や［伊東 1995･1996･1997･1998･1999］を参考にする。

3）結　　果

木製品の同定結果を第 8 表、炭化材の同定結果を第 9 表に示す。木製品は、針葉樹 5 分類群（マツ属複維管束亜属･スギ･ヒノキ･アスナロ･ヒノキ科）と広葉樹 3 分類群（ブナ属･クリ･ヌルデ）に同定された。一方、炭化材は、すべて広葉樹で 2 分類群（ヤナギ属・クスノキ科）に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となり、1 分野に 1 個。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15 細胞高。

・スギ（*Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2-4 個。放射組織は単列、1-10 細胞高。

・ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される｡仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1 分野に 1-3 個。放射組織は単列、1-10 細胞高。

・アスナロ（*Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc.）　ヒノキ科アスナロ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部

の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、内壁には茶褐色の樹脂が顕著に認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1 分野に 1-4 個。放射組織は単列、1-10 細胞高。

報告 No.	実測 No.	調査区	遺構名	層位	取上 No.	器種	木取	樹種
124	W-13	23J17 ウ	SX2			底板？	柾目	ヒノキ
127	W-15	24K2 ウ	SX3	2 層		角棒状	柾目	スギ
129	W-17	24K2 ア	SX3	2 層		底板	柾目	スギ
130	W-21	24J19 エ	SX4	1 層		折敷（底板）？	柾目	スギ
131	W-18	24J20 ウ	SX4	1 層		（板材）	柾目	スギ
134	W-27	25K2 ア	SX4	4 層		箸	削出角棒	スギ
135	W-1	23K21				漆器	横木地	ブナ属
136	W-4	25J14		Ⅲ層		漆器椀	横木地柾目取	ブナ属
137	W-2	25K8				漆器椀	横木地柾目取	ブナ属
138	W-10	25J14		Ⅲ層		底板？	板目	スギ
141	W-6	24K1		Ⅰ層		角棒状	板目	アスナロ
143	W-8	24K16				箸	削出角棒	ヒノキ科
145	W-12	25K1		Ⅲ層		付け木	分割材	スギ
146	W-22	24K12		Ⅲ層		（板材）	板目	マツ属複維管束亜属
148	W-24	23J14	杭 18			柱根 / 杭	芯持丸木	クリ
149	W-23	23J15	杭 28			柱根	芯持丸木	ヌルデ

第８表　香積寺沢遺跡　木製品の樹種同定結果

・ヒノキ科（Cupressaceae）

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10 細胞高。

遺構名	取上 No.	形状	直径（cm）	樹種
SK25	10	芯持丸木	4.5	ヤナギ属
	29	半裁木	6.5	クスノキ科
	33	芯持丸木	7.0	クスノキ科
	36	芯持丸木	5.0	ヤナギ属
	43	芯持丸木	4.0	ヤナギ属
	46	芯持丸木	9.0	ヤナギ属
	59	半裁木	6.5	ヤナギ属

第９表　香積寺沢遺跡　炭化材の樹種同定結果

・ヤナギ属（*Salix*）　ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または 2-3 個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1-15 細胞高。

・ブナ属（*Fagus*）　ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に 2-3 個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。

・クスノキ科（Lauraceae）

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または 2-3 個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔及び階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3 細胞幅、1-20 細胞高。

・ヌルデ（*Rhus javanica* L.）　ウルシ科ウルシ属

環孔材で孔圏部は 4-5 列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では 2-5 個が塊状に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-4 細胞幅、1-30 細胞高。

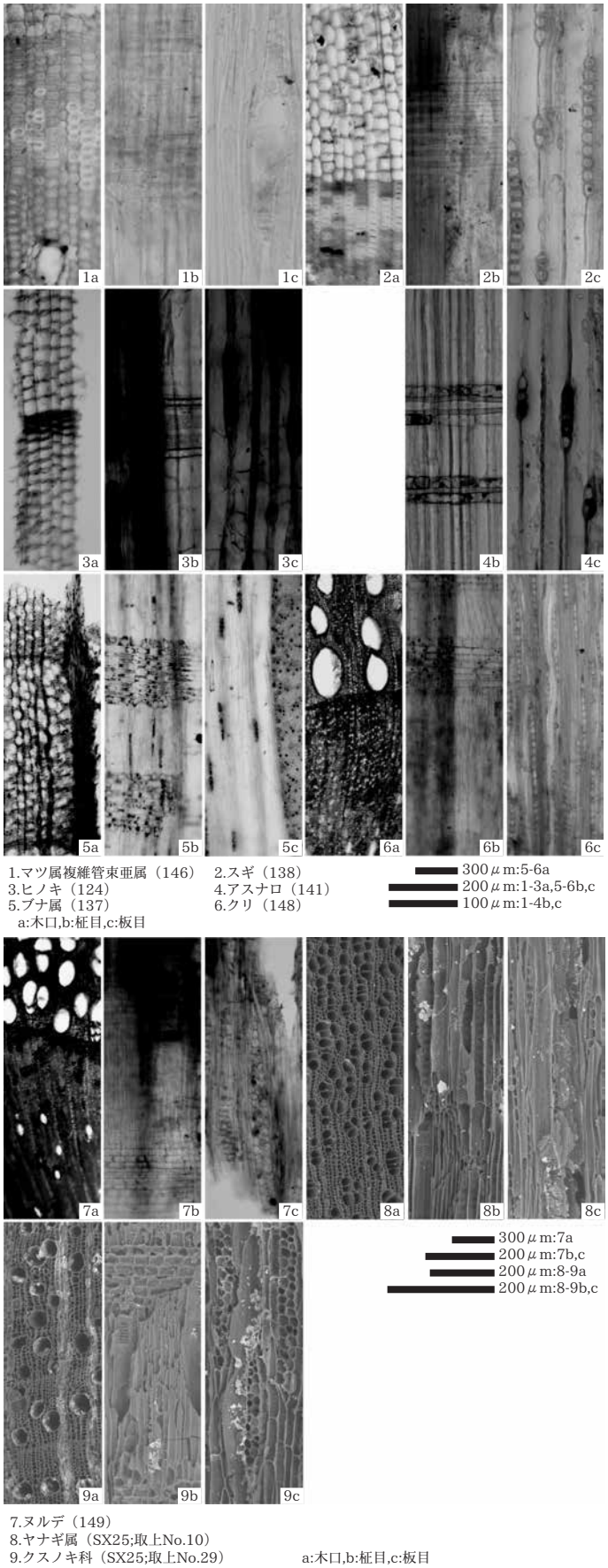
4）考　　察

木　製　品

木製品は、漆器、底板、折敷（底板）、箸、付け木、柱根と、用途不明の木製品がある。漆器 3 点（135 ～ 137）は、いずれも横木地であり、底面の木取りが観察できた 2 点（136・137）はいずれも柾目取りであった。これらの漆器は、いずれも落葉広葉樹のブナ属に同定された。ブナ属は、緻密・重硬で強度が高く、加工は容易であるが、乾燥の際に変形しやすいとされる。漆器椀・皿の木地としては、ケヤキやトチ

ノキとともに最もよく利用される樹種の一つである。本遺跡周辺では、下沖北遺跡（柏崎市）の中世の漆椀や皿にブナ属を中心に、ケヤキ、タラノキ、トチノキ、クリが確認されている［パリノ・サーヴェイ株式会社 2003］ほか、大武遺跡（長岡市）では、ブナ属を中心にハリギリ、カツラ、ケヤキ、トチノキ、ニレ属、クリが確認されている［松葉 2000］。一方、同じ容器に分類される曲物等の底板と考えられる試料（124・129・138）は、すべて針葉樹の柾目板であり、スギとヒノキ科の利用が認められた。スギやヒノキ科は、いずれも木理が通直で割裂性が高く、板状の加工が容易である。したがって、曲物等には、これらの加工性等を考慮した木材利用が推定される。柏崎市域では、東原町遺跡でスギやヒノキ、サクラ属、下沖北遺跡でスギとヒノキが確認されており［パリノ・サーヴェイ株式会社 2003・2005a］、本分析結果と調和的である。また、上澤田遺跡では、中世の曲物側板にスギが確認されており［パリノ・サーヴェイ株式会社 2007］、底板と側板はともに同じような木材利用であったことが推定される。

薄い板状を呈し、隅が斜めに切られている状況から折敷の底板と考えられる木製品（130）は、スギの柾目板であった。折敷の底板については、海道遺跡（上越市）や坂井遺跡（見附市）で中世の試料を対象とした調査事例があり、スギとヒノキが確認されている［パリノ・サーヴェイ株式会社 2005b、金原 2006］。この結果から、曲物の底板など同様に割裂性の高いスギや



第 18 図　香積寺沢遺跡　木製品の材組織

ヒノキが利用されたと考えられる。

削出角棒状を呈する箸２点（134・143）は、スギとヒノキ科であった。本分析結果から、加工性の高い木材の利用が指摘される。箸は、上記した東原町遺跡や下沖北遺跡で同様の加工を施す試料にスギが確認されている［パリノ・サーヴェイ株式会社 2003・2005a］。

分割棒状を呈し、一方の端部に炭化が認められる付け木（145）は、針葉樹のスギであった。針葉樹材は、広葉樹材に比較して燃えやすいことや、余材の利用が可能であることなどから、付け木に利用されたと考えられる。付け木の調査事例は、馬越遺跡及び鬼倉遺跡（加茂市）の古代の資料にマツ属複維管束亜属を中心にスギ、カツラが混じる組成が確認されている［パリノ・サーヴェイ株式会社 2001・2005c］。

芯持丸木の柱根（149）と杭または柱根（148）は、それぞれ広葉樹のヌルデとクリであった。ヌルデは、広葉樹の中では軽い部類に入り、加工は容易であるが、耐朽性が高いとされる。一方、クリは、重硬で強度･耐朽性が高い材質を有し、加工はやや困難な部類に入る。いずれも、材質的な特徴を考慮すると、柱･杭に適した木材と言える。柏崎市域における中世の柱材の調査では、東原町遺跡でクリ（2 点）、下沖北遺跡でクリとアカガシ亜属（各 1 点）、上澤田遺跡でクリとコナラ節（各 1 点）が確認されている［パリノ･サーヴェイ株式会社 2003・2005a・2007］。これらの分析結果をみると、重硬で強度の高い木材の利用がうかがわれ、ヌルデについては樹種選択と異なる傾向が指摘される。

このほかの板状や各棒状を呈する木製品からは、アスナロやスギ、マツ属複維管束亜属等が認められた。これらの木製品の用途は不明であるが、加工性の高い針葉樹材の利用が示唆される。

木　炭　窯（SX25）

木炭窯（SX25）からは、製炭材の一部と考えられる木炭が多量出土している。今回の分析調査では、発掘調査時に取上げられた炭化材を確認し、径の大小、芯持丸木あるいは半裁木という形状、保存状況から 7 点の炭化材を選択した（第 9 表）。これらの炭化材からは、ヤナギ属（5 点）とクスノキ科（2 点）の広葉樹 2 分類群が確認された。ヤナギ属は軽軟で強度・保存性が低い。クスノキ科は、種によって材質が異なるが、比較的重硬な材質の種類が多い。

炭化材の大きさや形状別に見ると、クスノキ科は径約 6.5 ～ 7cm 程度の半裁木と芯持丸木に各 1 点と、比較的よく似た試料に確認された。一方、ヤナギ属は、径 4 ～ 9cm とまちまちであり、芯持丸木 6 点、半裁木 1 点に認められた。この結果から、樹種と径・形状の関連性をうかがうことはできないが、ヤナギ属及びクスノキ科が主体的に利用される状況が推定される。

周辺地域では、谷地製鉄跡（出雲崎町）の古代末～中世初頭と考えられる炭窯から出土した炭化材の樹種同定が行われ、ハンノキ亜属を中心にシナノキ属、クリ、トチノキが混じる組成が確認されている［高橋 2006］。軽軟な材質も混じるが、ハンノキ亜属やクリなど、比較的重硬な材質を有する種類が多く利用される傾向があり、本遺跡とは種類構成が異なる。また、新潟県内では、高田平野及び関川上流域の複数の遺跡において同様の分析調査が行われている。道灌遺跡（上越市）では、古代の炭窯からブナ属、コナラ節、ケンポナシ属の 3 種類［パリノ・サーヴェイ株式会社 2004a］、前原遺跡・丸山遺跡・郷清水遺跡・窪畑 B 遺跡・上滝ノ沢遺跡・上中島遺跡・八斗蒔原遺跡（旧中郷村）の古代の炭窯ではブナ属が多く、タケ亜科がわずかに混じる組成［株式会社パレオ・ラボ 1999、パリノ・サーヴェイ株式会社 2004b・2004c、株式会社古環境研究所 2004］、関川谷内遺跡（旧妙高高原町）ではコナラ節のみの組成が確認されている［パリノ・サーヴェイ株式会社 1998］。これらの結果をみる限り、比較的重硬で強度の高い木

材が多く、本遺跡の木炭窯で確認された樹種構成の特異性がうかがわれる。

引用文献

林　昭三　1991　「日本産木材」『顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所
伊東隆夫　1995　「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I」『木材研究』資料 31　京都大学木質科学研究所
伊東隆夫　1996　「日本産広葉樹材の解剖学的記載 II」『木材研究』資料 32　京都大学木質科学研究所
伊東隆夫　1997　「日本産広葉樹材の解剖学的記載 III」『木材研究』資料 33　京都大学木質科学研究所
伊東隆夫　1998　「日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV」『木材研究』資料 34　京都大学木質科学研究所
伊東隆夫　1999　「日本産広葉樹材の解剖学的記載 V」『木材研究』資料 35　京都大学木質科学研究所
株式会社古環境研究所　2004 「前原遺跡出土炭化材の樹種同定」『前原遺跡・丸山遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
株式会社パレオ・ラボ　1999 「樹種同定分析」『窪畑 B 遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
金原　明　2006　「木製品の樹種」『坂井遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
松葉礼子　2000 「大武遺跡出土木製品の樹種同定」『大武遺跡 I（中世編）』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社　1998 「炭化材の樹種」『関川谷内遺跡 I』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社　2001 「鬼倉遺跡出土遺物の自然科学分析」『鬼倉遺跡』 加茂市教育委員会
パリノ・サーヴェイ株式会社　2003 「下沖北遺跡から出土した木製品などの樹種」『下沖北遺跡 I』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社　2004a 「道灌・向原遺跡の樹種同定」『道灌遺跡・向原遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社　2004b 「炭化材の樹種」『前原遺跡・丸山遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社　2004c 「炭化材の樹種」『八斗蒔原遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社　2005a 「木製品樹種同定及び鉄滓成分分析」『東原町遺跡・下沖北遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社　2005b 「自然科学分析」『海道遺跡・大塚遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社　2005c 「平成 14 年度馬越遺跡の自然科学分析」『馬越遺跡』 加茂市教育委員会
パリノ・サーヴェイ株式会社　2007 「坂田遺跡・上澤田遺跡の自然科学分析」『坂田遺跡群 I』 柏崎市教育委員会
Richter　H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編） 2006 「針葉樹材の識別」『IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』 海青社
高橋　敦　2006　「樹種同定」『越巻 4 号塚・谷地製鉄跡・大慶寺御経塚』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編） 1998 「広葉樹材の識別」『IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』 海青社

5　ま　と　め

A　SX3 出土の土器・陶磁器について

香積寺沢遺跡では、13 世紀～ 14 世紀前半と 15 世紀後半～ 16 世紀前葉を主体とする中世の土器・陶磁器が出土した。その出土量組成は中世土師器皿・小皿を中心として、珠洲焼（Ⅳ～Ⅵ期）がこれに次ぎ、少量の龍泉窯系青磁椀Ｂ・Ｄ類、染付椀、瀬戸・美濃焼（大窯４期）の天目茶椀、越前焼、信楽焼などが加わる。このうち SX3 からは、手づくね成形の中世土師器皿・小皿のⅠ・Ⅱ類を主体とする多数の土器・陶磁器が出土した。当遺構は第Ⅳ章３節で述べたように、中世土師器皿・小皿の様相に空間的・層位的分布傾向を認識することができた。以下では SX3 出土資料の様相を整理し、その位置付けを行う。

SX3 下層資料について　SX3 では、遺構東側の下層（2 層）から中世土師器皿Ⅰ類・小皿Ⅰ類が、遺構西側の上層（1 層）から同皿Ⅱ類・小皿類Ⅱ類がそれぞれ主体的に出土した。

ここではまず下層（2 層）主体の中世土師器皿Ⅰ類・小皿Ⅰ類の様相を整理する。中世土師器皿Ⅰ類・小皿Ⅰ類は手づくね成形の一群で、体部から底部にかけて指オサエ痕を明瞭に残すのを特徴とする（6 ～ 13）。このうち皿Ⅰ類は、体部の指オサエの境に段を明瞭に残すもの（皿Ⅰａ・Ⅰｂ類：8・9・11 など）、段が沈線に変容したもの（皿Ⅰｃ類：6・7・10）、その段が不明瞭となったもの（皿Ⅰｄ類：13）が含まれている。主体は皿Ⅰａ・Ⅰｂ類で、法量は口径 12 ～ 13cm 前後である。これに対して皿Ⅰｃ・Ⅰｄ類（13 など）は少数で、特に後者は口径 11cm 前後と縮小傾向にあり、その身が深い特徴がある。

こうした SX3 資料の中世土師器皿に見られる型式学的特徴は、既に時間的な変遷として認識され、皿Ⅰａ～Ⅰｃ類を中心として 13 世紀後半台を中心とする位置付けがなされてきた［品田 1999a、山崎 2003、水澤 2007］。このうち皿Ⅰｄ類としたものは、14 世紀までの位置付けが示唆されていたが［品田 1999a］、下沖北遺跡 SK445 で口径が縮小（口径 11cm 台を含む 12cm 前後中心）した同類と、珠洲焼（Ⅲ・Ⅳ期）や輸入陶磁器（14 世紀中葉）が伴出し、同類が 14 世紀前半に位置付けられる可能性が高くなってきた［山崎 2003］。最近の編年でも、下沖北 SK455 出土資料は 14 世紀中葉に位置付けられている［水澤 2007］。本遺構でも、中世土師器皿Ⅰ類に伴って瀬戸・美濃焼の中期様式以降（14 世紀以降）の 28 が伴出している。

したがって、下層の中世土師器皿Ⅰ類・小皿Ⅰ類は、13 世紀後半を主体として 14 世紀中葉までの時間幅を含むものと考えられる。なお、同層出土の曲物底板の放射性炭素年代測定を行ったところ、13 世紀後葉～ 14 世紀とする値が得られており、中世土師器皿Ⅰ類の年代観と整合的である。

SX3 上層資料について　続いて SX3 の上層（1 層）で主体的な中世土師器皿Ⅱ類・小皿Ⅱ類の様相を整理する。中世土師器皿Ⅱ類・小皿Ⅱ類は、器厚が薄く、体部から緩く外反する器形を呈するもので、京都系第２派の影響を受けたものである。手づくね成形で体部から底部にかけて指オサエ痕を明瞭に残すのを特徴とする（18 ～ 23）。これらには、口縁部が摘み上げられるもの（20・22）や、それが肥厚するにとどまるもの（16・23）、口縁部の横ナデと体部の指オサエ痕との境に段あるいは稜が明瞭に残されるもの（18 ～ 20 など）、その稜や段が不明瞭となっているもの（22・23 など）などが含まれている。加えて、やや器厚が厚く、底部が丸底となる型式学的にやや新しい特徴を備えたものなどがあり（16）、上層（1 層）の皿Ⅱ類・小皿Ⅱ類の様相には型式学的に新旧の要素が看取される。これらの法量は、皿Ⅱ類には口径 15cm 以上（Ⅱａ類）、14 ～ 13cm 前後（Ⅱｂ類）、12 ～ 11cm 前後（Ⅱｃ類）、小皿には口径 10.5 ～

10cm 前後（Ⅱa 類）、10cm 以下（Ⅱb 類）があり、両者を合わせると少なくとも 5 段階の法量が認められる。

こうした中世土師器皿Ⅱ類・小皿Ⅱ類を主体とする上層資料は、かつて 16 世紀代の年代観が与えられてきたが、最近では江上館 317 号遺構［水澤 1996］などの一括資料によって、これらが 15 世紀代に遡り関東系のロクロ成形の一群（皿Ⅲ類）と伴出する様相が明らかとなってきた［水澤 2001］。しかしながらこれよりも後出の皿Ⅱ類･小皿Ⅱ類が主体的な伝至徳寺遺跡 SK519･570［水澤 2004］などについては、その時間的位置付けがほぼ 15 世紀後半までに収まるとする説［水澤 2005］や、16 世紀前葉あるいは前半とする見解［品田 1999b、伊藤 2006］があり、編年上の課題となっている。

ここで上層の伴出資料を整理すると、少量ながら皿Ⅲ類とした 15 世紀代のロクロ成形の土師器皿や、15 世紀前半頃の珠洲焼Ⅴ期の甕や龍泉窯系青磁椀、15 世紀後半～ 16 世前葉頃の越前焼の擂鉢があり、その様相には 15 世紀前半を含むなど時間幅が存在している。したがって、上層資料は中世土師器皿Ⅱ類･小皿Ⅱ類を主体とする様相から、江上館 317 号遺構に後続するが、型式学的に新旧の要素が見られる点や、伴出資料の様相から、その主体は 15 世紀後葉以降～ 16 世紀前葉頃にあると考えられる。

B　遺構の変遷と遺跡の性格について

遺構の変遷について　ここでは前節までの土器・陶磁器の年代観や切り合い関係をもとに、中世を中心とした遺構の変遷を整理する。遺構内出土遺物は少ないが、主要遺構の帰属時期は遺跡中央を南北に分断する SX3 との切り合い関係を基準に判断することができる。以下にその概要を示す（第 19 図）。

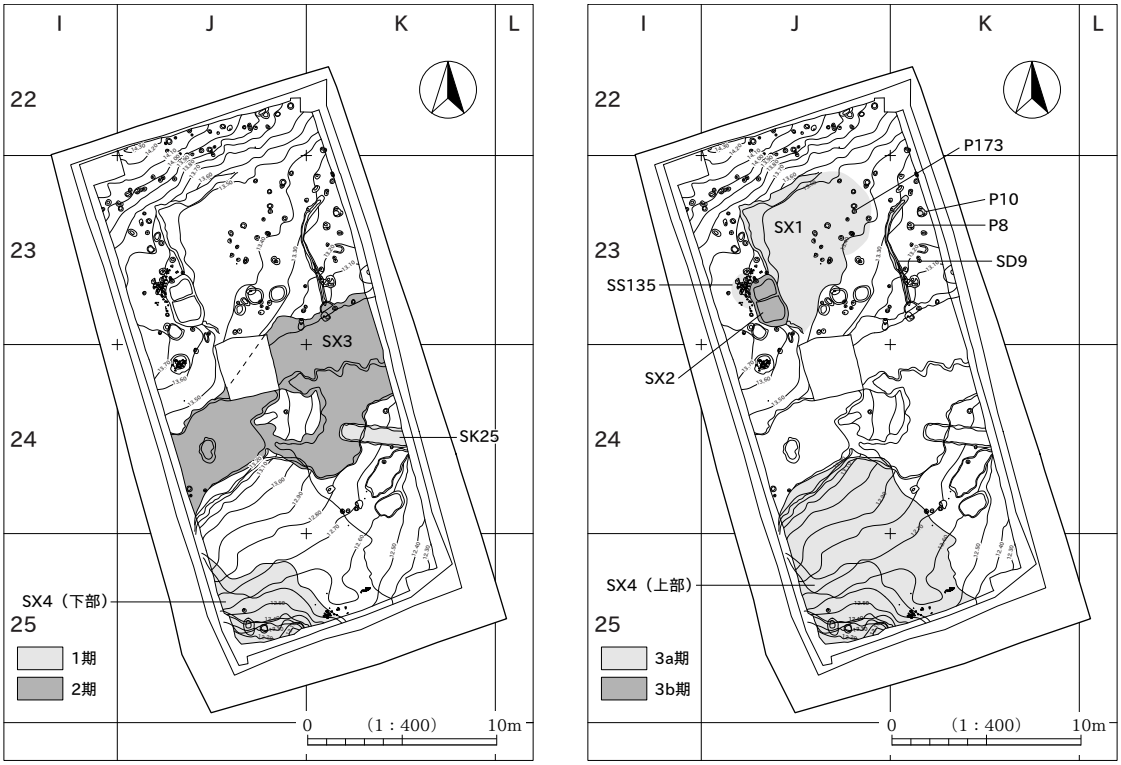
Ⅰ　期　当期は SX3 形成以前（13 世紀後半以前）であり、調査区南側の SK25 や SX4 下部（3・5 層）の少数が該当する。SK25 は多数の炭化材が検出された遺構で、簡易的な木炭窯の可能性もある。SX4 下部は遺構の形状から自然形成の埋没谷と考えられ、出土遺物には平安時代の遺物も確認した。なお、SX4 下部の形成以前には縄文時代晩期と弥生時代の土器集中区が形成されていた。

このように I 期は検出遺構に乏しく、南側に埋没谷（SX4 下部）や SK25（木炭窯）が存在するにとどまる。しかしながら SK25 の存在は、本遺跡周辺が鉄生産に関連していた可能性も示している。当期は、SK25 の炭化材や SX4 下部の放射性炭素年代測定によって、前者が 7 世紀後半～ 8 世紀後葉頃、後者が 10 世紀末葉～ 11 世紀前葉の年代観が得られ、古代（奈良～平安時代）にさかのぼる可能性がある。

Ⅱ　期　SX3 の形成期である。出土遺物によって 13 世紀後半以降に形成され 16 世紀前葉前後には埋没していたと判断している。当期には当遺構以外の明確な遺構形成はないが、基底面が水平となる SX3 西側の存在や、13 世紀後半以降の土器・陶磁器などの包含層遺物の大部分があり、周辺には集落遺跡などが存在していた可能性が考えられる。

Ⅲ　期　当期は SX3 形成以後の遺構からなり、Ⅲa・Ⅲb 期に細分する。Ⅲa 期は、SK170、SD9、SX1・4 上部（1 層）からなり、SS135、P8・173 などの柱穴（以下「柱穴群」と仮称）、杭 18 なども当期の可能性がある。これらは、SX3 との切り合い関係から 16 世紀前葉以降と考えられるが、放射性炭素年代測定を行った杭 18 では、おおむね 16 世紀前葉～ 17 世紀初頭頃の年代観が得られており、時期が近世にかかる可能性もある。

柱穴群（P8･173 など）が位置する 23J･K グリッドは、掘立柱建物などの明確な配列は認められないが、本遺跡が集落域であることを示す。帰属時期は、柱穴群とともに検出された SK170・SD9 が SX3 よりも新しいこと、P173（柱穴群）が杭 18 と共に SX1 と同時期かそれ以降と推察されることから、当期の



第 19 図　香積寺沢遺跡　遺構の変遷

可能性を考えた。SX1 では混入の可能性もあるが、新寛永銭も出土している。

SX1 は基底面に水平面を持つ遺構で、周辺の斜面地造成に伴う結果と推測される。前述の P178 や杭 18 との新旧関係から、柱穴群などの集落形成に伴う可能性もあろう。浅い低地となっている SX4 上部も同様に斜面地造成の性質を持つ可能性がある。

Ⅲｂ期は SS135 や SX1 を切る SX2 があるが、前述の SX1 も当期に降る可能性がある。時期判別が可能な遺物にとぼしく、形成時期は明確にできないが、少なくともⅢａ期以降と考えられる。

このようにⅢ期は、そのⅢａ期に最も遺構形成が明確となる。特に柱穴群や SD9 などが分布する区域は本期以降に形成された可能性が高く、その周辺が集落の一部を構成していたものと推測される。

遺跡の性格　香積寺沢遺跡では、上記のようにⅠ期～Ⅲ期にかけての遺構形成が認められる。遺跡周辺も含めてⅡ期以降（13 世紀後半以降）に中世の集落遺跡などが存在した可能性が高く、特にⅢ期（16 世紀前葉以降）に明確となる。また古代にさかのぼるⅠ期は、遺構形成が低調ながらも木炭などの生産域と考えられ、時期不明の大型椀形鍛冶滓（163）などの出土とともに、Ⅰ期以降、鉄生産に関連した性格も考えられよう。

なお、本遺跡の名称が示す「香積寺」の存在については、寺院を決定付ける遺構や遺物は検出できなかった。しかしながら、包含層出土の信楽焼や瀬戸・美濃焼（天目茶椀）などの茶道具は、有力領主層や寺院などの遺跡にもあり［水澤 2005］、本遺跡の性格とも関連しよう。また、柏崎町遺跡［品田・伊藤ほか 2001］では、陶磁器類の量が群を抜くとされながらも、15 世紀以降の遺物に信楽焼が示されていない。このようなことから、今回の調査区で寺院の存在を認めることはできなかったが、その周辺に存在する可能性を多分に残している。

要　　約

千古作遺跡

1　千古作遺跡は柏崎市剣野町字千古作 288-3 番地ほかに所在し、鵜川左岸の自然堤防上に立地する。標高は約 2.7m で、現況は宅地である。

2　調査は一般国道 8 号柏崎バイパス建設に伴い、平成 20 年度に実施した。調査面積は 850m^2 である。

3　遺構は、井戸 1 基、土坑 3 基、溝 13 条、性格不明遺構 7 基、柱穴 5 基、杭 12 本を検出した。遺構の時期は、出土遺物が少なく判断しにくいが、中世（13 世紀後半～ 15 世紀頃）が主体と考えられる。

4　遺物は古代～近世のものが出土している。古代（平安時代）は土師器の椀が主体であり、須恵器の杯・甕等が少量含まれる。大半を占めるのは中世（13 世紀後半～ 15 世紀）で、中世土師器、珠洲焼、青磁・白磁、瀬戸・美濃焼、越前焼、信楽焼などがある。ほかに田下駄などの木製品、土錘、有孔石製品、磨石類、砥石、鉄関連遺物、銭貨等が出土した。

5　今回の調査範囲では、明確な集落の居住域を検出できなかったが、ピア 2 区の井戸（SE19）等の存在から、遺跡東側は居住域の縁辺部であった可能性が考えられる。自然流路（SD13）などを検出したピア 3 区周辺は低地となり、作業ヤード周辺にかけて耕作痕（水田など）の可能性がある性格不明遺構（SX1・2 など）が展開する。ピア 3 区の自然流路では、農具の田下駄足板が折り割られ、地面に突き刺された状態で出土したことから、農耕に関連した祭祀の場としての性格も考えられる。

香積寺沢遺跡

1　香積寺沢遺跡は柏崎市剣野字香積寺沢 862-28 番地ほかに所在し、樹枝状に刻まれた開析谷の沢内平野に立地する。標高は 14m で現況は宅地である。

2　調査は一般国道 8 号柏崎バイパス建設に伴い、平成 20 年度に実施した。調査面積は 630m^2 である。

3　遺構は、土坑 9 基、溝 1 条、性格不明遺構 4 基、柱穴 121 基、杭 9 基、集石 1 か所、縄文・弥生土器の土器集中区を検出した。木炭窯の可能性がある SK25 など、古代までさかのぼる遺構も一部存在するが、出土遺物の様相から、大部分が中世（13 世紀後半～ 16 世紀前葉）～近世の遺構と考えられる。

4　出土遺物は、中世（13 世紀後半～ 16 世紀前葉）のものが大半を占め、中世土師器・珠洲焼・青磁・瓦器などの土器・陶磁器類のほか、石硯などの石製品、木製品、銭貨、鉄関連遺物などが出土した。ほかに縄文時代後・晩期の土器・石器が南側の低地を中心に多く出土した。

5　遺構確認面は、北西から南東に向かって傾斜する緩斜面地で、丘陵裾に近い高所（調査区北側、23J･K 区）に土坑や柱穴が集中する。この範囲が中世～近世集落の居住域であった可能性がある。

6　これに対し低地となる南側には、古代の木炭窯と考えられる SK25 が存在し、本遺跡とその周辺が木炭の生産域となっていた可能性がある。また、包含層から鉄滓も出土しており、古代以降は鉄生産に関連した場であった可能性もある。

6　本遺跡周辺は、更正図などにある「香積寺沢」の地名から、現在でも柏崎市街地に存在する香積寺（曹洞宗）の移転以前の跡地である可能性があるが、今回の調査範囲で、寺院を示す明確な遺構・遺物を検出することはできなかった。

引用・参考文献

相沢　央・小林昌二　2000　「柏崎市箕輪遺跡出土木簡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

秋山浩三　1993　「『大足』の再検討」『考古学研究』第 40 巻　第 3 号　考古学研究会

秋山浩三　2008　「田下駄・『大足』と関連木製品」『季刊考古学』第 104 号　雄山閣

荒川隆史・加藤　学　1999『和泉 A 遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 93 集　新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団

猪狩俊哉　2004　「第Ⅴ章 5 木製品」『青田遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 133 集　新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団

伊藤啓雄　2002　「中世越後の城館と寺院」『中世北陸の城館と寺院』 北陸中世考古学研究会

伊藤啓雄　2006　「新潟県における中世土師器皿と輸入陶磁器･瀬戸美濃製品　－中世後半～近世初頭の様相－」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』 北陸中世考古学研究会

井上慶隆　1976　「三島郡の荘・保」『かみくひむし』第 21 号　かみくひむしの会

今村啓司　2006　「松原式土器の位置と踊場系土器の成立」『長野県考古学会誌』112　長野県考古学会

宇佐美篤美　1987　「大原遺跡」『柏崎市史資料集　考古篇 1』 新潟県柏崎市史編さん委員会

潮田鉄雄　1967　「田下駄の変遷」『物質文化』10　物質文化研究会

潮田鉄雄　2004　「原始農耕とはきもの―田下駄と下駄―」『はきもの』 法政大学出版局

大野隆一朗・徳間正一ほか　1990　「大地」『柏崎市史　上巻』 新潟県市史編さん委員会

岡田和則ほか 2000　「箕輪遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

荻野正博　1983　「越後国中世荘園の成立」『新潟史学』第 16 号　新潟史学会

小野正敏　1982　「15、16 世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会

金子拓男　1987　「三締寺経塚遺跡」『柏崎市史資料集　考古篇 1』 新潟県柏崎市史編さん委員会

金子拓男　1990　「第 6 章 第 5 節 交通と交通路、第 6 節 延喜式内神社」『柏崎市史 上巻』 新潟県柏崎市史編さん委員会

兼康保明　1985　「田下駄」『弥生文化の研究』第 5 巻　雄山閣

木戸雅寿　1995　「Ⅲ 9.〔3〕信楽」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社

笹澤正史・水澤幸一　2001　「伝至徳寺跡の遺物様相」『上越市史研究』第 6 号　新潟県上越市

品田高志　1985　『吉井遺跡群』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 4　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志　1985　『刈羽大平　小丸山』 柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 5　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志　1987　『西岩野』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 7　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志　1990a　『千古塚』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 11　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志　1990b　『剣野山縄文遺跡群』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 12　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志　1990c　『吉井遺跡群Ⅱ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 13　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志　1991a　「越後の中世土師器」『新潟考古学談話会会報』第 8 号　新潟考古学談話会

品田高志　1991b　『小児石』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 15　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志　1995a　『藤橋東遺跡群』 柏崎市埋蔵文化財調査図録第 1 集　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志　1995b　「Ⅷ 総括 1 鵜川中流域における古代・中世の遺跡」『柏崎市の遺跡Ⅳ』 柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第 20 集　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志　1996　「季節と縄文集落」『新潟考古学談話会会報』第 16 号　新潟考古学談話会

品田高志　1997　「越後国における土師器の変遷と諸相」『中・近世の北陸』 北陸中世土器研究会

品田高志　1999a「Ⅲ 総括 3 角田遺跡出土中世土師器の時期と変遷」『角田』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 32 集　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志　1999b　「越後における中世後期の土師器Ⅲ－京都系土師器第 2 波の流入と展開－」『中世土師器の基礎

研究ＸⅣ』 日本中世土器研究会
品田高志　2004　「柏崎市剣野Ｂ遺跡発掘調査の概要　―縄文時代中期前葉と後晩期の環状集落を中心に―」『新潟県考古学会第 16 回大会　研究発表会発表要旨』 新潟県考古学会
品田高志・伊藤啓雄 1997a 『呑作』 柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第 25 集　新潟県柏崎市教育委員会
品田高志・伊藤啓雄 1997b 『前掛り』 柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第 26 集　新潟県柏崎市教育委員会
品田高志・中野　純　1996 『屁振坂』柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第 23 集　新潟県柏崎市教育委員会
品田高志・中野　純ほか　1996 『田塚山遺跡群』柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第 21 集　新潟県柏崎市教育委員会
品田高志・中野　純ほか　2000 『横山東遺跡群Ⅰ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第 34 集　新潟県柏崎市教育委員会
品田高志・伊藤啓雄ほか　2001 『柿崎町』柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第 38 集　新潟県柏崎市教育委員会
品田高志・平吹　靖　2001 『十三本塚北』柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第 37 集　新潟県柏崎市教育委員会
新沢佳大　1970　『柏崎編年史　上巻』 新潟県柏崎市教育委員会
新沢佳大　1990　「第１章　幕藩体制の支配」『柏崎市史　中巻』 新潟県柏崎市史編さん委員会
新沢佳大ほか 1990　「第３章　第４節　町村の展望」『柏崎市史　中巻』 新潟県柏崎市史編さん委員会
鈴木郁夫ほか 1988　『土地分類基本調査　岡野町』 新潟県
鈴木郁夫ほか 1989　『土地分類基本調査　柏崎・出雲崎』 新潟県
関　雅之　1990　「古代細型管状土錘考」『北越考古学』第３号　北越考古学研究所
高橋　保ほか 1979　『下谷地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 19 集　新潟県教育委員会
高橋　保ほか 2002　『箕輪遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 109 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
田中照久・木村孝一郎　2005 「越前窯」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨』
戸根与八郎・北村　亮ほか　1992 『木崎山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 28 集　新潟県教育委員会
鶴巻康志　2003　「第１章 第２節 9 至徳寺遺跡(至徳寺館跡･至徳寺跡)」『上越市史叢書８ 考古－中･近世資料－』上越市史専門委員会考古部会
中　大輔　2003　「日本古代の駅家と地域社会－越後国三嶋駅の事例を中心に－」『古代交通研究』第 13 号　古代交通研究会
中野　純　1988　「柏崎市大宮縄文前期集落遺跡」『新潟県考古学会第 10 回大会　研究発表･調査報告等要旨』新潟県考古学会
中野　純　1995　「Ⅷ 総括　2 鯨波地区東部における縄文遺跡の立地」『柏崎市の遺跡Ⅳ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第 20 集　新潟県柏崎市教育委員会
中野　純　2003　「柏崎市琵琶島城跡の調査概要」『新潟県考古学会第 15 回大会　研究発表会発表要旨』 新潟県考古学会
中野　純　2008　『よみがえった古代の製鉄』 柏崎の遺跡シリーズ 第１集 柏崎市教育委員会
中山正典　1994　「第４節 田下駄の形態変遷と機能」『瀬名遺跡Ⅲ』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第 47 集　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
長澤展生・穴沢義功ほか　2007 『坂田遺跡群Ⅰ』 柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第 50 集　新潟県柏崎市教育委員会
藤澤良祐　1986　「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要Ⅴ』 瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐　1991　「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『研究紀要 Ⅴ』 瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐　2005　「施釉陶器生産技術の伝播」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨集』
藤巻正信　1988　『西田・鶴巻田遺跡群』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 27 集　新潟県教育委員会
藤巻正信　1989　「土器片円盤について」『新潟考古学談話会会報』第３号　新潟考古学談話会
細井佳浩　2006　「第Ⅶ章２　Ｂ木製農具大足について」『土居下遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 166 集 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
細井佳浩　2007　「木製農具「大足」について」『新潟考古学談話会会報』第 32 号 新潟考古学談話会
水澤幸一　1996　『江上館跡Ⅳ』 中条町埋蔵文化財調査報告第 10 集・奥山荘城館遺跡調査報告 第４集　新潟県中条町教育委員会

水澤幸一　2001　「15 世紀中葉～後半における北東日本海沿岸地域へのやきものの搬入時期－越後江上館を中心として－」『中世土器研究論集－中世土器研究会 20 周年記念論集－』 中世土器研究会
水澤幸一　2004　「至徳寺遺跡の中世後期土器（補遺）」『上越市史研究』第 9 号　新潟県上越市
水澤幸一　2005a　「越後の様相」『中世北陸の茶道具』 北陸中世考古学研究会
水澤幸一　2005b　「越後の中世土器」『新潟考古』第 16 号　新潟県考古学会
水澤幸一　2007　「中世越後の土器と陶磁器－ 11 ～ 14c. 前半」『第 20 回 北陸中世考古学研究会 資料集　中世前期北陸のカワラケと輸入陶磁器・施釉陶器・瀬戸美濃製品』 中世北陸考古学研究会
水野和雄　1984　「日本石硯考－出土品を中心として－」『考古学雑誌』第 70 巻 第 4 号 日本考古学会
村山教二　1990　「第 1 章 第 2 節 越後における荘園制の展開」『柏崎市史 上巻』 新潟県柏崎市史編さん委員会
森田　勉　1982　「Ⅱ 14 ～ 16 世紀の貿易陶磁の編年　14 ～ 16 世紀の白磁の形式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会
山口賢俊　1972　『日本の民俗 15　新潟』 第一法規
山崎忠良　2003　「第Ⅶ章 2 土器・陶磁器について」『下沖北遺跡Ⅰ』 新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 125 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
山崎忠良ほか 2005　『東原町遺跡・下沖北遺跡Ⅱ』 新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 140 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
山田邦明　1987　「第 2 章 第 2 節 3 国人と守護」『新潟県史 通史編 2　中世』 新潟県
山本信夫　2000　『太宰府条坊跡 XV －陶磁器分類編－』太宰府市の文化財 第 49 集 太宰府市教育委員会
山本　肇・高橋　保ほか　2003 『下北沖遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 125 集　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
山本真央　1996　「第 4 章　第 2 節 1　田下駄」『岳美遺跡Ⅱ（遺物編）』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報 第 75 集 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
米沢　康　1980　「大宝二年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』第 32 巻 第 6 号　信濃史学会
渡邊朋和　1997　「第Ⅴ章 2Bc　焼土坑」『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』 新潟県新津市教育委員会
渡邊朋和　1998　「第Ⅶ章 1C　木炭窯について」『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』 新潟県新津市教育委員会

千古作遺跡　土器類観察表 1

報告書№	遺構名・出土地点	層位	種別	器種（分類）	法量（cm）			胎土		調整等の所見	口縁部遺存率	備考
					口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	含有物	色調			
1	SE19・9K5 ウ	4	珠洲焼	甕				白・石・針・チャ・黒	灰 N 6/0	外面タタキメ、内面当て具痕		還元焔焼成、Ⅴ期
3	SD27・9J20 イ	1	須恵器	甕				白・石	灰白 2.5Y 7/1	外面タタキメ、内面当て具痕		還元焔焼成
4	SX16・9J15 ウ	1	須恵器	有台杯	13.0			白・石・針	灰白 5Y 7/1	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ	4/36	還元焔焼成
5	SX17・10K5 イ	1	中世土師器	小皿 Ⅲ類	7.5	6.1	1.5	白・雲・チャ	浅黄橙 2.5YR 7/4	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	4/36	
6	10K6	Ⅱd	中世土師器	小皿 Ⅰ類	8.0	5.2	1.9	石	橙 7.5YR 7/6	手づくね成形　内・外面ナデ	3/36	タール状付着物
7	10K2	Ⅰ	中世土師器	皿 Ⅰb類	12.3			白・石・雲・チャ	にぶい黄橙 10YR 6/4	手づくね成形　内・外面ナデ　底部オサエ未調整	2/36	
8	10J11	Ⅱd	瓦質土器	鉢		12.8		白	橙 7.5YR 6/6			18C 後半（江戸後期）の可能性もある
11	SD13・6K7 エ	2	中世土師器	小皿 Ⅰ類	8.2		1.7	白・石・チャ	にぶい黄橙 10YR 7/3	手づくね成形　内・外面ナデ　底部オサエ未調整	2/36	
21	6K7	Ⅱc	青磁（龍泉窯系）	椀 Ⅲ類	3.4	4.7	0.7		灰白 N 7/0	釉薬（明緑灰 10GY 7/1）		土器片利用研削具？付着物
22	5J25	Ⅱc	白磁	皿 D群	8.9				灰白 N 8/0	外面・底部付近露胎　釉薬（灰白 N 8/0）		15C 代
23	5K10	Ⅱ	珠洲焼	片口鉢				白・石・礫	灰 N 4/0	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ		還元焔焼成、Ⅴ期
24	6K4	Ⅱc	珠洲焼	片口鉢	31.0			白・石・針・黒・礫	灰 N 5/0	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ、内面卸目（1 単位幅 2.9cm、13 条）	3/36	還元焔焼成、Ⅴ期
25	6K3	Ⅱc	中世土師器	皿 Ⅰd類	12.0	7.0	2.3	白・石・雲・チャ・角	にぶい黄橙 10YR 7/4	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ　底部未調整	5/36	
26	6K8	Ⅱc	中世土師器	皿 Ⅰd類	12.4	8.0	2.8	白・石・針・雲・チャ	にぶい黄橙 10YR 6/4	手づくね成形 内・外面ナデ、底部オサエ　底部未調整	6/36	炭化物付着
27	6K17	Ⅱc	中世土師器	皿 Ⅰd類	12.8			白・石・雲・角	にぶい黄 2.5Y 6/3	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ　底部未調整	3/36	
28	6K24	Ⅱc	中世土師器	皿 Ⅱc類	12.6			白・石	にぶい黄橙 10YR 6/3	手づくね成形 内・外面ナデ、体部オサエ	5/36	
29	6K4	Ⅱc	中世土師器	皿 Ⅱc類	12.4			白・石・角	褐灰 10YR 4/1	手づくね成形　内・外面ナデ、体部オサエ	5/36	
30	6J23	Ⅱc	中世土師器	皿 Ⅱc類	12.0			白	暗灰黄 2.5Y 5/2	手づくね成形　内・外面ナデ、体部・底部オサエ　底部未調整	1/36	
31	6K4	Ⅱc	中世土師器	皿 Ⅱa類	15.6			白・石・黒	にぶい黄橙 10YR 7/2	手づくね成形　内・外面ナデ、体部オサエ	4/36	
33	6K24	Ⅱc	須恵器	甕				白・石・礫	灰白 N 7/0	外面タタキメ、内面当て具痕		還元焔焼成
43	2K10	Ⅱe	青磁（景徳鎮窯系）	皿					灰白 5Y 7/1	釉薬（灰白 7.5Y 7/2）		漆接ぎ
44	2K15	Ⅱe	青磁（龍泉窯系）	椀 Ⅳ類		6.0		白	灰 N 6/0	無文 釉薬（オリーブ灰 10Y 5/2）		14C 末～ 15C 初頭
45	2J25	Ⅰc	珠洲焼	甕				白・石・黒・礫	灰 N 5/0	外面タタキメ、内面当て具痕		還元焔焼成、Ⅲ期頃
46	2J24	Ⅱf	珠洲焼	片口鉢	30.6			白・石・針・礫	灰 N 5/0	ロクロ成形　内面卸目、内・外面ロクロナデ	3/36	還元焔焼成、Ⅴ期
47	2K14	Ⅰc	中世土師器	皿 Ⅲ類	12.6	3.6	2.4	白・石・針・チャ	にぶい黄橙 10YR 7/4	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ 底部回転系切り	1/36	
48	2K9	Ⅱg	中世土師器	皿 Ⅲ類	10.8			白・石・雲	にぶい黄褐 10YR 5/4	手づくね成形　内・外面ナデ	2/36	
49	2K15	Ⅲe	中世土師器	皿 Ⅲ類	14.6			白・石・雲	灰黄 2.5Y 7/2	手づくね成形　内・外面ナデ、体部オサエ	4/36	
50	2K9	Ⅱg	中世土師器	皿 Ⅲ類		5.4		白・石・雲・針	にぶい黄橙 10YR 7/3	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ 底部回転系切り（右）		
51	2K10	Ⅲc	中世土師器	皿 Ⅲ類		6.0		白・石・雲・針	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ 底部回転系切り（右）		
52	2K10	Ⅲc	土師器	（無台椀）		4.8		白・石・針	浅黄 2.5Y 7/4	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ 底部回転系切り（右）		
53	3K16	Ⅰc	土師器	長甕	23.3			白・石・雲・チャ	にぶい黄橙 10YR 7/4	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ	2/36	
54	2K9	Ⅰc	唐津	椀		4.8		白	灰白 N 8/0	不均等な幅の高台、高台内に細かいシワ　釉薬（鉄釉 黒褐 7.5YR 3/2		17 世紀前半
69	SD3・8L10 エ	1	土師器	無台椀		6.6		白・石・雲・チャ	灰黄 2.5Y 7/2	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ 底部回転系切り（右）		中世土師器の可能性あり
70	SD5・8L13 エ	1	珠洲焼	片口鉢				白・石・針・黒	灰 7.5Y 6/1	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ、口縁部内面波状文		還元焔焼成、Ⅵ期

※中世土師器皿・小皿の分類は、香積寺沢遺跡の分類を適用

千古作遺跡　土器類観察表２

報告書No.	遺構名・出土地点	層位	種別	器種（分類）	法量（cm）			胎土		調整等の所見	口縁部遺存率	備考
					口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	含有物	色調			
71	SD6・8L14 ア	2	中世土師器	皿 Ⅳ類		6.6		白･石･針･雲・チャ	浅黄橙 7.5YR 8/4	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ 底部回転糸切り（右）		硬質で、胎土に海綿骨針含む。
72	SX1・8L22 イ 他	1	中世土師器	皿 Ⅰｄ類	11.6		2.8	白･石･チャ	にぶい黄橙 10YR 7/2	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ　底部未調整	9/36	
73	SX1・8L22 イ	1	珠洲焼	片口鉢				白・石・黒	灰 N 6/0	ロクロ成形　内･外面ロクロナデ、口縁部波状文		還元焔焼成、Ⅴ期
74	SX2・8L23 イ	1	須恵器	無台杯	12.6			白・石	灰 N 5/0	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ	4/36	還元焔焼成
75	8L18	Ⅱｃ	青磁（龍泉窯系）	椀 ｃ類				白	灰白 N 8/0	外面雷文 釉薬（オリーブ灰 10Y 6/2）		
76	8L21	Ⅱｃ	瀬戸・美濃	天目茶碗	12.8			白	灰白 N 8/0	釉薬（鉄釉 黒褐 2.5YR 2/1）	3/36	後Ⅱ期頃
77	8L23	Ⅱｃ	珠洲焼	甕				白･石･針･黒	灰 N 5/0	外面タタキメ、内面摩滅		還元焔焼成、Ⅳ期
78	8L23	Ⅱｃ	珠洲焼	片口鉢	23.2			白・石・角	灰 N 6/0	ロクロ成形 内・外面ロクロナデ	1/36	還元焔焼成、Ⅲ期
79	8L24	Ⅲｂ	珠洲焼	片口鉢				白･石･針･黒	灰 N 5/0	ロクロ成形　内･外面ロクロナデ、口縁部波状文		還元焔焼成、Ⅵ期
80	8L24	Ⅱｃ	珠洲焼	片口鉢				白･石･針･黒	灰白 N 7/0	ロクロ成形　内･外面ロクロナデ、内面卸目		還元焔焼成、Ⅵ期
81	8L18	Ⅱｃ	珠洲焼	（甕）	2.5	2.1	0.8	白・石・針	灰 N 5/0	外面タタキメ		土器片利用の研削具 還元焔焼成
82	7L20	Ⅱ	中世土師器	皿 Ⅰｄ類	12.2		2.7	白･石･針･雲・チャ	にぶい黄橙 10YR 6/4	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ　底部未調整	4/36	
83	8L22	Ⅱ	中世土師器	皿 Ⅰｄ類	11.6			白･石･針･雲・チャ	にぶい黄褐 10YR 5/3	手づくね成形　内・外面ナデ	3/36	
84	8L17	Ⅱｃ	中世土師器	小皿 Ⅱｂ類	8.8			白・石	にぶい黄橙 10YR 7/3	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ	6/36	
85	8L19	Ⅱｃ	須恵器	有台杯		7.4		白・石	灰 N 6/0	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ		還元焔焼成

※中世土師器皿・小皿の分類は、香積寺沢遺跡の分類を適用

千古作遺跡　石器・石製品観察表

報告書No.	遺構名・出土地点	層位	器種	石材	法量（mm・g）				備考
					長さ	幅	厚さ	重量	
2	SE19・9K5	5	磨石	輝石安山岩	116.0	94.0	73.0	940.0	
9	9J25	Ⅱｄ	有孔石器	頁岩	35.0	25.5	8.0	7.9	表裏両面から穿孔　孔径 4.5mm
55	2K5	Ⅱｅ	磨石	輝石安山岩	150.0	76.0	66.0	1070.0	
56	2K5	Ⅱｅ	有溝砥石	凝灰岩	75.0	56.0	41.5	186.8	表裏に各１条の溝状使用痕、側面敲打
57	2J25	Ⅲｃ	砥石	輝石安山岩	176.5	105.0	68.0	1560.0	
86	8L14	Ⅱ	砥石	輝石安山岩	76.0	35.5	23.5	110.9	裏面割れ口に使用痕

千古作遺跡　鉄滓観察表

報告書No.	遺構名・出土地点	層位	種類	法量（mm・g）				磁着反応	備考
				長さ	幅	厚さ	重量		
10	10K11	Ⅰ	椀形鍛冶滓	51.0	33.0	19.0	33.6	無	小型
68	2K15	Ⅲｃ	椀形鍛冶滓	59.0	67.0	34.0	88.4	有	小型
89	8L24	Ⅱｃ	椀形鍛冶滓	84.0	54.0	29.5	113.1	無	小型

千古作遺跡　土製品観察表

報告書No.	遺構名・出土地点	層位	器種	法量（cm・g）					備考
				長さ	幅	厚さ	孔径	重量	
32	5J25	Ⅱｃ	太型管状土錘	6.2	4.8	1.5	2.0	（102.0）	表面の剥落著しい

千古作遺跡　木製品観察表

報告書No.	遺構名・出土地点	層位	種別	器種	木取り	法量（mm・g）			製作痕跡等の所見	備考
						長さ	幅	厚さ		
12	SD13・№5	4	農具	田下駄足板	板目	261.0	99.5	15.5	3孔。径約9mm	スギ
13	SD13・№6	3	農具	田下駄足板	板目	287.5	52.0	9.5	孔径約8mm	SD13の底面に突き刺さって検出。スギ
14	SD13・№6	3	農具	田下駄足板	板目	236.0	28.5	7.0	孔径約8mm	SD13の底面に突き刺さって検出
15	SD13・№1	2	農具	田下駄足板	板目	280.0	43.0	7.5	孔径約8mm	
16	SD13・№4	2	雑具	板材	柾目	273.0	40.0	9.5	穿孔、先端斜めに削り、下部炭化	火付け木
17	SD13・№2	2	雑具	板材	板目	193.0	35.0	6.5		
18	SD13・6K4ア	上部	食事具	箸	削り出し	110.0	6.0	5.0	削り出しによって断面多角形に整形	下半部
19	SD13・6K8イ		食事具	箸	削り出し	56.5	6.0	4.0	削り出しによって断面多角形に整形	下半部
20	SD10・6K17イ		食事具	箸	削り出し	67.0	7.0	5.0	削り出しによって断面多角形に整形	下半部
34	6K16		雑具	板材	柾目	93.0	31.0	6.0	直線上に3か所穿孔。径約3mm	スギ
35	6K8		雑具	板材	柾目	80.0	22.5	5.0	上部に穿孔。径約4mm	
36	7K16		雑具	板材	柾目	74.0	27.5	10.5	径約2mmの木釘	スギ
37	6K19	Ⅱ	雑具	板材	板目	150.0	44.0	7.0		スギ
38	6J24		雑具	部材	板目	204.0	35.0	28.0	断面四角形（約4.5mm）の鉄釘	スギ
39	5K20		食事具	箸	削り出し	141.0	6.0	4.0	削り出しによって断面多角形に整形	下半部。スギ
40	5J25		食事具	箸	削り出し	120.0	9.0	5.0	削り出しによって断面方角形に整形	下半部
41	6K7		食事具	箸	削り出し	100.5	6.0	5.0	削り出しによって断面多角形に整形	下半部
42	6K12		食事具	箸	削り出し	100.5	8.0	5.0	削り出しによって断面多角形に整形	下半部。スギ
58	2K9	Ⅱc	容器（漆器）	椀	横木取り					内面赤漆、外面黒漆、赤漆による文様。ブナ属
59	2K14	Ⅲ	武器	弓	丸木	570.0	21.0	21.0	全体は削り出しによって整形され、一端を凸状に加工	ヒノキ科
60	2K14	Ⅰc	雑具	部材	芯持ち	88.0	32.0	30.0	上部突起断面円形。下部突起断面方形	コナラ属
61	2K15	Ⅰc	容器	桶側板	柾目	125.5	41.0	11.0		スギ
62	2K14	Ⅱ	雑具	板材	板目	114.0	36.0	7.0	穿孔1孔。綴じ皮あり	
63	2K10	Ⅱ	雑具	板材	柾目	72.0	23.0	11.0		用途不明
64	2K14	Ⅲ	雑具	板材	板目	72.0	21.5	4.0		用途不明
65	2K10	Ⅱ	不明	棒状	削り出し	99.0	16.0	4.5	先端尖る	用途不明
87	8L17		雑具	板材	柾目	132.0	21.0	8.0	円孔	スギ
88	8L17	Ⅱ	雑具	板材	斜め板	69.0	47.0	9.0		

千古作遺跡　銭貨観察表

報告書No.	遺構名・出土地点	層位	銭貨名	法量（mm・g）				初鋳年	備考
				外径	内径	銭厚	重量		
66	2K9	Ⅲc	元祐通寶	25.0	8.0	1.9	3.8	北宋1086	篆書
67	2K10	Ⅱc	永楽通寶	25.0	5.5	1.4	3.6	明1408	

香積寺沢遺跡　遺構観察表

遺構名	グリッド	遺構の形態			規模（m）			他遺構との切り合い	遺構図版	出土遺物	備考
		平面	断面	立ち上がり	長軸	短軸	深度				
SK25	24K11 ～ 13	長方形	台形状	急斜度	3.62	1.40	0.35	SX3 よりも古い	図版 12・14	図版 18-1	簡易的な木炭窯、あるいは焼土坑の可能性がある
SK27	24K18・22・23	長方形	弧状	緩やか	1.60	1.09	0.08		図版 13・15		
SK69	23J20	円形	台形状	急斜度	1.00	0.85	0.15		図版 13・15		
SK74	23J19	円形	弧状	緩やか	0.95	0.88	0.06	P174・175 よりも古い	図版 13・15		
SK77	23J19・24	円形	弧状	緩やか	0.58	0.56	0.08		図版 13・15		
SK125	24J2	円形	弧状	緩やか	1.03	1.00	0.32		図版 13・15		多数の礫が集積
SK129	24K21	楕円形	台形状	緩やか	1.38	0.87	0.20		図版 13・15		
SK152	23J22	楕円形	台形状	緩やか	4.50	3.20	0.20	P176 よりも新しい	図版 13・15		
SK170	23K12・17		台形状	急斜度	0.45	0.37	0.34	SX3 よりも新しい	図版 13・15		
P173	23J15	楕円形	U 字状	急斜度	0.32	0.29	0.22	SX1 よりも新しい	図版 13・15	図版 21-149	柱根
SD9	23J10・15 23K6・11・16		U 字状	急斜度	0.30	0.15	0.20	P23 よりも古く、SX3 よりも新しい			
P8	23K1	楕円形	U 字状	急斜度	0.47	0.25	0.25		図版 13・15		
P10	23K6	円形	台形状	急斜度	0.43	0.39	0.38		図版 13・15		
P11	23K6	楕円形	台形状	急斜度	0.45	0.37	0.34		図版 13・15		
P23	23K16	不整形	台形状	急斜度	0.82	0.64	0.12	SD9 よりも新しい	図版 13・15	図版 18-39	
P28	24K22	不整形	台形状	急斜度	0.41	0.42	0.21		図版 13・15	図版 18-40	
SX1	23J	不整形		急斜度	7.30	5.30	0.32	P173・杭 18・SX2 よりも古い	図版 13・16	図版 18-2 ～ 5、20-100 ～ 103、21-150	斜面地に平坦面を形成する
SX2	23J17・18・22・23	楕円形	台形状	緩やか	2.80	1.60	0.18	SX1・SS135 よりも新しい	図版 13	図版 21-124 ～ 126	
SX3	24J・23・24K	不整形	U 字状	緩やか	13.80	8.72	0.20	SK25・SK129 よりも新しく、SX4・SD9 よりも古い	図版 13・16	図版 18-6 ～ 33、20-104 ～ 107、21-127 ～ 129	東側は溝状、西側は平坦面を形成
SX4	24・25J・K	不整形	U 字状	緩やか	9.50	6.53	0.46		図版 13・16	図版 18-34 ～ 38、20-108・109、21-130 ～ 134	上部（1 層）と下部（3･5 層）からなる。2・4 層は土石流堆積物
SS135	23J12・16・17				2.47	1.35		SX2 より古いも	図版 13・15		礫の一部が被熱
土器集中区	25J・K							SX4 下部（5 層）よりも古い	図版 14・17	図版 19-88 ～ 91、94 ～ 98	主に、25J 集中区は弥生時代、25K 集中区は縄文時代晩期後葉からなる

香積寺沢遺跡　土器類観察表１

報告書№	遺構名・出土地点	層位	種別	器種（分類）	法量（cm）			胎土		調整等の所見	口縁部遺存率	備考
					口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	含有物	色調			
1	SK25・24K13 イ	1	中世土師器	小皿 Ⅱｂ類	8.1			白・雲	灰黄 2.5Y 7/2	手づくね成形　内・外面ナデ 体部オサエ	3/36	外面タール状付着物
2	SX1・23J13 ア	1	中世土師器	小皿 Ⅰ類	7.7		1.6	白・石・雲・チャ	浅黄橙 7.5YR 8/4	手づくね成形　内・外面ナデ 体部オサエ	5/36	
3	SX1・23J8 ア	1	中世土師器	皿 Ⅰｄ類	12.6			白・粘	浅黄 2.5Y 7/3	手づくね成形　内・外面ナデ 底部オサエ 底部未調整	2/36	
4	SX1・23J13 ウ	1	中世土師器	皿 Ⅰａ類	12.6			白・石・チャ	灰白 2.5Y 8/2	手づくね成形　内・外面ナデ 底部オサエ 底部未調整	2/36	
5	SX1・23J14 ウ	1	中世土師器	皿 Ⅰｄ類		7.0		白・石・雲・針	灰黄褐 10YR 5/2	手づくね成形　内・外面ナデ 底部オサエ 底部未調整		
6	SX3・23K21 ウ	1	中世土師器	皿 Ⅰｃ類	12.8		2.6	白・粘	浅黄橙 10YR 8/4	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ　底部未調整	3/36	
7	SX3・23K23	1	中世土師器	皿 Ⅰｃ類	14.6			白・石・チャ	にぶい黄橙 10YR 7/4	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ、沈線文　底部未調整	2/36	
8	SX3・24J5 ア	2	中世土師器	皿 Ⅰａ類	13.6			白・雲	浅黄橙 10YR 8/4	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ、沈線文１条　底部未調整	3/36	
9	SX3・24K2 エ	2	中世土師器	皿 Ⅰｂ類	12.7			白・石・雲・角・粘	にぶい黄橙 10YR 7/3	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ　底部未調整	2/36	
10	SX3・23K17 ウ	2	中世土師器	皿 Ⅰｃ類	12.4	8.0	2.0	白	灰白 2.5Y 8/2	手づくね成形　内・外面ナデ、体部オサエ、沈線文２条　底部未調整	2/36	
11	SX3・24K8 ア	2	中世土師器	皿 Ⅰｂ類				白・石・粘	にぶい黄橙 10YR 7/4	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ　底部未調整		
12	SX3・24K2 イ	2	中世土師器	皿 Ⅰｂ類	13.3			白・石・雲・粘	灰白 10YR 8/2	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ　底部未調整	3/36	
13	SX3・23K22 エ	2	中世土師器	皿 Ⅰｄ類	13.0	10.0	4.1	白・針・雲・チャ	浅黄 2.5Y 7/3	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ、板状圧痕　底部未調整	1/36	
14	SX3・24J13 ア	1	中世土師器	小皿 Ⅱｂ類	8.1		1.4	白・石	浅黄橙 10YR 8/3	手づくね成形　内・外面ナデ、体・底部オサエ 底部未調整	7/36	
15	24J14 ア	1	中世土師器	小皿 Ⅱｂ類	8.7			白・雲	オリーブ黒 5Y 3/1	手づくね成形　内・外面ナデ、体・底部オサエ 底部未調整	8/36	全面にタール状付着物
16	SX3・24J23 イ	1	中世土師器	小皿 Ⅱｂ類	8.2		1.7	白・雲・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/4	手づくね成形　内・外面ナデ、体・底部オサエ 底部未調整	9/36	
17	SX3・24J23 ア	1	中世土師器	小皿 Ⅱｂ類	8.8		1.9	白	浅黄橙 10YR 8/3	手づくね成形　内・外面ナデ、体・底部オサエ 底部未調整	9/36	内面タール状付着物
18	SX3・24J14 ア	1	中世土師器	皿 Ⅱｃ類	11.0			白・雲・チャ	浅黄 2.5Y 7/3	手づくね成形 内・外面ナデ 体部オサエ	6/36	
19	SX3・24J13 イ	1	中世土師器	皿 Ⅱｂ類	13.0			白・石	浅黄 2.5Y 7/3	手づくね成形　内・外面ナデ、体・底部オサエ 底部未調整	2/36	
20	SX3・24J13 イ	1	中世土師器	皿 Ⅱａ類	16.0			白・雲・角	浅黄 2.5Y 7/3	手づくね成形　内・外面ナデ、体・底部オサエ 底部未調整	2/36	
21	SX3・23K22 ア	1	中世土師器	皿 Ⅱｃ類	12.2			白・雲	浅黄 2.5Y 7/3	手づくね成形　内・外面ナデ 体部オサエ	3/36	墨書あり 内面炭化物付着
22	SX3・24J12 エ	1	中世土師器	皿 Ⅱａ類	17.8			白	灰白 10YR 8/2	手づくね成形　内・外面ナデ 体部オサエ	4/36	
23	SX3・23K21 イ	2	中世土師器	皿 Ⅱｂ類	13.8		2.3	白・粘	浅黄橙 10YR 8/3	手づくね成形　内・外面ナデ、体・底部オサエ 底部未調整	4/36	
24	SX3・24J9 ウ	2	中世土師器	皿 Ⅲ類	14.0			白・雲	にぶい黄橙 10YR 7/4	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ	3/36	
25	SX3・24J13 ウ	1	中世土師器	皿 Ⅲ類		7.6		白・石・雲	灰白 10YR 8/2	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ 底部回転糸切り（右）		
26	SX3・24J19 ア	1	中世土師器	皿 Ⅲ類		8.0		白・雲	にぶい黄橙 10YR 7/3	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ 底部回転糸切り（右）		
27	SX3・24J20	1	青磁（龍泉窯系）	椀					灰白 N 8/0	釉薬（オリーブ灰 2.5GY 6/1）		漆接ぎ
28	SX3・24K3 ア	2	瀬戸・美濃	平椀				白	浅黄 2.5Y 7/3	釉薬（にぶい黄 2.5Y 6/4）		漆接ぎ 中期様式以降
29	SX3・23K21 ウ	1	信楽	甕				白・石・チャ・黒	灰白 2.5Y 8/1			
30	SX3・24J18 ア	1	越前焼	擂鉢				白・チャ	黄橙 10YR 8/6	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ、内面卸目		酸化焔焼成 Ⅴ期頃
31	SX3・23K22 ウ	1	珠洲焼	甕		13.0		白・石・黒・礫	灰 N 6/0	外面タタキメ、内面当て具痕		内面摩滅 還元焔焼成　Ⅴ期頃
32	SX3・23K22 ア	1	瓦質土器	香炉				白・石	灰黄 2.5Y 6/2	巴文の墨書		
33	SX3・24K2 ウ	2	須恵器	長頸瓶	13.2			白・石	灰 5Y 6/1	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ	2/36	還元焔焼成
34	SX4・25J15 ア	4	中世土師器	皿 Ⅰａ類	13.8	6.0	3.0	白・石・雲・黒	にぶい黄橙 10YR 7/4	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ　底部未調整	10/36	
35	SX4・24K21 ウ	4	中世土師器	皿 Ⅰｄ類	11.8		3.5	白・石・雲・角	にぶい黄橙 10YR 6/4	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ、底部未調整	6/36	
36	SX4・25J9 ウ	4	中世土師器	皿 Ⅳ類		7.0		白・石	にぶい黄橙 10YR 7/4	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ 底部回転糸切り（右）		

香積寺沢遺跡　土器類観察表２

報告書№	遺構名・出土地点	層位	種別	器種（分類）	法量（cm）			胎土		調整等の所見	口縁部遺存率	備考
					口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	含有物	色調			
37	SX4・24J20 ウ	1	珠洲焼	片口鉢				白・石・針・黒	黄灰 2.5Y 4/1	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ、内面卸目		還元焔焼成 Ⅳ期頃
38	SX4・25K11 ア	4	珠洲焼	甕				白・石・針・礫	灰 N 6/0	外面タタキメ、内面当て具痕		還元焔焼成 Ⅳ期頃
39	P23・23K16 イ	4	中世土師器	皿 Ⅰ b 類	12.1			白・石・チャ	浅黄橙 10YR 8/3	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ、底部未調整	1/36	
40	P28・24K22 イ		中世土師器	皿 Ⅰ b 類				白・石	にぶい黄橙 10YR 7/3	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ、底部未調整		
41	24J23	Ⅰ	珠洲焼	片口鉢	39.5			白・石・針・チャ・黒・礫	灰 N 5/0	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ、内面卸目	3/36	還元焔焼成
42	23J5		珠洲焼	甕				白・石・針・雲	灰白 N 7/0	外面タタキメ、内面当て具痕		還元焔焼成 Ⅵ期
43	25J14	Ⅱ	珠洲焼	甕（T 種）		11.8		白・石・黒	灰 N 6/0			Ⅳ期以前
44	24J19	Ⅰ	珠洲焼	片口鉢				白・石・チャ・礫	浅黄 2.5Y 7/3	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ、内面卸目		漆接ぎ 酸化焔焼成　Ⅵ期
45	14Tr		珠洲焼	片口鉢				白・針・チャ・黒	灰白 2.5Y 7/1	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ、内面卸目		還元焔焼成 Ⅴ～Ⅵ期
46	23J22	Ⅰ	珠洲焼	片口鉢				白	灰白 2.5Y 8/1	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ、内面卸目		酸化焔焼成 Ⅳ期以降
47	23K17	Ⅲ	珠洲焼	甕ヵ壺	2.9	2.8	6.5	白・石	灰 N 5/0	外面タタキメ、内面当て具痕		土器片利用の研削具 還元焔焼成　Ⅳ期頃
48	23J23	Ⅰ	珠洲焼	甕ヵ壺	2.8	2.9	1.5	白・石・チャ	灰 N 5/0	外面タタキメ		土器片利用の研削具 還元焔焼成　Ⅳ期頃
49	23K1	Ⅲ	中世土師器	皿 Ⅰ a 類	14.2			白・石・雲・チャ	浅黄橙 10YR 8/4	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ 底部未調整	4/36	
50	23K6	Ⅲ	中世土師器	皿 Ⅰ a 類	12.4			白・石	浅黄橙 10YR 8/3	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ 底部未調整	5/36	
51	22J25	Ⅲ	中世土師器	皿 Ⅰ a 類	12.2			白	浅黄橙 10YR 8/4	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ 底部未調整	4/36	
52	23J22	Ⅲ	中世土師器	皿 Ⅰ b 類	12.2			白・石	灰白 2.5Y 8/2	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ 底部未調整	3/36	
53	23J5	Ⅲ	中世土師器	皿 Ⅰ b 類	14.0			白・石・雲・チャ	浅黄橙 10YR 8/3	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ 底部未調整	6/36	
54	23J10	Ⅲ	中世土師器	皿 Ⅰ b 類	12.5			白・雲・粘	橙 7.5YR 7/6	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ 底部未調整	2/36	
55	24K12	Ⅰ	中世土師器	皿 Ⅰ c 類	12.4	6.4	2.7	白・石・針・チャ	にぶい黄橙 10YR 7/4	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ、沈線文１条 底部未調整	3/36	
56	24K2		中世土師器	皿 Ⅰ c 類	13.2			白・雲・角	灰白 2.5Y 8/2	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ、沈線文１条 底部未調整	5/36	
57	24K8	Ⅲ	中世土師器	皿 Ⅰ b 類	14.2			白	浅黄橙 10YR 8/3	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ、沈線文１条 底部未調整	2/36	
58	24K21	Ⅲ	中世土師器	皿 Ⅰ d 類	11.0			白・石・雲	灰黄褐 10YR 6/2	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ 底部未調整	3/36	
59	23K16	Ⅰ	中世土師器	皿 Ⅰ d 類	12.4			白・石・チャ・砂	にぶい黄橙 10YR 7/4	手づくね成形　内・外面ナデ、底部オサエ 底部未調整	4/36	
60	24K2		中世土師器	皿 Ⅲ類	12.4			白・石・雲	浅黄 2.5Y 7/3	手づくね成形　内・外面ナデ、体部オサエ	4/36	
61	24J8	Ⅲ	中世土師器	小皿 Ⅱ b 類	8.0			白・石	浅黄橙 10YR 8/3	手づくね成形　内・外面ナデ、体・底部オサエ 底部未調整	7/36	内面タール状付着物
62	25J8	Ⅰ	中世土師器	小皿 Ⅱ a 類	10.2	4.2	1.5	白・石	浅黄 2.5Y 7/3	手づくね成形　内・外面ナデ、体・底部オサエ 底部未調整	11/36	内・外面タール状付着物
63	24J19	Ⅰ	中世土師器	小皿 Ⅱ a 類	10.7	5.4	1.4	白	淡黄 2.5Y 8/3	手づくね成形　内・外面ナデ、体・底部オサエ 底部未調整	3/36	内・外面タール状付着物
64	23J25	Ⅲ	中世土師器	皿 Ⅱ a 類	17.0			白・石	淡黄 2.5Y 8/3	手づくね成形　内・外面ナデ、体部オサエ	4/36	
65	23K17	Ⅰ	中世土師器	皿 Ⅱ c 類	12.2			白・石	淡黄 2.5Y 8/3	手づくね成形　内・外面ナデ、体部オサエ	6/36	
66	23K16	Ⅲ	中世土師器	皿 Ⅱ b 類	14.3	7.0	2.5	白・石・雲	にぶい黄橙 10YR 7/3	手づくね成形　内・外面ナデ、体・底部オサエ 底部未調整	3/36	
67	14Tr		青磁（龍泉窯系）	椀 B 類	15.4			白	灰黄 2.5Y 7/2	蓮弁文 釉薬（オリーブ灰 5Y 5/3）	2/36	
68	23K22	Ⅰ	青磁（龍泉窯系）	椀 B 類				白	にぶい黄橙 10YR 7/3	蓮弁文 釉薬（オリーブ灰 7.5Y 5/2）		酸化焔焼成
69	23K16	Ⅲ	青磁（龍泉窯系）	椀 B 類				白	にぶい黄橙 10YR 7/4	蓮弁文 釉薬（にぶい黄橙 10YR 6/4）		酸化焔焼成
70	25J14	Ⅱ	青磁（龍泉窯系）	椀 D 類	15.4			白	灰白 N 7/0	無文、端反 釉薬（オリーブ灰 7.5Y 5/2）	2/36	

香積寺沢遺跡　土器類観察表 3

報告書№	遺構名・出土地点	層位	種別	器種（分類）	法量（cm）			胎土		調整等の所見	口縁部遺存率	備考
					口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	含有物	色調			
71	23J24 エ 他		染付	椀 C 群 V 類	124.0				灰白 5Y 8/2	釉薬（明緑灰 5G 7/1）	4/36	
72	23K21	I	瀬戸・美濃	天目茶碗	11.5	4.0	6.3	白・石	淡黄 2.5Y 8/3	底部露胎 釉薬（鉄釉 褐 7.5YR 4/3）	6/36	大窯 4 期
73	24J19	I	越前焼	壺				白・石・雲・チャ・砂	黄灰 2.5Y 6/1	釉薬（褐 7.5YR 4/3）		黒色付着物
74	25J15	II	瓦質土器	花瓶ヵ				白・石・雲・チャ	灰 5Y 4/1	蓮弁状の文様		
75	24K16	I	須恵器	無台杯		7.1		白・石	灰白 10Y 7/1	ロクロ成形　内・外面ロクロナデ 底部回転ヘラ切り		還元焔焼成 内面に付着物
76	23J17	III	縄文土器	深鉢				白・石・チャ・砂	にぶい黄橙 10YR 6/4	貝殻腹縁文、沈線文		早期中葉
77	24K7	I	縄文土器	深鉢				白・石・繊維	にぶい黄橙 10YR 6/4	無文、胎土に繊維		前期前葉
78	24K23	III	縄文土器	深鉢				白・石・チャ・角・砂	にぶい黄褐 10YR 4/3	口唇部の肥厚、貼付文、細隆起線文（幅 4mm 前後）		前期末葉
79	24J2	IV	縄文土器	深鉢				白・チャ・砂	にぶい黄橙 10YR 6/4	口唇部の肥厚、細隆起線文（幅 4mm 前後）		前期末葉
80	23K12	III	縄文土器	深鉢				白・雲・チャ・砂	にぶい黄橙 10YR 6/4	細隆起線文（幅 4mm 前後）による斜格子目文、斜格子目文の左傾の沈線は竹管状工具、口唇部刻目文（竹管状工具）		前期末葉
81	23K11	III	縄文土器	深鉢				白・石・チャ・砂	にぶい黄橙 10YR 6/4	横位区画隆帯（刻目が施文される）結節縄文、縄文 RL		中期
82	SX4・25J3 エ	6	縄文土器	深鉢				白・石・雲・砂	黒褐 10YR 3/2	磨消縄文、縄文施文後沈線文、縄文 LR		後期前葉
83	22J19	I	縄文土器	深鉢				白・雲・チャ・砂	浅黄 2.5Y 7/3	磨消縄文、縄文施文後沈線文、羽状縄文、縄文 LR と RL		後期後葉
84	22J19	I	縄文土器	深鉢				白・石・雲・チャ・砂	浅黄 2.5Y 7/3	磨消縄文、縄文施文後沈線文、羽状縄文、縄文 RL と LR		後期後葉
85	SX1・23J13 ア		縄文土器	深鉢				白・石・雲・チャ・砂	灰黄褐 10YR 6/2	磨消縄文、縄文施文後沈線文、羽状縄文（縄文 RL と LR）		後期後葉
86	SX3・23K22 エ	2	縄文土器	深鉢				白・石・チャ・砂	にぶい黄橙 10YR 7/4	太い沈線文		後期後葉
87	23J12	III	縄文土器	深鉢				白・雲・チャ・角・砂	にぶい黄橙 10YR 7/3	磨消縄文、縄文施文後沈線文、縄文 RL		後期後葉
88	25J15 №24	VII	弥生土器	壺				白・雲・角・砂	浅黄 2.5Y 7/4	磨消縄文、縄文施文後沈線文、縄文 LR		中期前葉 実測№89 と同一個体
89	25J15 №24	VII	弥生土器	壺				白・雲・角・砂	にぶい黄橙 10YR 7/3	磨消縄文（斜行する帯縄文）、縄文施文後沈線文、縄文 LR、文様下端を横位の沈線で区画		中期前葉 実測№88 と同一個体
90	25K11 №10 他	III	縄文土器	深鉢				白・雲・チャ・砂	にぶい褐 7.5YR 5/4	肥厚する口縁部に鋸歯状の沈線文、頸部と胴部の区画に横位短沈線文の刺突文		晩期後葉
91	25K11 №17	III	縄文土器	深鉢								晩期後葉 報告№94 と同一個体
92	23J20	III	縄文土器	深鉢				白・石・雲・チャ・砂	にぶい黄橙 10YR 6/3	櫛歯状工具による条痕文		晩期
93	23K16	III	縄文土器	深鉢				白・雲・チャ・黒・砂	浅黄橙 10YR 8/3	撚糸文 L		晩期後葉
94	25K11 №1 他	III	縄文土器	深鉢	26.2			白・石・雲・チャ・砂	にぶい褐 7.5YR 5/4	肥厚する口縁部に縄文 L を施文、胴部は横位結節縄文（縄文 RL）	6/36	晩期後葉 報告№91 と同一個体
95	25K7 №18	III	縄文土器	深鉢				白・石・チャ・礫・砂	灰黄 2.5Y 7/2	無文、輪積痕を顕著に残す		晩期
96	25K11 №16	III	縄文土器	深鉢		9.7		白・雲・チャ・砂	にぶい褐 7.5YR 5/4	無文、底部網代圧痕		
97	25J14 №10	VII	弥生土器	深鉢		8.0		白・石・雲・チャ・砂	浅黄 2.5Y 7/3	無文、ミガキ		
98	SK25・24K13 ア	1	縄文土器	注口				白・雲・角	灰黄褐 10YR 6/2	無文、ミガキ		後期後葉
99	22K21	III	縄文土器	注口				白・雲	灰白 10YR 8/2	無文、ミガキ		晩期

香積寺沢遺跡　石器・石製品観察表

報告書No.	遺構名・出土地点	層位	器種	石材	法量（mm・g）				備考
					長さ	幅	厚さ	重量	
100	SX1・23J18 ア	1	不定形石器	輝石安山岩	54.0	36.0	13.0	17.7	
101	SX1・23J14 ア	1	石核	珪質頁岩	19.0	25.5	18.0	9.7	
102	SX1・23J18 ア	1	磨石	輝石安山岩	84.0	28.0	52.5	160.0	
103	SX1・23J18 イ	1	磨石	輝石安山岩	103.0	93.0	43.0	640.0	
104	SX3・23K22 ウ	1	ピエス・エスキーユ	頁岩	33.0	11.0	8.0	3.1	
105	SX3・24J8 ウ	1	磨石	輝石安山岩	90.0	96.5	33.0	400.0	
106	SX3・24J14 ウ	2	磨石	輝石安山岩	140.0	88.0	48.0	872.7	被熱
107	SX3・24K2 イ	2	砥石	ヒン岩	106.5	76.5	40.0	531.2	
108	SX4・25J5 イ	4	石核	頁岩	37.0	55.0	41.0	64.9	打面転移
109	SX4・25K12	2	石硯	粘板岩	137.5	61.5	23.0	280.0	
110	24K8	Ⅲ	敲石	蛇紋岩	103.0	56.0	28.0	260.1	磨製石斧の再利用
111	23J13	Ⅲ	磨製石斧	蛇紋岩	37.0	36.0	17.0	15.1	
112	23J6	Ⅰ	石鏃	頁岩	22.5	18.0	5.0	1.3	
113	25J10	Ⅱ	石鏃	黒色頁岩	26.5	12.5	4.0	1.2	有茎鏃、有茎部欠損
114	25K3	Ⅲ	石鏃	珪質頁岩	38.0	19.0	6.0	5.1	摘み
115	23K11	Ⅰ	石匙	珪質頁岩	50.5	25.0	6.0	6.6	摘みは表裏から加工、裏面使用痕あり
116	23J25	Ⅲ	不定形石器	黒色頁岩	67.0	39.5	14.0	26.1	
117	23K11	Ⅲ	磨石	輝石安山岩	47.0	45.0	29.0	70.0	被熱
118	25K6	Ⅲ	磨石	輝石安山岩	75.0	73.0	65.5	504.3	
119	23K17	Ⅱ	磨石	輝石安山岩	109.0	95.0	43.0	700.0	
120	24J18	Ⅰ	磨石	輝石安山岩	85.0	52.0	48.0	200.0	
121	23J20		スタンプ形石器（敲磨石）	閃緑岩	117.5	67.0	51.5	647.7	
122	23J5	Ⅲ	石硯	粘板岩	89.0	43.0	14.0	74.3	
123	24K21	Ⅰ	砥石	凝灰岩	50.0	30.0	9.0	18.1	

香積寺沢遺跡　木製品観察表 1

報告書No.	遺構名・出土地点	層位	種別	器種	木取り	法量（mm）			製作痕跡等の所見	備考
						長さ	幅(底径)	厚さ		
124	SX2・23J17 ウ	下部	容器	曲物（底板）	柾目	261.0	72.5	7.5		表面に線状痕。ヒノキ
125	SX2・23J22 イ	1	食事具	箸	削り出し	170.0	6.0	3.5	削り出しによって断面多角形に整形	
126	SX2・23J22 イ	1	食事具	箸	削り出し	201.0	5.0	3.0	削り出しによって断面多角形に整形	
127	SX3・24K2 ウ	2	雑具	部材	柾目	125.0	16.0	11.0	削り出しによって整形	上面に径約 2mm の木釘。スギ
128	SX3・24K8 ア	2	雑具	板材		159.0	37.0	6.5		下部に炭化・穿孔
129	SX3・24K2 ア	2	容器	曲物（底板）	柾目	173.5	66.0	7.0		全体に炭化。スギ
130	SX4・24J19 エ	1	容器	折敷	柾目	104.5	52.0	1.0		2 か所に孔 約 3.1 寸。スギ
131	SX4・24J20 ウ	1	容器	板材	柾目	136.0	40.0	8.0		裏面に炭化痕あり・穿孔。スギ
132	SX4・25K2 ア	4	不明	棒状	柾目	89.0	12.0	10.5	削り出しによって断面略円形に整形	
133	SX4・25K6 イ	3	食事具	箸	削り出し	136.0	7.0	5.0	削り出しによって断面多角形に整形	
134	SX4・25K2 ア	4	雑具	棒状	削り出し	108.0	8.0	6.0	削り出しによって断面多角形に整形、先端は尖る	スギ
135	23K21		容器（漆器）	皿	横木取り		73.5			底面黒の漆地に赤漆による「上」ヵ字が書かれる。 内面赤地に黒漆によるハライがある。 高台部が剝落する。ブナ属
136	25J14	Ⅲ	容器（漆器）	椀	横木取り					内・外面黒漆塗布。ブナ属
137	25K8		容器（漆器）	椀	横木取り					内・外面赤漆塗布。ブナ属
138	25J14	Ⅲ	容器	曲物（底板）	板目	146.0	41.0	6.0		スギ

香積寺沢遺跡　木製品観察表２

報告書No.	遺構名・出土地点	層位	種別	器種	木取り	法量（mm）			製作痕跡等の所見	備考
						長さ	幅(底径)	厚さ		
139	23J24	Ⅰ	雑具	板材	板目	148.0	21.0	7.5		穿孔
140	25K1	Ⅱ	雑具	板材	板目	136.0	22.5	10.0		穿孔
141	24K1	Ⅰ	不明	棒状	板目	217.0	15.0	9.0		上部炭化。アスナロ
142	24K7	Ⅰ	食事具	箸	削り出し	184.0	7.0	6.0	ケズリ出しによって断面多角形に整形	
143	24K16	Ⅲ	食事具	箸	削り出し	165.5	8.0	6.0	ケズリ出しによって断面多角形に整形	ヒノキ科
144	24K23	Ⅲ	食事具	箸	削り出し	60.0	7.0	5.0	ケズリ出しによって断面多角形に整形	
145	25K11	Ⅲ		火付け木	木片	79.0	9.0	6.0		両端に炭化。スギ
146	24K12	Ⅲ		杭状	板目	294.0	133.0	25.0		マツ属
147	24K17			杭	芯持ち	313.5	45.0	28.0	5 面の削り出し	杭 43
148	23J14			杭	芯持ち	274.5	45.0	44.0	6 面の削り出し	杭 18。クリ
149	23J15		建築材	柱根	芯持ち	363.0	128.0	108.0		P173。ヌルデ

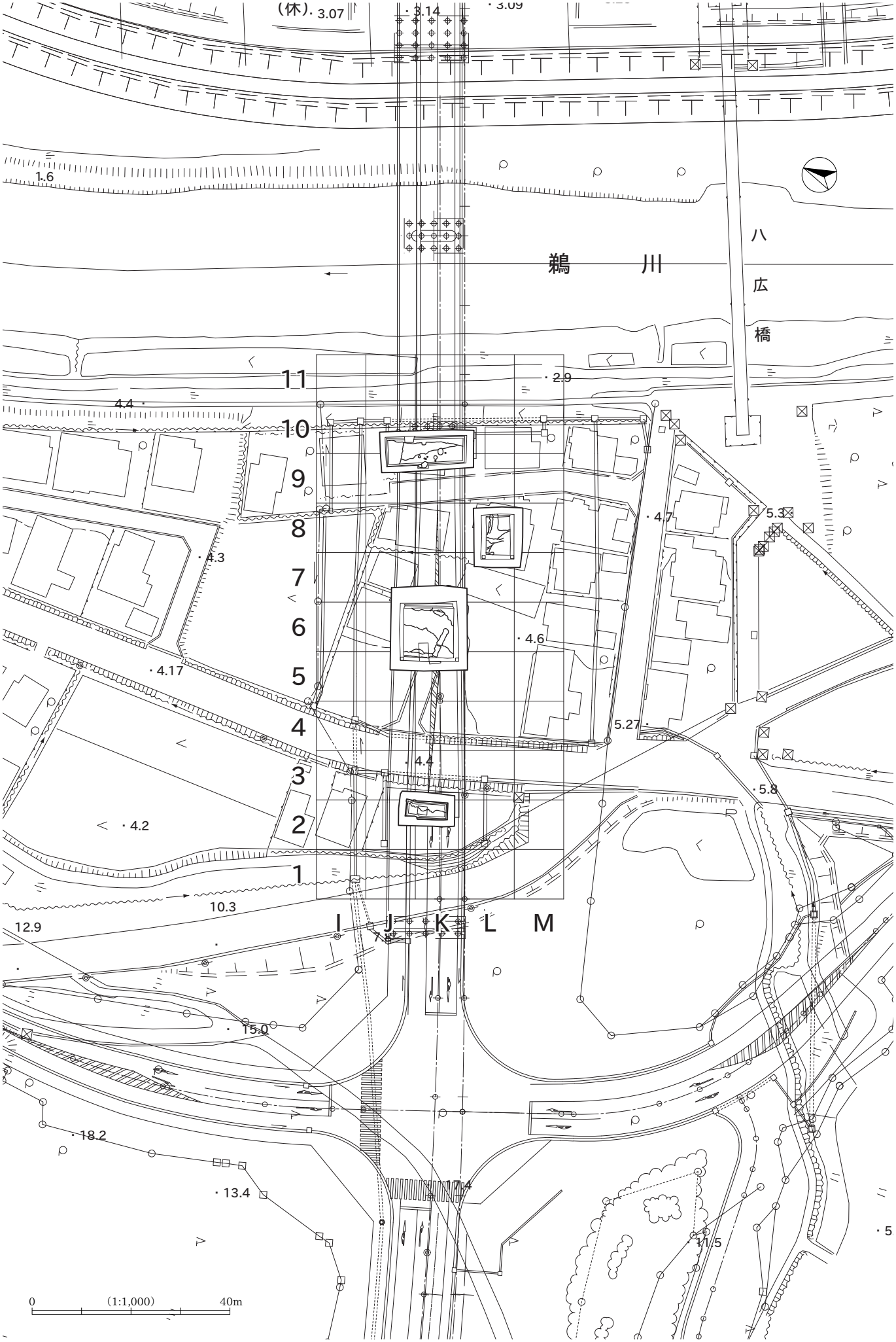
香積寺沢遺跡　銭貨観察表

報告書No.	遺構名・出土地点	層位	銭貨名	法量（mm・g）				初鋳年	備考
				外径	内径	銭厚	重量		
150	SX1・23J9 ア	1	寛永通寶	23.0	7.0	1.0	1.6	1736	四ツ宝銭
151	24J5		天聖元寶	23.0	7.5	1.0	1.8	北宋 1023	真書
152			元豊通寶	23.0	6.5	1.4	2.0	北宋 1078	行書
153	24K1	Ⅲ	元豊通寶	23.0	7.0	1.4	2.9	北宋 1078	篆書
154	23K21	Ⅰ	洪武通寶	21.0	5.5	1.4	1.9	明 1368	背右摩耗のため不明
155	23J5	表土	寛永通寶	23.0	7.0	1.0	2.4	1714	佐渡銭
156	24K1	Ⅰ	寛永通寶	23.0	6.5	0.9	1.7	1714	元文期十万坪銭
157	24K6	Ⅰ	寛永通寶	21.5	7.0	0.9	2.1	1736	四ツ宝銭
158	23K22	Ⅰ	寛永通寶	23.0	6.0	1.0	2.4	1741	高津背元銭

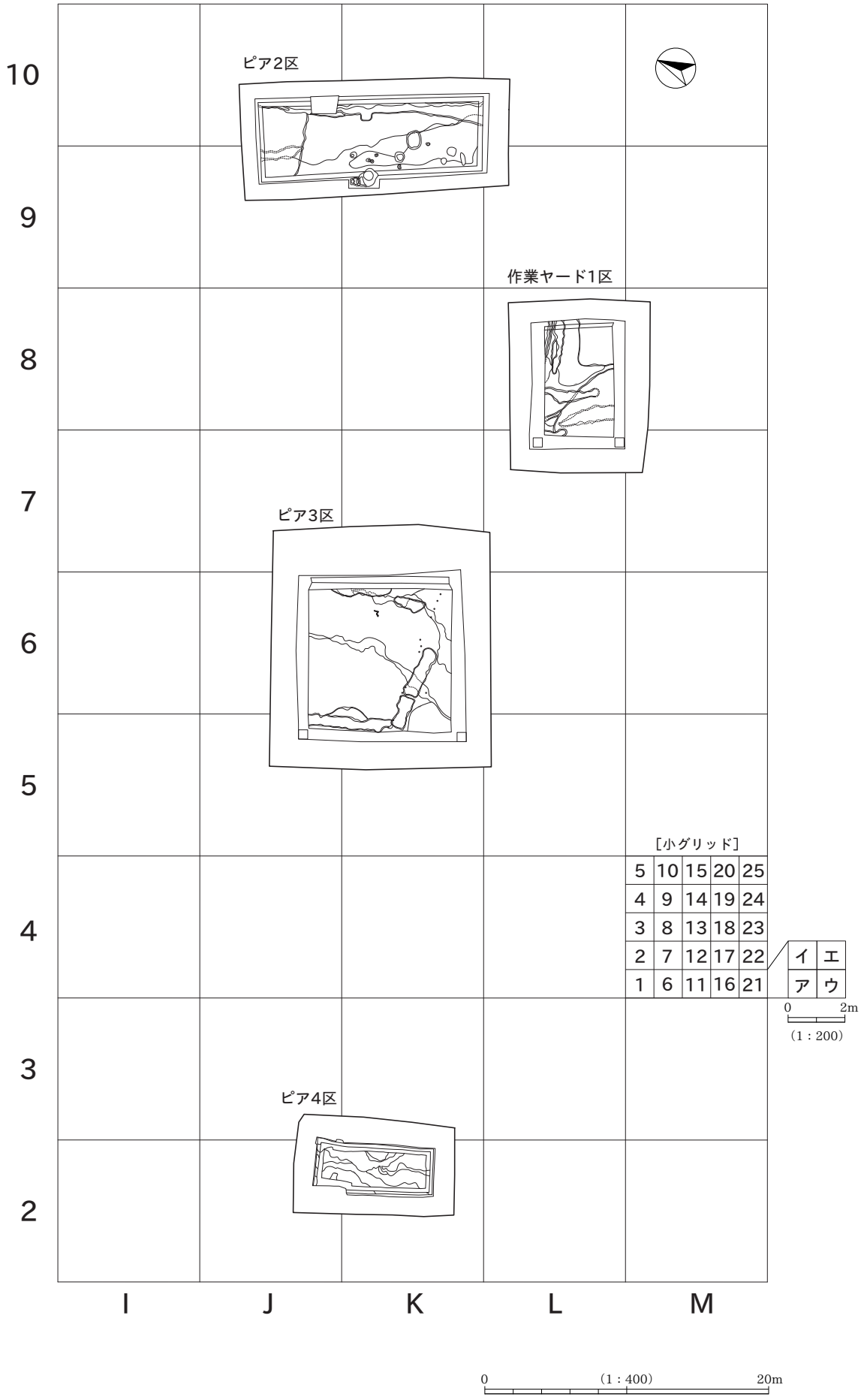
香積寺沢遺跡　金属製品観察表

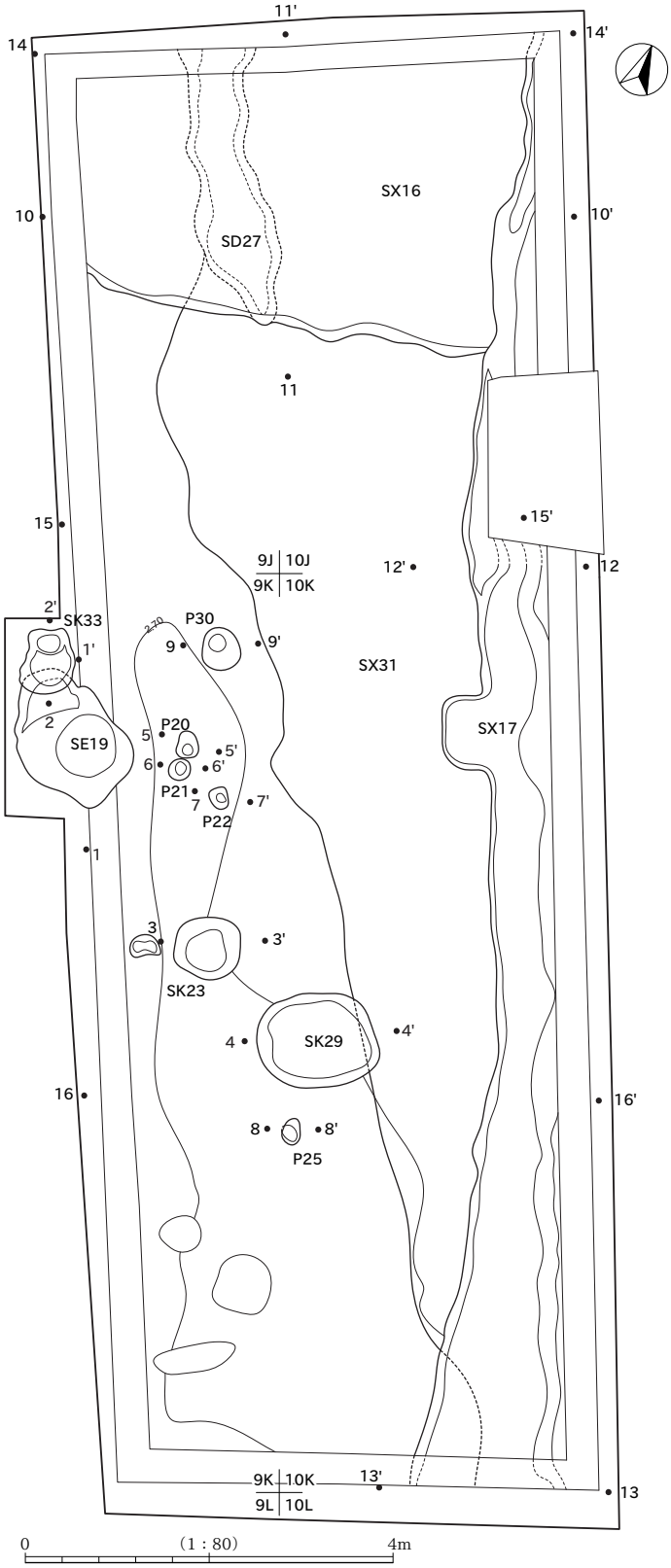
報告書No.	遺構名・出土地点	層位	種類	法量（mm・g）				磁着反応	備考
				長さ	幅	厚さ	重量		
159	24K21	Ⅰ	刀子	174.0	16.0	7.0	32.6		
160	24K2	Ⅰ	釘	56.0	11.0	4.0	5.5		
161	25J5	Ⅲ	火箸		10.0	10.0	14.1		
162	SX4・25K1 エ	2	炉壁	62.5	72.0	26.0	61.6	無	
163	25K3	Ⅲ	椀形鍛冶滓	76.0	61.5	55.5	295.6	無	中型もしくは大型、底面に炉床土

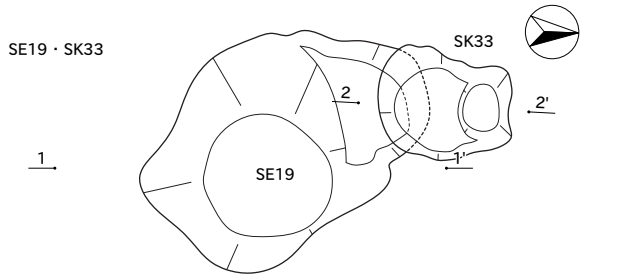
図　　版

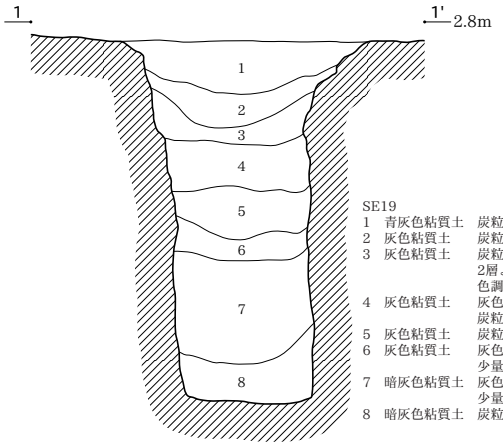

鵜　川
八
広
橋
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
I J K L M
0 (1:1,000) 40m

千古作遺跡　遺構全体図

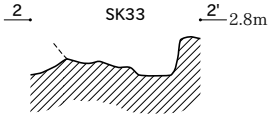

10
9
8
7
6
5
4
3
2
I
J
K
L
M
ピア2区
作業ヤード1区
ピア3区
ピア4区
［小グリッド］
5 10 15 20 25
4 9 14 19 24
3 8 13 18 23
2 7 12 17 22
1 6 11 16 21
イ エ
ア ウ
0 2m
（1：200）
0 （1：400） 20m

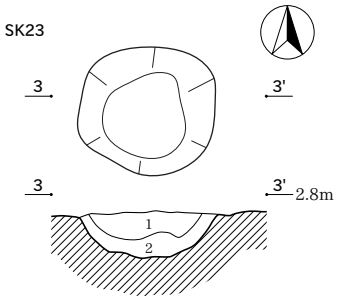




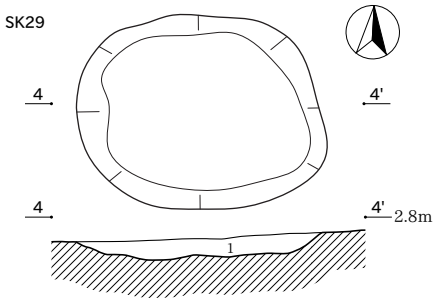


SE19
1　青灰色粘質土　炭粒を少量含む
2　灰色粘質土　炭粒を微量含む
3　灰色粘質土　炭粒を微量含む 2層よりも相対的に色調明るい
4　灰色粘質土　灰色粘質地山土、炭粒を微量含む
5　灰色粘質土　炭粒を微量含む
6　灰色粘質土　灰色粘質地山土を少量含む
7　暗灰色粘質土　灰色粘質地山土を少量含む
8　暗灰色粘質土　炭粒を少量含む

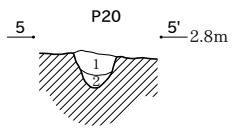




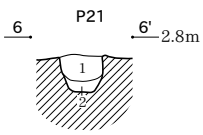
SK23
1　暗青灰色粘質土　青灰色粘質土を微量に含む
2　黄灰色粘質土　青灰色粘質土、炭粒を少量含む



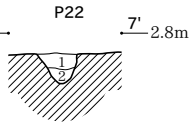
SK29
1　灰色粘質土　青灰色粘質土と炭粒を少量含む

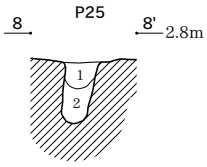


P20
1　暗青灰色粘質土
2　暗青灰色粘質土　青灰色粘質土を少量含む



P21
1　暗青灰色粘質土
2　暗青灰色粘質土　青灰色粘質土を少量含む

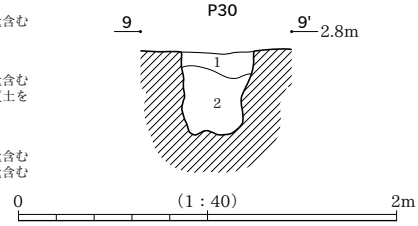


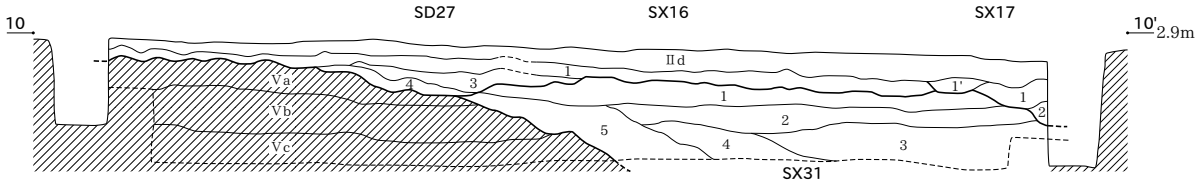


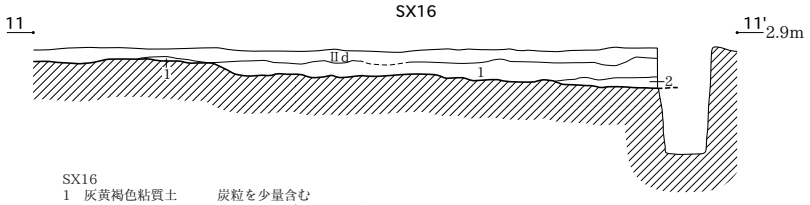
P22
1　暗青灰色粘質土
2　暗青灰色粘質土　青灰色粘質土を少量含む

P25
1　暗青灰色粘質土　青灰色粘質土を微量含む
2　緑灰色粘質土　青灰色～緑灰色粘質土を少量含む

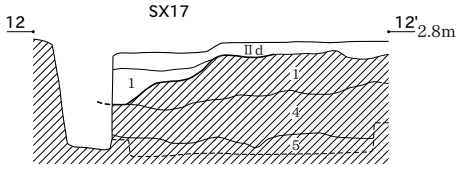
P30
1　暗青灰色粘質土　青灰色粘質土を微量含む
2　暗青灰色粘質土　青灰色粘質土を少量含む

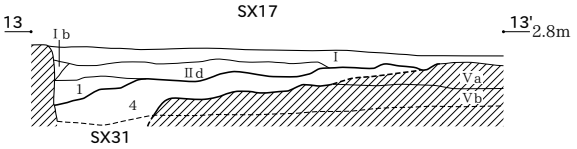




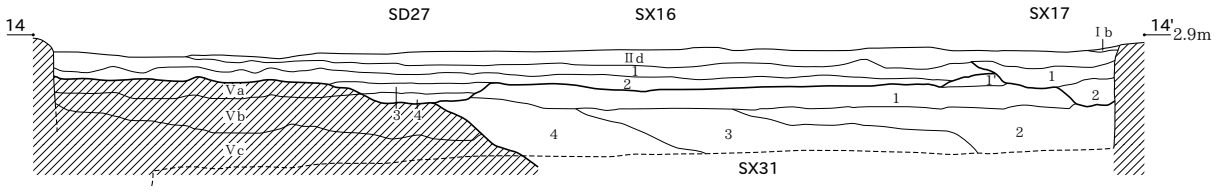


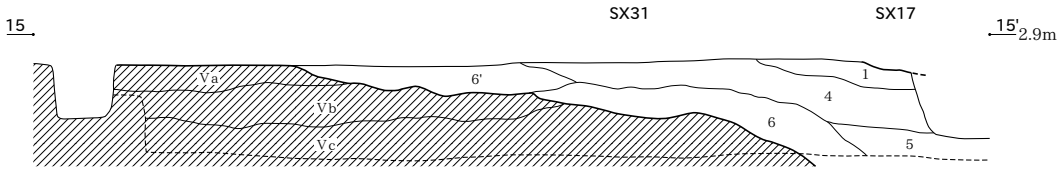
SX16
1　灰黄褐色粘質土　　炭粒を少量含む
2　灰色粘質土　　炭粒を含むが1層よりも格段に少ない
3　緑灰粘質土　　1・2層より粘性がやや強い　SD27の覆土
4　オリーブ灰色粘質土　SD27の覆土
※　SX17の覆土は12－12'、SX31の覆土は16－16'参照

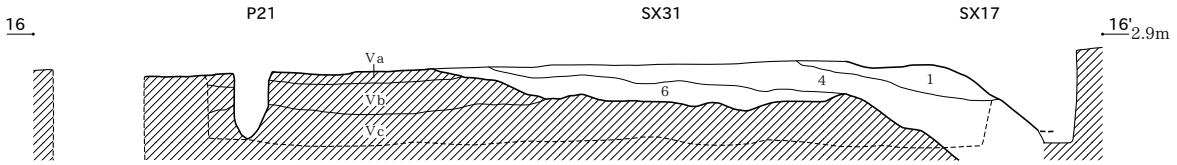




SX17
1　暗青灰色粘質土　しまりやや弱　炭粒を少量に含む
1'暗青灰色粘質土　青灰色粘質土（Ⅱd層対応）を少量、炭粒を微量に含む
　　1層より若干色調が明るい
2　青灰色粘質土　　非常に微量ながら炭粒を含む

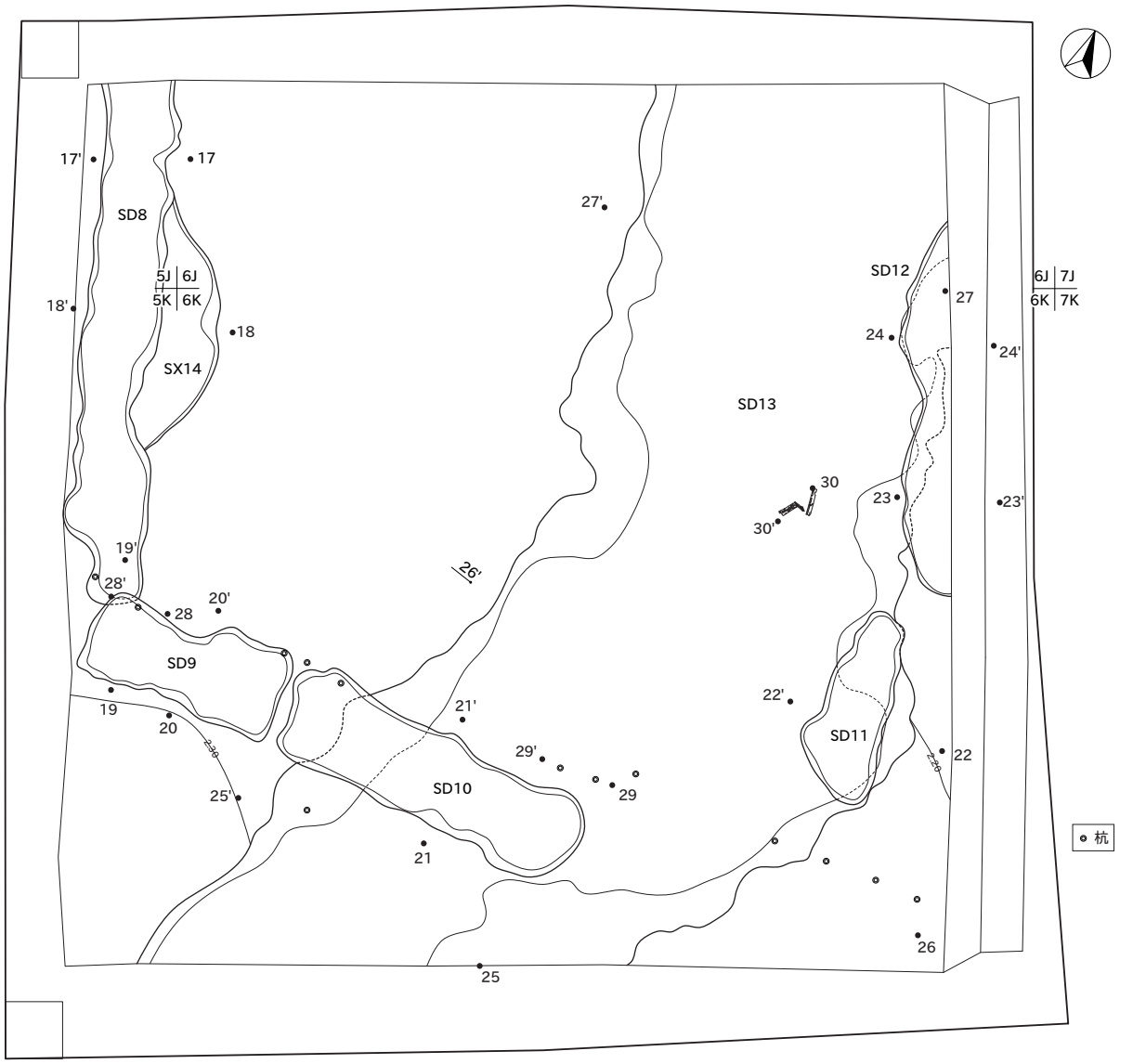




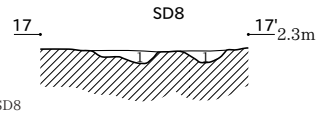


SX31
1　暗青灰色粘質土　炭粒を少量含む
2　灰色粘質土　　炭粒を少量含む　1層よりも相対的に粘性強い
3　黄灰色粘質土　　炭粒を含むが、1・2層よりも格段に少ない
4　黄灰色粘質土　　炭粒を微量に含む　3層よりも相対的に粘性強い
5　緑灰色粘質土　　6層よりも相対的に粘性が強い
6　緑灰色粘質土　　黒色粒が微量に含まれる
6'　黄橙色粘質土　　6層が酸化し、部分的に赤褐色を呈する
※　SX17の覆土は12－12'、SX16、SD27の覆土は11－11'参照

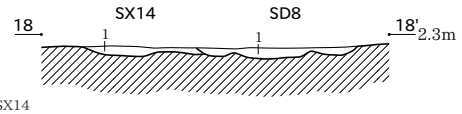
0　（1：40）　2m



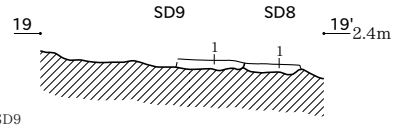
0　（1：80）　4m



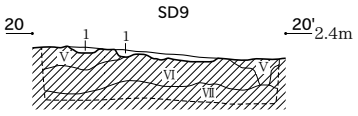
SD8
1　黒褐色粘質土　灰黄色粘質土（Va層対応）が少量含まれる

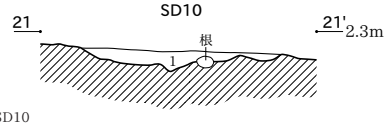


SX14
1　黒褐色粘質土　灰黄色粘質土（Va層対応）が含まれるが、SD8よりも少ない。

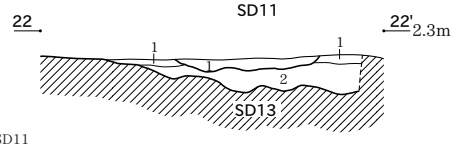


SD9
1　黒褐色粘質土　灰黄色粘質土（Va層対応）が少量含まれる

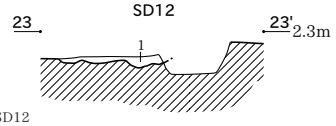




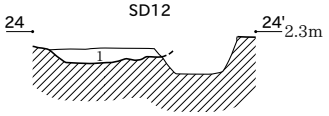
SD10
1　黒褐色粘質土　灰黄色粘質土（Va層対応）が少量含まれる



SD11
1　黒褐色粘質土　灰黄色粘質土（Va層対応）が少量含まれる

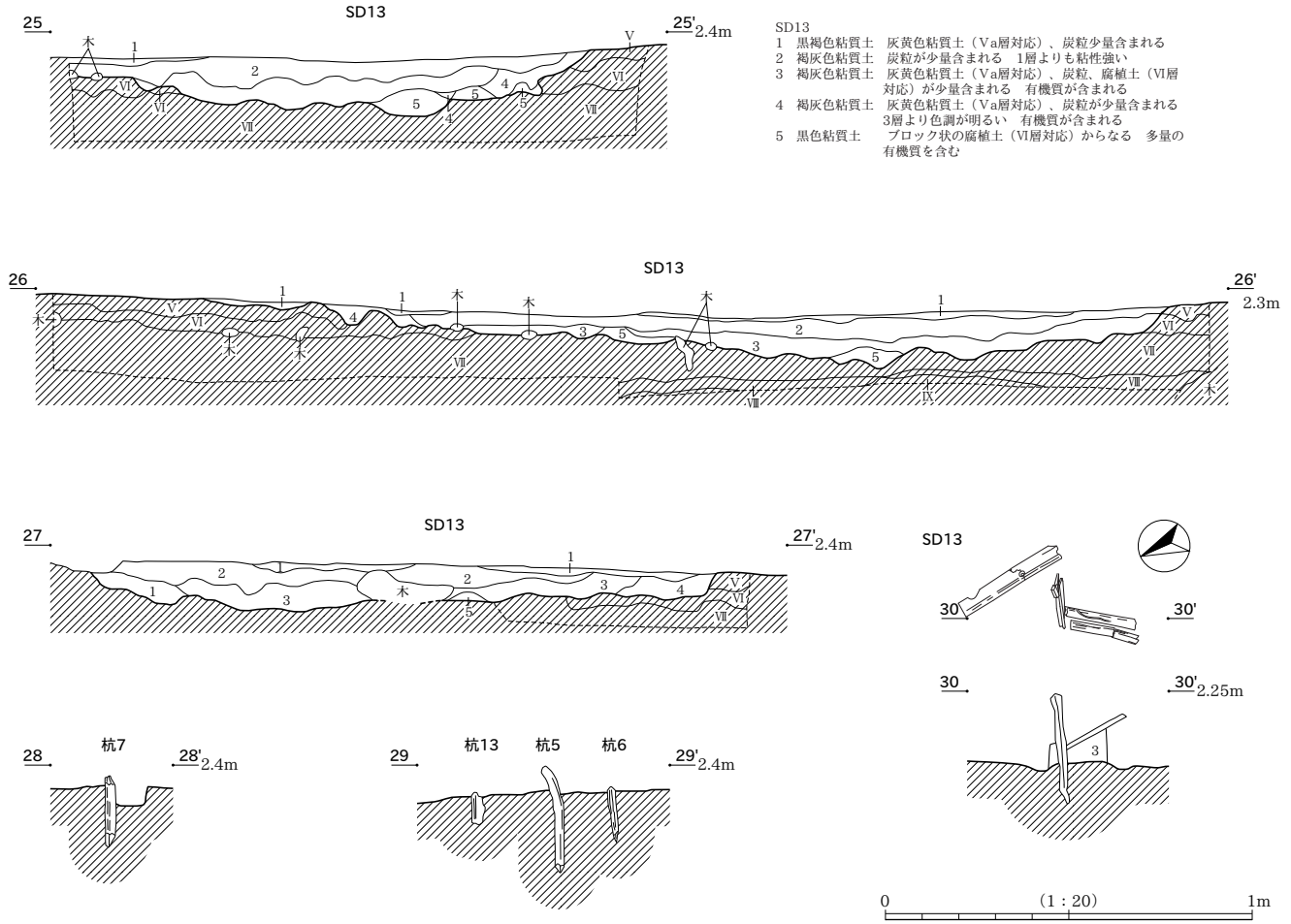


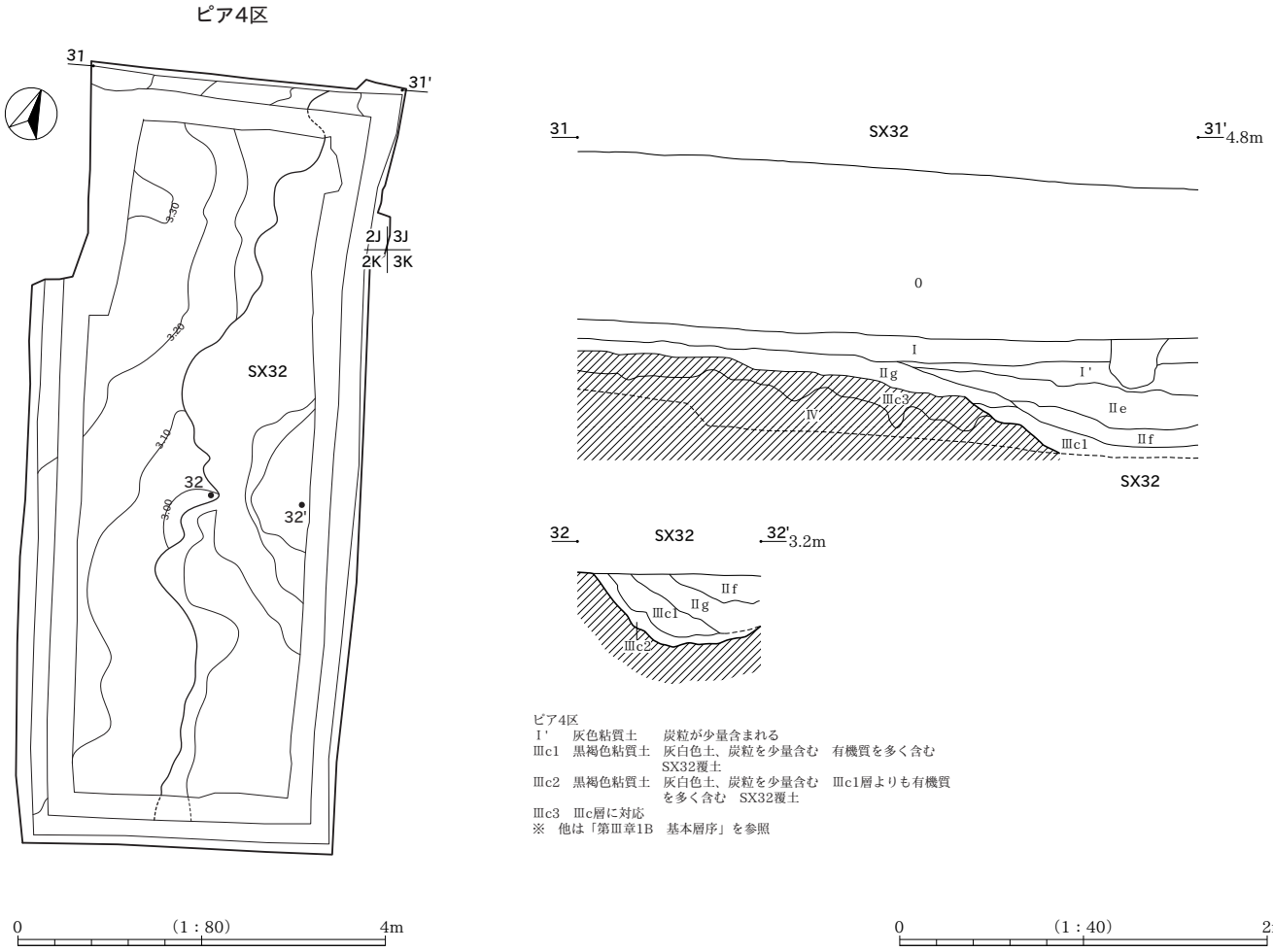
SD12
1　灰色粘質土　灰黄色粘質土（Va層対応）が少量含まれる

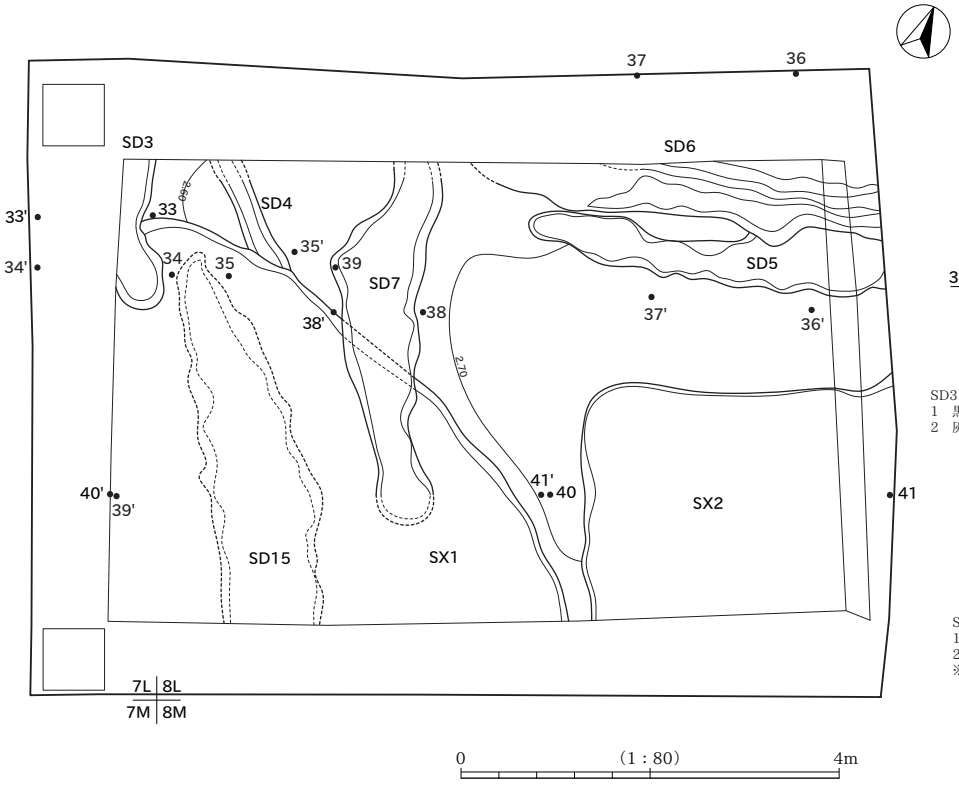


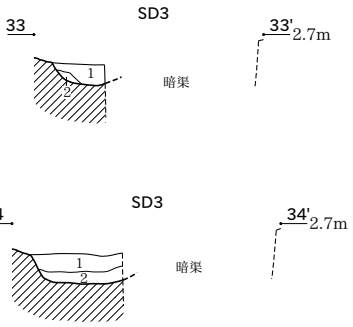
0　（1：40）　2m

千古作遺跡　ピア３区遺構個別図（２）溝・杭・木製品出土状況、ピア４区遺構全体図

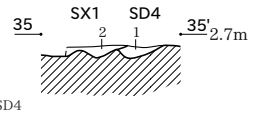




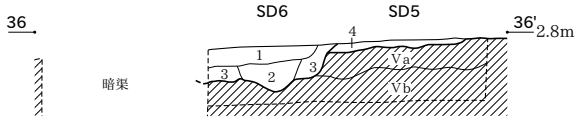


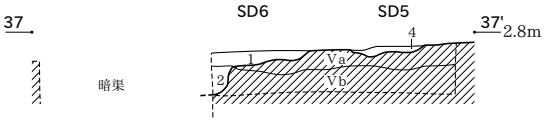


SD3
1　黒褐色粘質土　灰黄色土（Va層対応）、炭粒を少量含む
2　灰黄色粘質土　黒褐色土（1層対応）が少量含まれる

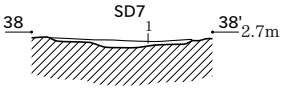


SD4
1　黒褐色粘質土　灰黄色土（Va層対応）、炭粒を少量含む
2　SX1の1層に対応
※　SX1の覆土は40－40'参照

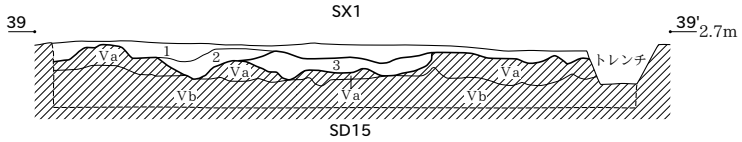


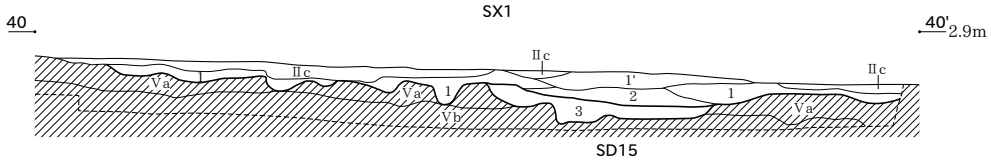


SD5・6
1　黄灰色粘質土　灰黄色土（Va層対応）、炭粒を微量に含む
2　灰色粘質土　　灰黄色土（Va層対応）、炭粒含むが、1層よりも多い
3　灰色粘質土　　2層よりも灰黄色土（Va層対応）が多く含まれる
4　灰色粘質土　　灰黄色土（Va層対応）を少量含む
※　1～3層がSD5、4層がSD6に対応する

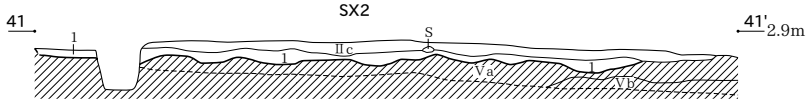


SD7
1　灰黄褐色粘質土　灰黄色土（Va層対応）、炭粒を微量に含む



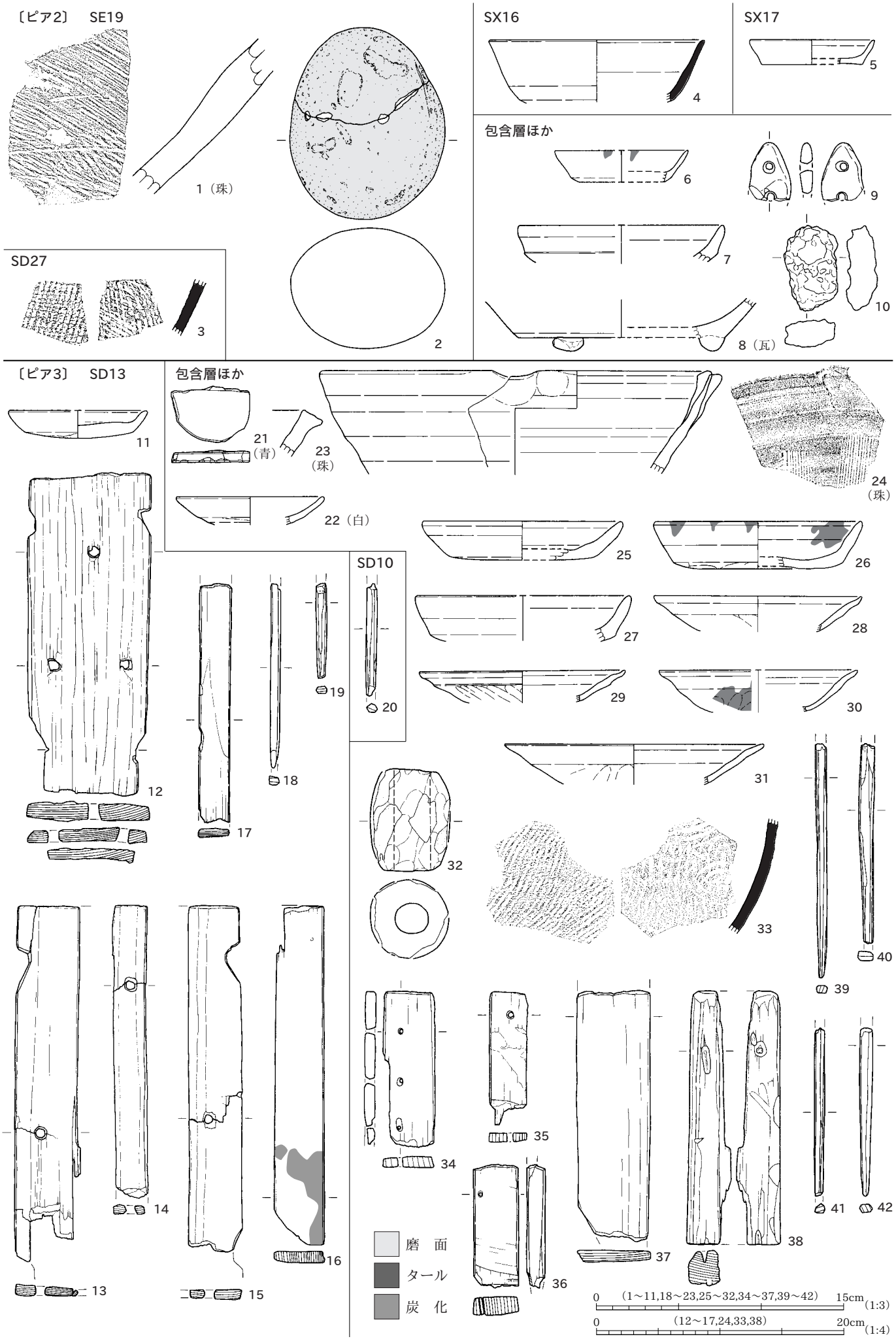


SX1・SD15
1　灰色粘質土　　灰黄色土（Va層対応）、炭粒を少量含む
2　黒褐色粘質土　1層よりも灰黄色土（Va層対応）を多く含む
3　灰色粘質土　　灰黄色土（Va層対応）を多量に含む
※　1・2層がSX1、3層がSD15に対応する

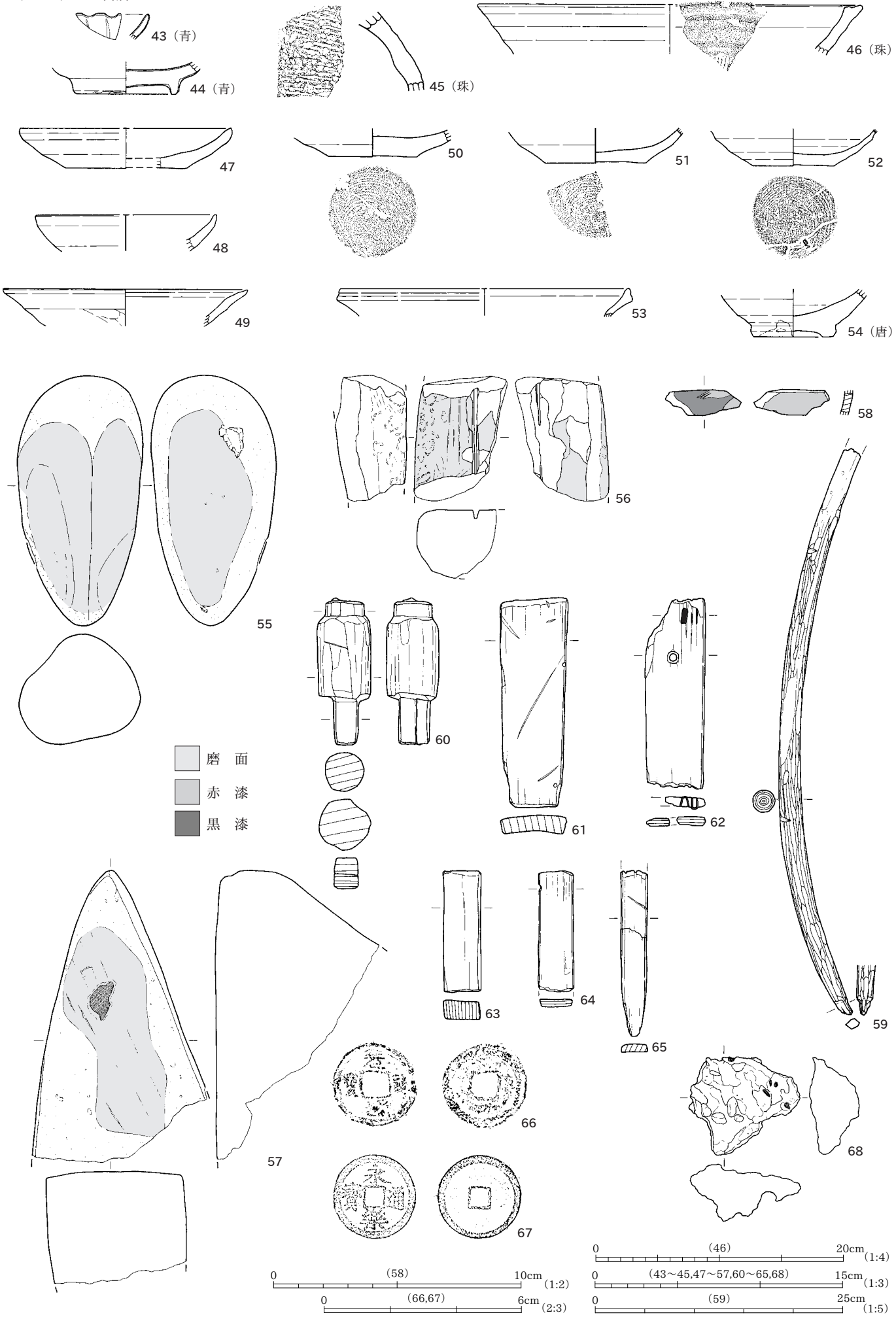


SX2
1　灰色粘質土　灰黄色土（Va層対応）、炭粒を少量含む

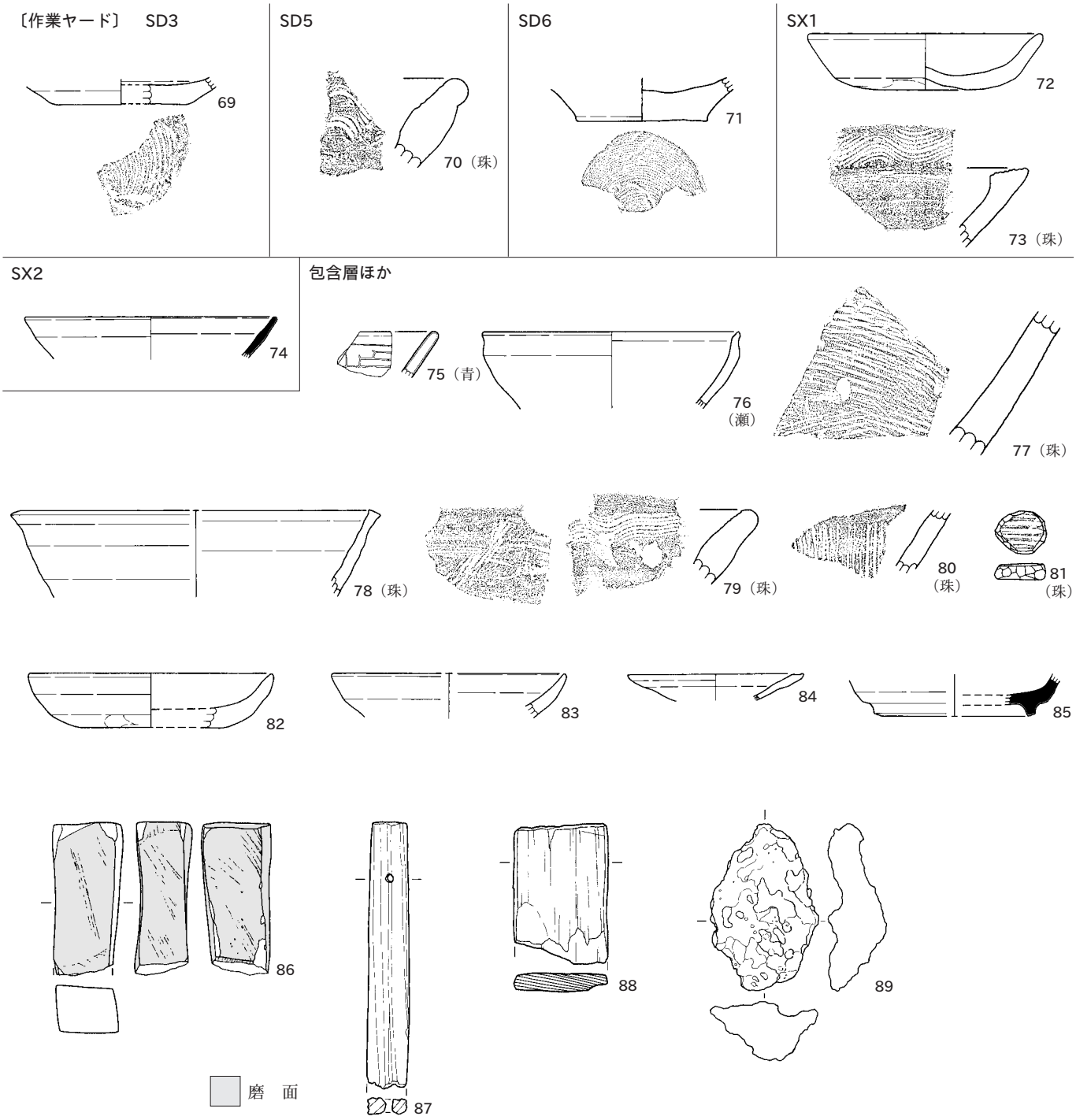
0　(1：40)　2m


〔ピア2〕　SE19
1（珠）
2
SX16
4
SX17
5
包含層ほか
6
7
8（瓦）
9
10
SD27
3
〔ピア3〕　SD13
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
SD10
包含層ほか
21（青）
22（白）
23（珠）
24（珠）
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
磨　面
タール
炭　化
0　（1～11,18～23,25～32,34～37,39～42）　15cm（1:3）
0　（12～17,24,33,38）　20cm（1:4）

〔ピア4〕　包含層ほか

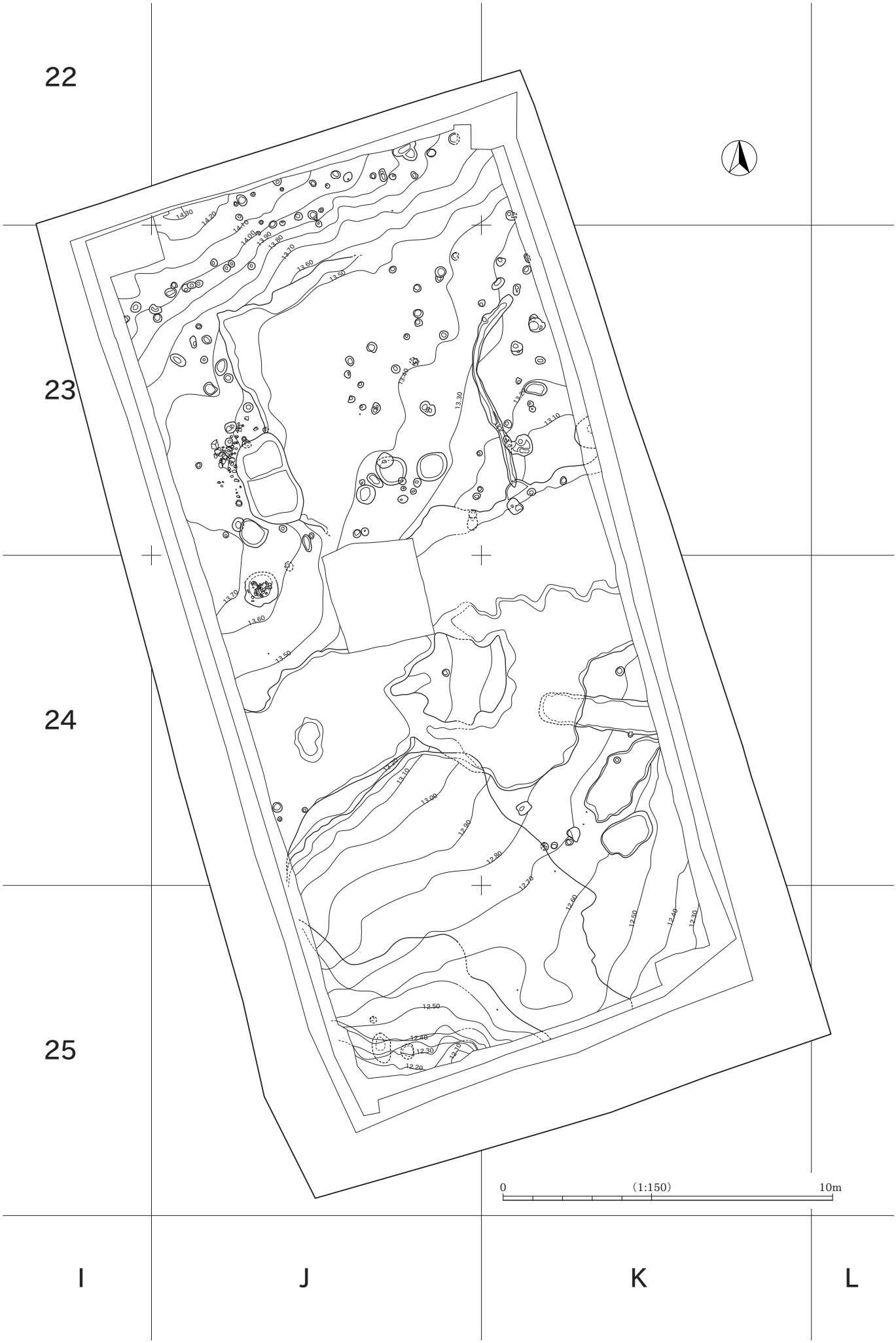

43（青）
44（青）
45（珠）
46（珠）
47
48
49
50
51
52
53
54（唐）
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
磨　面
赤　漆
黒　漆
永通
永通
0 (58) 10cm (1:2)
0 (66,67) 6cm (2:3)
0 (46) 20cm (1:4)
0 (43～45,47～57,60～65,68) 15cm (1:3)
0 (59) 25cm (1:5)

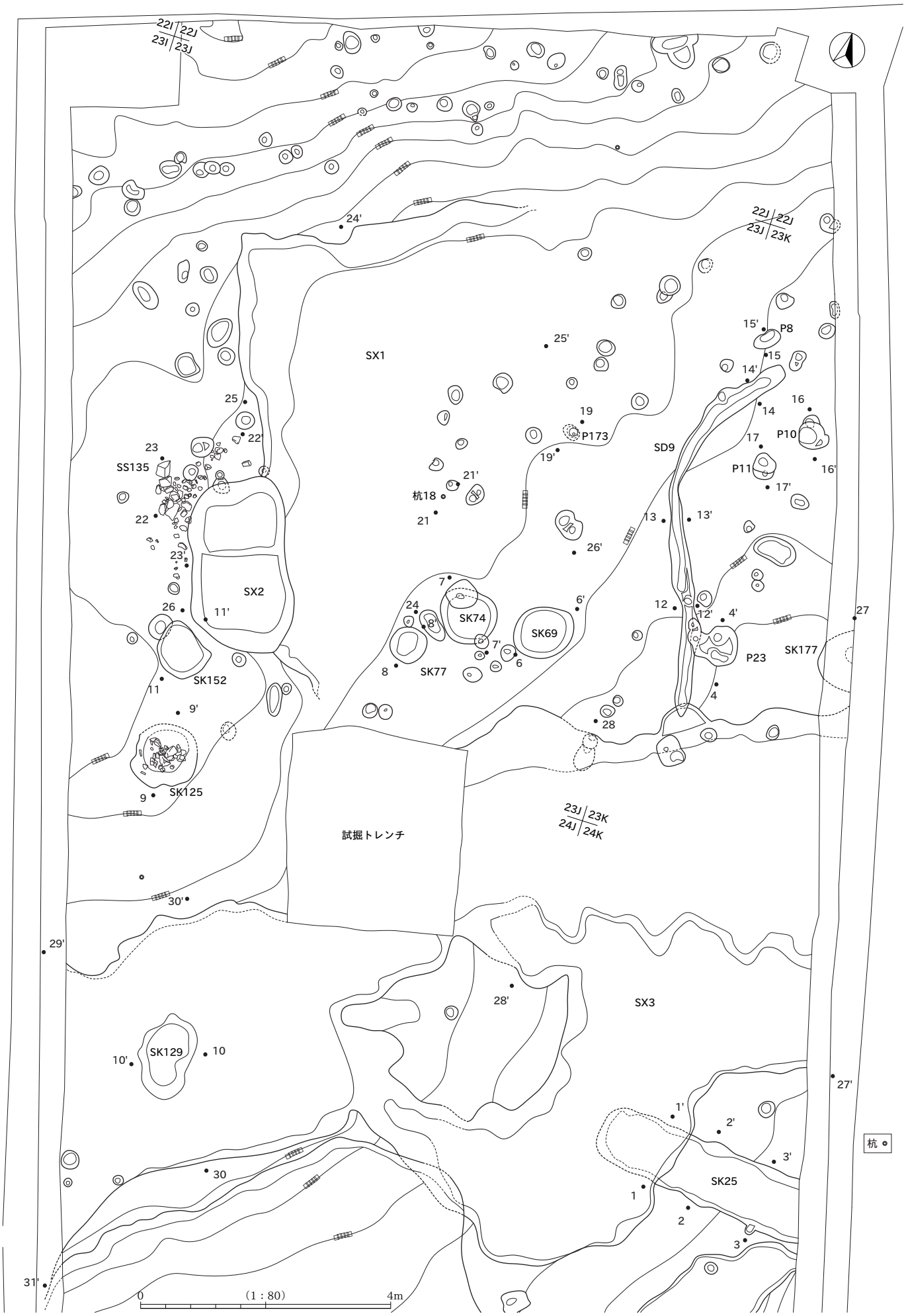
千古作遺跡　遺物実測図（3）　作業ヤード出土遺物

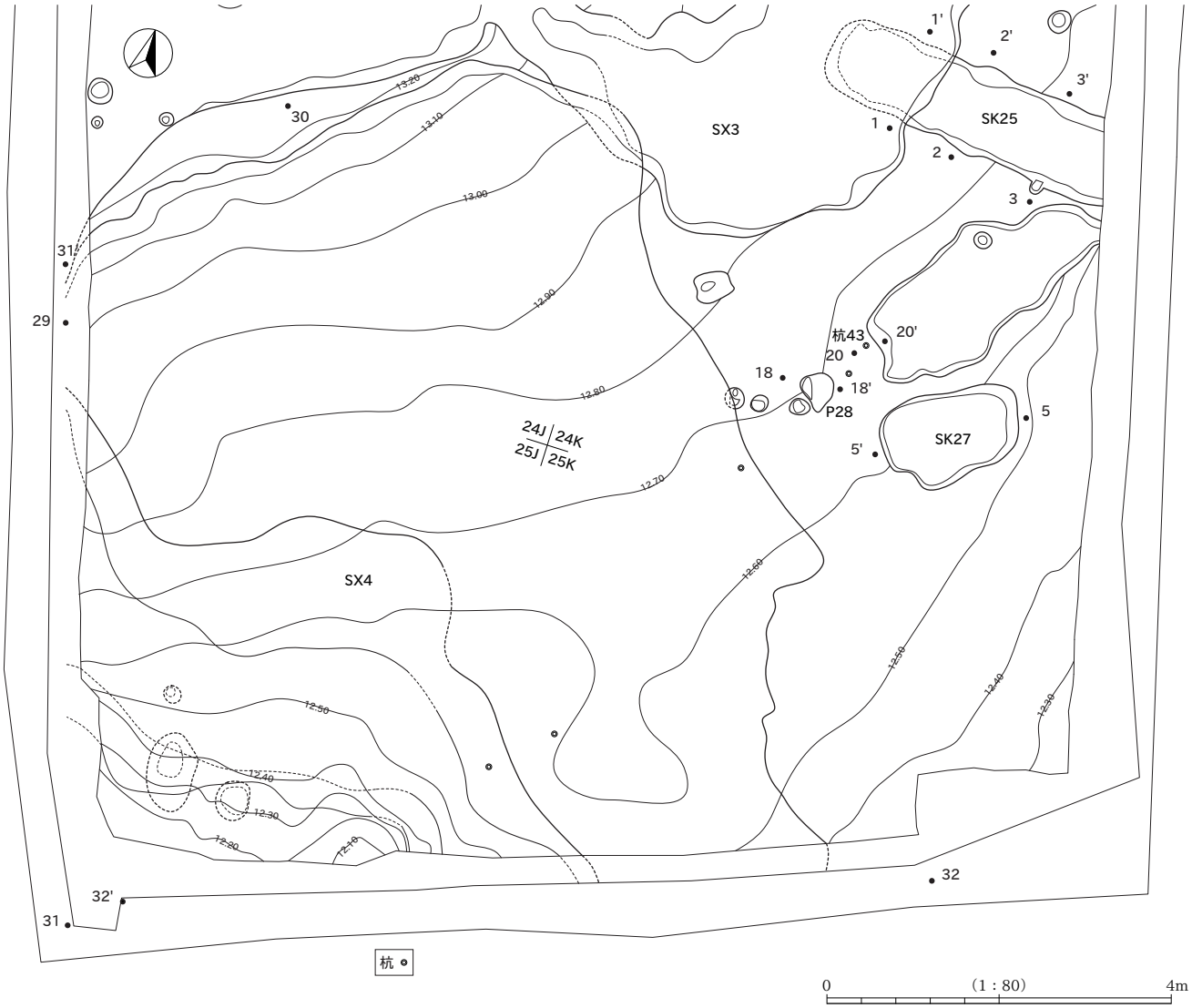


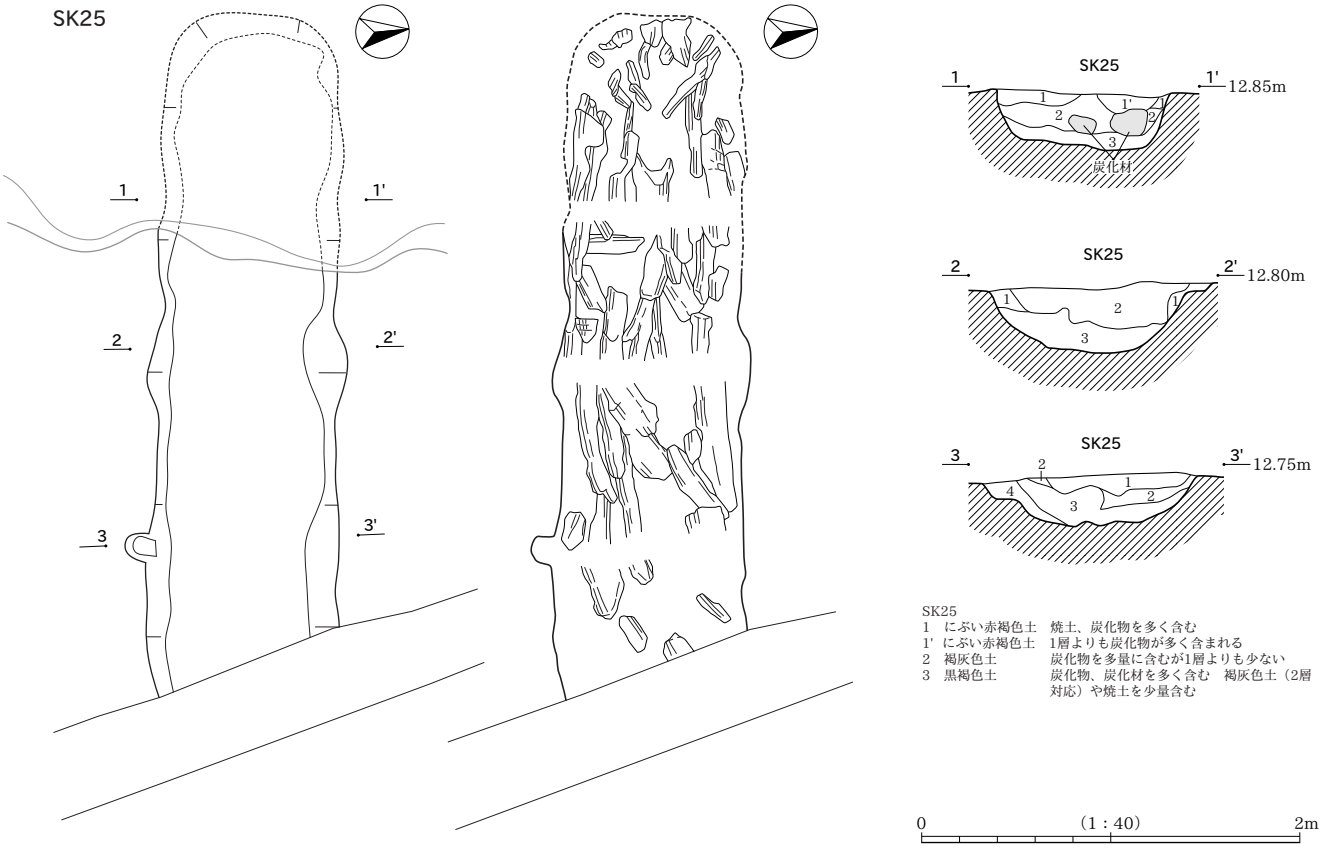
剣野沢遺跡
香積寺沢遺跡
NO.415
NO.420
空地
0 (1:1,000) 40m
E D C B A Z Y X W V U T S R Q P O N M L K J I H G F E
20 21 22 23 24 25 26 27

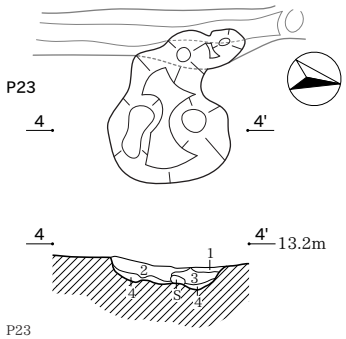
香積寺沢遺跡　遺構全体図



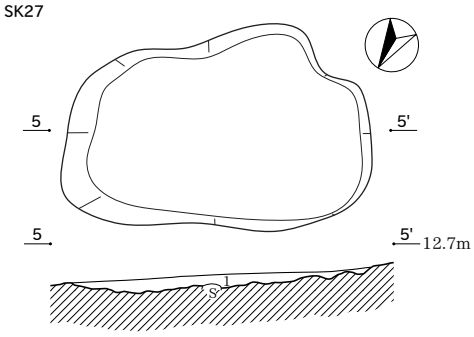

22I/22J
23I/23J
22J/22J
23J/23K
23J/23K
24J/24K
SX1
SX2
SX3
SS135
SK152
SK125
SK129
SK77
SK74
SK69
SK177
SK25
SD9
P173
P8
P10
P11
P23
杭18
試掘トレンチ
杭
0
(1：80)
4m


SX3
SK25
SX4
SK27
P28
杭43
24J 24K
25J 25K
杭
0 (1：80) 4m

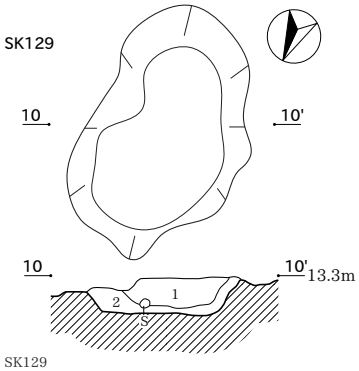

SK25
SK25 12.85m
SK25 12.80m
SK25 12.75m
炭化材
SK25
1 にぶい赤褐色土 焼土、炭化物を多く含む
1' にぶい赤褐色土 1層よりも炭化物が多く含まれる
2 褐灰色土 炭化物を多量に含むが1層よりも少ない
3 黒褐色土 炭化物、炭化材を多く含む 褐灰色土（2層対応）や焼土を少量含む
0 (1：40) 2m



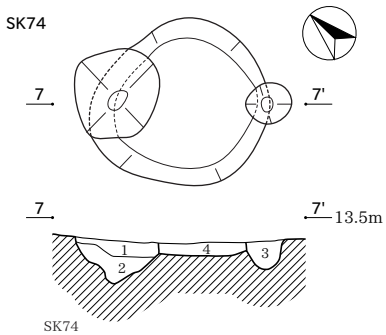
P23
1　淡黄色砂　　粒径の粗い砂からなる
2　黒褐色粘質土　砂礫、炭粒を含む
3　黒褐色粘質土　炭粒、礫を少量含む
4　灰黄色砂



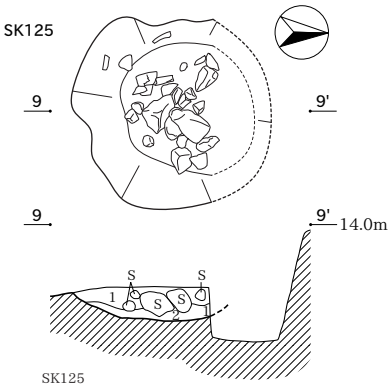
SK27
1　黒褐色粘質土　礫、灰黄色土（Ⅳ層対応）を含む



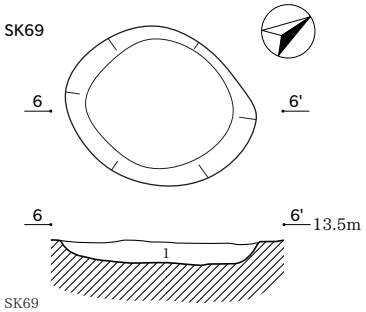
SK129
1　黒褐色粘質土　　礫を含む
3　灰黄褐色粘質土　灰黄色土（Ⅳ層対応）を含む



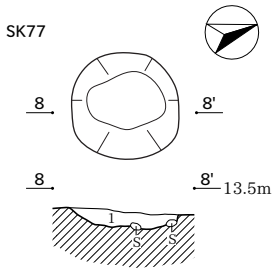
SK74
1　暗褐色粘質土　灰黄色土（Ⅳ層対応）、炭粒を含む
2　黒褐色粘質土　礫、灰黄色土（Ⅳ層対応）を含む
3　黒褐色粘質土　礫、炭粒を含む
4　黒褐色粘質土　礫、灰黄色土（Ⅳ層対応）を含む



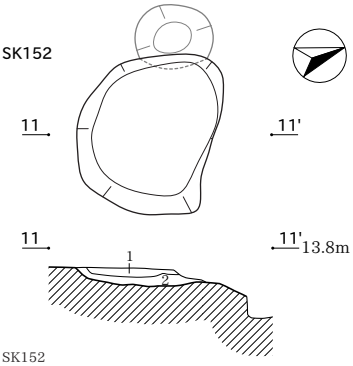
SK125
1　黒褐色粘質土　　礫、灰黄色土を含む
2　灰黄褐色粘質土　灰黄色土を含む



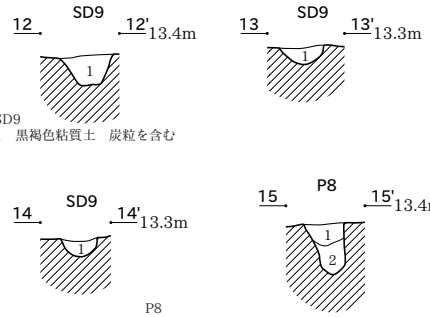
SK69
1　黒褐色粘質土　灰黄色土（Ⅳ層対応）を含む



SK77
1　黒褐色粘質土　礫、炭粒を含む

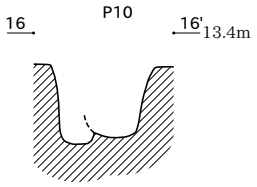


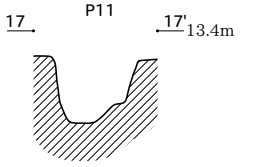
SK152
1　黒褐色粘質土　　灰黄色土（Ⅳ層対応）を含む
2　灰黄褐色粘質土　灰黄色土（Ⅳ層対応）を含む

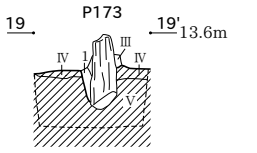


SD9
1　黒褐色粘質土　炭粒を含む

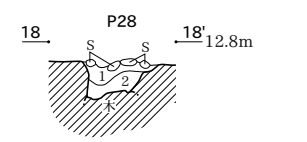
P8
1　黒褐色粘質土　　灰黄色土（Ⅳ層対応）、炭粒を含む
2　灰黄褐色粘質土　灰黄色土（Ⅳ層対応）を含む



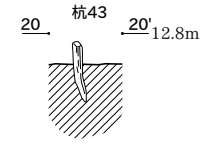


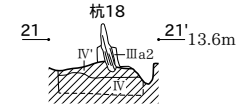


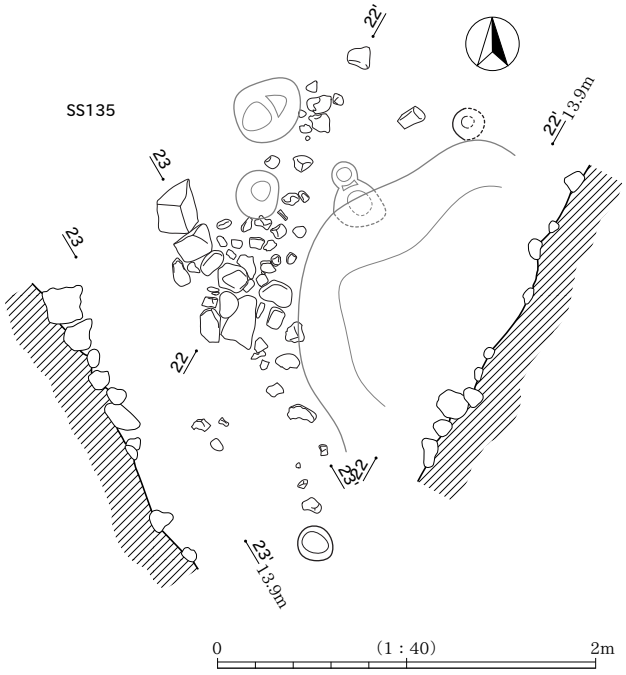
P173
1　褐灰色粘質土　　灰黄色土（Ⅳ層対応）を含む

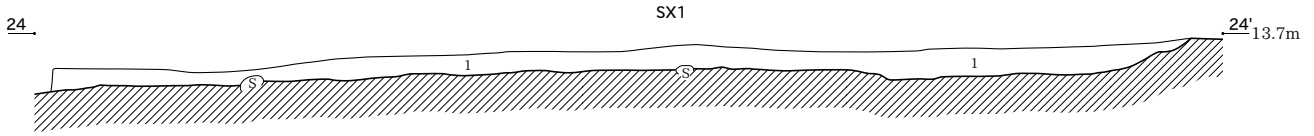


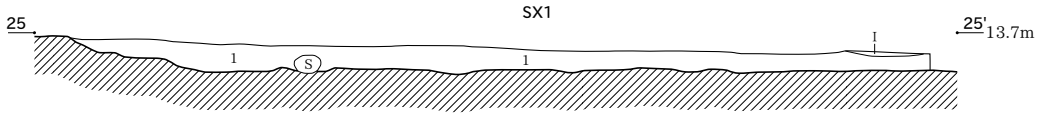
P28
1　褐灰色粘質土　　灰黄色土（Ⅳ層対応）を含む
2　黒褐色粘質土　　炭粒を含む

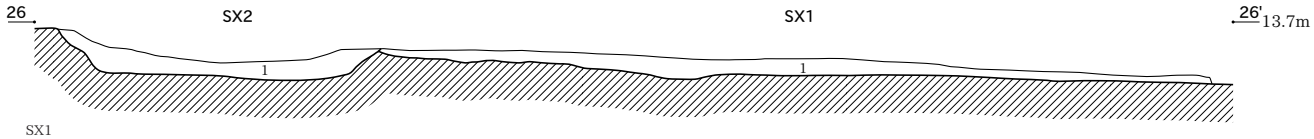




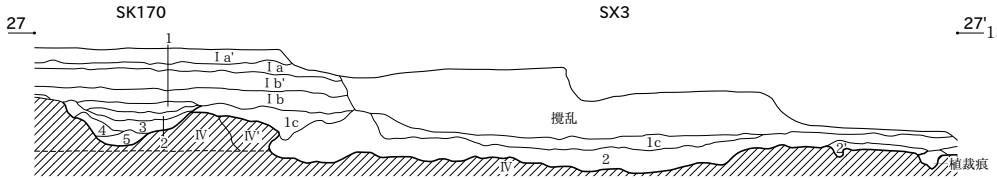




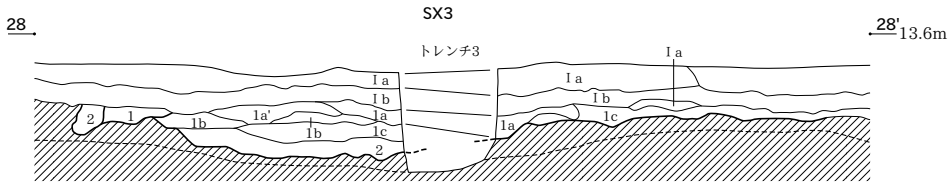


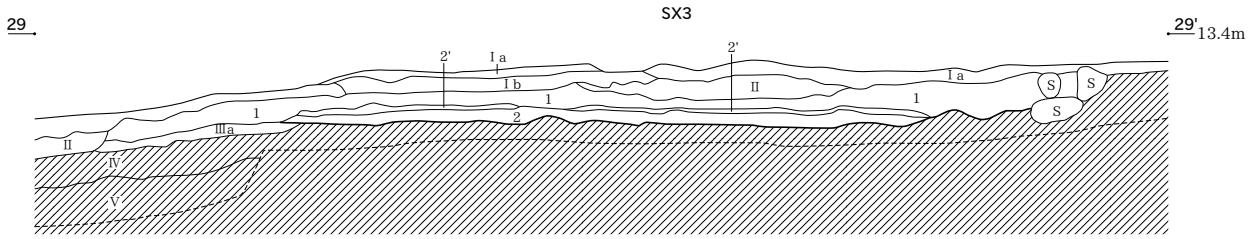


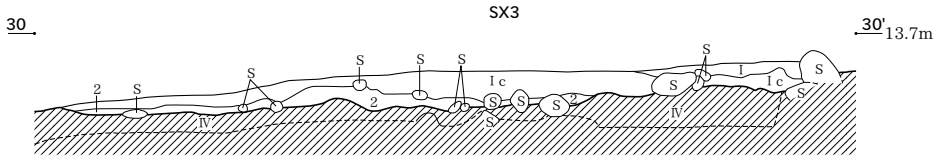
SX1
1　黒褐色粘質土　礫、炭粒、灰黄色土（Ⅳ層対応）を含む



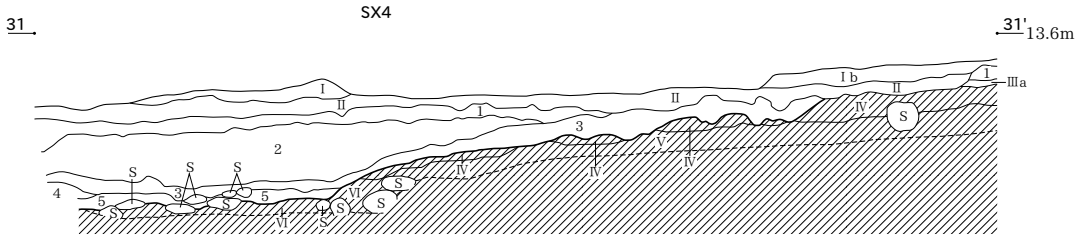
SK170
1　黒褐色粘質土　礫、炭粒、灰黄色土（Ⅳ層対応）を少量含む
2　黒褐色粘質土　礫、灰黄色土（Ⅳ層対応）を含むが1層よりも少ない
3　灰黄褐色粘質土　灰黄色土（Ⅳ層対応）を微量に含む
4　灰黄褐色粘質土　3層よりも色調が暗い
5　黒褐色粘質土　礫、灰黄色土（Ⅳ層対応）を微量に含む

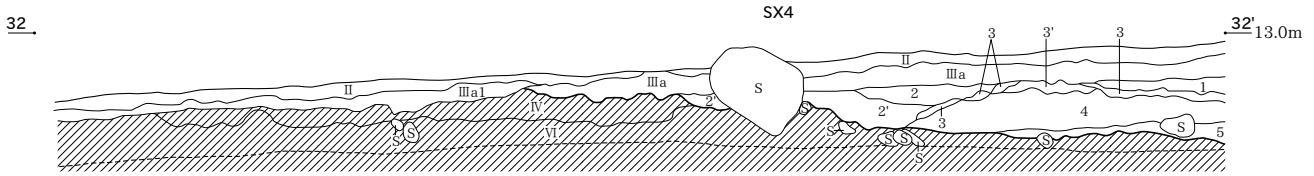






SX3
1a　黒褐色粘質土　礫、炭粒を少量含む
1a'　灰黄褐色シルト　礫、炭粒を含むが1a層よりも少ない
1b　灰黄褐色粘質土　礫、炭粒を少量含む
1c　灰黄褐色粘質土　礫、炭粒を少量含む粘性やや弱い
1c'　灰黄褐色砂礫　礫を多く含む
2　褐灰色粘質土　礫、炭粒を微量含む
2'　褐灰色粘質土　炭化物を多く含む



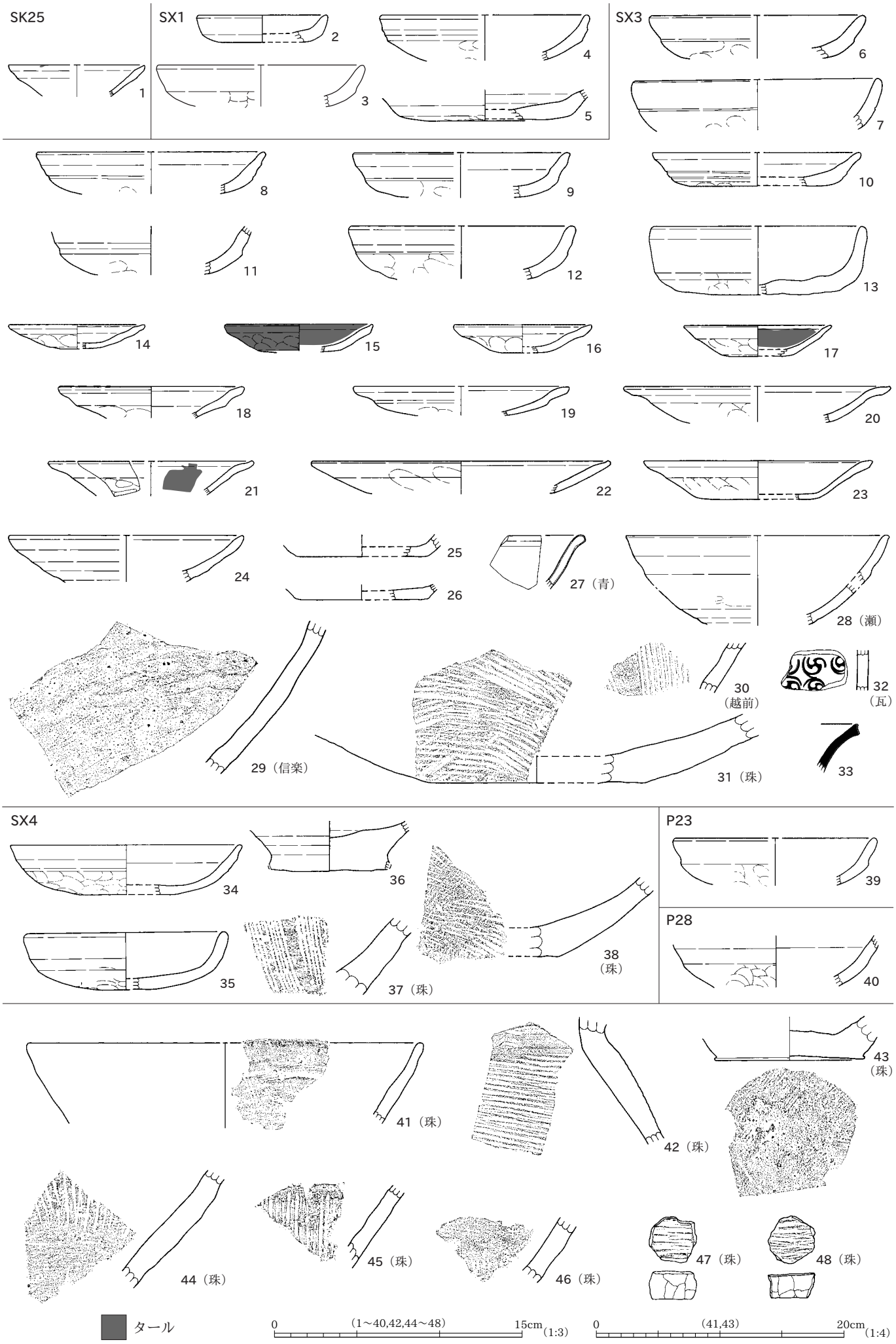


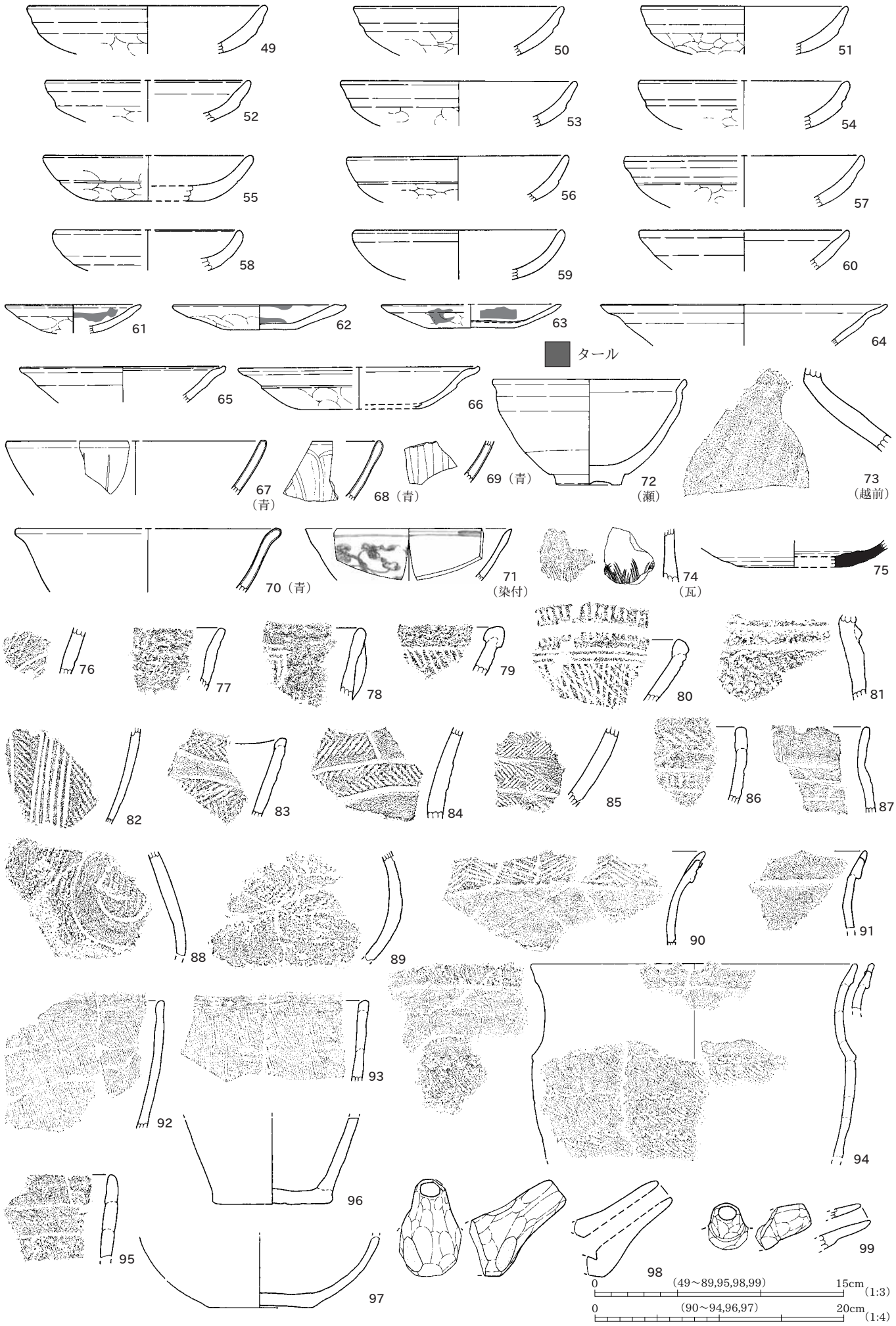
SX4
1　黒褐色粘質土　礫、炭粒、灰黄色土（Ⅳ層対応）を少量含む　Ⅲb層に相当する
2　灰黄褐色礫　礫（10～20cm前後）を多量に含む　しまりが非常に強い　土石流堆積物
2'　灰黄褐色礫　礫、黒褐色粘質土（1層）を少量含む
3　黒色粘質土　炭粒、礫を少量含む　粘性が強い
4　灰黄褐色礫　2層と類似するが、含有する礫が小さい　土石流堆積物
5　黒色粘質土　粘性が強く有機質が含まれる

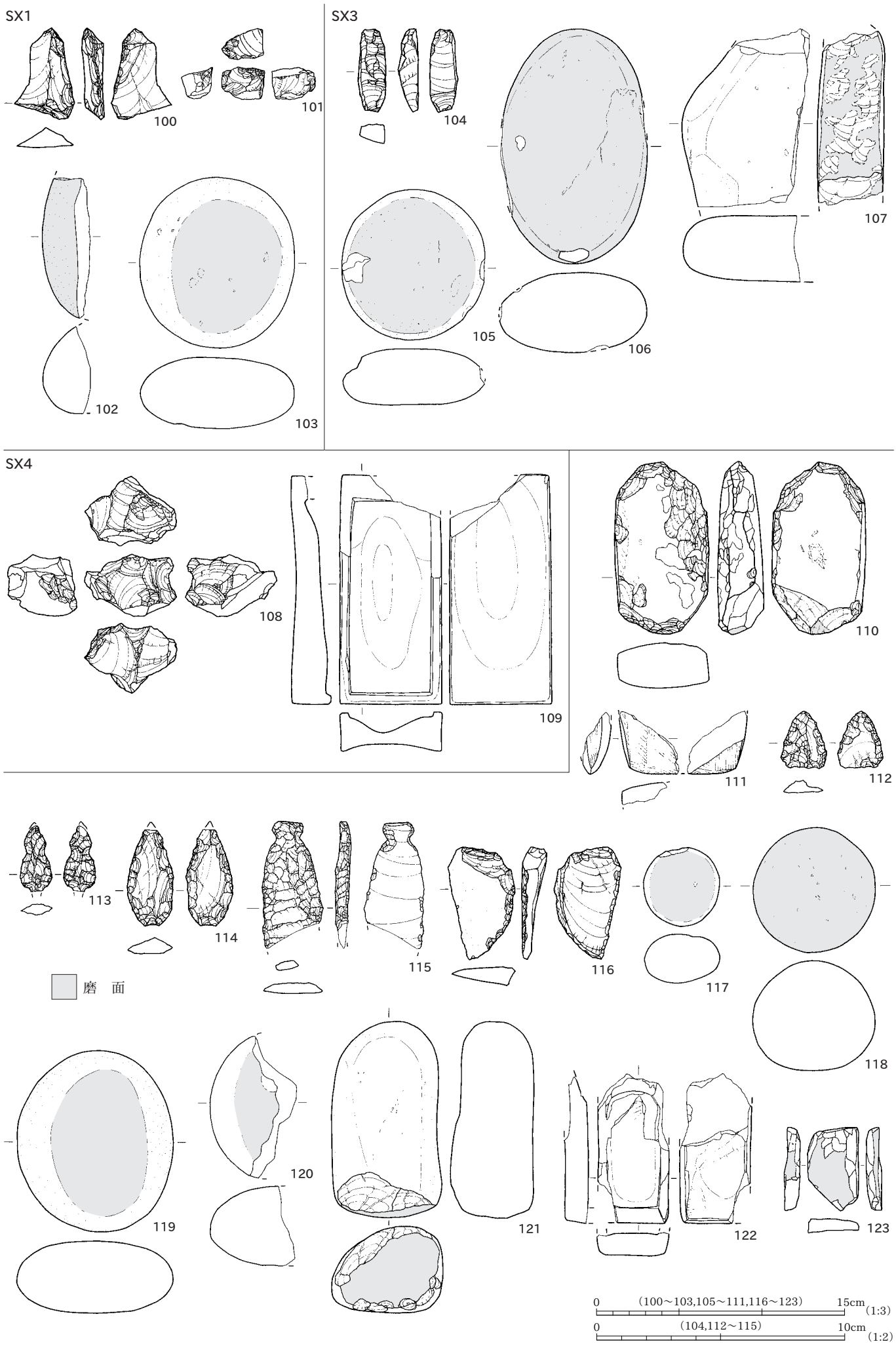
0　（その他　1：40）　2m
0　（27・31・32　1：60）　3m

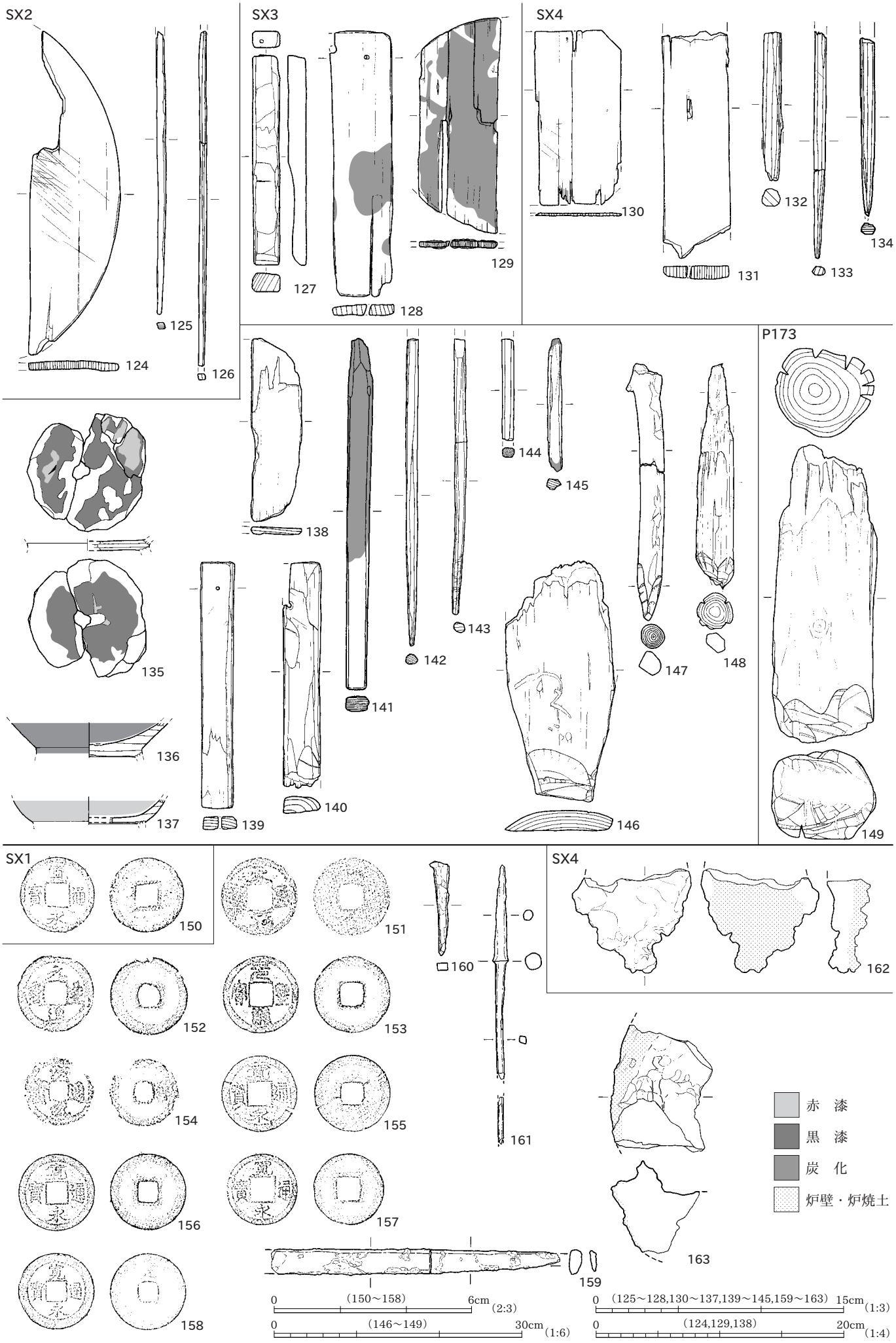
25J・K遺物集中区

※図中の番号は、図版19の番号と対応する。

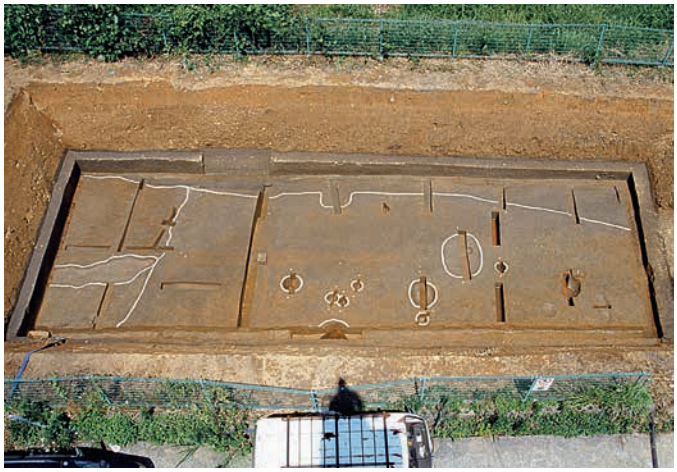

SK25
SX1
SX3
SX4
P23
P28
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27（青）
28（瀬）
29（信楽）
30（越前）
31（珠）
32（瓦）
33
34
35
36
37（珠）
38（珠）
39
40
41（珠）
42（珠）
43（珠）
44（珠）
45（珠）
46（珠）
47（珠）
48（珠）
タール
0
（1～40,42,44～48）
15cm
(1:3)
0
（41,43）
20cm
(1:4)


49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
タール
65
66
67（青）
68（青）
69（青）
72（瀬）
73（越前）
70（青）
71（染付）
74（瓦）
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
0 (49～89,95,98,99) 15cm (1:3)
0 (90～94,96,97) 20cm (1:4)


SX1
100
101
102
103
SX3
104
105
106
107
SX4
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
磨　面
0　(100～103,105～111,116～123)　15cm (1:3)
0　(104,112～115)　10cm (1:2)

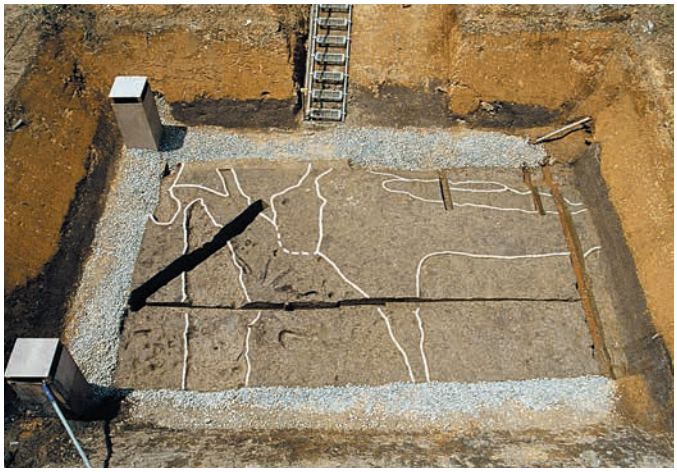

SX2
124
125
126
SX3
127
128
129
SX4
130
131
132
133
134
P173
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
SX1
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
SX4
162
163
赤　漆
黒　漆
炭　化
炉壁・炉焼土
0 (150～158) 6cm (2:3)
0 (146～149) 30cm (1:6)
0 (125～128,130～137,139～145,159～163) 15cm (1:3)
0 (124,129,138) 20cm (1:4)

千古作遺跡　遠景（西から）



ピア２区　完掘（西から）

ピア３区　完掘（西から）

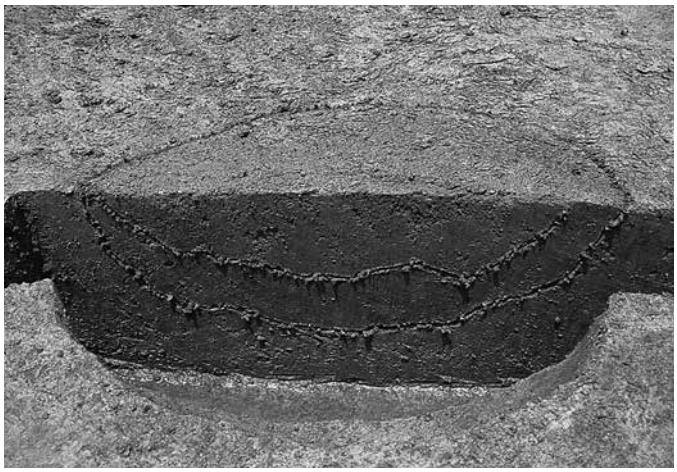


作業ヤード　完掘（南から）

ピア４区　完掘（北から）

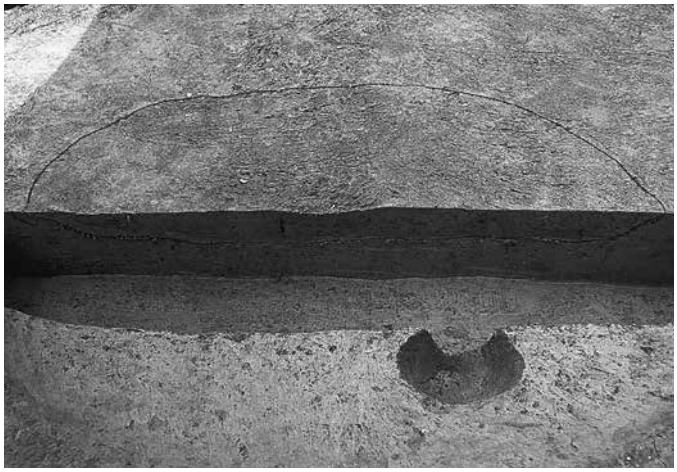
ピア２区　9J24　基本層序（東から）

ピア２区　SE19　1-1' セクション（東から）

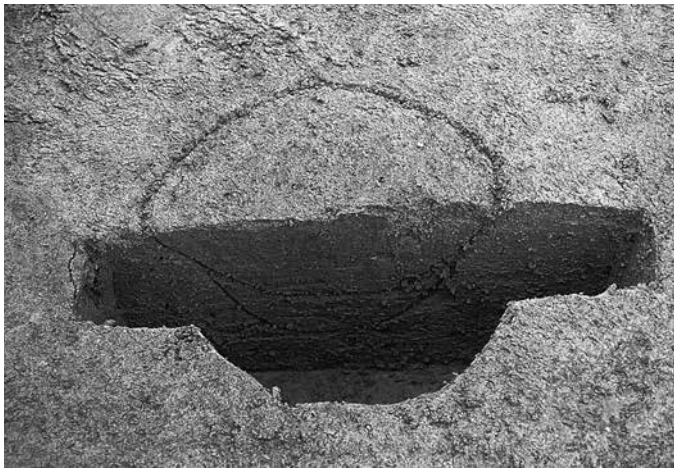


ピア２区　SK23　3-3' セクション（南から）

ピア２区　SE19　完掘（東から）

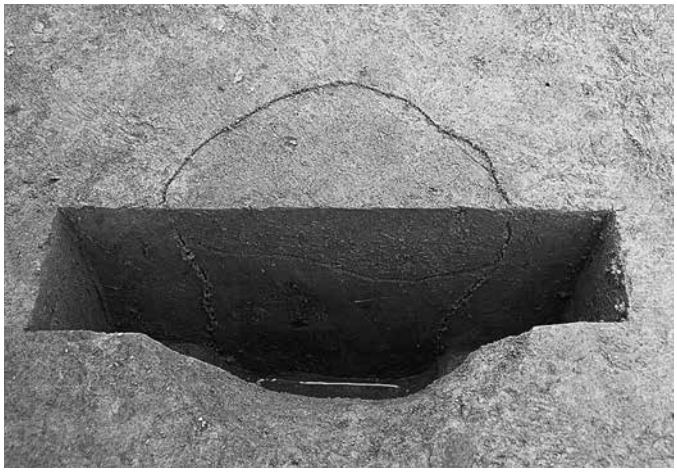


ピア２区　SK29　4-4' セクション（南から）

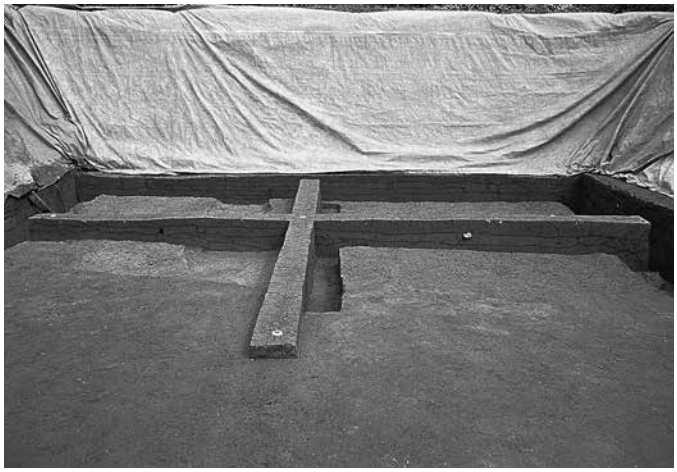


ピア２区　P22　7-7' セクション（南から）

ピア２区　P25　8-8' セクション（南から）



ピア２区　P30　9-9' セクション（南から）

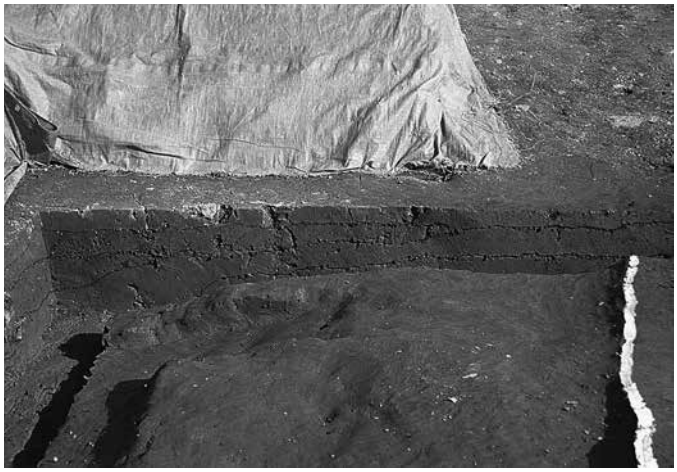


ピア２区　SX16　10-10' セクション（南から）

ピア２区　SX16　11-11' セクション（東から）

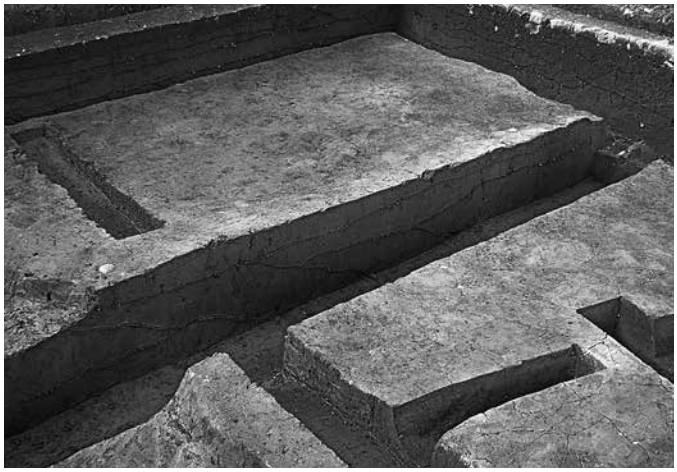
ピア２区　SX17　セクション（北から）

ピア２区　SX17　12-12' セクション（北から）

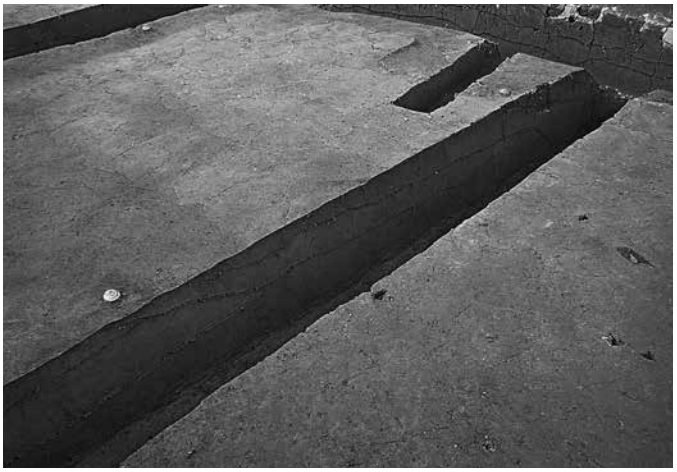


ピア２区　SX17　13-13' セクション（北から）

ピア２区　SX31　14-14' セクション（南西から）



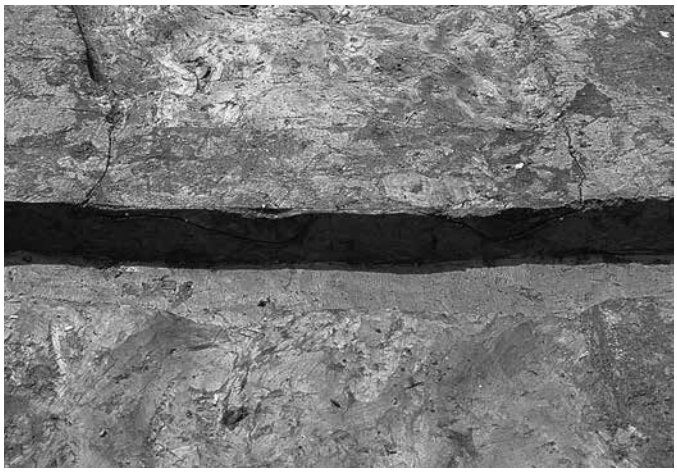
ピア２区　SX31　10-10'（下部）セクション（南西から）



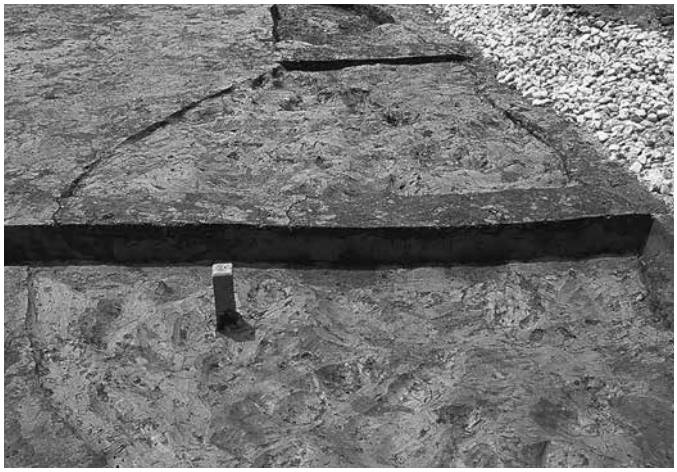
ピア２区　SX31　16-16' セクション（南西から）

ピア３区　基本層序（東から）

ピア３区　SD8　セクション（北から）

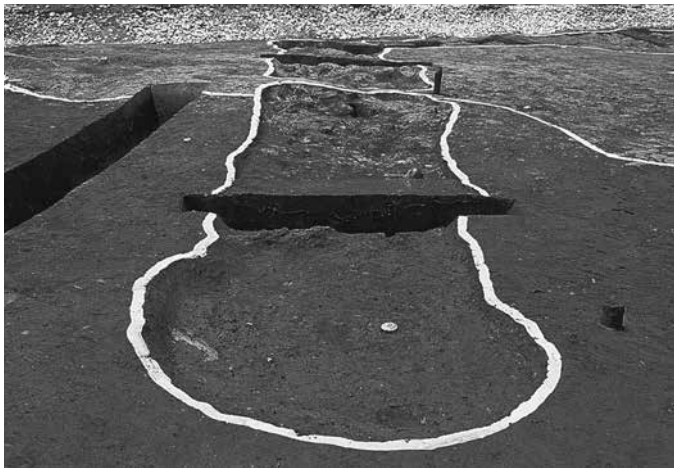


ピア３区　SD8　17-17' セクション（北から）



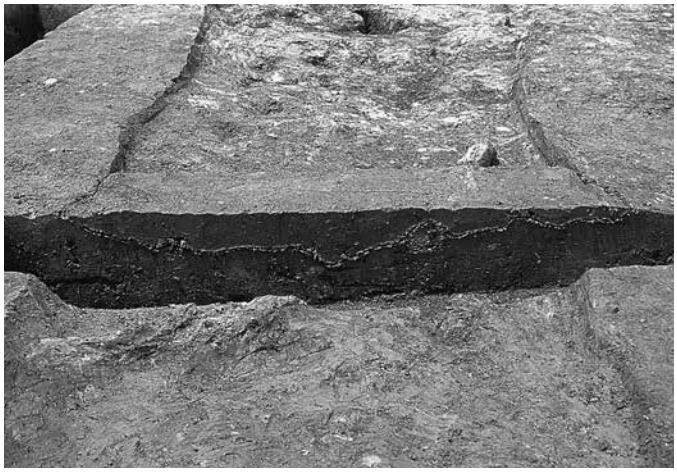
ピア３区　SD8　18-18' セクション（北から）

ピア３区　SD8・SD9　19-19' セクション（東から）

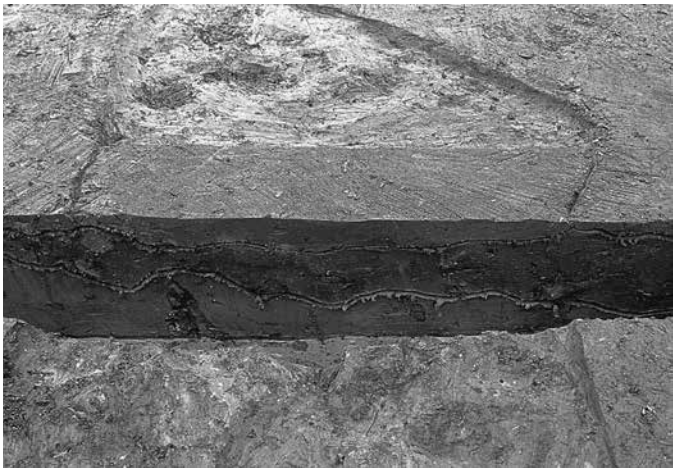


ピア３区　SD9・SD10　セクション（東から）

ピア３区　SD9　20-20' セクション（北から）



ピア３区　SD10　21-21' セクション（東から）

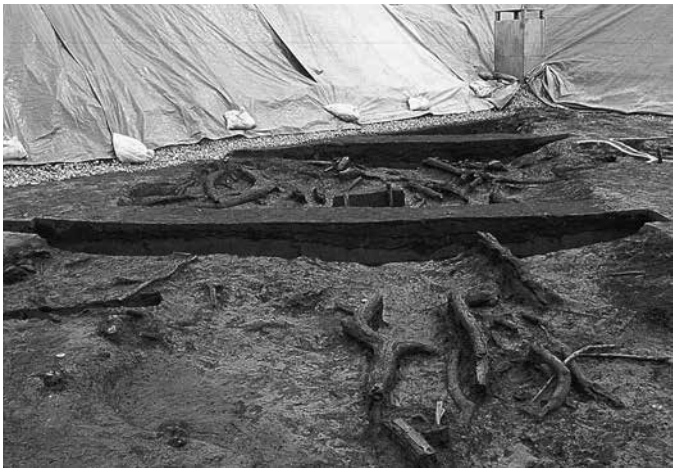


ピア３区　SD11　22-22' セクション（北から）

ピア３区　SD12　23-23' セクション（南から）

ピア３区　SD13　セクション（北から）

ピア３区　SD13　25-25' セクション（北から）

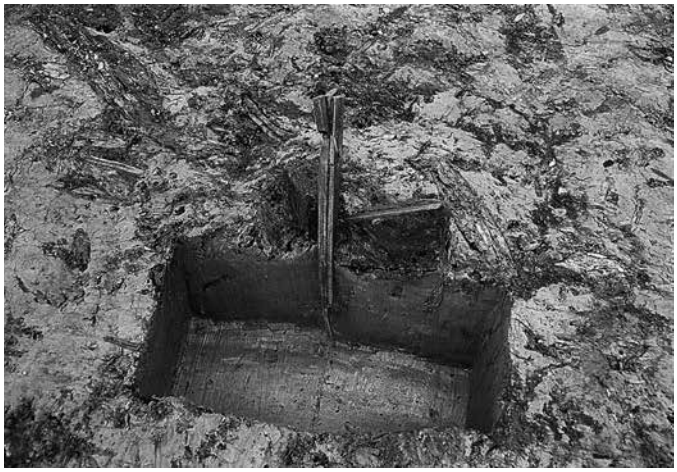


ピア３区　SD13　26-26' セクション（北から）

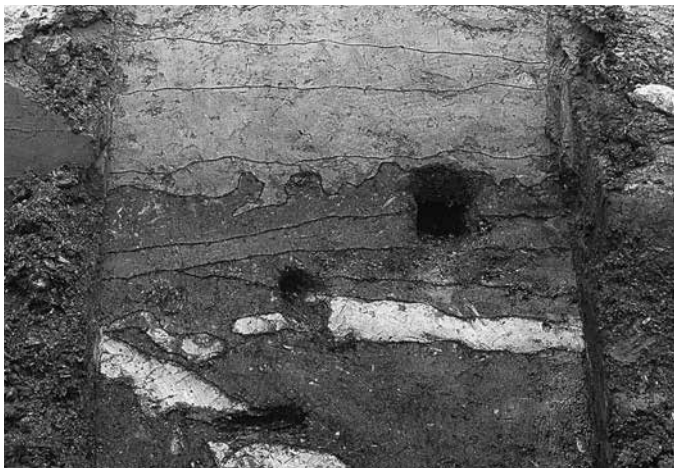
ピア３区　SD13　27-27' セクション（北から）

ピア３区　杭５・６・13　29-29' セクション（北から）

ピア３区　SD13　大足出土状況（西から）



ピア３区　SD13　30-30' セクション（北西から）



ピア４区　基本層序（東から）

ピア４区　SX32　完掘（北から）

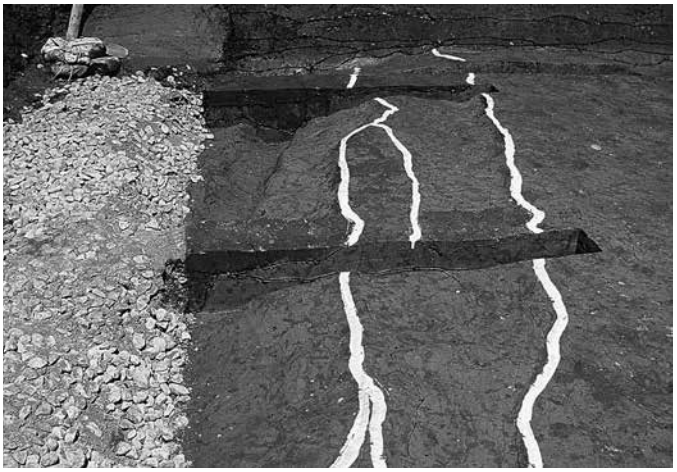
ピア４区　SX32　31-31' セクション（南から）

ピア４区　SX32　32-32' セクション（南から）

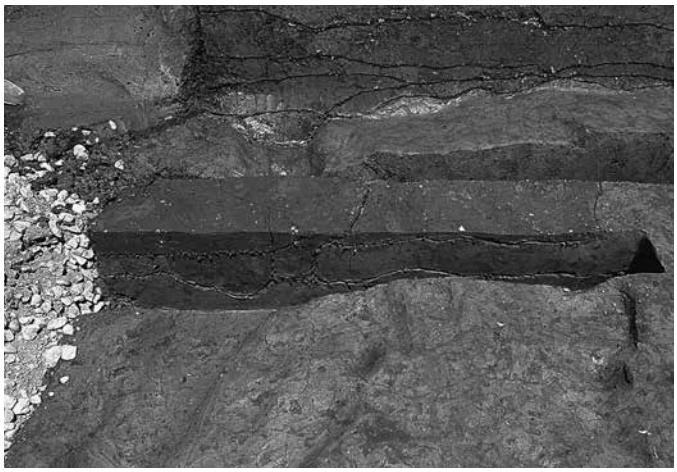
ヤード１区　基本層序（西から）

ヤード１区　SD3　セクション（北から）

ヤード１区　SD4・SX1　35-35' セクション（南から）

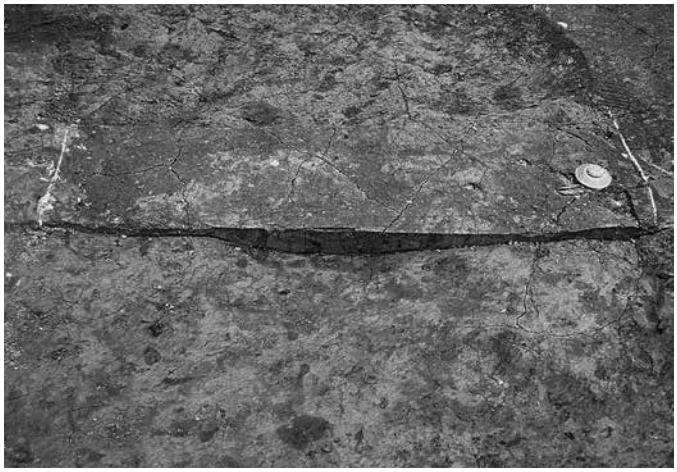


ヤード１区　SD5・SD6　セクション（西から）

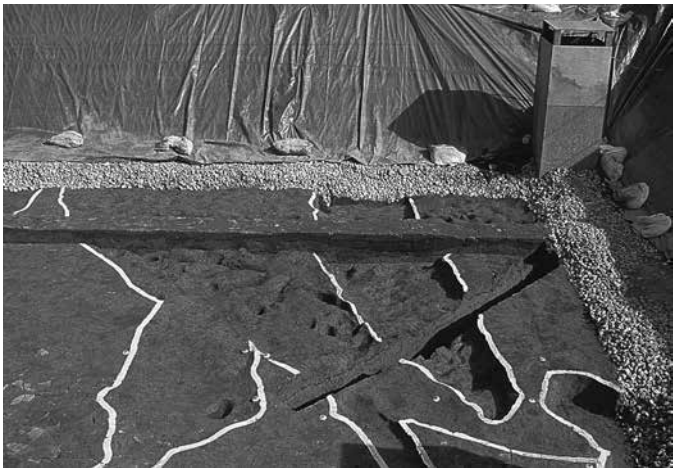


ヤード１区　SD5・SD6　36-36' セクション（西から）

ヤード１区　SD5・SD6　37-37' セクション（西から）

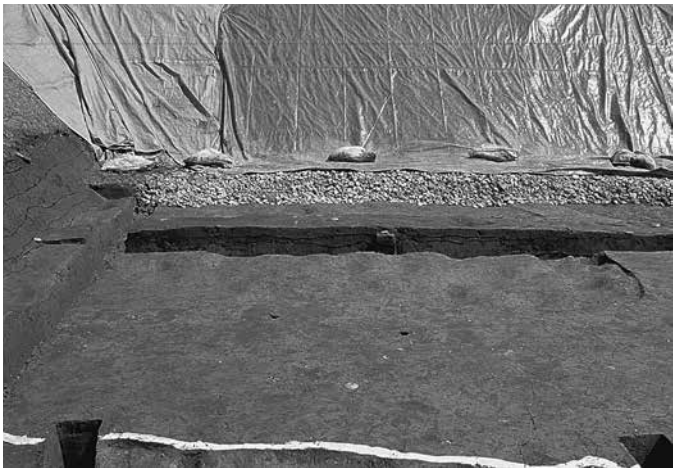


ヤード１区　SD7　38-38' セクション（北から）

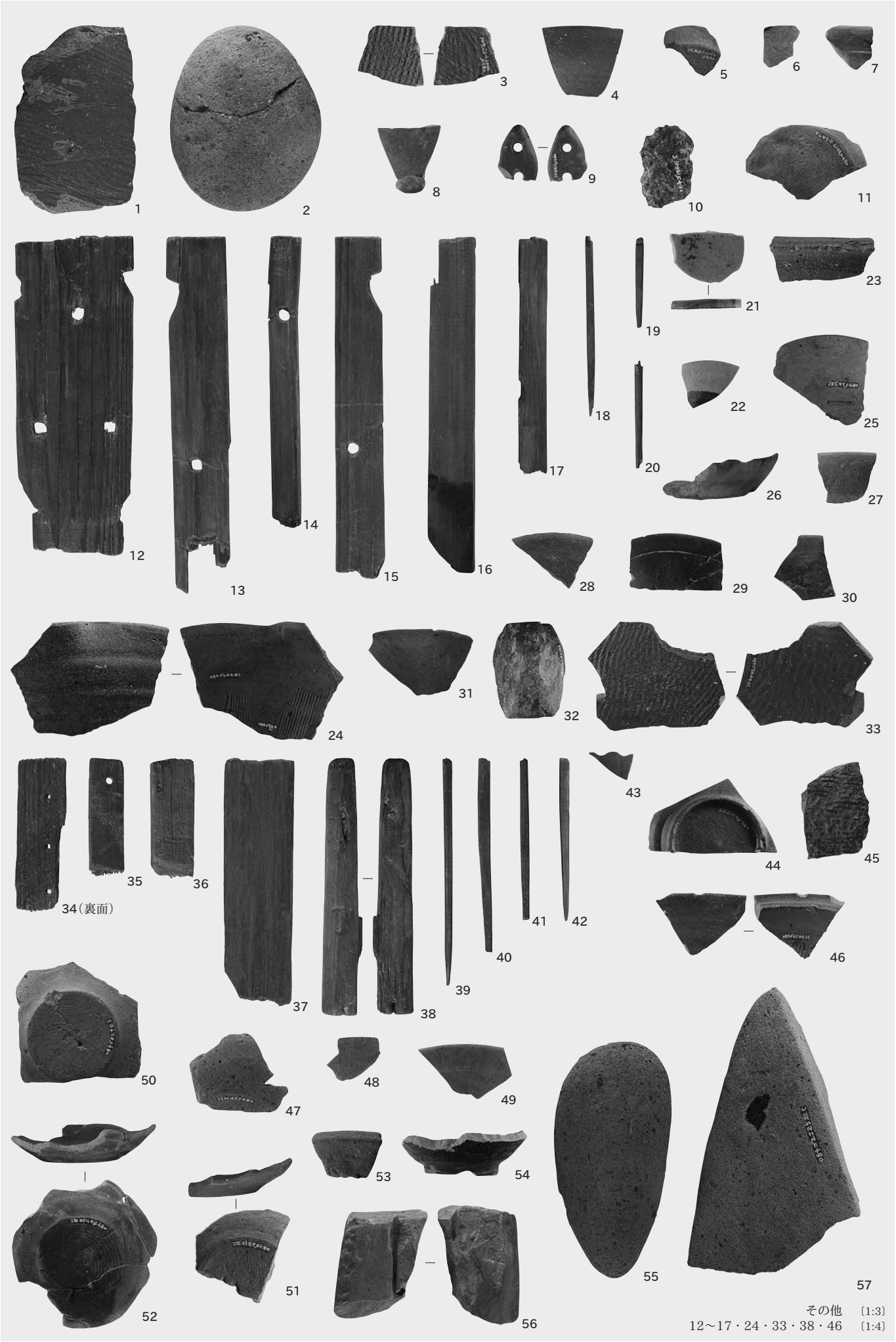


ヤード１区　SX1・SD15　40-40' セクション（北から）

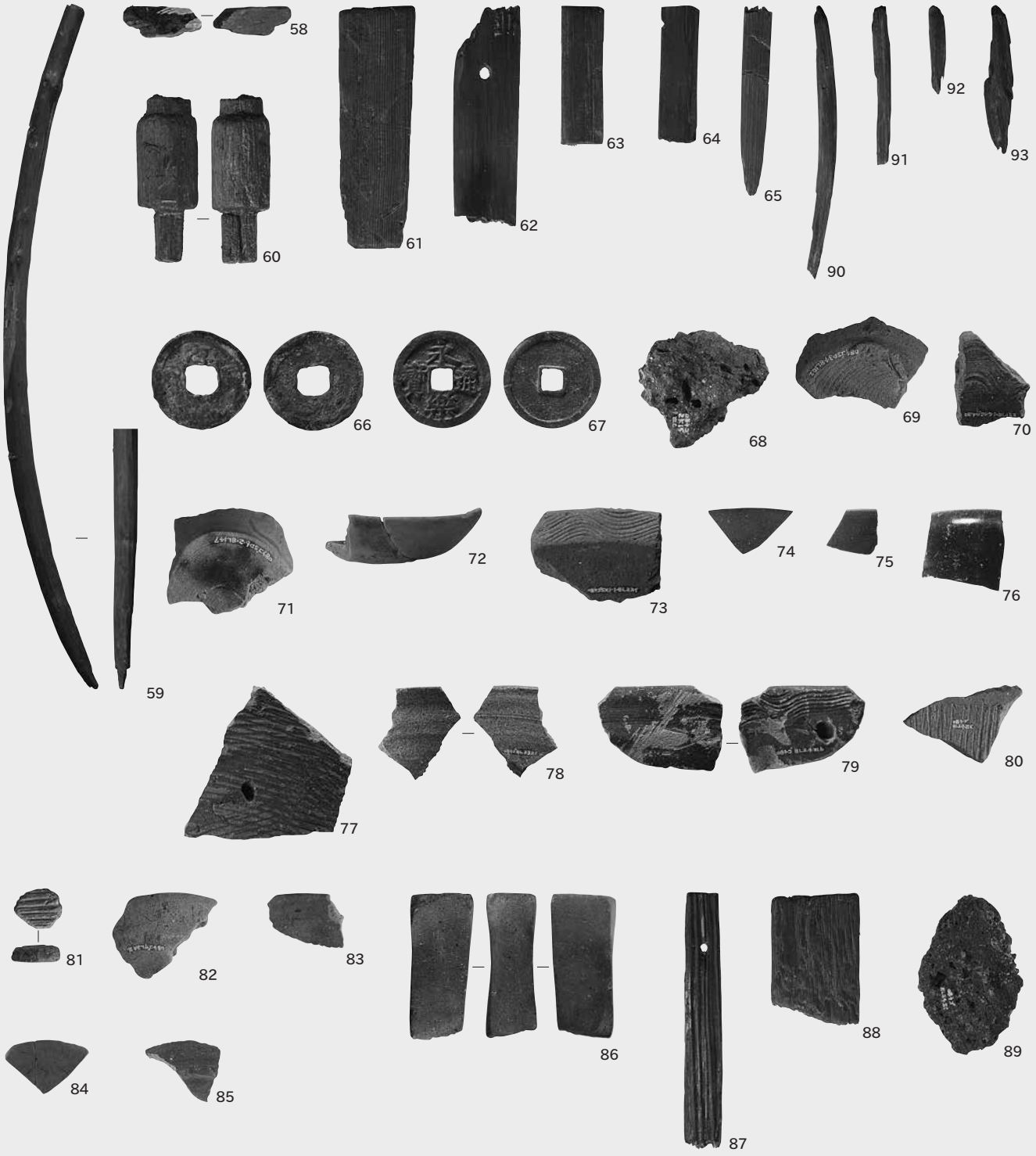
ヤード１区　SX1・SD15　39-39' セクション（北西から）



ヤード１区　SX2　41-41' セクション（北から）

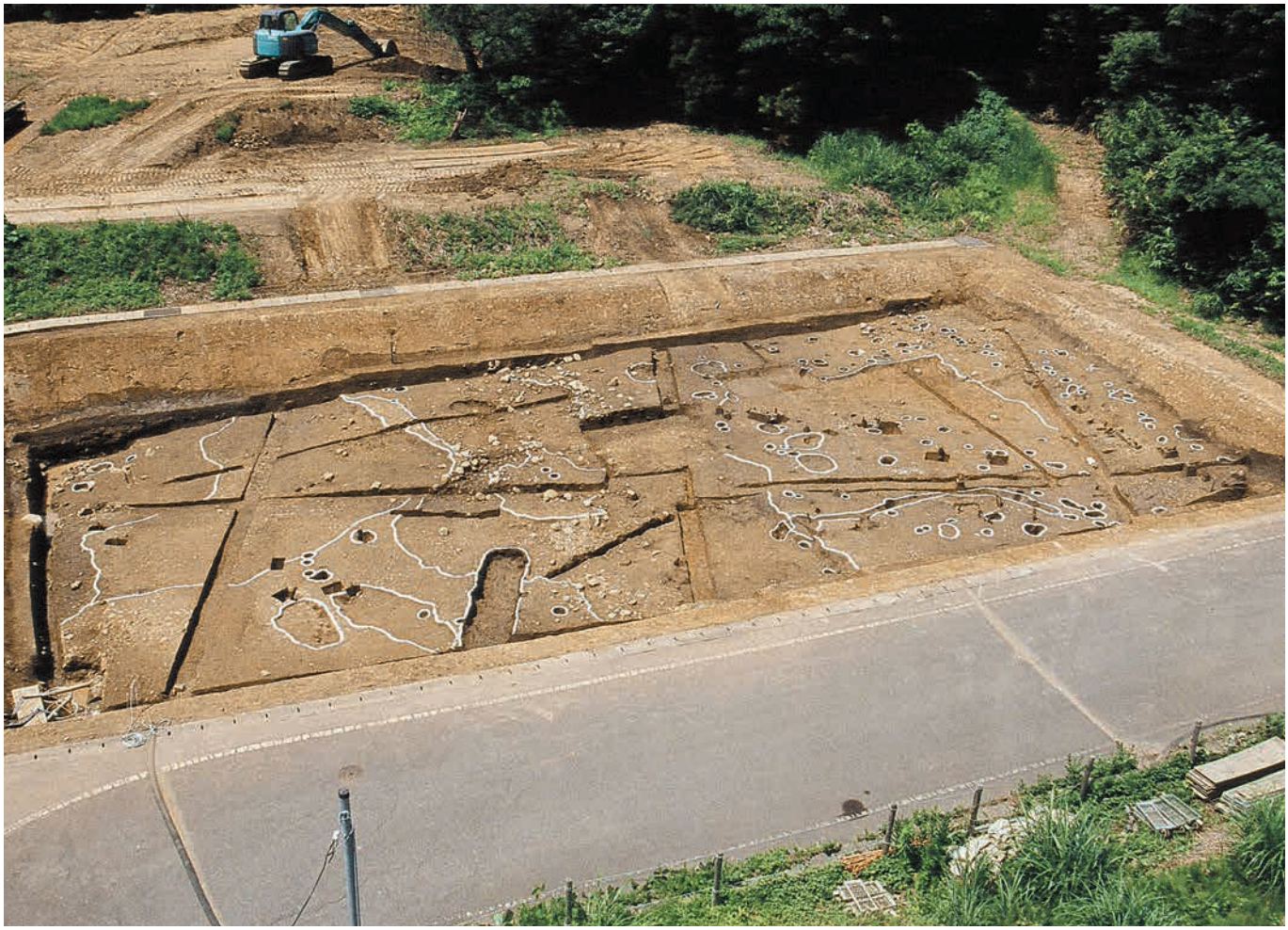


その他　〔1:3〕
12～17・24・33・38・46　〔1:4〕



58　〔1:2〕
その他　〔1:3〕
78　〔1:4〕
59　〔1:5〕
66・67　〔2:3〕

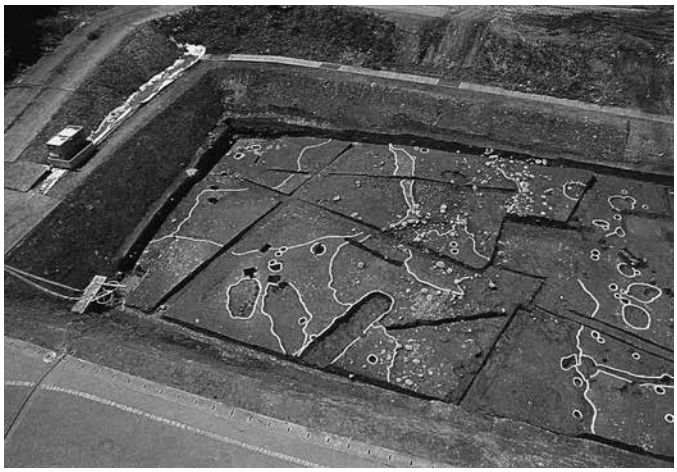
香積寺沢遺跡　遠景（北から）



香積寺沢遺跡　全景（南東から）

遺跡遠景（東から）

遺跡遠景（西から）



調査区南側（北東から）

調査区北側（南東から）

22J25　基本層序（E）（西から）

24J25　基本層序（G）（西から）

SK23　4-4' セクション（東から）

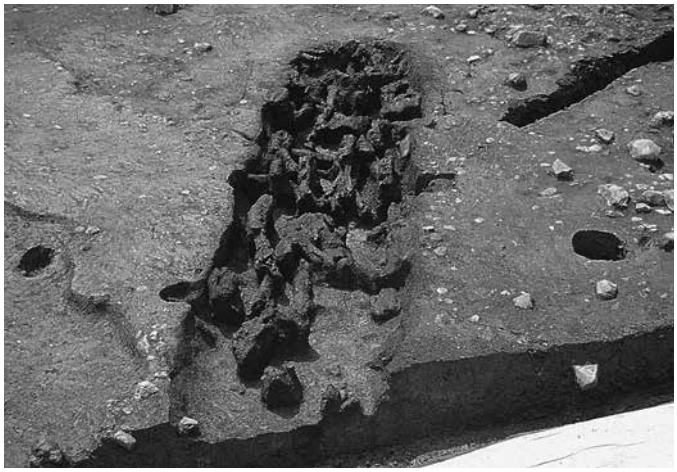
SK27　5-5' セクション（北から）

SK25　セクション（東から）

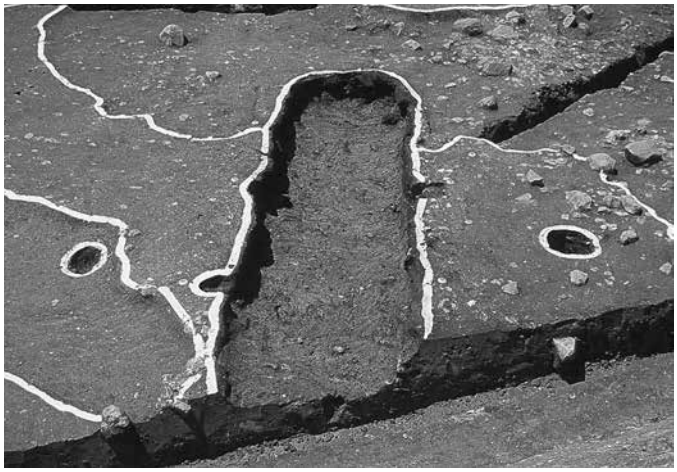
SK25　1-1' セクション（東から）

SK25　2-2' セクション（東から）

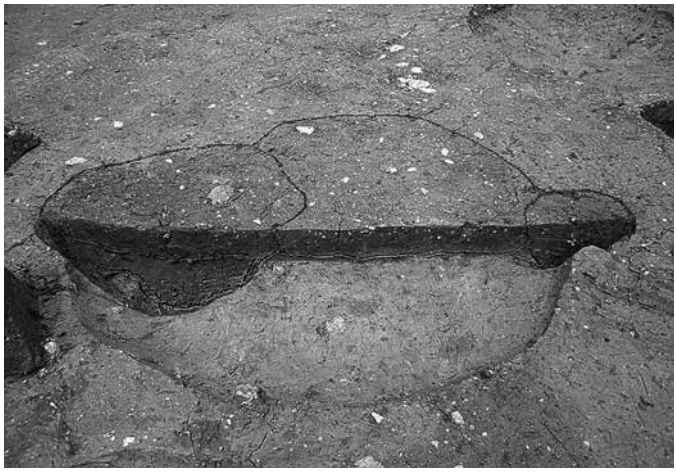
SK25　3-3' セクション（東から）



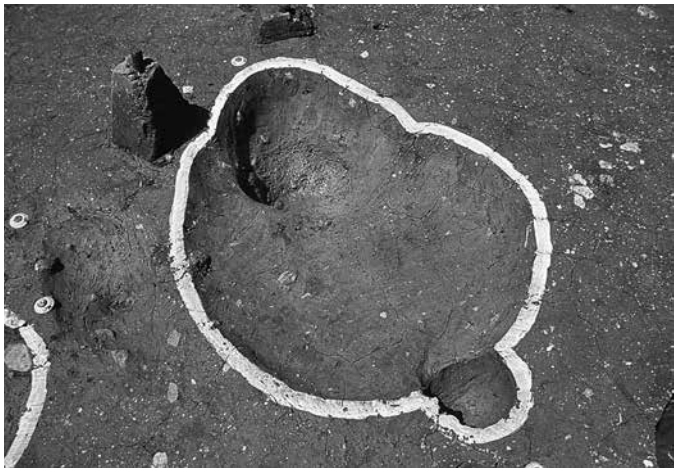
SK25　炭化材出土状況（東から）



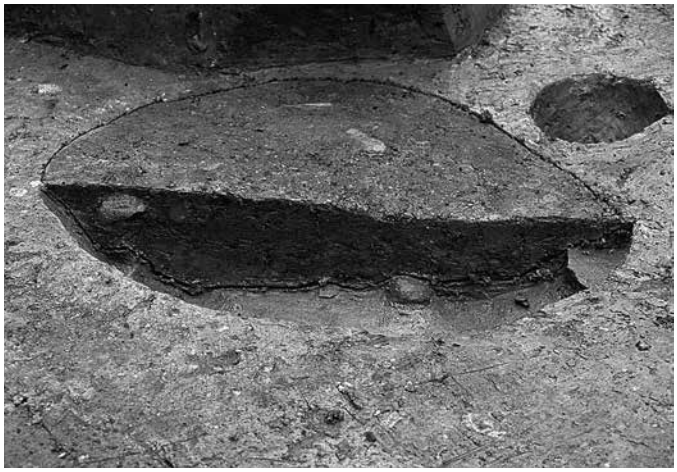
SK25　完掘（東から）



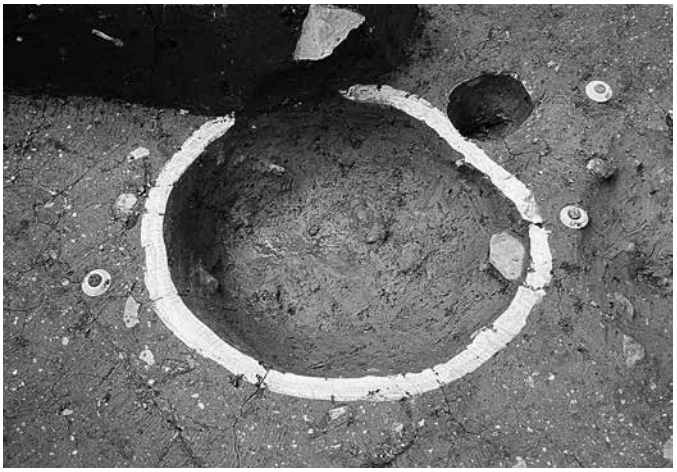
SK74　7-7' セクション（南から）



SK74　完掘（南東から）



SK77　8-8' セクション（東から）

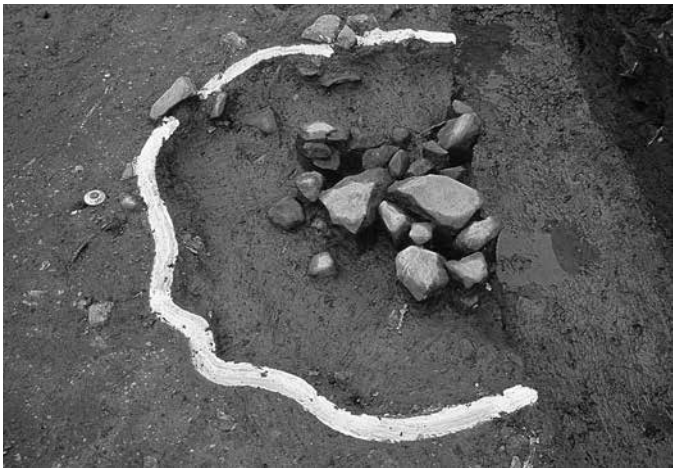


SK77　完掘（東から）

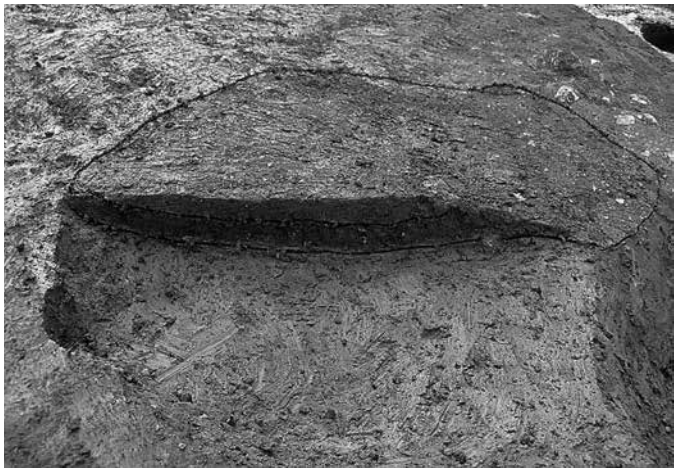
SK69　完掘（南から）

SK129　10-10' セクション（北から）

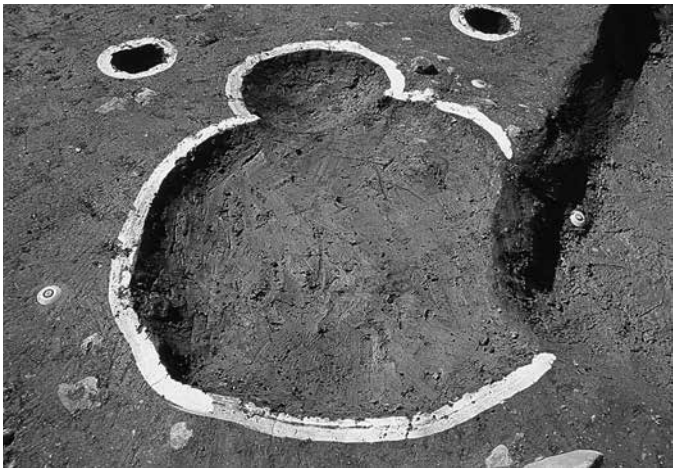
SK125　9-9' セクション（東から）



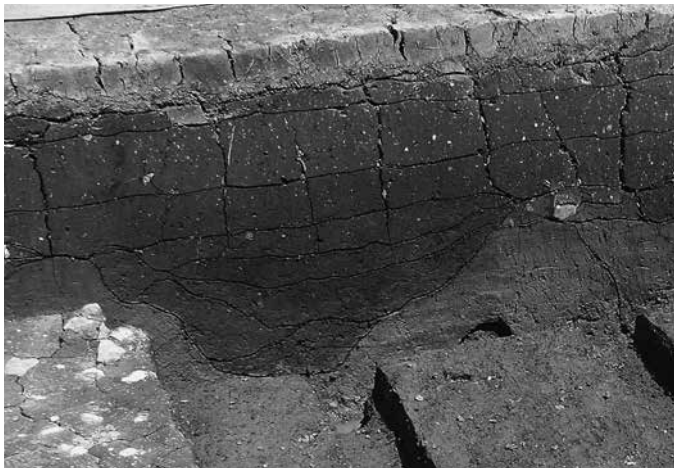
SK125　完掘（東から）



SK152　11-11' セクション（東から）



SK152　完掘（南から）



SK170　セクション（西から）

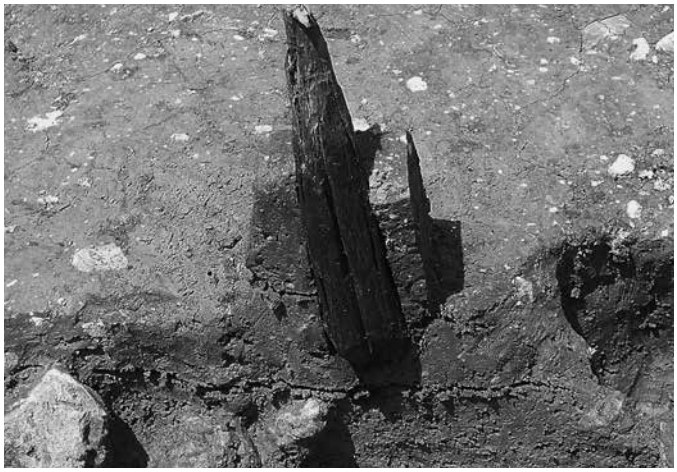
SD9　完掘（北西から）

SD9　12-12' セクション（北東から）

SD9　14-14' セクション（南から）

P8　15-15' セクション（北東から）

P173　19-19' セクション（東から）



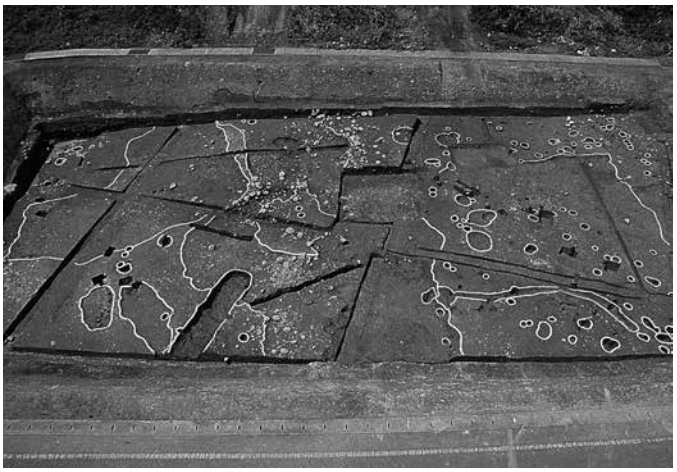
杭 18　21-21' セクション（東から）

杭 43（右）　21-21' セクション（東から）

SS135　検出状況（西南から）

SX1　完掘（東から）

SX1　セクション（南から）



SX3　完掘（東から）

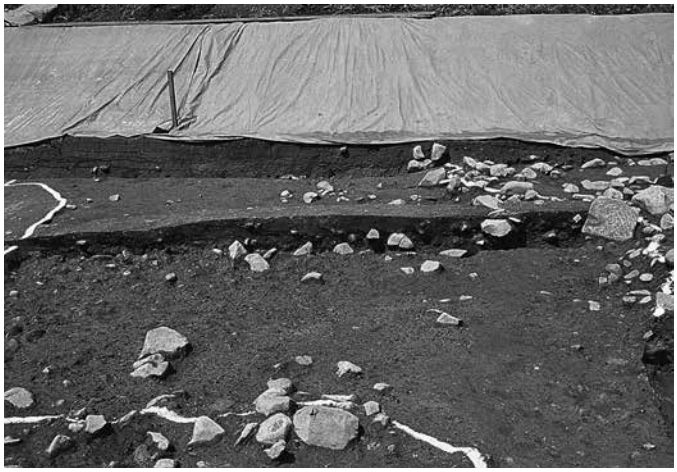
SX3　完掘（東から）

SX3　出土状況（西から）

SX3　27-27' セクション（西から）

SX3　28-28' セクション（西から）

SX3　29-29' セクション（東から）



SX3　30-30' セクション（東から）

SX4　完掘（東から）

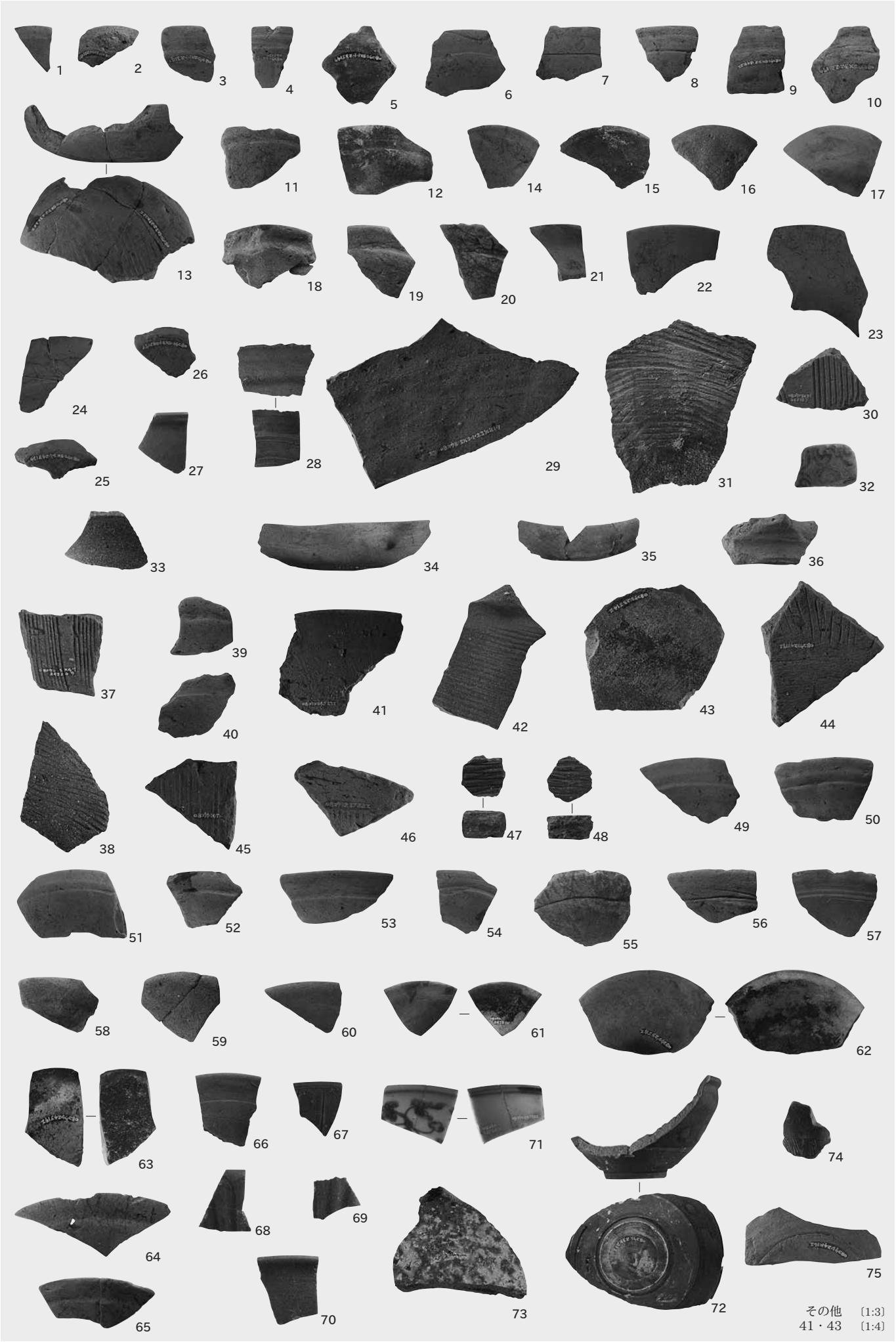
SX4　31-31' セクション（東から）

SX4　32-32' セクション（北から）

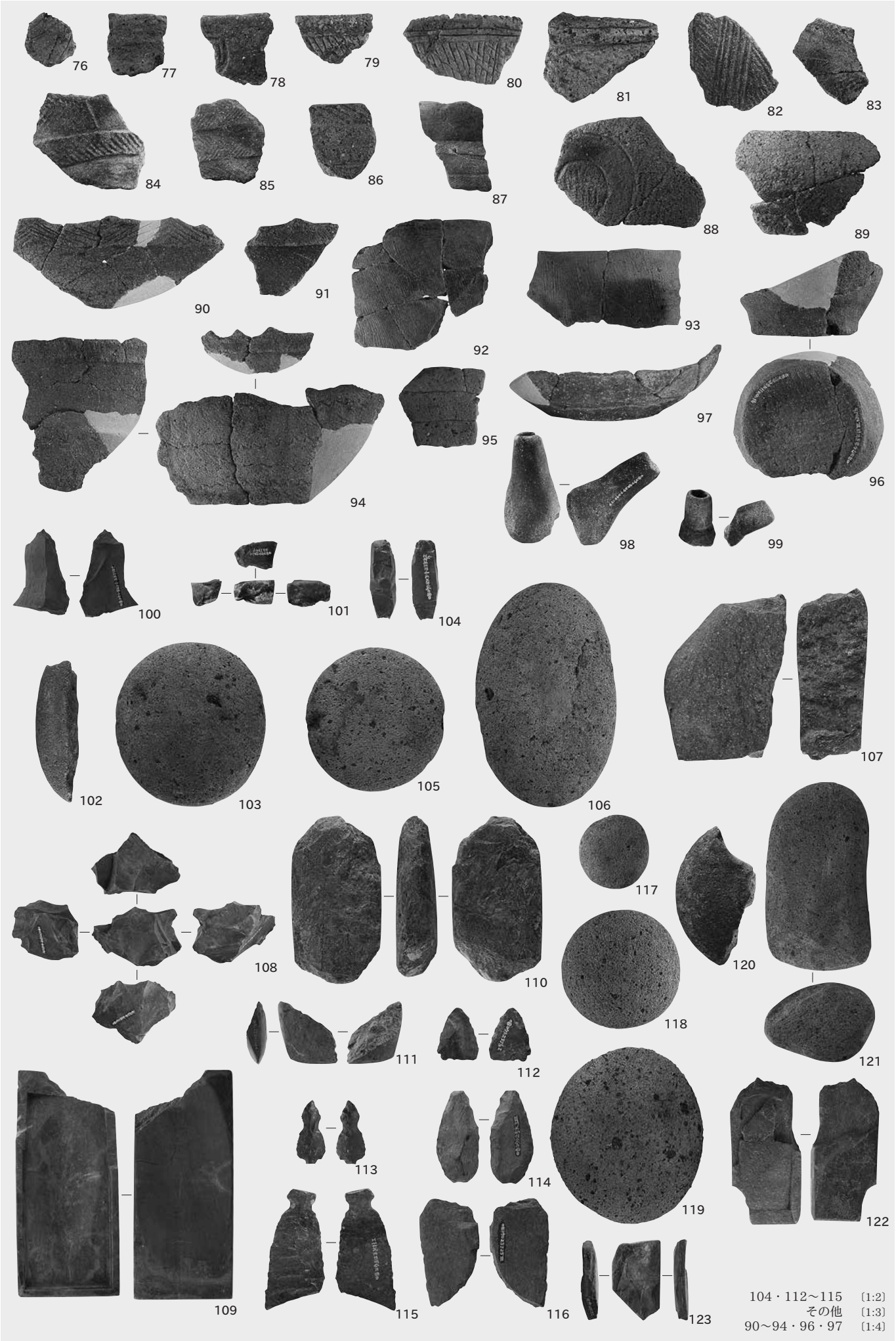
25J・25K　Ⅳ層　土器出土状況（東から）

25J・25K　Ⅳ層　土器出土状況（西から）

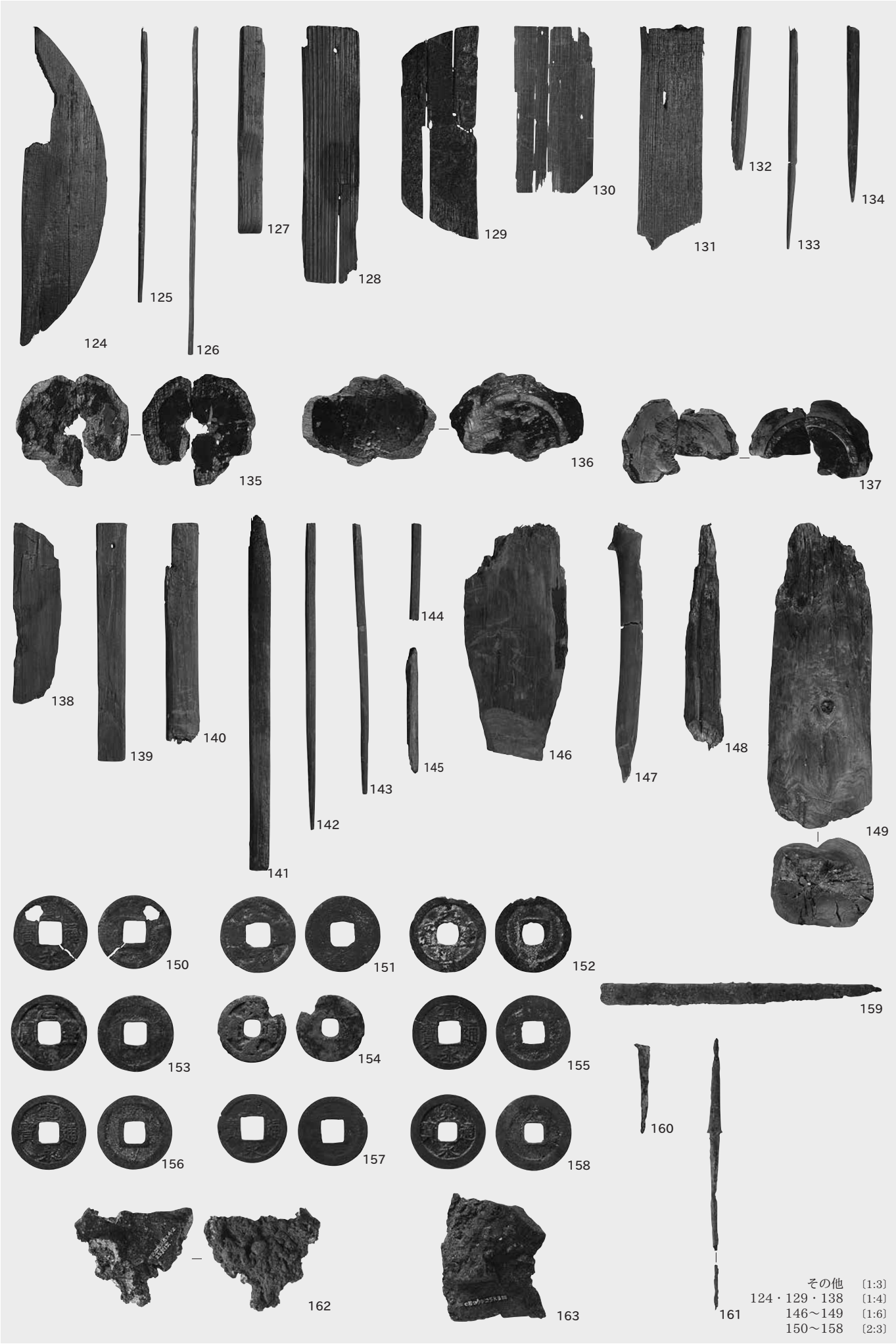
25J・25K　Ⅳ層　土器出土状況（北西から）



その他　〔1:3〕
41・43　〔1:4〕



104・112～115　〔1:2〕
その他　〔1:3〕
90～94・96・97　〔1:4〕



その他　〔1:3〕
124・129・138　〔1:4〕
146～149　〔1:6〕
150～158　〔2:3〕

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ちごづくりいせき・こうじゃくじさわいせき
書　　名	千古作遺跡・香積寺沢遺跡
副 書 名	一般国道８号柏崎バイパス関係発掘調査報告書
巻　　次	Ⅳ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 214 集
編 著 者 名	石川智紀･藤巻正信（新潟県埋蔵文化財調査事業団）、實川順一･長澤展生（以上、株式会社イビソク）、鹿又喜隆（株式会社加速器分析研究所）、 斉藤崇人・高橋敦・馬場健司（以上、パリノ・サーヴェイ株式会社）
編 集 機 関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社イビソク
所 在 地	〒 956-0845　新潟県新潟市秋葉区金津 93 番地 1　　TEL　0250（25）3981
発行年月日	平成 23（2011）年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
千古作遺跡（ちごづくりいせき）	新潟県柏崎市大字剣野町字千古作（にいがたけんかしわざきしおおあざけんのちょうあざちごづくり） 288-3 ほか	15205	721	37 度 20 分 43 秒	138 度 33 分 14 秒	20080428 ～ 20080703	850㎡	一般国道８号柏崎バイパス建設
香積寺沢遺跡（こうじゃくじさわいせき）	新潟県柏崎市大字剣野字香積寺沢（にいがたけんかしわざきしおおあざけんのあざこうじゃくじさわ） 862-28 ほか		359	37 度 20 分 51 秒	138 度 32 分 47 秒	20080602 ～ 20080820	630㎡	

所収遺跡	種別	時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
千古作遺跡	遺物包含地	古代（平安時代） 中世（13 世紀後半～15 世紀）	井戸・土坑・溝・性格不明遺構・柱穴	須恵器、土師器、青磁、白磁、青花、珠洲焼、瀬戸・美濃焼、越前焼、中世土師器、石器･石製品（磨石･有孔石器・砥石）、木製品（田下駄足板・弓・箸等）、銭貨、鉄滓	
香積寺沢遺跡	遺物包含地	縄文時代（後・晩期）		縄文土器（深鉢・注口等）、石器（石鏃・石匙・石核・磨製石斧・磨石等）	香積寺移転以前の跡地の可能性はあるが、寺院を示す明確な遺構・遺物は見つからなかった。
		弥生時代		弥生土器（壺）	
		古代（平安時代）	木炭窯	須恵器、鉄滓	
		中世（13 世紀後半～ 16 世紀前葉）	土坑・溝・性格不明遺構・柱穴・杭	青磁、白磁、珠洲焼、瀬戸･美濃焼、越前焼、中世土師器、瓦質土器、石製品（砥石・石硯）、漆器、木製品（曲物底板・箸等）、金属製品（銭貨・刀子・釘・火箸・鉄滓）	

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 214 集

一般国道８号柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ

千古作遺跡・香積寺沢遺跡

平成 23 年 3 月 30 日印刷　編集・発行　新潟県教育委員会

平成 23 年 3 月 31 日発行

〒 950-8570　新潟市中央区新光町 4 番地 1
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒 956-0845　新潟市秋葉区金津 93 番地 1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　新高速印刷株式会社

〒 950-0963　新潟市中央区南出来島2丁目1番25号
電話　025（285）3311

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第214集『千古作遺跡 香積寺沢遺跡』　正誤表

2019年9月追加

頁	位置	誤	正
抄録	千古作遺跡　北緯	３７度２０分４３秒	３７度２０分５４秒
抄録	千古作遺跡　東経	１３８度１７分２８秒	１３８度３３分０３秒